

市浦村埋藏文化財調査報告書 第11集

TOSAMINATO

SITE

十三湊遺跡

— 第86次発掘調査報告書 —

本文編

青森県市浦村教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

2000年3月



調査地区全景写真



SK17出土金銅製円盤

市浦村埋蔵文化財調査報告書 第11集

TOSAMINATO

SITE

十三湊遺跡

——第86次発掘調査報告書——

本文編

青森県市浦村教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

2000年3月

序 文

本書は平成10年度に十三小学校グラウンドにおいて実施しました十三湊遺跡第86次調査報告書です。調査は市浦村教育委員会が富山大学考古学研究室（代表 前川 要教授）の全面的な協力を得て、青森県教育委員会と合同で実施しております。調査面積が約3,000㎡というこれまでにない大規模な発掘調査の結果、発見された遺構・遺物は膨大な量に及び、中世十三湊が北日本を代表する大規模な港湾都市遺跡であることが改めて明らかとなった次第であります。さらに調査期間中の平成10年7月24日には青森県教育委員会が青森県文化観光立県宣言を記念して「十三湊フォーラム」を開催し、当日は1千人近い聴衆を集め、大きな反響を得ることができました。そして翌日の現地見学会は好天にも恵まれ、500人に及ぶ見学者を得て、十三湊の発掘現場や市浦村の景観を体感していただくことができました。さらに「十三湊フォーラム」に合わせて青森県郷土館で特別展「中世国際港湾都市 十三湊と安藤氏」が開催された後、国立歴史民俗博物館においても企画展「幻の中世都市十三湊～海から見た北の中世～」が開催されました。展示内容はこれまでの発掘成果から明らかとなった十三湊の実態と十三湊を支配した安藤氏の軌跡を紹介したものであり、多くの方々の好評を待たものと存じます。まさに市浦村・十三湊を広く県内外の皆様にご紹介することができた一年だったと存じます。

今後ますます十三湊遺跡の調査・研究を継続的にを行い、史跡指定を目指した史跡公園化の推進に努めていく所存です。

最後になりましたが、調査全般にわたって、多大な御指導・御助言をいただきました文化庁記念物課、青森県教育委員会、市浦村遺跡整備検討委員会、富山大学考古学研究室の諸先生には心から感謝申し上げます。

平成12年3月

市浦村教育委員会

教育長 木村 義光

例 言

- 1 本書は、青森県市浦村教育委員会が平成10年度に国庫補助金事業として実施した市浦村大字十三所在十三湊遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は、文化庁記念物課、青森県教育委員会文化課、市浦村遺跡整備検討委員会の指導協力を得て、市浦村が富山大学人文学部考古学研究室と協力して実施した。
- 3 遺物の復原・実測、図面の整理・製図は、調査参加者全員が協力して行った。
- 4 本文は、前川 要（富山大学人文学部教授）、榑原滋高（市浦村教育委員会）、田中 学、戸藤暢宏（富山大学大学院人文科学研究科学生）、遠野いずみ、貫井美鈴、広瀬直樹、真井田宏彰、宮川俊輔、渡辺 樹、阿部 来（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆し、前川、田中が記述内容の統一をはかった。（なお執筆分担は目次に記し、必要な場合は、文末にも記した。編集は前川、榑原、田中が行った。）電磁気調査については、酒井英男氏（富山大学理学部助教授）、動物遺体の鑑定については、西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館助教授）、植物遺体の鑑定については、金原正明氏（天理大学附属参考館）、金原明子氏（古環境研究所）をお願いした。X線写真撮影については、名古屋大学文学部考古学研究室渡辺 誠教授にお願いし、丹下昌之氏（同文学研究科博士後期課程）の手をわずらわせた。
- 5 本書は、本文編と図版編の2分冊よりなり、付録としてCD-ROMがある。参考文献は本文末にまとめた。遺物番号は実測図と写真とを統一した。
- 6 地区割は、直角座標第10系国土座標（ $X=110.5$ 、 $Y=-43.0$ ）を原点として設定した。水準はT.P.である。
- 7 土層の色調については『新版・標準土色帳』（農林水産技術会議事務局 1995年）を使用した。
- 8 本書の作成に際して、宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授）、楢崎彰一、藤沢良祐、河合君近（瀬戸市埋蔵文化財センター）、吉岡康暢（国立歴史民俗博物館教授）、小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）、久保智康（京都国立博物館主任研究官）、垣内光次郎（石川県埋蔵文化財センター）、楠 正勝、増山 仁、庄田知充（金沢市埋蔵文化財センター）、沙見一夫（鎌倉考古学研究所）、福島政文（広島県福山市教育委員会）、内山純蔵（富山大学人文学部講師）、新本真之（富山県立山町教育委員会）、三浦圭介、鈴木和子、工藤 忍、佐々木雅裕（青森県教育庁文化課）、マーチン・モリス（千葉大学工学部講師）をはじめとする方々からご協力ならびに貴重なご教示を得た。調査に際しては、市浦村連合婦人会をはじめとする市浦村の方々にご協力戴いた。十三小学校・十三公民館より、調査全般について便宜を計って戴いた。記して厚く感謝申上げる。
- 9 考察における『当麻受茶羅縁起』、『墓層絵詞』よりの転載については、中央公論新社より掲載許可戴いた。記して感謝する次第である。
- 10 出土遺物・記録書類等は、市浦村教育委員会が保管している。
- 11 図版中の遺構実測図・遺物実測図にある以下のスクリーン・トーンは次のこのがらをそれぞれ示す。
：（遺構）第Ⅲ層。（遺物）煤。：（遺構）第Ⅳ層。（遺物）付着物底。

目 次

頁

巻頭図版 調査地区全景写真
SK17出土金銅製円盤

第1章 調査の概要	1
1 調査に至る経緯と目的	榑原滋高 1
2 調査の経過と調査組織	田中 学 2
3 遺跡の立地と歴史的環境	榑原滋高 5
4 調査の名称について	田中 学 7
5 調査前の知見	榑原滋高 7
6 調査の方法	田中 学 8
第2章 発掘調査の成果	13
1 層 位	遠野いずみ 13
2 遺 構	13
(1) 櫛 列	遠野いずみ 13
(2) 掘立柱建物	遠野いずみ 15
(3) 溝・堀	遠野いずみ 16
(4) 井 戸	渡辺 樹 20
(5) 竪穴遺構	真井田宏彰 23
(6) 土 坑	宮川俊輔 25
(7) 集石遺構	広瀬直樹 32
3 遺 物	遠野いずみ、真井美鈴、広瀬直樹、 真井田宏彰、宮川俊輔、渡辺 樹 34
第3章 考 察	87
1 遺物の考察	87
(1) 出土土器・陶磁器の組成	真井美鈴 87
(2) 十三湊遺跡第86・87次調査区出土遺物の分布 —地理情報システム(GIS)の活用—	戸籙暢宏、渡辺 樹 101
(3) 銭 貨	阿部 来 108
(4) 砥 石	田中 学 123
2 遺構の考察	131
(1) 区画遺構	遠野いずみ 131
(2) 井 戸	渡辺 樹 138

(3) 竪穴建物	真井田宏彰	146
(4) 土坑および土坑墓	宮川俊輔	151
(5) 集石遺構	広瀬直樹	156
(6) 遺構の変遷	田中 学	161
3 結 語	前川 要・鱗原滋高・田中 学	172
(1) 今回新たに判明した事実		172
(2) 推定安藤氏居館の移動の可能性と今後の発掘調査の課題		174
参考文献		177
付 章 関連調査の成果		181
1 津軽・十三湊遺跡出土漆器の塗膜分析	四柳嘉章	183
2 十三湊遺跡第86・87次発掘調査出土の動物遺体	西本豊弘	193
3 十三湊遺跡の種実同定	金原正明・金原正子	199
4 北東日本海域における貿易陶磁の年代観—瀬戸美濃との併行関係について—	賈井美鈴	207
ENGLISH SUMMARY	前川 要	225

図 版 編

付 録 CD-ROM目次

凡例 遺構計測表凡例	
凡例 遺物計測凡例	
表 1 第86次調査検出遺構計測表	
表 2 第86次調査出土遺物計測表	
表 3 第86次調査出土遺物接合関係一覧表	
表 4 出土土鏝計測表	
表 5 出土銭貨計測表	

挿 図 目 次

第1図 発掘調査風景	前川撮影	3
第2図 調査参加者写真	前川撮影	4
第3図 十三湖周辺の遺跡地図	1998年須田作成を転載	6
第4図 調査区位置図(1)	青森県教育委員会作成に加筆	9
第5図 調査区位置図(2)	賈井作成	10
第6図 井戸断面形分類図	渡辺作成	20
第7図 海綿状骨針を含む瓦器火鉢	前川撮影	72

第8図	中世土器・陶磁器種類別構成比	貫井作成	89
第9図	食膳具種類別構成比	貫井作成	91
第10図	調理具種類別構成比	貫井作成	91
第11図	貯蔵具種類別構成比	貫井作成	91
第12図	その他種類別構成比	貫井作成	91
第13図	珠洲器種・種類別出土量	貫井作成	92
第14図	瀬戸美濃食膳具・調理具 器種・時期別出土量	貫井作成	93
第15図	瀬戸美濃貯蔵具・その他 器種・時期別出土量	貫井作成	93
第16図	青磁器種類構成比	貫井作成	96
第17図	白磁器種類構成比	貫井作成	96
第18図	青磁碗分類別出土量	貫井作成	96
第19図	白磁器種・分類別出土量	貫井作成	98
第20図	第86・87次調査区古瀬戸後II期 瀬戸美濃器種類別構成比	貫井作成	100
第21図	小長管窯跡 同構成比	貫井作成	100
第22図	土器分布図	戸籠・渡辺作成	103
第23図	銅製品分布図	戸籠・渡辺作成	104
第24図	茶道具分布図	戸籠・渡辺作成	105
第25図	用途別出土遺物分布図(1)	戸籠・渡辺作成	106
第26図	用途別出土遺物分布図(2)	戸籠・渡辺作成	107
第27図	瓦器接合関係図	戸籠・渡辺作成	109
第28図	瀬戸美濃接合関係図	戸籠・渡辺作成	110
第29図	貿易陶磁接合関係図	戸籠・渡辺作成	111
第30図	珠洲すり鉢接合関係図	戸籠・渡辺作成	112
第31図	珠洲壺・甕接合関係図	戸籠・渡辺作成	113
第32図	壺器系陶器・信楽接合関係図	戸籠・渡辺作成	114
第33図	第86・87次調査出土銭貨構成	阿部作成	115
第34図	第86・87次調査出土銭貨鑄造国	阿部作成	116
第35図	銭貨出土遺構の性格	阿部作成	116
第36図	SK60緋銭出土状況図	阿部作成	118
第37図	SK60出土緋銭	前川操影	118
第38図	緋銭銭種構成	阿部作成	119
第39図	十三湊遺跡出土銭貨鑄造国	阿部作成	120
第40図	対象遺跡位置図	阿部作成	121
第41図	遺跡別出土銭貨構成	阿部作成	122
第42図	砥石(仕上げ砥)の諸例	田中作成	124
第43図	各遺跡出土砥石の石材別構成比	田中作成	125
第44図	仕上げ砥の切り出し幅の分布(1)	田中作成	126

第45図	十三湊遺跡出土仕上げ砥の幅と長さ・厚さの分布	田中作成	127
第46図	仕上げ砥の長さと重量の分布	田中作成	128
第47図	中砥の幅と長さの分布	田中作成	129
第48図	中砥の幅と厚さの分布	田中作成	129
第49図	荒砥の幅と厚さの分布	田中作成	129
第50図	仕上げ砥の切り出し幅の分布 (2)	田中作成	130
第51図	十三湊遺跡出土砥石の平均重量	田中作成	130
第52図	SD01土層堆積模式図	遠野作成	132
第53図	SD02土層堆積模式図	遠野作成	133
第54図	溝・堀方位と古中道・土塁方位との関連図	遠野作成	134
第55図	SD03土層堆積模式図	遠野作成	135
第56図	SD17土層堆積模式図	遠野作成	136
第57図	第86・87次調査区周辺中世遺構概略図	遠野作成	137
第58図	時期別井戸分布図	渡辺作成	139
第59図	井戸平面規模時期別分布図	渡辺作成	141
第60図	掘形長径・井戸側内法面積相関関係図	渡辺作成	142
第61図	井戸掘削の光景		143
第62図	断面形別掘形規模	渡辺作成	143
第63図	井戸側内法面積度数分布 (第86・87次調査区)	渡辺作成	145
第64図	井戸側内法面積度数分布 (第18・76調査区)	渡辺作成	145
第65図	竪穴遺構分類図	真井田作成	147
第66図	竪穴遺構平面規模分布図	真井田作成	148
第67図	竪穴遺構時期別構成比	真井田作成	148
第68図	竪穴遺構主軸方位	真井田作成	149
第69図	竪穴遺構分布図	真井田作成	150
第70図	土坑規模分布図	宮川作成	151
第71図	鉄釘出土土坑規模分布図	宮川作成	152
第72図	銭貨出土土坑規模分布図	宮川作成	152
第73図	骨片出土土坑規模分布図	宮川作成	152
第74図	刀型刃物出土土坑規模分布図	宮川作成	153
第75図	炭化物出土土坑規模分布図	宮川作成	153
第76図	土坑墓規模分布図	宮川作成	153
第77図	対象遺物未出土土坑規模分布図	宮川作成	155
第78図	一般土坑規模分布図	宮川作成	155
第79図	菓石遺構分類図	広瀬作成	157
第80図	菓石遺構出土の瀬戸美濃被熱破片点数 (接合後)	広瀬作成	158
第81図	菓石遺構分布図	広瀬作成	159

第82図	十三湊遺跡出土瓦器分類図	田中作成	163
第83図	植木鉢に転用された瓦器		164
第84図	第86・87次調査区遺構変遷図 (I b期)	田中作成	168
第85図	第86・87次調査区遺構変遷図 (II期古段階)	田中作成	169
第86図	第86・87次調査区遺構変遷図 (II期新段階)	田中作成	170
第87図	第86・87次調査区遺構変遷図 (II c期)	田中作成	171

表 目 次

第1表	遺物執筆分担一覧表	田中作成	85
第2表	中世土器・陶磁器 種類・器種別組成表	貫井作成	88・89
第3表	中世土器・陶磁器 用途・種類別組成表	貫井作成	90
第4表	珠洲器種・時期別一覧表	貫井作成	92
第5表	瀬戸美濃器種・時期別一覧表	貫井作成	94・95
第6表	青磁器種・時期別一覧表	貫井作成	97
第7表	白磁器種・時期別一覧表	貫井作成	97
第8表	第86・87次調査区・小長曾窯跡出土 古瀬戸後II期瀬戸美濃器種別組成表	貫井作成	99
第9表	井戸出土遺物共伴関係一覧表	渡辺作成	140
第10表	既調査区竪穴遺構計測表	真井田作成	146
第11表	第86次調査土坑出土遺物一覧表	宮川作成	154
第12表	従米の遺構変遷案と本稿の遺構変遷案	田中作成	161
第13表	第86・87次調査区堀・集石遺構の時期区分	田中作成	165
第14表	第86・87次調査区井戸の時期区分	田中作成	166

付 図

遺構配置図	青森県教育委員会・市浦村教育委員会作成
-------	---------------------

第1章 調査の概要

1 調査に至る経緯と目的

現在、十三湊遺跡では国史跡指定を目指した学術調査を地元市浦村教育委員会と青森県教育委員会が継続して実施している。ここではこれまでに至る調査の経緯を振り返るとともに今年度の調査目的を述べておきたい。

平成3年～平成5年にかけて行われた国立歴史民俗博物館（以下、歴博とする）の特定研究「北部日本における文化交流」において、十三湊遺跡における本格的な発掘調査が開始された。これは分布調査や試掘・本調査の考古学的調査の他に地籍図及び古絵図調査、遺跡探査調査など港町の全体像を捉える総合的な調査であった。

これによって港湾都市の全体構造や十三湊の変遷過程が提示され、今後の調査に大きな指針を与えている。さらに十三湊遺跡が従来の遺跡台帳に登録されていた琴湖岳遺跡の他に、約23,500枚の大量の渡米銭を出土した鉄砲台遺跡、宗教施設とされる檀林寺跡、中世の水戸口付近にあって灯台の役割を果たした浜神遺跡までを含む十三湖西側砂丘一帯約550,000㎡の広大な範囲に広がることが明らかとなった。十三湊遺跡をまとまりのある都市遺跡として認識した意義は大きいであろう。

この歴博による成果は平成5年歴博第14回フォーラム、シンポジウム「遺跡にさぐる北日本—中世都市十三湊と安藤氏—」と題して発表された。この中で十三湊遺跡の日本中世史並びに東アジア史の中の重要性が再認識され、行政的に対応した継続調査が叫ばれることとなった。

これを受けて地元市浦村では、現在推進している「過疎地域活性化事業」の一環として、今後十三湊遺跡の調査・研究を深化させ、国史跡指定の実現をめざした史跡観光化を実現させる方向性を打ち出した。そこで市浦村教育委員会では今後の遺跡調査・整備保存・活用を円滑に推進するために、学識経験者からなる指導・助言機関として「遺跡整備検討委員会」を平成6年8月9日に設置した。また、平成7年4月から1名の調査学芸員を採用し、さらに平成8年7月から「安藤の里振興室」を教育委員会内部に設置し、文化財行政に対応する事となった。

青森県教育委員会では十三湊遺跡の重要性を考慮し、また市浦村の単独事業では継続調査が困難との判断から平成7年度より大規模・重要遺跡調査研究とした6ヶ年の発掘調査計画を作成し、現在に至るまで継続調査を行っている。なお、市浦村教育委員会が領主館周辺の調査を行い、青森県教育委員会が家臣団館や町屋跡、及び港湾施設の確認調査などを行なう方向性が取られ、地元市浦村と青森県が役割分担しながら協力して進めている。

そうした中で、平成10年度には青森県が文化観光立県宣言を記念して、7月24日に十三湊遺跡フォーラムを実施し、翌日には現地見学会を予定する計画を打ち出した。そのため、検討委員会の中で、今年度は十三湊遺跡を多くの人々に見学してもらいながら遺跡を理解してもらう必要性もあって、十三湊遺跡の中で最も重要で中心施設の存在が推定されており、なおかつ広い面積を調査できる場所として十三小学校グラウンドが選ばれた。調査対象面積はグラウンド部分の約5,000㎡であるが、排土置き場を考慮すると、調査面積は約3,080㎡となる。調査は市浦村教育委員会と青森県教育委員会で行い、富山大学

人文学部考古学研究室（代表 前川 要助教授）が市浦村に協力するかたちで調査を実施した。この地区における調査の主目的は、歴博の推定復原図やこれまでの調査成果を考慮すると領主館に伴う堀跡の検出と館に付随する大土塁に挟まれた屋敷地を確認するためのものであった。

なお、平成10年7月24日の十三湊遺跡フォーラムは当日一千人近い聴衆を集め、歴博の調査以来、明らかとなった十三湊遺跡の調査成果が公表され、大きな反響を得た。さらに翌日の現地見学会には500人を超える見学者を迎え、対応に苦慮する程であった。そして、これらを受けた形で「中世国際港湾都市十三湊と安藤氏」と題した特別展が青森県立郷土館において7月20日～8月23日にかけて行われた。これは最近の研究成果から見た十三湊遺跡の実態と十三湊を支配した安藤氏の軌跡を紹介したものや各地の中世港湾都市遺跡の様子や出土遺物を比較展示するなど、日本中世社会における「北の文化」の位置づけを考える内容であった。そして、この展示は十三湊遺跡の調査を支援してきた歴博においても継続して実施され、企画展「幻の中世都市十三湊 一海から見た北の中世一」と題して9月8日から10月4日にかけて行われた。今年度は十三湊遺跡を理解してもらう一大イベントとして大成功をおさめたと言えるだろう。しかし、調査を担当するものとしては、これからますます十三湊遺跡の緻密な調査研究を進める必要性を痛感するものであった。

（榎原滋高）

2 調査の経過と調査組織

市浦村教育委員会は1998年度に、十三小学校グラウンドを広範囲に調査することによって、「領主館跡」を区画する堀跡や「領主館跡」と大土塁に挟まれた屋敷地の様相を明らかにすることを主な目的として、十三湊遺跡第86次発掘調査を富山大学人文学部考古学研究室の協力のもとに実施した。

発掘調査の経過：

6月12日、市浦村教育委員会事務局担当者と富山大学人文学部考古学研究室（代表：前川 要）が調査日程・内容等について打ち合せを行なう。

7月10日、富山大学人文学部において発掘調査の打ち合せを行ない、日程・調査方法等を確認した。

6月15日、地区割の設定、遺構の半截、遺構概略図の作成を開始した。さらに、重機による調査地区の表土掘削を開始し、遺構面の検出に入った。

7月15日、富山大学人文学部において発掘器材の準備を行なった。

7月21日、現地に発掘器材を搬入した。

7月23日、瀬戸市埋蔵文化財調査センター河合君近氏来訪。

7月25日、十三湊遺跡フォーラムに伴う現地説明会を行った。

7月26日、富山大学考古学研究室による調査を開始した。中世遺物包含層の掘り下げおよびそれに伴う遺構の確認作業から開始した。遺構の半截と並行して遺構の検出状況平面図・断面図の作成を開始した。

7月27日、中世遺物包含層の掘り下げと並行して、縮尺20分の1の調査区全体平面図作成を開始した。

7月28日、奈良国立文化財研究所西村 康氏来訪。

7月29日、調査区全体平面図作成と並行して、調査区北部から個別遺構の調査を開始した。

7月30日、富山大学理学部酒井英男氏他、理化学的探査のため来訪。

8月3日、調査区中央の中世遺物包含層掘り下げ、それに伴う出土遺物の採り上げ・記録、遺構確認作業などを開始した。国立歴史民俗博物館千田嘉博氏、弘前大学諸氏来訪。

8月5日、山口義伸氏来訪。集石遺構出土礫の岩石鑑定および堀状遺構SD02の土層堆積状況についてご教示を得た。

8月9日、調査区南部において個別遺構の調査を開始した。

8月13日、午前中まで発掘調査を行い、午後から機材整理を行った。

8月14日、富山大学考古学研究室による調査を終了した。

9月4日、青森県浪岡町工藤清泰氏来訪。

9月11日、北海道埋蔵文化財センター石井淳平氏来訪。

10月18日、現地説明会を行った。

10月26日、千葉大学玉井哲男、財団法人古代学協会堀内明博、生活史研究所小泉和子諸氏来訪。

10月27日、全ての発掘調査・記録作業を終了し、調査区の埋め戻し作業を行なった。

10月30日、発掘機材の搬出を行ない、現場での全調査日程を終了した。

整理作業：

発掘作業中に宿舎での夜業において、遺物洗浄・遺物台帳への記録、図面台帳の作成を行なう。

10月28日～11月2日、市浦村にて出土遺物および記録図面などの整理作業を一部行った。その後、富山大学にて整理作業を継続して行った。11月中旬から、本調査区出土遺物の接合作業・計測・実測を行なった。また遺構の計測、遺構計測表の作成を行ない、順次データベース化を行なった。

12月4日、瀬戸市埋蔵文化財センターにて藤澤良祐、河合君近両氏に遺物の分類・時期等について指導を受けた。

12月17日、歴博にて吉岡康暢氏、小野正敏氏に遺物の分類・時期等について指導を受けた。

12月25日、金沢市埋蔵文化財センターにて楠正勝、増山仁、庄田知充氏に遺物の分類・時期等について指導を受けた。2月上旬から、鉄製品・古銭の計測を行った。3月上旬から遺物図版版下の作成を開始した。

2月中旬、遺構図版版下の作成を開始した。4月下旬～6月下旬、遺物、遺構の事実報告の執筆を行なった。

5月中旬、事実報告の記載に並行して考察の執筆を開始した。

6月下旬、全図版版下が完成した。

8月10日、最終的な編集作業を終了した。

翌年、2月31日、印刷所に入稿した。

3月31日、報告書発行。



第1図 発掘調査風景

十三湊遺跡第86次発掘調査地区調査組織

調査員：前川 要（富山大学人文学部助教授）

榊原 滋高（市浦村教育委員会学芸員）

調査作業員：田中 学（富山大学大学院人文科学研究科学生）

小野 基（富山大学人文学部考古学研究室研究生）

中田書矢，小幡鮎子，小松博幸，後藤 晋，佐々木建二，須田雅昭，滝川邦彦，

戸簾暢宏，早川さやか，遠野いずみ，貫井美鈴，廣瀬直樹，真井田宏彰，宮川俊輔，

渡辺 樹，阿部 来，井出靖夫，笹井史生，塚田直哉，不鳴美穂，八巻謙司

（富山大学人文学部考古学研究室学生）

小泉史恵，伊藤明子，島村知憲，田中洋一，葛川貴祥，床平慎介，豊田恒一郎，

藤原孝夫，水岩田篤，遊佐真一郎，渡部 智（富山大学人文学部国際文化科学科学生）

調査協力者：土橋尚起（専修大学大学院学生），伊藤桂子（弘前大学教育学部学生），

木村倫子，佐々木拓哉，須藤浩司（北海道大学文学部学生），

降矢哲男（奈良大学文学部学生），加来知之，Marx Coronel（九州大学文学部学生）

整理参加者：荒木晋也，磯村愛子，佐々木亮二，砂田晋司，高橋泰生，井出靖夫，瓜生日菜子，

表原孝好，片桐清恵，川端良招，笹井史生，塚田直哉，不鳴美穂，的場茂晃，

八巻謙司，山口欣志（富山大学人文学部考古学研究室学生），猪狩俊哉，

小栗由希代，小泉史恵，澤野慶子，新宅由紀，田中洋一，葛川貴祥，床平慎介，

山本教幸，遊佐真一郎（富山大学人文学部国際文化科学科学生）

（田中 学）



第2図 調査参加者写真

3 遺跡の立地と歴史的環境（第3図）

十三湊遺跡は青森県北津軽郡市浦村十三に所在し、本州の最北端、日本海側に面した十三湖西側砂丘一帯に位置する。十三湖周辺は津軽平野を縦断して流れる岩木川の河口に位置し、古くから岩木川水系を通じて結ばれた内陸地との交易流通の拠点だけでなく、十三湊が繁栄を極めた中世期には日本国家の東の境界となり、北海道・樺太などの北方交易の拠点として重要な役割を担っていた地域である。この両者の役割が結節した海上・水上交通の要衝として、歴史的にも古くから重要な位置を占めていたと考えられる。

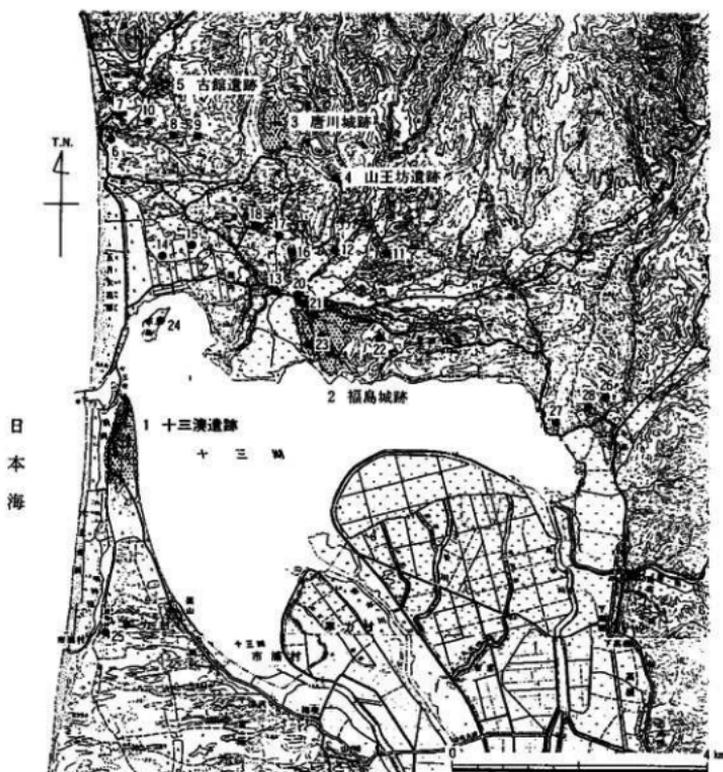
十三湖周辺の遺跡を時代順に見てみると、十三湖北岸には中山山脈から派生した東西に渡って伸びる標高20m前後の丘陵縁辺部に、縄文時代前期から中期にかけてヤマトシジミを主体とした、オセドウ貝塚や畑畑貝塚がある。この両貝塚は大正14年に山内清男氏による層位の発掘によって、円筒上層式と円筒下層式とを命名した研究史的にも有名な遺跡である。そして、十三湖北西岸の標高2m程の砂丘一帯には縄文時代晩期を主体とした五月女菟遺跡の遺物包含層が確認されている。縄文時代晩期には現在の地形がすでに形成されていたようである。

古代になると十三湖内の北西部に浮かぶ小島に奈良時代の中島遺跡がある。環・高環・壺形土器・甕形土器など採取品であるものの、8世紀前半～中頃の遺物がまとまって出土している。この土器は甕の口頸部に見られる多条沈線文の存在によって、擦文土器との関連性が指摘される北方的な要素が強い土器である。最近では北東北の在地的な土器の一形態として認識される傾向にあるが、津軽地域では内陸部の尾上町を中心とした浅瀬石川流域に集中しており、西海岸部では本遺跡を含め、非常に限られている。ちなみに年代的にやや遅るが、文献資料では7世紀中頃の著名な阿部比羅夫の北方遠征に関する「日本書紀」斉明天皇四年(658)条に登場する「有間浜」の比定地の一つに十三湊が挙げられている。

平安時代後期にあたる10世紀後半から11世紀頃は古代律令体制が崩壊し、王朝国家段階に変容する時期である。この時期の遺跡には赤坂遺跡、古館（墳館）遺跡、福島城、オセドウ貝塚が確認されている。赤坂遺跡は十三湖北岸の丘陵上において、土器とともに擦文土器を伴っている。擦文土器は北海道において発生しており、津軽海峡によって隔てられていたそれぞれの文化が、この時期に強く結び付くようになる。また、古館遺跡は日本海に面した丘陵縁辺部に位置し、集落を堀等によって保塞する「防御性集落」と呼ばれるもので、この時期に集落が大きく変容する。福島城は十三湖の北岸の丘陵縁辺部に位置し、一辺が約1kmの三角形を呈する城郭遺構である。総面積625,000㎡の規模を持ち、外郭と内郭から成っている。これまで中世期に十三湊を支配した安藤氏の居城という伝承に従って中世城館と考えられてきたが、近年の歴博の調査によって築城時期が10世紀後半から11世紀代に遡る可能性が高いという成果をあげている。これほどの大規模な城郭を築くことができた築城主体は、岩木川水系や日本海における水運・海運交通を押さえる強力な政治集団であったと考えられる。

中世期になると、十三湖の西側砂丘一帯に十三湊遺跡が形成される。十三湊は北海道・樺太などの北方世界の産物が集まる中核港湾として発展する。前述したように、十三湊遺跡は平成3年～平成5年にわたる歴博の総合的な調査によって、その港湾都市の全体像と変遷過程が示され、今後の研究の指針となっている。

十三湊の成立については、今後の調査によるところが大きいが、現時点では13世紀から大きな活動を



番号	遺跡名	所在地	時代	種別	番号	遺跡名	所在地	時代	種別
1	十三湊遺跡	市浦村十三	中世, 近世	散布地	15	五月女窟(2)遺跡	市浦村相内字相内	縄文晩期	散布地
2	福島城跡	市浦村相内字実取	縄文, 平安, 中世	城跡	16	釜畑遺跡	市浦村相内字岩井	縄文前・中期	貝塚
3	唐川城跡	市浦村相内字岩井	中世	城跡	17	二ツ沼遺跡	市浦村相内字岩井	中世	散布地
4	山王坊遺跡	市浦村相内字岩井	中世	寺院	18	岩井遺跡	市浦村相内字岩井	縄文後・晩期 平安	墓落跡
5	古館遺跡	市浦村磯松字磯野	平安	散布地	19	大沼遺跡	市浦村相内字岩井	縄文	散布地
6	磯松砂山遺跡	市浦村磯松字磯野	縄文	散布地	20	露草遺跡	市浦村相内字露草	平安	散布地
7	磯松遺跡	市浦村磯松字磯野	平安	墳墓	21	オセドウ遺跡	市浦村相内字露草	縄文前～後期 平安	貝塚
8	唐川(1)遺跡	市浦村磯松字唐川	平安	墓落跡	22	実取遺跡	市浦村相内字実取	平安	墓落跡
9	唐川(2)遺跡	市浦村磯松字唐川	平安	散布地	23	蛇石遺跡	市浦村相内字実取	縄文後・晩期 平安	散布地
10	唐川(3)遺跡	市浦村磯松字唐川	平安	散布地	24	中島遺跡	市浦村十三字土佐	奈良	散布地
11	ナガラ山遺跡	市浦村太田字山ノ井	縄文, 平安	散布地	25	明神遺跡	車力村大字富落	中世	神社跡
12	赤坂遺跡	市浦村相内字赤坂	平安	墓落跡	26	唐崎遺跡	中里町今泉字唐崎	平安	散布地
13	相内遺跡	市浦村相内字相内	平安	祭祀跡	27	今泉大石崎遺跡	中里町今泉字唐崎	縄文, 平安	散布地
14	五月女窟(1)遺跡	市浦村相内字相内	縄文晩期	散布地	28	明神宮遺跡	中里町今泉字唐崎	平安	城跡

第3図 十三湊周辺の遺跡地図 (縮尺1/80,000)
(1998年須田作成を転載)

見ることができる。近年の調査によって、前潟に面した場所（現在の湊迎寺付近）で13世紀～14世紀前半の遺構・遺物がまとまって出土しており、前潟が中世期に外洋船の水路であったことを考慮すると、前潟に面した場所に初期の湊町が形成されていたことは明らかであろう。十三湊の終焉を示す文献史料に「湊済准后日記」永享4年（1432）10月21日条の記事がある。十三湊を支配していた安藤氏が南部氏に敗れ、北海道に退去したというものである。出土遺物の様相からも、この時期に十三湊が衰退した様子が伺える。

近世期では、出土遺物の様相から16世紀末になって序々に人々が集まり湊町を形成し始めたことが分かる。十三湊に所在する神明宮の宮司工藤家所蔵の「御宮改之覚」元文元年（1737）によれば、十三町に関わる神社の建立が1660～1680年代に集中していることから、17世紀中頃にはすでに近世十三湊として整備されていたことが分かる。弘前藩の支配のもと青森、鯉ヶ沢、深浦とともに「四浦」として湊の機能を維持したが、中世期に見られた十三湊の北方交易の窓口としての役割は完全に失うこととなった。東廻航路の開設によって、江戸へ米を運ぶ廻船が青森から、西廻航路の開設によって、上方への廻船は鯉ヶ沢から積み出されることになった。そして、十三湊は岩木川水系から運ばれた物資を鯉ヶ沢へ回送する継地としての役割にとどまることとなった。

近代になると、蒸気船の発達とともに、岩木川の流れによって運ばれた土砂の堆積によって十三湖や水戸口が浅くなり、船の出入りがさらに困難となったようである。また、津軽森林鉄道の開設など陸上交通機関の発達によって、湊町の機能を完全に失い、現在は十三湖のシジミ漁を中心とした漁村となっている。

（柳原滋高）

4 調査の名称について

十三湊遺跡で行なわれた調査の名称に関しては、青森県教育委員会は平成7年度の調査を第1次調査とし、市浦村教育委員会は平成6年度調査を第1次調査とし、それぞれ個別に名称をつけてきた。また、十三湊遺跡内で行なわれる調査は、学術調査の他にも開発に伴う調査もあり、調査の増加に伴って調査の名称も多様になり、混乱が生じるといった問題がでてきている。

そこで、1998年度より十三湊遺跡内で行われる全ての試掘・発掘調査については、青森県教育委員会と市浦村教育委員会で統一した調査次数を付すこととした。これまで行われた調査についても改めて調査次数番号を振りなおした。ただし、番号を付したものは、調査区が国土座標上で確認できる1991年の歴博の調査からとしている。

（田中 学）

5 調査前の知見

十三小学校周辺における考古学的調査は、1973年十三小学校改築に伴う村越潔氏の調査、国立歴史民俗博物館（以下、歴博と呼称する）による第3次調査（大土塁と堀の調査）・第5次調査（推定領主館の範囲確認調査）、市浦村教育委員会による第7・8・9・18・76次調査（推定領主館の範囲確認調査）、富山大学考古学研究室による第77次調査（中軸街路確認調査）が実施されている。ここでは上記の調査成果を踏まえ、今回実施した十三小学校グラウンドの調査前の知見を述べてみる。

1973年十三小学校改築に伴う調査では、ふいこの羽口、鉄滓など職人活動を示す鍛冶関連遺物が出土している（村越1975）。

歴博による第3次調査では、十三小学校グラウンド南側の土塁たち割り調査を実施している。土塁は十三小学校グラウンド南西端から湖岸に至る東西190mに渡って残存している。たち割り調査の結果、土塁は大きく2時期存在することが明らかとなり、さらに土塁南側は低湿地を利用した幅10mの堀跡が存在することが明らかとなった。前期土塁の構築は14世紀末・15世紀初頭に求められ、十三湊が繁栄する時期と重なり、十三湊の都市軸線を基に土塁が成立したと考えられる。この土塁を基点として土塁北側地区に十三湊の中心施設「領主館跡」の存在、南側地区には町屋の存在を想定している。

歴博による第5次調査では前述の成果を踏まえ、土塁北側地区の「領主館跡」の確認調査を実施している。調査の結果、調査区の南側にSX01, SX02とした区画施設とSF02とした土橋状遺構が検出され、「領主館跡」を区画する堀跡と推定された。さらに、区画施設とSF01とした道路状遺構の間に竪穴住居群や井戸跡が検出され、「領主館跡」の周辺に付随する工人集落の存在が想定されている。

上記の歴博の成果を受けて、十三湊の中心施設が想定される十三小学校周辺の調査を市浦村教育委員会が継続して行なうこととなった。

市浦村教育委員会では、これまで第7次・8次調査で十三小学校グラウンドの試掘調査や第9・18・76次調査で十三小学校北側の調査を実施している。

第7次調査では東西に伸びる幅2.2～2.5m、深さ30～40cmの大溝を検出しており、「領主館跡」と推定される南堀跡と想定されている。

第8次調査では2対の櫓堀囲いの道路状遺構が検出された。道路状遺構の間には掘立柱建物を構成する柱穴や井戸跡、土坑等が多く検出され、屋敷地の居住空間が想定されている。

第18・76次調査では、東西方向に渡って伸びる区画溝が検出されている。これは「領主館跡」と推定される北堀跡と想定されている。これによって、「領主館跡」と推定される内部の様相が徐々に明らかにされている。櫓・堀によって区画された空間内に掘立柱建物、大型竪穴遺構、井戸などが配置されている様子が明らかとなった。さらに出土遺物を見ても、この地区では中国製鉄軸壺、瀬戸仏花瓶、白磁鉢など奢侈品が多い。また、東北北部では極めて出土量の少ない中世土器（かわらけ）がこの地区でまともに出土しており、格上の場であったことが裏付けられている。

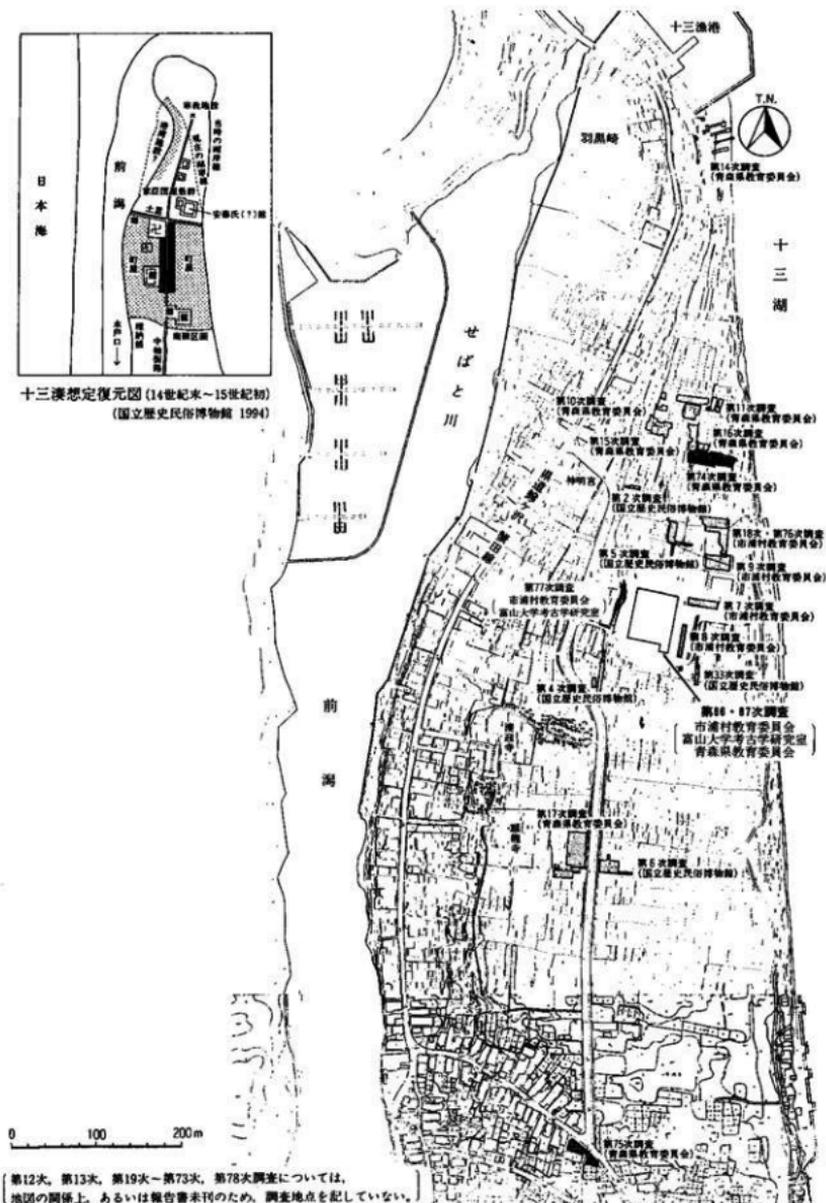
この間、富山大学考古学研究室によって第77次調査が実施されている。これは下水道敷設に伴う緊急調査であったが、十三湊の中軸街路が想定されている十三小学校グラウンドの西側道路部分であった。調査の結果、中軸街路は検出されなかったものの、東西に伸びる堀状遺構を検出しており、「領主館跡」に関連する区画遺構と推定された。その他、土坑墓（火葬）も検出されている。

以上の成果を受けて、十三小学校グラウンドを広範囲に調査することによって、「領主館跡」を区画する堀跡や「領主館跡」と大土塁に挟まれた屋敷地の様相を明らかにすることを主な目的とした。

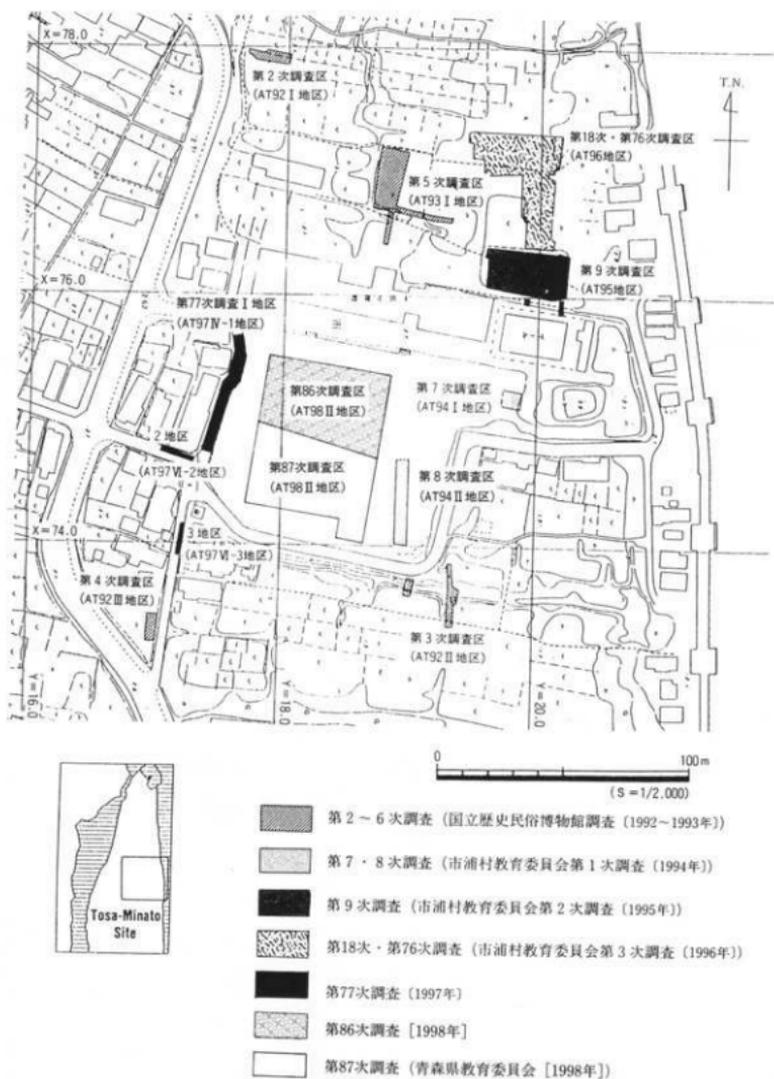
(榎原滋高)

6 調査の方法（第4・5図）

発掘調査は、重機を使用して表土を掘削し、それより下層は人力により行った。それと同時に調査区北および西側のサブトレンチでは、1994年に実施した市浦村教育委員会による第7次調査で明確にした表土、I層、III層、IV層、V層（地山）までの基本層序を確認した（市浦村 1996）。基本層序は以下の通りである。



第4図 調査区位置図(1) (縮尺1/6,000) (青森県教育委員会作成に加筆)



第5図 調査区位置図(2)

第Ⅰ層：現代の生活面を含む耕作土、盛土層である。

第Ⅱ層：中世～現代までの遺物包含層である。

第Ⅲ層：中世・近世遺構面を含む中世遺物包含層である。

第Ⅳ層：無遺物層で黒色砂質土である。

第Ⅴ層：無遺物層で黄褐色砂層で構成される。

遺構検出はⅣ層上面、地山面でそれぞれ行なった。比較的規模の小さな遺構は二分法を用いて発掘し、大きな遺構には四分法を用いた。検出された遺構には、市浦村教育委員会による十三湊遺跡での遺構の標示分類表に基づいて標示し、検出順に番号を付し、遺構名とした。標示は以下に行なった。

SA：櫓・塙 SB：掘立柱建物 SD：溝・堀 SE：井戸 SI：竪穴建物

SK：土坑 SP：穴・柱穴 SX：集石遺構

遺構の平面図・断面図は原則的に縮尺10分の1あるいは20分の1で、割り付け実測を行なった。土坑については、基本的には堆積に層位があるものについて断面図を作成した。

遺物の取り上げは全て地点を記録し、後の整理作業で座標を割り出した。立面はレベルによって標高を測定し、少数点以下3桁まで記録した。

写真撮影は遺構検出状態、土層断面、遺物出土状態、遺構完掘状態等を中心に行なった。調査区全体の発掘後全景写真は空中写真撮影システムによる写真撮影を実施した。(田中 学)

第2章 発掘調査の成果

1 層位 (図版2～7, 79)

第86・87次調査地区は十三小学校グラウンドのほぼ全域にあたる。地山面の標高はX座標75.28付近で標高が異なり、南側の標高は約1.3m、北側の標高は約2.0mである。Y座標では18.52付近で標高が異なり、東側の標高は約1.3m、西側の標高は約1.9mである。よって北西側の標高が最も高く、南東に向かって標高が低くなっていく。

遺構埋土は黒褐色・暗褐色であるので、地山面より上層にも堆積があったと推定でき、後世に地山面まで削平を受けたと考えられる。このため調査区北西角の一部では層位の観察を行えなかった。

層位は北壁、西壁の二方向で観察した。西壁の北側では2条の堀状遺構を検出、南側では市浦村教育委員会の第7次調査(1994年)で明確にした基本層序を確認した。第I層は現代の生活面を含む盛土層である。厚さは約10～50cmである。第III層は中世・近世遺構面を含む中世遺物包含層である。厚さは約10～40cmである。黒褐色砂質土を基本とする。第III層は地山面の高低差に対応して、北西から南東に向かって標高が低くなっており、その高低差をなくすために上面に盛土をして一部整地している。盛土の年代については不明である。第IV層は無遺物層である。厚さは20～40cmであり、黒色砂質土を基本とする。なお第II層は確認できなかった。(遠野いずみ)

2 遺構 (図版8～121, 第6図)

本調査区で検出した主な遺構には柵列、掘立柱建物、掘溝、井戸、竪穴遺構、土坑、集石遺構がある。その他、多数の柱穴を検出している。

以下で主な遺構について報告するが、ここでは各遺構を種類ごとに記すにとどめ、詳細な検討やその変遷については第4章考察で扱うこととする。

(1) 柵列 (図版80～84)

今回の調査では布掘り柵列を含む柵列16列を復元した。復元には高島成信氏のご教示を得た。なお文中に示す尺は、1尺を0.303mとして計算したものである。

SA01 (図版80) : 調査区北寄り、X座標75.12～75.20、Y座標18.44～18.88に位置する。東西方向にSD02に沿うように並び、主軸方位はN-80.0°-Wである。総長は2140cm(70尺)であり、柱間は約212cm(7尺)等間である。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形・不整円形を呈し、長径22～60cm、短径20～40cm、深さ10～44cmを測る。SD02、SE16、SP287・383・1030を壊し、SK79、SP1131に壊されている。遺物は鉄滓が1点(SP1060)出土している。

SA02 (図版80) : 調査区北寄り、X座標75.04～75.08、Y座標18.48～18.86に位置する。東西方向にSD02に沿うように並び、主軸方位はN-85.5°-Wである。総長は1888cm(62尺)であり、柱間は212cm(7尺)等間である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径22～41cm、短径19～36cm、深さ16～57cmを測る。SD02・04、SP934・1061・1070・1075・1150を壊し、SP935に壊されている。遺物は珠洲甕が1点

(SP1132), 中国製天目茶碗が1点 (SP1026), 鉄釘が2点 (SP1026) 出土している。

SA04 (図版92) : 調査区北寄り, X座標75.04~75.08, Y座標17.86~18.86に位置する。東西方向に延び, 主軸方位はN-77.7°-Wである。総長は515cm (17尺) であり, 柱穴の平面形は楕円形を呈し, 長径16cm, 短径10cmを測る。SD17, SP570・574・576・692・977・990に壊されている。

SA08 : 調査区中央からやや北寄り, X座標74.76~74.94, Y座標18.00~18.02に位置する。南北方向に延び, 主軸方位はN-7.0°-Eである。総長は876cm (29尺) であり, 柱穴の平面形は円形を呈し, 長径20~22cm, 短径19~21cm, 深さ11~34cmを測る。SD33を壊し, SD03, SK90・105, SP253・1373・1409・1444・1870・1985・2091に壊されている。

SA22 : 調査区中央からやや北寄り, X座標74.98~75.00, Y座標18.54~18.62に位置する。東西方向に延び, 主軸方位はN-82.0°-Wである。総長は488cm (16尺) であり, 柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し, 長径18~20cm, 短径12~19cm, 深さ14~21cmを測る。SD216, SK385を壊し, SK542, SP3814・4580~4582・4587~4590に壊されている。

SA23 (図版81の1) : 調査区北寄り, X座標75.18~75.21, Y座標17.94~18.07に位置する。柱間2間で南北方向に延び, 主軸方位はN-14.0°-Eである。総長は520cm (17尺) であり, 柱間は約220cm (7尺) 等間である。柱穴の平面形は円形を呈し, 長径23~33cm, 短径21~30cm, 深さ14~28cmを測る。SK16, SP200を壊している。

SA24 (図版81の1) : 調査区北寄り, X座標75.30~75.35, Y座標17.90~18.09に位置する。柱間3間で東西方向に延び, 主軸方位はN-79.0°-Wである。総長は600cm (20尺) であり, 柱間は約200cm (7尺) 等間である。柱穴の平面形は円形を呈し, 長径29~36cm, 短径23~31cm, 深さ21~36cmを測る。

SA25 (図版81の1) : 調査区北寄り, X座標75.16~75.18, Y座標18.75~18.84に位置する。柱間4間で東西方向に延び, 主軸方位はN-79.0°-Wである。総長は930cm (31尺) であり, 柱間は約232cm (8尺) 等間である。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し, 長径27~55cm, 短径24~45cm, 深さ16~37cmを測る。SP149では柱痕跡を確認し, 径15cmを測る。SI06, SP93・137を壊している。

SA26 (図版81の1) : 調査区北寄り, X座標75.06~75.14, Y座標18.78~18.80に位置する。柱間2間で東西方向に延び, 主軸方位はN-85.0°-Wである。総長は470cm (16尺) であり, 柱間は約235cm (8尺) 等間である。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し, 長径21~35cm, 短径17~29cm, 深さ8~38cmを測る。SP523・532を壊している。

SA27 (図版82の1) : 調査区北寄り, X座標74.99~75.04, Y座標18.12~18.27に位置する。柱間2間で東西方向に延び, 主軸方位はN-5.5°-Eである。総長は400cm (13尺) であり, 柱間は約200cm (7尺) 等間である。柱穴の平面形は円形を呈し, 長径31~40cm, 短径24~32cm, 深さ15~62cmを測る。SK77, SP529を壊している。

SA28 (図版82の2) : 調査区中央やや北寄り, X座標75.00~75.04, Y座標18.12~18.28に位置する。柱間3間で東西方向に延び, 主軸方位はN-77.5°-Wである。総長は740cm (24尺) であり, 柱間は約247cm (8尺) 等間である。柱穴の平面形は円形を呈し, 長径20~37cm, 短径18~35cm, 深さ22~47cmを測る。

SA29 (図版82の3) : 調査区中央やや北寄り, X座標74.92~74.94, Y座標18.56~18.72に位置する。柱間3間で東西方向に延び, 主軸方位はN-82.5°-Wである。総長は850cm (28尺) であり, 柱間は約283cm (9尺) 等間である。柱穴の平面形は円形を呈し, 長径22~31cm, 短径21~28cm, 深さ19~31cmを測

る。SD14, SP1006・1008・1018を壊している。

SA31(図版83の1)：調査区北寄り, X座標75.39~75.43, Y座標17.95~18.10に位置する。柱間3間で南北方向に延び、主軸方位はN-10.5°-Eである。総長は220cm(7尺)であり、柱間は約110cm(4尺)等間である。柱穴の平面形は楕円形または円形を呈し、長径20~30cm, 短径20~24cm, 深さ16~19cmを測る。

SA32(図版84の1)：調査区北寄り, X座標75.40~75.44, Y座標17.96~18.10に位置する。柱間3間で東西方向に延び、主軸方位はN-81.5°-Eである。総長は720cm(24尺)であり、柱間は約240cm(8尺)等間である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径34~40cm, 短径30~40cm, 深さ14~32cmを測る。SP04・21に壊されている。

SA33(図版84の2)：調査区北寄り, X座標75.22~75.25, Y座標18.51~18.59に位置する。柱間3間で南北方向に延び、主軸方位はN-7.5°-Eである。総長は600cm(20尺)であり、柱間は約200cm(7尺)等間である。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、長径24~56cm, 短径24~47cm, 深さ20~57cmを測る。SP255では柱痕跡を確認し、径14cmを測る。

SA34(図版84の3)：調査区北寄り, X座標75.24~75.26, Y座標18.54~18.60に位置する。柱間3間で東西方向に延び、主軸方位はN-79.5°-Wである。総長は370cm(12尺)であり、柱間は185cm(6尺)等間である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径24~56cm, 短径24~40cm, 深さ20~57cmを測る。SD04, SP327・338を壊し、SP330に壊されている。

(2) 掘立柱建物(図版83, 85~87)

今回の調査では掘立柱建物11棟を復原した。復原には欄列と同様に、高島成侑氏のご教示を得た。なお文中に示す尺は、1尺を0.303mとして計算したものである。

SB03(図版85)：調査区北寄り, X座標75.15~75.25, Y座標18.59~18.74に位置する。桁行3間, 梁行2間の東西棟掘立柱建物である。SP376に対応する北側桁行の柱穴は消失している。主軸方位はN-79.5°-Wである。桁行長は690cm(23尺)であり、梁行長は約390cm(13尺)である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径24~35cm, 短径16~33cm, 深さ11~43cmを測る。SP449・475では柱痕跡を確認し、径8cm, 16cmを測る。SP466を壊し、SE09, SK28に壊されている。

SB04(図版86の1)：調査区北寄り, X座標75.12~75.24, Y座標18.45~18.66に位置する。桁行5間, 梁行2間の東西棟掘立柱建物である。SP290に対応する北側桁行の柱穴は消失している。主軸方位はN-80.5°-Wである。桁行長は980cm(32尺)であり、梁行長は約400cm(13尺)である。柱穴の平面形は円形または楕円形・不整形楕円形を呈し、長径15~36cm, 短径13~30, 深さ8~37cmを測る。SD04, SP921を壊している。

SB07(図版85)：調査区北寄り, X座標75.03~75.21, Y座標18.58~18.68に位置する。桁行4間, 梁行2間の南北棟掘立柱建物である。主軸方位はN-3.5°-Eである。桁行長は840cm(28尺)であり、梁行長は約450cm(15尺)である。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、長径22~55cm, 短径21~40cm, 深さ6~54cmを測る。SP466・948では柱痕跡を確認し、径はそれぞれ22cm, 12~20cmを測る。SD03, SP458・930を壊し、SP350・465に壊されている。

SB08(図版86の2)：調査区北東寄り, X座標74.87~75.06, Y座標18.80~18.85に位置する。桁行2

間、梁行1間の南北棟建物である。SP1156に対応する東側桁行の柱穴は調査区外に想定できる。主軸方位はN-2.0°-Eである。桁行長は400cm(13尺)であり、梁行長は約200cm(7尺)である。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、長径22~25cm、短径14~25cm、深さ6~34cmを測る。

SB09(図版85)：調査区中央やや北寄り、X座標75.01~75.10、Y座標18.50~18.68に位置する。桁行4間、梁行1間の側柱建物である。主軸方位はN-87.5°-Wである。桁行長は900cm(30尺)であり、梁行長は約220cm(7尺)である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径26~42cm、短径19~32cm、深さ6~42cmを測る。SD02、SP933・941に壊されている。

SB48：調査区北寄り、X座標75.19~75.25、Y座標17.99~18.08に位置する。桁行2間、梁行1間の東西棟建物である。主軸方位はN-83.0°-Wである。桁行長は470cm(16尺)であり、梁行長は約150cm(5尺)である。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、長径20~47cm、短径20~45cm、深さ9~45cmを測る。SD04、SE13、SK17・31、SP181・287・352・383・384・458・469・876・952を壊し、SK27・64、SP368・471・1125に壊されている。

SB49(図版83の1)：調査区北寄り、X座標75.11~75.20、Y座標18.19~18.30に位置する。桁行2間、梁行1間の東西棟建物である。SP760に対応する北側桁行の柱穴は消失している。主軸方位はN-80.0°-Wである。桁行長は530cm(17尺)であり、梁行長は約300cm(10尺)である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径24~36cm、短径23~32cm、深さ21~26cmを測る。SP758・760では柱痕跡を確認し、径はそれぞれ5cm、9cmを測る。

SB50(図版87)：調査区中央やや北寄り、X座標75.13~75.22、Y座標17.90~17.98に位置する。桁行2間、梁行1間の南北棟建物である。主軸方位はN-9.0°-Eである。桁行長は350cm(12尺)であり、梁行長は約300cm(10尺)である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径33~42cm、短径24~36cm、深さ14~44cmを測る。SE04を壊し、SP11に壊されている。

SB51(図版87)：調査区中央やや北寄り、X座標75.08~75.14、Y座標17.96~18.05に位置する。桁行2間、梁行1間の東西棟建物である。主軸方位はN-88.5°-Eである。桁行長は430cm(14尺)であり、梁行長は約230cm(8尺)である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径24~35cm、短径23~33cm、深さ10~30cmを測る。SE04を壊し、SP644に壊されている。

SB52(図版87)：調査区中央やや北寄り、X座標75.06~75.14、Y座標17.97~18.05に位置する。桁行2間、梁行1間の東西棟建物である。主軸方位はN-75.5°-Wである。桁行長は300cm(10尺)であり、梁行長は約230cm(8尺)である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径24~35cm、短径21~32cm、深さ11~30cmを測る。SP630・643・651を壊している。

SB53(図版83の2)：調査区中央やや北寄り、X座標74.96~75.04、Y座標18.18~18.31に位置する。桁行5間、梁行1間の東西棟建物である。主軸方位はN-80.0°-Wである。桁行長は530cm(17尺)であり、梁行長は約300cm(10尺)である。柱穴の平面形は円形を呈し、長径24~48cm、短径22~35cm、深さ15~43cmを測る。SP804・883を壊し、SP782に壊されている。

(3) 溝・堀(図版8~27, 88~92)

今回の調査では2条の堀状遺構を検出した。これらは第7・77次調査において確認された堀状遺構に対応するものであることが判明した。また堀状遺構に先行して、4条の溝状遺構が存在したことも判明

した。その他、道路の側溝として復原できるような、小規模な溝状遺構も確認している。本報告書ではこれらの遺構を「溝・堀」と呼称して以下に記述する。

SD01 (図版8～11, 図版88): 調査区北寄り, X座標75.28～75.54, Y座標18.12～18.82に位置する。東西方向にわたって調査区全域に及び、主軸方位はN-74.5°-Wである。断面形は方形状を呈し、底面は平坦である。規模は長3708cm, 上端幅114～324cm, 下端幅100～250cm, 最深120cmを測る。埋土は大きく5層に区分でき、上層から黒褐色砂質土の埋土①層, 灰黄褐色砂質土の埋土②層, 黒褐色シルト質土の腐食土層, 灰白色砂の飛砂堆積層, におい黄褐色砂質土～砂の自然堆積層とした。埋土①層, 埋土②層, 自然堆積層は遺構全体にわたって存在するが、腐食土層および飛砂堆積層は部分的に存在する。埋土①・②層は、人為的に埋め戻した土層の可能性が。基本的にSD02の堆積状況と同様である。SD04・17, SK30, SP304を壊し, SE01・02・07, SK07・10, SP36-42・54・56-62・64・65・399・400-403・406・409・509・511・512, SX01・03・04・07・16に壊されている。埋土①層と②層を面的調査で明確に区分することは難しく、層位観察によって区分するにとどまった。

遺物は自然堆積土層から珠洲すり鉢が1点, 刀の鞘に付属する銅製金具(折金)が1点出土し, 埋土①・②層から土器皿2点, 瀬戸美濃平椀・梅瓶それぞれ2点, 瀬戸美濃皿・天目茶碗・折縁深皿・花瓶・尊式花瓶・鉄釉梅瓶1点, それぞれ1点ずつ, 珠洲すり鉢・壺T種それぞれ2点ずつ, 瓷器系壺甕類4点, 炉壁の一部1点, 刀型刃物1点, 鉄釘30点, 鋸1点, 鉄滓6点, 砥石1点が出土している。また埋土②層の直下において, 部分的に骨片と炭化物が密集し, 特にX座標75.32, Y座標18.82において炭化米, X座標74.88, Y座標18.20において獣の顎骨などが出土している。出土炭化米および骨に関する詳細は, 付章を参照された。

SD02 (図版12・13, 図版89): 調査区中央からやや北寄り, X座標75.00～75.28, Y座標17.88～18.86に位置する。東西方向にわたって調査区全域に及び、主軸方位はN-80.0°-Wである。断面形は方形状を呈し、底面は平坦である。規模は長4848cm, 上端幅464～572cm, 下端幅110～330cm, 最深108cmを測る。埋土は大きく5層に区分でき、上層から黒褐色砂質土の埋土①層, 灰黄褐色砂質土の埋土②層, 黒褐色シルト質土の腐食土層, 灰白色砂の飛砂堆積層, におい黄褐色砂質土～砂の自然堆積層とした。埋土①層, 埋土②層, 自然堆積層は遺構全体にわたって存在するが、腐食土層および飛砂堆積層は部分的に存在する。SP1072を壊し, SD03・04・06～08・16, SE16・17, SK12～20・22・23・27・31・76～79, SX06・10・13・14・15・21, SI07・08, SP107～122・168・169・171・174・185～187・189～193・196・198・199・201・205～209・227・229～246・288～290・291・293～295・368・369・373・382・385～392・394～396・497・669・847～859・865～867・916・933・937・944～946・958・996・1022～1030・1038～1040・1042・1063・1067～1071・1073・1077・1079・1091・1132・1150・1152・1154・3532～3537・4182～4185に壊されている。

遺物は自然堆積土層から珠洲すり鉢が1点出土し, 埋土①・②層から青磁椀1点, 瓷器系壺甕類1点, 信楽焼壺1点, 珠洲すり鉢3点, 珠洲壺K種・T種・R種それぞれ1点ずつ, 珠洲壺甕類1点, 鉄釘21点, 銭貨1点, 砥石1点が出土している。SD01と同様に, 埋土①・②層及びその直下から, 部分的に炭化米が出土している。

SD03 (図版14～20, 図版90): 調査区中央南寄りから北端にかけて, 東西・南北2方向にわたってほぼ直角に曲がりコの字状に及び, X座標74.66～75.50, Y座標17.82～18.46に位置する。主軸方位はN-

18.5°-Eである。底面は平坦である。規模は長6910cm, 上端幅76~168cm, 下端幅48~100cm, 最深64cmを測る。埋土は大きく7層に区分でき、上層から黒褐色砂質土の埋土, におい黄褐色砂質土の飛砂堆積層, 黒色・黒褐色シルト質土の腐食土層, 灰黄褐色砂質土の飛砂層, 黒色・黒褐色シルト質土の腐食土層, 暗褐色・褐色砂質土で地山砂粒混じりの盛土層, 溝を掘った際についたと思われる地山砂粒・黒色シルト粒混じりで暗褐色砂質土の耕具痕層とした。SA08, SD17・20, SP47を壊し, SD01・02, SE18・20, SI02・07~09, SK63・83・85~88・98・99・101・129・221・222, SX08・25・26, SP35・51・258・263・275・301・845・846・880・884・894・895・1189・1255・1271・1275・1279・1286~1289・1292・1355・1466~1469・1472~1475・1478・1479・1606・2669~2672・2676に壊されている。遺物は珠洲すり鉢が2点, 珠洲甕が1点出土している。

SD04(図版21~22, 図版91): 調査区中央から北端にかけて, X座標74.66~75.50, Y座標17.82~18.46に位置する。南北方向にわたって延びた後, ほぼ直角に曲がって東西方向に延びる。主軸方位はN-86.5°-Wである。規模は長3046cm, 上端幅40~84cm, 下端幅14~32cm, 最深75cmを測る。

SD04は一度掘り直していることがNo.14ラインおよびSD01トレンチ6の土層断面図より確認できる。最初に掘った段階を第1段階, 掘り直した段階を第2段階とすると, 第1段階, 第2段階とも同じ平面から掘りこまれ, 第1段階がX座標75.40, Y座標18.52付近で収束しているのに対して, 第2段階では第1段階の溝より約10~40cm上面から掘りこみ, 北壁まで延長している。第1段階の埋土は灰黄褐色砂質土であり, 第2段階の埋土は黒褐色砂質土あるいはシルトである。

SD09を壊し, SD01・02, SE08, SK09・10, SP56~58・62・64・65・318・320・324・325・237・342・345・346・353・359・370・383・384・937・953・954・962・980・981・1002・1767, SX04・05・17に壊されている。遺物は珠洲壺R種が1点出土している。

SD05: 調査区北寄りX座標75.36, Y座標17.94に位置する。東西方向に延び, 主軸方位はN-90.0°-Eである。底面は平坦である。規模は長42cm, 上端幅12~16cm, 下端幅8cm, 最深7cmを測る。SP91に壊されている。

SD06: 調査区北寄り, X座標75.12~75.18, Y座標18.30に位置する。南北方向に延び, 主軸方位はN-6.0°-Eである。底面は平坦である。規模は長235cm, 上端幅28~36cm, 下端幅20~28cm, 最深17cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。SK20, SP294を壊している。遺物は鉄釘が1点, 砥石が1点出土している。

SD07: 調査区北寄り, X座標75.14~75.18, Y座標18.32に位置する。南北方向に延び, 主軸方位はN-3.0°-Eである。底面は平坦である。規模は長300cm, 上端幅24~37cm, 下端幅22~24cm, 最深29cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。SD08, SK20を壊している。

SD08: 調査区北寄り, X座標75.16~75.18, Y座標18.32に位置する。南北方向に延び, 主軸方位はN-2.75°-Eである。規模は長113cm, 上端幅23cm, 下端幅4~8cm, 最深5cmを測る。SK20を壊し, SD07に壊されている。

SD09: 調査区北寄り, X座標75.20~75.26, Y座標18.54に位置する。南北方向に延び, 主軸方位はN-5.0°-Eである。底面は平坦である。規模は長242cm, 上端幅70~84cm, 下端幅14~62cm, 最深37cmを測る。SD04, SP346, SX05に壊されている。

SD10(図版93): 調査区北寄り, X座標75.28~75.30, Y座標18.72に位置する。南北方向に延び, 主

軸方位はN-10.5°-Eである。底面は平坦である。規模は長132cm, 上端幅49~58cm, 下端幅32~42cm, 最深35cmを測る。SK34を壊し, SE02, SP419に壊されている。

SD11: 調査区中央, X座標74.98~75.0, Y座標17.88に位置する。南北方向に延び, 主軸方位はN-16.5°-Eである。底面は平坦である。規模は長168cm, 上端幅20~24cm, 下端幅16~20cm, 最深22cmを測る。SD13を壊し, SD72に壊されている。

SD12: 調査区中央, X座標75.02~75.10, Y座標18.24~18.26に位置する。南北方向に延び, 主軸方位はN-21.5°-Eである。底面は平坦である。規模は長425cm, 上端幅36~46cm, 下端幅16~24cm, 最深22cmを測る。SK56に壊されている。

SD13 (図版26, 図版92): 調査区中央, X座標75.0, Y座標17.84~18.06に位置する。東西方向に延び, 主軸方位はN-87.7°-Wである。底面は平坦である。規模は長1008cm, 上端幅18~44cm, 下端幅12~20cm, 最深32cmを測る。SD11, SE10, SI04, SP540・593~595に壊されている。

SD14: 調査区中央, X座標74.94, Y座標18.56~18.68に位置する。東西方向に延び, 主軸方位はN-84.0°-Wである。底面は平坦である。規模は長590cm, 上端幅20~27cm, 下端幅12~20cm, 最深26cmを測る。SP1006~1009・1011・1013~1015・1017~1019・1122・1123に壊されている。

SD15 (図版24の1): 調査区中央, X座標74.98, Y座標18.58~18.66に位置する。東西方向に延び, 主軸方位はN-84.2°-Wである。底面は平坦である。規模は長292cm, 上端幅17~22cm, 下端幅8~12cm, 最深20cmを測る。SA22, SP991・993・1099に壊されている。

SD16 (図版24の1): 調査区中央, X座標75.08~75.12, Y座標18.52~18.76に位置する。東西方向に延び, 主軸方位はN-76.7°-Wである。底面は平坦である。規模は長804cm, 上端幅16~33cm, 下端幅9~13cm, 最深21cmを測る。SP926・929・1033・1050を壊し, SX06・21, SP1051・1052・1056に壊されている。遺物は鉄釘が4点出土している。

SD17 (図版23の3, 図版24の2~図版25, 図版26の2~図版27, 図版92): 調査区中央, X座標74.34~75.10, Y座標18.02~18.10に位置する。南北方向に延び, 主軸方位はN-5.0°-Eである。底面は平坦である。規模は長3700cm, 上端幅74~112cm, 下端幅14~58cm, 最深64cmを測る。埋土は大きく6層に区分でき, 上層から黒褐色砂質土の埋土, ぶい黄褐色砂質土の飛砂堆積層, 黒色・黒褐色シルト質土の腐食土層, 灰黄褐色砂質土の飛砂堆積層, 黒色・黒褐色シルト質土の腐食土層, 溝を掘った際の耕具痕中に堆積した地山砂粒・黒色シルト粒混じりの暗褐色砂質土層とした。SD22, SK112を壊し, SD03・38・39, SI12, SK98・102・110・185・191・200・272・281~283・342, SP662・665・691・698・719・735・751・752・756・982・983・992・1311・1331・1334・1336・1337・1342・1356・1365・1368・1369・1385~1388・1394・1395・1402・1403・1407・1431・1470・2469・2470・2538・2561・2574・2646~2648・2657・3399・3418・3431・3444・3446・3453・4189に壊されている。

SD22 (図版92): 調査区中央, X座標74.34~75.10, Y座標18.0~18.08に位置する。南北方向に延び, 主軸方位はN-8.0°-Eである。底面は平坦である。規模は長834cm, 上端幅80cm, 下端幅8~30cm, 最深49cmを測る。埋土は大きく6層に区分でき, 上層から黒褐色砂質土の埋土, ぶい黄褐色砂質土の飛砂堆積層, 黒色・黒褐色シルト質土の腐食土層, 灰黄褐色砂質土の飛砂堆積層, 黒色・黒褐色シルト質土の腐食土層, 暗褐色砂質土で, 溝を掘った際の耕具痕中に堆積した地山砂粒・黒色シルト粒混じりの暗褐色砂質土層とした。SD13・72, SA04を壊し, SD17, SK342, SP719・720・725・748~750・

756・982・983・992・4187・4189・4192に壊されている。

SD33：調査区中央，X座標74.92～74.98，Y座標18.02～18.06に位置する。南北方向に延び，主軸方位はN-34.5°-Eである。底面は平坦である。規模は長324cm，上端幅21～42cm，下端幅10～22cm，最深22cmを測る。SD13，SP717・1308・1655に壊されている。遺物は砥石が1点出土している。

SD72（図版26の1・2，図版92）：調査区中央，X座標74.94～75.02，Y座標17.86～18.26に位置する。東西方向に延び，主軸方位はN-82.0°-Wである。底面は平坦である。規模は長1710cm，上端幅46～76cm，下端幅26～44cm，最深42cmを測る。SD11を壊し，SD17・22，SE10，SI03・04，SK40・46～48・56，SP02・107・366・590・596・597・692・701・702・705・706・718・832・835・837・4191・4193・4194・4203・4204，SX20に壊されている。

（4）井戸（図版28～35，図版93～99）

今回の調査では井戸を15基検出した。ただしSE07は遺構の大半が調査区外にあり，未調査である。井戸側の残存状態が良好なものは，宇野隆夫氏の分類によると木組み井戸の「縦板組隅柱横棧どめ」に属する（宇野1982）。

本地区の井戸については，断面形態をもとに大きく3つの類型に分けることが可能であった（第6図）。ここではその集計結果について記述する。調査区内において，断面形態の分類が可能であった井戸は総数42基のうち25基を数える。その内訳は，C類が64%と大半を占め，B類が24%，A類が12%という順につづく。

なお十三湊遺跡では井戸の上部に掘りこまれた穴をよく見受ける。この穴は井戸側内が埋められた後に掘られており，井戸の廃棄に密接な関連があると推察される。本報告書ではこれを二次掘削坑と特別に呼ぶこととする。

また調査中に湧水や土砂の崩落などの理由により正確な出土地点を把握することができなかった遺物については，文中で「出土地点が確認できなかった遺物」と記載している。

SE01（図版28の1，図版93）：調査区北寄り東壁際，X座標75.40，Y座標18.72に位置する。堀形の平面形は円形，断面形はA類である。規模は長径178cm，短径176cm，深さ92cmを測る。堀形の中央，標高

形態・分類	備考
A類 	・掘り形の断面形がすり鉢形を呈するもの。
B類 	・掘り形にテラス状の平坦面を有するもの。
C類 	・掘り形の断面形が方形を呈するもの。

第6図 井戸断面形分類図

0.64mにおいて長辺87cm, 短辺84cmの方形井戸側を確認した。遺構底面に水溜の曲物を確認している。曲物は径45cm, 高26cmを測る。埋土は9層に分層でき、黒褐色砂質土の二次掘削坑、黄褐色砂質土を中心とする掘形、黒褐色砂質土の井戸側内、のそれぞれに大きく区分できる。二次掘削坑の埋土には、拳大の自然礫が多く混入していた。SD04, SP80を壊している。遺物は二次掘削坑埋土から珠洲壺・すり鉢がそれぞれ1点、井戸側内埋土から瀬戸美濃平椀1点、木製の箸3点、出土地点が確認できなかった遺物として漆器椀皿類2点、鉄製品3点が出土している。

SE02(図版28の2, 図版93): 調査区北寄り東壁際, X座標75.32, Y座標18.72に位置する。掘形の平面形は不整形, 断面形はB類である。規模は長径239cm, 短径226cm, 深さ89cmを測る。掘形の中央, 標高0.78mにおいて長辺90cm, 短辺84cmの方形井戸側を確認した。遺構底面に水溜の曲物を確認している。曲物は径45cm, 高22cmを測る。埋土は9層に分層でき、全て黒褐色砂質土であるが、堆積の状態から二次掘削坑, 掘形, 井戸側内, のそれぞれに大きく区分できる。SD01・10を壊している。遺物は出土地点が確認できなかった遺物として珠洲すり鉢1点, 漆器椀皿類1点が出土している。

SE04(図版28の3, 図版94): 調査区中央西寄り, X座標75.04, Y座標17.96に位置する。掘形の平面形は不整形, 断面形はA類である。規模は長径189cm, 短径145cm, 深さ113cmを測る。掘形の中央西寄り, 標高0.71mにおいて長辺89cm, 短辺75cmの方形井戸側を確認した。底面に水溜の曲物を確認している。曲物は径37cm, 高8.5cmを測る。埋土は9層に分層でき、いよいよ黄褐色砂質土を中心とする掘形, 黒褐色砂質土を中心とする井戸側内, のそれぞれに大きく区分できる。SX12, SP441・537・538・543に壊されている。遺物は井戸側内埋土から瀬戸美濃平椀1点が出土している。

SE06(図版29の1・2, 図版94): 調査区中央北寄り, X座標75.32, Y座標18.28に位置する。掘形の平面形は不整形, 断面形はB類である。規模は長径264cm, 短径205cm, 深さ128cmを測る。掘形の南東, 標高0.81mにおいて長辺98cm, 短辺95cmの方形井戸側を確認した。底面に曲物は確認できなかった。埋土は19層に分層でき、暗褐色砂質土を中心とする二次掘削坑, 炭化物を含む暗褐色砂質土を中心とする掘形, 黒褐色砂質土の井戸側内, のそれぞれに大きく区分できる。SP215・219・220・221・223に壊されている。遺物は二次掘削坑埋土から珠洲すり鉢1点が出土している。

SE07(図版29の3, 図版95): 調査区北寄り西壁際, X座標75.52, Y座標18.20に位置する。遺構の北半分が調査区外にあるため平面形は不明である。井戸の調査は南側を半壊して行なった。断面形はA類である。掘形の中央, 標高0.71mにおいて井戸側を確認した。横棧が残存するのみで隅柱や遺構底面の曲物は確認できなかった。埋土は15層に分層でき、黄褐色砂質土を中心とする掘形, 黒褐色砂質土を中心とする井戸側内埋土, のそれぞれに大きく区分できる。SD01を壊している。遺物は井戸側内埋土から瀬戸美濃平椀・天目茶碗それぞれ1点, 土器皿1点, 珠洲すり鉢1点が出土している。

SE08(図版30, 図版95): 調査区中央北寄り, X座標75.44, Y座標18.52に位置する。掘形の平面形は不整形, 断面形はC類である。規模は長径180cm, 短径158cm, 深さ131cmを測る。掘形の中央, 標高0.75mにおいて長辺110cm, 短辺104cmの方形井戸側を確認した。遺構底面に水溜の曲物を確認している。曲物は径56cm, 高17cmを測る。埋土は18層に分層でき、暗褐色砂質土を中心とする掘形, 黒褐色砂質土を中心とする井戸側内, のそれぞれに大きく区分できる。井戸側内には、中世遺構面から100cm程掘り下げた所まで拳大の自然礫が混入していた。SD04を壊し, SK10に壊されている。遺物は掘形埋土から瀬戸美濃平椀が1点, 越前甕2点, 銅鏡1点, 井戸側内埋土から珠洲すり鉢3点, 珠洲甕1点, 鉄製刀子1点,

鉄釘 2点, 出土地点が確認できなかった遺物として珠洲甕 1点, 鉄製品 2点が出土している。

SE09(図版31, 図版95): 調査区中央北寄り, X座標75.18, Y座標18.72に位置する。掘形の平面形は方形, 断面形はC類である。規模は長径149cm, 短径145cm, 深さ112cmを測る。掘形の中央, 標高0.66mにおいて長辺64cm, 短辺58cmの方形井戸側を確認した。中世遺構面から70cm程掘り下げた所に頭大の自然礫が出土した。底面に曲物は確認できなかった。埋土は15層に分層でき, 黒褐色砂質土を中心とする二次掘削坑, におい黄褐色砂を中心とする掘形, 黒褐色粘質土を中心とする井戸側内, のそれぞれに大きく区分できる。SP475・502を壊している。遺物は二次掘削坑埋土から土器皿 1点, 珠洲甕・すり鉢それぞれ 1点, 瓦器火鉢 1点, 鉄製品 7点, 掘形埋土から鉄製品 1点, 出土地点が確認できなかった遺物として瀬戸美濃平碗 1点が出土している。

SE10(図版32の1, 図版96): 調査区中央西寄り, X座標75.00, Y座標17.94に位置する。掘形の平面形は方形, 断面形はC類である。規模は長径157cm, 短径155cm, 深さ136cmを測る。掘形の中央, 標高0.68mにおいて長辺90cm, 短辺82cmの方形井戸側を確認した。底面に水溜の曲物を確認している。曲物は径49cm, 高4cmを測る。埋土は18層に分層でき, 黒褐色砂質土の二次掘削坑, 灰黄褐色砂質土を中心とする掘形, 黒褐色砂質土の井戸側内, のそれぞれに大きく区分できる。二次掘削坑の埋土には, 上層から拳大の自然礫が混入していた。SK39, SA03・05を壊し, SP598に壊されている。遺物は二次掘削坑埋土から珠洲すり鉢 4点, 銅製品 1点, 鉄製品13点, 銭貨 1点, 漆の塗膜が出土している。

SE11(図版33, 図版96): 調査区中央西寄り, X座標75.12, Y座標18.14に位置する。掘形の平面形は不整形, 断面形はC類である。規模は長径185cm, 短径182cm, 深さ107cmを測る。掘形の中央やや南寄り, 標高0.73mにおいて長辺85cm, 短辺83cmの方形井戸側を確認した。横棧が残存するのみで隅柱は確認できなかった。底面に水溜の曲物を確認している。曲物は径41cm, 高21cmを測る。埋土は10層に分層でき, 暗褐色砂質土を中心とする掘形, 黒褐色砂質土を中心とする井戸側内, のそれぞれに大きく区分できる。遺物は掘形埋土から珠洲壺 1点, 鉄製品 5点, 井戸側内埋土から珠洲すり鉢 1点, 鉄製刀形刃物 1点, 鉄釘 7点が出土している。

SE12(図版32の2, 図版97): 調査区中央西寄り, X座標75.12, Y座標18.10に位置する。掘形の平面形は不整形, 断面形はB類である。規模は長径330cm, 短径265cm, 深さ104cmを測る。掘形の中央, 標高0.59mにおいて縦板, 横棧を確認したが, 隅柱と遺構底面の曲物は確認できなかった。井戸側の規模は不明である。埋土は23層に分層でき, 全て黒褐色砂質土を中心とするが, 堆積の状態で, 暗褐色砂質土を含む井戸側の二次掘削坑, 褐色土砂質を含む掘形, 黒色砂質土を含む井戸側内, のそれぞれに大きく区分できる。SP647, SD17, SA06を壊し, SP637に壊されている。遺物は二次掘削坑埋土から瀬戸美濃平碗 1点, 珠洲すり鉢 2点, 珠洲壺 1点, 鉄製品13点, 掘形埋土から鉄製品 1点が出土している。

SE13(図版34の1・2, 図版97): 調査区中央, X座標75.04, Y座標18.42に位置する。掘形の平面形は方形, 断面形はB類である。規模は長径175cm, 短径159cm, 深さ85cmを測る。掘形の中央, 標高0.69mにおいて長辺96cm, 短辺95cmの方形井戸側を確認した。底面に曲物は確認できなかった。埋土は23層に分層でき, 黒褐色砂質土を中心とした二次掘削坑, 灰黄褐色土と黒褐色粘質土の掘形, 灰黄褐色土におい黄褐色の砂および黒褐色シルトの井戸側内, のそれぞれに大きく区分できる。SK64, SP875-877・879・885に壊されている。遺物は二次掘削坑埋土から珠洲甕 1点, 鉄製刀形刃物 1点が出土している。

SE14(図版32の3, 図版98): 調査区中央東寄り, X座標75.00, Y座標18.76に位置する。掘形の平面

形は不整形、断面形はB類である。規模は長径211cm、短径206cm、深さ86cmを測る。掘形の中央、標高0.67mにおいて長辺95cm、短辺94cmの方形井戸側を確認した。底面に水溜の曲物を確認している。曲物は上下二段に積み重なっており、上部は径55cm、高23cm、下部は径51cm、高30cmを測る。埋土は35層に分層でき、黒褐色砂質土を中心とする二次掘削坑、暗褐色砂質土を中心とする掘形、黒褐色砂質土を中心とする井戸側内、のそれぞれに大きく区分できる。井戸側内埋土の上層には拳大の自然礫が混入していた。SP1103を壊している。遺物は二次掘削坑埋土から鉄釘1点、掘形埋土から白磁皿1点、瓦器火鉢1点、出土地点が確認できなかった遺物として珠洲甕1点が出土している。

SE15(図版34の3、図版98)：調査区中央東寄り、X座標75.00、Y座標18.70に位置する。掘形の平面形は不整形、断面形はC類である。規模は長径243cm、短径186cm、深さ116cmを測る。掘形の中央、標高0.74mにおいて長辺91cm、短辺83cmの方形井戸側を確認した。底面に水溜の曲物を確認している。曲物は径39cm、高53cmを測る。埋土は10層に分層でき、暗褐色砂質土を中心とする二次掘削坑、黄褐色砂質土を中心とする掘形、灰黄褐色砂質土の井戸側内、のそれぞれに大きく区分できる。SP1085に壊されている。遺物は二次掘削坑埋土から瀬戸美濃灰釉陶器・天目茶碗それぞれ1点、鉄製品4点、掘形埋土から鉄製品4点が出土している。

SE16(図版35の1・2、図版99)：調査区北寄り東壁際、X座標75.12、Y座標18.72に位置する。掘形の平面形は不整形、断面形はC類である。規模は長径170cm、短径167cm、深さ132cmを測る。掘形の中央、標高0.74mにおいて長辺101cm、短辺92cmの方形井戸側を確認した。底面に曲物は確認できなかった。埋土は11層に分層でき、黒褐色砂質土の二次掘削坑のみを確認した。SD02を壊し、SP669・1024に壊されている。遺物は二次掘削坑埋土から瀬戸美濃天目茶碗2点、中国製天目茶碗1点、青磁碗1点、土器皿2点、珠洲すり鉢3点、鉄製品15点、銭貨4点、出土地点が確認できなかった遺物として鉄釘1点、銭貨1点、種子1点が出土している。

SE17(図版35の3、図版99)：調査区北寄り東壁際、X座標75.08、Y座標18.84に位置する。掘形の平面形は不整形、断面形はA類である。規模は長径107cm、短径98cm、深さ66cmを測る。掘形の中央、標高0.74mにおいて長辺71cm、短辺63cmの方形井戸側を確認した。底面に水溜の曲物を確認している。曲物は径46cm、高19cmを測る。埋土は9層に分層でき、炭化物を含む黒褐色砂質土を中心とする二次掘削坑、黒褐色砂質土を中心とする掘形、黄褐色の砂粒を含む黒褐色砂質土を中心とする井戸側内、のそれぞれに大きく区分できる。SD02を壊し、SP1149に壊されている。遺物は二次掘削坑埋土から鉄釘1点、掘形埋土から鉄製品2点が出土している。

(5) 竪穴遺構(図版36~44、図版100~107)

今回の調査では竪穴遺構を10基検出した。そのうちSI01・03・04・09・10は、上屋を支えていたと推察できる柱穴を確認できるが、SI02・06にはそのような柱穴は確認できない。SI05は西壁土層断面図で確認したため、その規模は不明である。またSI07・08は検出のみにとどめた。

SI01(図版36、図版37の1・2、図版100・101)：調査区北寄り西壁際、X座標75.36~75.42、Y座標17.94~18.00に位置する。主軸方位はN-14.5°-Eである。平面形は方形を呈し、規模は長径299cm、短径270cm、深さは33cm、貼り床面まで9cmを測る。遺構の四隅には柱穴があり、上屋を支えていたと推察する。また柱穴間に、壁面に沿って走行する溝があり、壁板を立てる構造であったと考える。北辺の

溝が無い部分には竪穴内に向かって緩やかに傾斜する張り出しがあり、長35cm、幅80cmを測る。埋土は8層に分層できる。2層は黒褐色砂質土に炭化物を少量含んだ覆土であり、3・6・7層は黒褐色砂質土を中心とした貼り床層である。4・5層は部分的に入ったにふい黄褐色砂質土である。なお地山直上に炭化物が集中しており、火を使用した形跡が確認できた。SP03・05・07・12を壊し、SP06・09・13・14・4186に壊されている。SP11との先後関係は不明である。遺物は覆土中から須臾器杯身2点、地山直上から鉄片1点が出土している。

S102(図版37の3、図版38、図版102)：調査区中央北寄り、X座標75.08~75.14、Y座標18.34~18.40に位置する。主軸方位はN-7.5°-Eである。平面形は方形を呈し、規模は長径281cm、短径276cm、深さは22cmを測る。柱穴は多数確認されたが深く掘り込んだものは少なく、上屋を支える柱穴として明確に捉えることはできない。埋土は黒褐色砂質土の1層のみで、床面は確認できなかった。SD02を壊し、SP849・857・863・864、SX08に壊されている。遺物は瓦器火鉢9点、瀬戸美濃平碗1点、珠洲すり鉢1点、鉄釘2点、鉄製品1点が出土している。

S103(図版39~41、図版100、図版103・104)：調査区中央、X座標74.90~74.98、Y座標18.18~18.26に位置する。主軸方位はN-7.5°-Eである。平面形は方形を呈し、規模は長径352cm、短径301cm、深さは29cmを測る。遺構の四隅と、南壁を除く三辺の壁際の中央に計7本の柱穴があり、上屋を支えていたと推察する。また柱穴間に、壁面に沿って走行する溝があり、壁板を立てる構造であったと考える。埋土は黒褐色砂質土を中心に7層に分層できるが、明確な床面は確認できなかった。遺構の中央部や東よりで炉K1を確認した。平面形は円形を呈し、規模は径60cm、深さは28cmを測る。SD72、SI10、SK53・54、SP1495・1496、SX28を壊し、SK343、SP811・817・832・837・1494に壊されている。SP824・835・838~841との先後関係は不明である。遺物は貼り床内から珠洲壺1点、すり鉢2点、鉄製品1点、銭貨1点、P1内から珠洲壺1点、P3内から珠洲すり鉢1点、P4内から鉄釘1点、P8内から珠洲壺1点が出土している。

S104(図版42、図版100、図版105)：調査区中央西壁際、X座標74.94~75.00、Y座標17.98~18.02に位置する。主軸方位はN-11.5°-Eである。平面形は方形を呈し、規模は長径298cm、短径259cm、深さは18.4cmを測る。遺構の四隅と、北壁際・南壁際の中央に計6本の柱穴があり、上屋を支えていたと推察する。遺構確認面が低かったために壁面は確認できなかったが、東辺を除く三辺には溝があり、壁板を立てる構造であったと考える。なお東辺では、調査当初設けたサブトレンチによって溝を削平した可能性が高い。南辺では土層断面図から溝を確認している。南辺にはやや西よりに張り出しがあり、長20cm、幅90cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心として5層に分層できるが、明確な床面は確認できなかった。SD13・72、SP714・722を壊し、SP678・680・701・712・715・727・729・4190に壊されている。SP705~707・709~711・713・721・728との先後関係は不明である。遺物はP9内から土釜1点、P10内から瓷器系壺甕類1点が出土している。

S105(図版79)：調査区西壁、X座標75.56、Y座標17.94に位置する。規模は径178cm、深さ50cmを測る。西壁土層断面図でのみ確認したため平面形は不明である。埋土は8層に分層できる。1・2層は黒褐色砂質土・にふい黄褐色砂質土の覆土であり、3層は黒褐色砂質土の貼り床層である可能性を指摘できる。

なお本遺構は竪穴遺構として取り上げたが、土層断面図による確認のみであるために全体の規模・構

造が不明であり、遺構の性格についても変更の余地がある。

S106 (図版43, 図版44の1, 図版106): 調査区北寄り西壁際, X座標75.26~75.32, Y座標18.00~18.06に位置する。主軸方位はN-16.0°-Eである。平面形は不整形を呈し、規模は長径327cm, 短径283cm, 深さは39cm, 貼り床面まで25cmを測る。東辺の南部分は面的に把握することができなかった。柱穴は多数確認されたが深く掘りこんだものは少なく、上屋を支える柱穴として明確に捉えることはできない。D1・D2およびD3は竪穴に伴うものであるが、用途が明確ではなく、その性格は不明である。埋土は7層に分層できる。1層は黒褐色砂質土の覆土であり、4・5・6層は黒褐色砂質土を中心とした貼り床である。2・3層は部分的に入った暗褐色砂質土である。SK19, SP143・149~152・154・158・166・167・178, SX10に壊されている。遺物はD1内から珠洲壺、銭貨それぞれ1点, P6内から鉄釘1点, P10内から鉄釘1点, P12内から青磁椀1点, P14内から鉄釘1点, P15内から鉄釘1点, P30内から鉄釘1点, P34内から鉄製品1点, 埋土中から鉄釘7点が出土した。

S107 (図版44の2・3, 図版107): 調査区中央北寄り, X座標75.20~75.24, Y座標18.36~18.40に位置する。主軸方位はN-6.0°-Eである。平面形は方形を呈し、規模は長径233cm, 短径205cmを測る。上面に炭化物が集中して多数確認できることから、焼失家屋である可能性が非常に高い。SD02・03, SI08を壊し, SP279に壊されている。遺物は信楽壺甕類2点が出土している。

S108 (図版44の2, 図版107): 調査区中央北寄り, X座標75.20~75.24, Y座標18.34~18.42に位置する。主軸方位はN-13.5°-Eである。平面形は不整形を呈し、規模は長径388cm, 短径236cmを測る。SD02・03を壊し, SI07, SK23, SP279に壊されている。遺物は瀬戸美濃梅瓶1点が出土している。

S109 (図版100, 図版103・104): 調査区中央, X座標74.88~74.96, Y座標18.28~18.34に位置する。主軸方位はN-18.5°-Eである。平面形は方形を呈し、規模は長径263cm, 短径254cm, 深さは11cmを測る。遺構の四隅と、東壁際・西壁際の中央とに計6本の柱穴があり、上屋を支えていたと推察する。遺構確認面が低かったために壁面は確認できなかったが、南辺には溝があり、壁板を立てる構造であったと考える。埋土は黒褐色砂質土を中心として5層に分層できるが、明確な床面は確認できなかった。SD03, SI10, SP846を壊し, SK116・129, SP1621に壊されている。SP845・1614との先後関係は不明である。遺物は出土していない。

S110 (図版100, 図版103・104): 調査区中央, X座標74.92~74.96, Y座標18.26~18.30に位置する。主軸方位はN-11.0°-Eである。平面形は方形を呈し、規模は長径339cm, 短径287cm, 深さは7cmを測る。遺構の南東隅を除く三隅と、北壁際の中央とに計4本の柱穴があり、上屋を支えていたと推察する。遺構確認面が低かったために壁面は確認できなかったが、北辺および西辺には溝があり、壁板を立てる構造であったと考える。埋土は黒色砂質土と黒褐色砂質土の2層に分層できるが、明確な床面は確認できなかった。SD72, SP1495を壊し, SI03・09, SK53・54・116・343, SP817・820~822・832・833・841, SX28に壊されている。SP824・830・831・834・835・842・843・1492・1493・1496・1508との先後関係は不明である。遺物は出土していない。

(6) 土 坑 (図版45~62, 図版93, 図版96・97, 図版102~104, 図版106, 図版108~116, 図版118, 図版120)

今回の調査では土坑70基を検出した。そのうち遺物が出土しているものは38基である。またSK03・04・

09・12・16・17・20・22・24・27～29・31・35・60・64・67・76・77・79の20基は遺物の出土状況から土坑墓である可能性を指摘できる。

SK03 (図版45の1・3, 図版108): 調査区北寄り西壁際, X座標75.36, Y座標18.08に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長径133cm, 短径127cm, 深さ79cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心として17層に分層できる。SP24に壊されている。遺物は土器皿1点, 瀬戸美濃平椀2点, 瀬戸美濃天目茶碗1点, 甕器系甕1点, 鉄製品7点が出土している。

SK04 (図版45の2・3, 図版108): 調査区北寄り西壁際, X座標75.38, Y座標18.06に位置する。平面形は不整形円形を呈する。規模は長径192cm, 短径124cm, 深さ54cmを測る。埋土は黒褐色砂質土, 暗褐色砂質土を中心として16層に分層できる。SP22・24・025, SK05に壊されている。遺物は須恵器杯身1点, 鉄釘2点, 黒曜石製石核1点が出土している。

SK05 (図版45の2・3, 図版108): 調査区北寄り西壁際, X座標75.40, Y座標18.04に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長径79cm, 短径64cm, 深さ7cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。SP22, SK04を壊している。遺物は瀬戸美濃平椀1点, 鉄製品4点が出土している。

SK06: 調査区北寄り西壁際, X座標75.42, Y座標18.04に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径136cm, 短径96cm, 深さ24cmを測る。埋土はSP16に壊されている。遺物は鉄釘が2点出土している。

SK07: 調査区北壁際, X座標75.42, Y座標18.42に位置する。平面形は調査用のトレンチにより大部分を壊されており不明である。規模は長径80cm, 短径70cm, 深さ48cmを測る。SD01を壊し, SP41・42に壊されている。遺物は出土していない。

SK09 (図版46の1・2): 調査区北壁際, X座標75.38, Y座標18.54に位置する。平面形は調査時に大部分を掘削しており不明である。規模は長径292cm, 短径168cm, 深さ30cmを測る。埋土は黒色砂質土を中心とした6層に分層できる。SD01を壊し, SX04, SP59～62・64に壊されている。遺物は鉄釘5点が出土している。

SK10: 調査区中央北寄り, X座標75.46, Y座標18.52に位置する。SE08半截時に土層断面で確認された遺構であるため, 平面形は不明である。深さは10cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。SE08を壊している。

SK12 (図版47, 図版108): 調査区西壁際, X座標75.24, Y座標17.92に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長径84cm, 短径71cm, 深さ7cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層であり, 炭化物を含む。1～4cm大の焼けた骨片が遺構上面～中部から集中して出土している。遺物は鉄製品が5点出土している。

SK15 (図版48の1・2, 図版108): 調査区西壁際, X座標75.28, Y座標17.90に位置する。平面形は円形を, 断面形は台形状を呈する。規模は長径83cm, 短径75cm, 深さ41cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心とした2層に分層できる。遺物は鉄釘3点が出土している。

SK16 (図版46の3, 図版120): 調査区中央西寄り, X座標75.20, Y座標18.10に位置する。平面形は不整形円形を呈する。規模は長径249cm, 短径138cm, 深さ28cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。SD02を壊し, SX15, SP186・187・189・196・198～200・206に壊されている。遺物は中国製天目茶碗1点, 鉄釘2点が出土している。

SK17 (図版48の3, 図版49, 図版108) : 調査区北寄り, X座標75.20, Y座標18.06に位置する。平面形は方形を呈する。規模は長径164cm, 短径150cm, 深さ54cmを測る。埋土は黒褐色シルト, 黒褐色砂質土を中心とした8層に分層でき, とくにその上面~中部にかけて炭化物を含む層がある。SD17を壊し, SP194・195・197・212に壊されている。遺物は白磁碗1点, 瀬戸美濃底御目皿1点, 瓷器系壺甕類1点, 鉄製刀形刃物1点, 鉄製品13点, 円盤形金銅製品1点が出土している。

SK18 (図版106) : 調査区中央西寄り, X座標75.26, Y座標18.06に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長径55cm, 短径35cm, 深さ18cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心とした3層に分層できる。SI06を壊し, SX10に壊されている。遺物は鉄釘2点が出土している。

SK20 (図版50の1・2, 図版109) : 調査区中央, X座標75.16, Y座標18.30に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径339cm, 短径242cm, 深さ40cmを測る。埋土は暗褐色土, 黒褐色土, 褐灰色土を中心とした10層に分層できる。SD02を壊し, SD06~08, SK22・SP233・242・243・246・294に壊されている。遺物は白磁碗1点, 瀬戸美濃四耳壺1点, 瓷器系壺甕類2点, 珠洲すり鉢・壺それぞれ3点, 鉄製品9点, 銭貨1点が出土している。

SK22 (図版109) : 調査区中央, X座標75.16, Y座標18.32に位置する。SD06・07に壊されており, また作業用サブトレンチで削平したため平面形は不明である。深さ27cmを測る。埋土は暗褐色土, 黒褐色土を中心とした5層に分層できる。SD02, SK20を壊し, SD06・07, SP294に壊されている。SD08との先後関係は不明である。遺物は出土していない。

SK23 (図版107) : 調査区中央北寄り, X座標75.18, Y座標18.42に位置する。平面形は遺構の両側が攪乱によって壊されているため不明である。規模は長径180cm, 短径92cmを測る。SD02, SI08を壊している。遺物は出土していない。

SK24 (図版50の3, 図版51の1, 図版109) : 調査区北寄り, X座標75.28, Y座標18.34に位置する。平面形は円形を, 断面形は台形状を呈する。規模は長径233cm, 短径191cm, 深さ56cmを測る。埋土は黒色砂質土, 暗褐色砂質土を中心とした8層に分層でき, いずれの層にも炭化物を含む。SK25を壊し, SP260・261・262・269に壊されている。遺物は瀬戸美濃平碗1点, 瓷器系壺甕類1点, 珠洲すり鉢・壺それぞれ2点, 鉄製品15点, 銭貨2点が出土している。

SK25 (図版51の1, 図版109) : 調査区北寄り, X座標75.30, Y座標18.32に位置する。SK24に壊されているため平面形は不明である。規模は長径212cm, 短径48cm, 深さ38cmを測る。埋土は黒褐色砂質土, 暗褐色砂質土の2層に分層でき, とともに炭化物を含む。SK24, SP260・261・269に壊されている。遺物は出土していない。

SK27 (図版52, 図版118) : 調査区中央北寄り, X座標75.18, Y座標18.48に位置する。平面形は方形を呈する。規模は長径104cm, 短径83cm, 深さ63cmを測る。埋土は黒褐色砂質土, 暗褐色砂質土, 黒色砂質土を中心とした16層に分層できる。SD02を壊し, SP364・382に壊されている。遺物は珠洲すり鉢1点, 珠洲壺2点, 珠洲甕3点, 鉄釘7点, 銭貨2点出土している。また, 骨片が集中して出土している。

SK28 (図版51の2・3, 図版109) : 調査区北寄り, X座標75.18, Y座標18.58に位置する。平面形は方形を呈する。規模は長径237cm, 短径109cm, 深さ11cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心とした2層に分層でき, とともに炭化物を含む。遺物は出土していない。

SK29 (図版53の1, 図版118) : 調査区中央北寄り, X座標75.22, Y座標18.48に位置する。平面形は

不整形円形を呈する。規模は長径215cm, 短径181cm, 深さ69cmを測る。埋土は暗褐色砂質土, 黒褐色砂質土, 黒色砂質土を中心とした27層に分層できる。SP343・344, SX05に壊されている。遺物は瀬戸美濃折縁小皿・梅瓶それぞれ1点, 瀬戸美濃折縁深皿3点, 珠洲すり鉢・壺それぞれ2点, 珠洲甕1点, 鉄釘15点, 鉄製品4点, 砥石1点, 銭貨1点が出土している。

SK31 (図版110) : 調査区北寄り東壁際, X座標75.14, Y座標18.68に位置する。平面形は円形, 断面形は台形状を呈する。規模は長径186cm, 短径155cm, 深さ25cmを測る。埋土は黒褐色砂質土と, 炭化物を少量含む黒褐色シルトの2層に分層できる。SD02を壊し, SP498に壊されている。遺物は瀬戸美濃豆皿1点, 珠洲壺1点, 鉄製刀形刃物1点, くさび1点, 鉄釘8点, 鉄製品1点, 銭貨5点が出土している。また炭化物が集中して多数出土している。鉄製品, 銭貨があわせて多数出土していることから, 土坑墓である可能性を指摘できる。

SK34 (図版53の2・3, 図版93) : 調査区北寄り東壁際, X座標75.26, Y座標18.72に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長径100cm, 短径97cm, 深さ11cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。SP418を壊し, SD10, SP419・426に壊されている。遺物は鉄製刀形刃物が1点出土している。

SK35 (図版54の1・2, 図版110) : 調査区東壁際, X座標75.18, Y座標18.80に位置する。平面形は円形を, 断面形は台形状を呈する。規模は長径138cm, 短径130cm, 深さ45cmを測る。埋土は暗褐色砂質土, 黒褐色砂質土を中心とした16層に分層でき, 炭化物を含む層がある。SP517~519に壊されている。遺物は鉄釘1点が出土している。

SK38 : 調査区北寄り東壁際, X座標75.26, Y座標18.80に位置する。平面形は後世の擾乱により大部分を壊されており不明である。規模は長径88cm, 短径84cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層である。SX01に壊されている。遺物は出土していない。

SK38 (図版54, 図版110) : 調査区西寄り, X座標74.96, Y座標17.90に位置する。平面形は円形を, 断面形はすり鉢状を呈する。規模は長径106cm, 短径88cm, 深さ41cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心とした7層に分層できる。SP608を壊し, SP606・607に壊されている。遺物は銅製品1点が出土している。

SK39 (図版96) : 調査区中央西寄り, X座標75.02, Y座標17.94に位置する。平面形は不整形円形を呈する。断面形はSE10に壊されているため不明である。規模は長径144cm, 短径97cm, 深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質土と暗褐色砂質土の2層に分類できる。SE10, SP591・592に壊されている。

SK41 (図版55の2) : 調査区西寄り, X座標75.04, Y座標17.86に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長径88cm, 短径74cm, 深さ26cmを測る。SP573に壊されている。遺物は瓦器火鉢1点, 石製硯1点が出土している。

SK44 (図版56の2, 図版110) : 調査区中央西壁際, X座標74.94, Y座標17.98に位置する。平面形は円形, 断面形は台形状を呈する。規模は長径112cm, 短径98cm, 深さ14cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層であり, 炭化物を少量含んでいる。SP744に壊されている。遺物は鏡1点が出土している。

SK45 (図版56の3) : 調査区中央, X座標74.94, Y座標18.10に位置する。平面形は方形を呈する。規模は長径140cm, 短径108cm, 深さ10cmを測る。SP738を壊し, SK47, SP739・740に壊されている。遺物は出土していない。

SK48 (図版57の1) : 調査区中央, X座標74.96, Y座標18.08に位置する。平面形は不整形円形を, 断面

形は調査していない。規模は長径102cm, 短径89cm, 深さ13cmを測る。SP734・743を壊している。遺物は鉄釘3点, 砥石1点が出土している。

SK47(図版56の3): 調査区中央, X座標74.96, Y座標18.12に位置する。平面形は調査用のサブトレンチで削平したため不明である。規模は長径240cm, 短径100cm, 深さ30cmを測る。SP739・740に壊されている。

SK48: 調査区中央, X座標74.98, Y座標18.10に位置する。平面形は方形を, 断面形は調査していない。規模は長径137cm, 短径75cm, 深さ20cmを測る。SP703・704に壊されている。遺物は珠洲甕1点, 鉄製品1点が出土している。

SK49(図版111): 調査区中央, X座標75.04, Y座標18.12に位置する。平面形は楕円形を, 断面形は方形状を呈する。規模は長径92cm, 短径42cm, 深さ38cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心とした4層に分層でき, 炭化物を含む層がある。遺物は出土していない。

SK50(図版57の2, 図版111): 調査区中央, X座標75.06, Y座標18.10に位置する。平面形は円形を, 断面形は台形状を呈する。規模は長径159cm, 短径142cm, 深さ73cmを測る。埋土は黒褐色土, 暗褐色土, 黒色土を中心とした20層に分層できる。SP660に壊されている。遺物は出土していない。

SK51(図版111): 調査区中央, X座標75.08, Y座標18.12に位置する。平面形は円形を, 断面形はすり鉢状を呈する。規模は長径69cm, 短径65cm, 深さ21cmを測る。埋土は暗褐色土, 黒褐色土の2層に分層でき, とともに炭化物を含む。遺物は出土していない。

SK52: 調査区中央, X座標74.94, Y座標18.18に位置する。平面形は方形を, 断面形は台形状を呈する。規模は長径88cm, 短径88cm, 深さ47cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心とした9層に分層できる。SP825を壊している。遺物は珠洲甕4点が出土している。

SK53(図版57の3, 図版103): 調査区中央, X座標74.94, Y座標18.22に位置する。平面形は方形, 断面形は台形状を呈する。規模は長径118cm, 短径114cm, 深さ63cmを測る。埋土は黒色砂質土・黒褐色砂質土を中心として10層に分層でき, 61・64・66層は炭化物を含んでいる。SD72, SI10を壊し, SI03, SK54, SP837に壊されている。遺物は出土していない。

SK54(図版103): 調査区中央, X座標74.96, Y座標18.22に位置する。平面形は方形を呈する。規模は長径110cm, 短径103cm, 深さ47cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の2層に分層でき, とともに炭化物を含んでいる。SK53を壊し, SI03に壊されている。遺物は出土していない。

SK55(図版111): 調査区中央, X座標75.04, Y座標18.22に位置する。平面形は円形を, 断面形は台形状を呈する。規模は長径72cm, 短径66cm, 深さ20cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の3層に分層できる。SP787に壊されている。遺物は出土していない。

SK56(図版111): 調査区中央, X座標75.10, Y座標18.24に位置する。平面形は不整形円形を, 断面形はすり鉢状を呈する。規模は長径154cm, 短径94cm, 深さ24cmを測る。埋土は黒褐色砂質土, 暗褐色灰層を中心として9層に分層できる。微量ではあるが, 灰層に炭化物を含んでいる。SDI2を壊している。遺物は出土していない。

SK57(図版112): 調査区中央, X座標74.92, Y座標18.40に位置する。平面形は円形を, 断面形はすり鉢状を呈する。規模は長径108cm, 短径104cm, 深さ26cmを測る。埋土は黒色砂質土を中心として3層に分層できる。SP1617を壊し, SP914に壊されている。遺物は珠洲甕1点が出土している。

SK58 (図版112) : 調査区中央, X座標74.94, Y座標18.36に位置する。平面形は方形を, 断面形は台形状を呈する。規模は長径103cm, 短径95cm, 深さ63cmを測る。埋土は黒褐色砂質土, 黄褐色砂を中心として15層に分層できる。微量ではあるが, 黒褐色土層の一部に炭化物を含んでいる。SP910を壊し, SK60に壊されている。遺物は鉄釘1点が出土している。

SK59 (図版112) : 調査区中央, X座標74.94, Y座標18.38に位置する。平面形は楕円形を, 断面形はすり鉢状を呈する。規模は長径92cm, 短径54cm, 深さ24cmを測る。埋土は黒褐色砂質土, 黒色砂質土, におい黄褐色砂の3層に分層できる。SP910を壊している。遺物は珠洲すり鉢1点が出土している。

SK60 (図版112) : 調査区中央, X座標74.94, Y座標18.38に位置する。平面形は方形を, 断面形は台形状を呈する。規模は長径104cm, 短径94cm, 深さ48cmを測る。埋土は黒褐色砂質土, 暗褐色砂質土を中心とした10層に分層でき, 炭化物を含む層がある。SK58に壊されている。遺物は瓦器火鉢1点, 珠洲甕1点, SK243(第87次調査区)出土破片と接合する瀬戸美濃天目茶碗1点, 鉄釘1点, 銭貨80点が出土している。

SK62 (図版112) : 調査区中央北寄り, X座標75.04, Y座標18.46に位置する。平面形は遺構の南側が攪乱によって壊されているため不明である。断面形は台形状を呈する。規模は長径100cm, 短径20cm, 深さ16cmを測る。埋土は黒褐色砂質土・灰褐色砂質土の3層に分層できる。遺物は出土していない。

SK63 (図版59の1・2, 図版102) : 調査区中央, X座標75.06, Y座標18.34に位置する。平面形は方形を呈する。規模は長径139cm, 短径95cm, 深さ42cmを測る。埋土は暗褐色砂質土, 黒褐色砂質土, におい黄褐色砂質土, 黒色砂質土を中心とした16層に分層できる。底面に炭化した木材が敷かれていた。SD03を壊し, SP881, SX08に壊されている。遺物は出土していない。

SK64 (図版59の3, 図版97) : 調査区中央北寄り, X座標75.08, Y座標18.42に位置する。平面形は楕円形, 断面形は台形状を呈する。規模は長径131cm, 短径72cm, 深さ10cmを測る。埋土は暗褐色砂質土の単層であり, 炭化物を含んでいる。SP875, SE13を壊し, SP871に壊されている。遺物は鉄製刀形刃物1点が出土している。

SK65 (図版60の1, 図版113) : 調査区中央北寄り, X座標75.08, Y座標18.46に位置する。平面形は円形を, 断面形は不整形を呈する。規模は長径63cm, 短径56cm, 深さ10cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層であり, 炭化物を少量含んでいる。SK66, SP872を壊している。遺物は鉄製品が1点出土している。

SK66 (図版60の1, 図版113) : 調査区中央北寄り, X座標75.08, Y座標18.46に位置する。平面形は楕円形を呈し, 断面形はSK65・67に壊されており不明である。規模は長径86cm, 短径53cm, 深さ16cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の2層に分層でき, ともに炭化物を含んでいる。SK65・67, SP872に壊されている。遺物は出土していない。

SK67 (図版60の1, 図版113) : 調査区中央北寄り, X座標75.10, Y座標18.46に位置する。平面形および断面形は遺構の北側が攪乱によって壊されているため不明である。規模は長径120cm, 短径118cm, 深さ22cmを測る。埋土は黒褐色砂質土・黒褐色シルトを中心に6層に分層でき, 炭化物を多く含みややシルト質の1~3層と, 炭化物をあまり含まない砂質の4~6層の2層に大きく区分できる。SD02, SK66, SP506を壊し, SP872に壊されている。遺物は瀬戸美濃花瓶・盤類それぞれ1点, 珠洲壺1点が出土している。

SK72(図版114)：調査区東寄り，X座標75.04，Y座標18.56に位置する。平面形は方形を，断面形は台形状を呈する。規模は長径63cm，短径50cm，深さ15cmを測る。埋土は黒褐色砂質土，褐色砂，黒色砂質土の3層に分層できる。遺物は鉄釘が2点出土している。

SK73(図版114)：調査区東寄り，X座標75.04，Y座標18.54に位置する。平面形は円形を，断面形は方形を呈する。規模は長径80cm，短径76cm，深さ38cmを測る。埋土は黒褐色砂質土，にぶい黄褐色砂，黒色砂質土を中心とし，9層に分層できる。遺物は鉄釘が1点出土している。

SK74(図版112)：調査区中央北寄り，X座標75.04，Y座標18.50に位置する。平面形は方形，断面形は台形状を呈する。規模は長径99cm，短径83cm，深さ19cmを測る。埋土は黒褐色砂質土と暗灰色砂質土を中心として5層に分層でき，1・2層は炭化物を少量含んでいる。遺物は鉄釘1点が出土している。

SK75(図版114)：調査区東寄り，X座標75.20，Y座標18.58に位置する。平面形は円形を，断面形は台形状を呈する。規模は長径117cm，短径102cm，深さ30cmを測る。埋土は黒色砂質土を中心とした4層に分層でき，炭化物を含む層がある。SP965・966に壊されている。遺物は出土していない。

SK76(図版110)：調査区北寄り東壁際，X座標75.14，Y座標18.66に位置する。平面形は円形を呈する。調査していない。規模は長径103cm，短径99cm，深さ45cmを測る。断面形および埋土は土層断面図を作成しなかったため不明である。遺物は銭貨19点が出土している。

SK77(図版61～62の1，図版114)：調査区東壁際，X座標75.10，Y座標18.82に位置する。平面形は円形を，断面形は台形状を呈する。規模は長径114cm，短径114cm，深さ42cmを測る。埋土は黒褐色砂質土，暗褐色砂質土を中心とした14層に分層でき，いずれの層にも炭化物を含む。骨片が遺構中部に多数出土している。遺物は瀬戸美濃印皿1点，珠洲すり鉢・甕それぞれ1点，壺3点，鉄製品18点が出土している。

SK78(図版114)：調査区東壁際，X座標75.10，Y座標18.80に位置する。平面形は方形を呈する。規模は長径76cm，短径36cm，深さ6cmを測る。SD02を壊し，SK79に壊されている。遺物は出土していない。

SK79(図版62の2，図版114)：調査区東壁際，X座標75.14，Y座標18.82に位置する。平面形は方形を，断面形は台形状を呈する。規模は長径124cm，短径122cm，深さ46cmを測る。埋土は黒色土，黒褐色土を中心とした6層に分層できる。SD02，SK78，SK1128を壊している。遺物は土器皿1点，青磁碗1点，珠洲すり鉢2点，鉄釘8点，砥石1点，銭貨1点が出土している。

SK341(図版115)：調査区中央西寄り，X座標74.96，Y座標18.06に位置する。平面形は円形を，断面形はすり鉢状を呈する。規模は長径100cm，短径80cm，深さ33cmを測る。埋土は黒褐色土を中心とした4層に分層できる。SD17，SP720・723・731・732・733・4195・4196を壊し，SK80に壊されている。遺物は出土していない。

SK342(図版115)：調査区中央西寄り，X座標74.94，Y座標18.06に位置する。平面形は楕円形を，断面形はすり鉢状を呈する。規模は長径149cm，短径93cm，深さ37cmを測る。埋土は黒色土，黒褐色土を中心とした6層に分層できる。SD17，SP742・755を壊し，SP752に壊されている。遺物は瀬戸美濃平碗・碗形鉢それぞれ1点，青白磁合子1点，鉄製品3点が出土している。

SK343(図版103)：調査区中央，X座標74.92，Y座標18.26に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長径156cm，短径70cm，深さ11cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心として4層に分層でき，1・4層は炭化物を含んでいる。SD72，SI03・10，SK116，SX28を壊している。遺物は出土していない。焼土

が遺構平面に確認できたことから屋外炉である可能性を指摘できる。

(7) 集石遺構 (図版64~78, 図版102~104, 図版106, 図版116~121)

今回の調査では集石遺構19基を検出した。そのうち遺物が出土しているのは18基である。SX20を除く全ての集石遺構で、出土礫に被熱を確認した。

SX01 (図版64の1・2, 図版116): 調査区北寄り東壁際, X座標75.28, Y座標18.80に位置する。平面形は後世の攪乱により大部分を壊されており不明である。規模は長径154cm, 短径69cm, 深さ16cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層である。また遺構上部に礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩, チャートがあり, なかには被熱しているものも確認できた。SD01, SK36を壊している。遺物は珠洲壺2点, 炭化物が出土している。

SX02 (図版64の3, 図版65の1・2, 図版116): 調査区北寄り東壁際, X座標75.22, Y座標18.76に位置する。平面形は不整形円形を呈する。規模は長径108cm, 短径57cm, 深さ14cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層である。遺構上部には多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。SP462・463に壊されている。遺物は出土していない。

SX03 (図版65の3, 図版66の1, 図版117): 調査区中央北寄り, X座標75.36, Y座標18.58に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長径122cm, 短径105cm, 深さ23cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩, チャート, 頁岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。SD01, SX04を壊している。遺物は土器皿2点, 瀬戸美濃平碗2点, 鉄釘4点, 炭化物が出土している。

SX04 (図版65の3, 図版66の2・3, 図版117): 調査区中央北寄り, X座標75.40, Y座標18.56に位置する。平面形は方形を呈する。規模は長径343cm, 短径336cm, 深さ25cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩, チャート, 頁岩, 粘板岩, 砂岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。SD01, SK09, SP63を壊し, SX03-17に壊されている。遺物は土器皿1点, 青磁碗2点, 瀬戸美濃天目茶碗2点, 瀬戸美濃碗形鉢・卸皿・仏花瓶・平碗それぞれ1点, 珠洲すり鉢3点, 珠洲壺2点, 瓷器系甕1点, 瓷器系甕類2点, 鉄釘19点, 鉄製品5点, 銭貨1点, 砥石1点が出土している。

SX05 (図版67, 図版118): 調査区中央北寄り, X座標75.20, Y座標18.50に位置する。平面形は不整形方形を呈する。規模は長径260cm, 短径155cm, 深さ16cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層である。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には凝灰岩を中心に安山岩, チャートがあり, なかには被熱しているものも確認できた。SD04・09, SK29, SP343・344・359・360・363・374・383・384を壊している。遺物は土器皿1点, 瀬戸美濃天目茶碗4点, 瀬戸美濃梅瓶1点, 瓷器系甕類1点, 鉄釘22点, 鉄製品2点, 銅製品1点, 銭貨9点が出土している。

SX06 (図版68, 図版116): 調査区中央, X座標75.12, Y座標18.56に位置する。平面形は楕円形, 断面形は台形状を呈する。規模は長径200cm, 短径93cm, 深さ48cmを測る。埋土は黒褐色砂質土, 黒色砂質土を中心とした5層に分層できる。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩, チャート, 粘板岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。SD02, SP928を壊し, SX21に壊されている。遺物は珠洲すり鉢2点, 鉄釘24点, 種子が出土している。また炭化物が集中して出土している。

SX07 (図版69, 図版116) : 調査区中央北寄り, X座標75.44, Y座標18.46に位置する。平面形は不整形楕円形を呈する。規模は長径138cm, 短径100cm, 深さ13cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層である。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩, チャート, 粘板岩, 頁岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。SD01を壊している。遺物は白磁碗2点, 珠洲すり鉢5点, 鉄釘2点が出土している。

SX08 (図版70, 図版102) : 調査区中央, X座標75.10, Y座標18.38に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長径348cm, 短径185cm, 深さ16cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層である。SP866に埋土が流入する。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩, チャート, 粘板岩, 頁岩, 石灰岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。SI02, SK62, SP857・858・863・864・866・869, SD03を壊している。遺物は瀬戸美濃平碗7点, 青磁碗2点, 珠洲甕1点, 信楽壺甕類1点, 鉄製品1点, 銭貨4点, 炭化物, 骨片が出土している。

SX09 (図版71の1, 図版119) : 調査区北寄り西壁際, X座標75.38, Y座標18.18に位置する。平面形は後世の攪乱により大部分を壊されており不明である。規模は長径230cm, 短径160cm, 深さ9cmを測る。埋土は黒色砂質土, 黒褐色砂質土, 暗褐色砂質土を中心とした4層に分層できる。遺構上部を中心に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩を中心に凝灰岩, チャート, 粘板岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。SP30・31・32を壊している。遺物は瀬戸美濃折縁深皿・梅瓶それぞれ1点, 青磁碗1点, 珠洲すり鉢3点, 鉄釘4点, 炭化物が出土している。

SX10 (図版71の2・3, 図版106) : 調査区中央西寄り, X座標75.26, Y座標18.06に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径136cm, 短径102cm, 深さ26cmを測る。埋土は黒褐色砂質土, 暗褐色砂質土を中心とした7層に分層できる。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩, 頁岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。SD02, SI06, SK19を壊している。遺物は鉄釘4点が出土している。

SX11 (図版72, 図版119) : 調査区中央西寄り, X座標75.16, Y座標18.06に位置する。平面形は円形, 断面形は方形状を呈する。規模は長径83cm, 短径82cm, 深さ33cmを測る。埋土は黒色砂質土, 黒褐色砂質土を中心とした6層に分層できる。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。また, 遺構上面を覆うように粘土塊が出土した。遺物は珠洲甕1点が出土している。

SX12 (図版73, 図版94) : 調査区中央西寄り, X座標75.14, Y座標17.94に位置する。平面形は不整形円形を呈する。規模は長径149cm, 短径126cm, 深さ53cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩, チャートがあり, なかには被熱しているものも確認できた。SE04を壊している。遺物は瀬戸美濃天目茶碗・緑釉小皿・平碗それぞれ1点, 青磁椀花盤1点, 青磁碗2点, 白磁碗1点, 珠洲すり鉢3点, 土釜1点, 銅製品1点, 鉄釘4点, 銭貨3点, 炭化物, 骨片, 種子が出土している。

SX13 (図版74の1・2, 図版120) : 調査区中央西寄り, X座標75.20, Y座標17.92に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長径115cm, 短径109cm, 深さ59cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層である。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩, 凝灰岩, チャート, 頁岩があり, なかには被熱しているものも確認できた。SD02, SP117を壊している。遺物は珠洲すり鉢, 甕それぞれ1点, 鉄釘15

点、鉄製品7点、炭化物、骨片が出土している。

SX14 (図版74の3、図版75の1、図版120)：調査区中央西寄り、X座標75.18、Y座標17.90に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長径121cm、短径114cm、深さ21cmを測る。埋土は黒色砂質土、黒褐色砂質土を中心とした3層に分層できる。遺構全体に多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩、凝灰岩、粘板岩、頁岩があり、なかには被熱しているものも確認できた。SD02を壊している。遺物は瀬戸美濃平櫛1点、中国製天目茶碗1点、鉄釘2点、炭化物、骨片が出土している。

SX15 (図版75の2・3、図版120)：調査区中央西寄り、X座標75.20、Y座標18.10に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長径135cm、短径112cm、深さ32cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を中心とした10層に分層できる。遺構上部には多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩、凝灰岩、チャート、粘板岩があり、なかには被熱しているものも確認できた。SK16、SP196を壊している。遺物は珠洲すり鉢1点、鉄釘1点、銭貨1点、炭化物が出土している。

SX16 (図版76、図版121)：調査区中央北寄り、X座標75.46、Y座標18.40に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長径83cm、短径68cm、深さ10cmを測る。埋土は黒色砂質土、黒褐色砂質土を中心とした3層に分層できる。遺構上部には多くの礫を確認した。礫の石材には安山岩を中心に凝灰岩、チャート、頁岩があり、なかには被熱しているものも確認できた。SD01を壊している。遺物は珠洲壺1点、鉄釘1点が出土している。

SX17 (図版77、図版117)：調査区中央北寄り、X座標75.42、Y座標18.54に位置する。セクションベルト上で確認したため平面形は不明である。断面形は台形状を呈する。規模は長径86cm、短径68cm、深さ13cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層である。遺構全体に多くの礫を確認した。礫のなかには被熱しているものも確認できた。SX04を壊している。遺物は瀬戸美濃仏花瓶1点、珠洲壺1点、鉄釘7点、鉄製品1点が出土している。

SX20 (図版121)：調査区中央、X座標74.98、Y座標18.16に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長径63cm、短径57cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色砂質土、黒色砂質土の2層に分層できる。遺構上部には多くの礫を確認した。SD72を壊している。遺物は珠洲すり鉢2点が出土している。

SX21 (図版78、図版116)：調査区中央、X座標75.12、Y座標18.58に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長径157cm、短径118cm、深さ24cmを測る。埋土は黒色砂質土の単層である。遺構全体に礫を確認した。礫のなかには被熱しているものも確認できた。SD02・16、SP931、SX06を壊している。遺物は瓦器火鉢2点、鉄製鉋1点、鉄釘4点、銭貨1点、骨片が出土している。また炭化物が集中して出土している。

3 遺物

出土遺物は年代がわかるものについては次に述べる編年・分類に依拠した。土器は宇野隆夫氏の編年(宇野1981)および榑原滋高の編年(榑原1998)、珠洲は吉岡康暢氏の編年(吉岡1994)、瀬戸美濃は藤澤良祐氏の編年(藤澤1982, 1991, 1993, 1995)、貿易陶磁は歴博集成分類(国立歴史民俗博物館1993)、肥前系陶磁器は大橋康二氏の編年(大橋1993)である。金銅製品に関する詳細は久保晋康氏に、硯・砥石に関する詳細は垣内光次郎、沙見一夫、福島政文各氏に、それぞれご教示いただいた。

なお包含層出土、出土地点不明などの遺構外出土遺物に関してのみ、青森県教育委員会の了承を得て、

第87次調査区出土の遺物をあわせて本報告書中に記述する。

(a) 第86次調査遺構出土遺物(図版122～図版149の882, 図版159～図版160の3, 図版162～図版174の5, 図版177・178)

SD01出土品(図版122～123の56, 図版162の4～6, 図版178の2): 1・2は自然堆積土から出土した遺物である。1は珠洲すり鉢である。口径は28cmを測る。胎土は密であり、黄灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV～3期に属し、14世紀後葉のものである。2は刀の鞘に付属する銅製金具(折金)である。長さ2.4cm, 最大幅1.0cmを測り、重さ2.2gを量る。一枚の銅板を曲げて角型に製作する。

3～56は人為的埋土から出土した遺物である。3は土器皿である。底径は7cmを測る。赤色塗彩しており、底面は回転糸切りである。胎土はやや密であり、にぶい橙褐色を呈する。焼成は酸化硬質である。古代のものの可能性が高い。4は土器皿の体部破片である。胎土は密であり、灰白色を呈する。年代は不明である。

5～14は瀬戸黄遺である。5は平碗である。口径は14cmを測る。内外面に明緑灰色の灰釉を施す。胎土はやや密であり、灰白色を呈する。古瀬戸中IV期に属し、14世紀中葉のものである。6は平碗である。口径は15cmを測る。内外面に浅黄色の灰釉を施す。胎土は密であり、黄白色を呈する。古瀬戸後I期に属し、14世紀中葉～14世紀後葉のものである。7は豆皿である。底径は3.8cmを測る。内面に浅黄色の灰釉を施す。底面は回転糸切りである。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。8は天目茶碗の底部である。底径は4cmを測る。内面に暗褐色の鉄釉を施し、外面は露胎である。外面に右回転の篋削りを施す。底面を回転糸切りで切り離した後、高台を削り出す。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I期に属し、14世紀後半のものである。9は折縁深皿である。口径は31cmを測る。内外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し、浅黄色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I期に属し、14世紀後半のものである。10は尊式花瓶である。底径は7cmを測る。外面に浅黄色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。11は花瓶である。補修の際用いたであろう漆が破面に付着している。内外面に明緑灰色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸中III～IV期に属し、14世紀中葉のものである。12は梅瓶の体部破片である。外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し、浅黄色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸前III期に属すると思われ、13世紀中葉のもの可能性を示唆する。13は梅瓶の体部破片である。外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し、明緑灰色を呈する。胴部に幅約1mmの沈線が5条めぐる。内面に幅約3mmの篋状工具による掻き上げを3本施した後、指押さえる。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸前III期に属すると思われ、13世紀中葉のもの可能性を示唆する。SD03出土の破片と接合した。14は鉄釉梅瓶の胴部である。外面には幅約1.5mmの沈線が2本めぐる。外面は底部よりやや上まで全面オリーブ黒色の鉄釉を施す。内面は露胎で底部際まで部分的に垂れ下る。胎土は密であり、黄白色を呈する。古瀬戸中I～II期に属し、13世紀後葉～14世紀前葉のものである。

15～18は珠洲である。15はすり鉢である。口径は23cmを測る。内面には2.8cm幅に11目の卸目が3条確認できる。胎土は密であり、黄灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV～2期に属し、14世紀前葉～14世紀中葉のものである。16はすり鉢の体部破片である。内面には2cm幅に7目の卸目が1条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IVまたはV期に属し、14世紀末～15世紀中葉

のものである。17は壺T種の体部破片である。内面に部分的に煤が付着する。外部に3cmあたり7目の平行叩きを施している。胎土は密であり、褐色を呈する。焼成は酸化硬質である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。18は壺T種の底部である。底径は14cmを測る。色調は明黄褐色で、胎土の中央は灰色を呈する。胎土は密であり、焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

19～22は壺器系壺變類の体部破片である。胎土は密である。19の色調は暗灰色を呈する。20および21の色調は灰色を呈する。22の色調は灰白色を呈する。焼成はいずれも良好である。

23は炉壁の一部である。内面にあたる部分に煤が付着している。色調は明黄褐色を呈する。

24は頁岩製砥石である。残存長2.9cm、残存幅0.2cm、厚さ0.2cmを測り、重さ3.0gを量る。長側面両方に鋸痕が残されている。また上面が使用されており、擦痕を観察できる。生産地は不明である。

25は鉄製刀型刃物である。刀身は長さ17.5cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmを測る。茎部は長さ10.9cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。柄部は長さ9.3cm、幅2.5cm、厚さ1.0cmを測る。重さ127.6gを量る。間は存在すると推察するが、形態は柄に隠れているため確認できない。柄は木製で、茎にも木質が付着している。

26～53は鉄釘である。26は長さ6.4cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.8gを量る。27は長さ8.0cm、身幅0.2cmを測り、重さ8.0gを量る。28は長さ6.6cm、身幅0.5cmを測り、重さ8.0gを量る。29は長さ6.4cm、身幅0.3cmを測り、重さ5.6gを量る。30は長さ6.9cm、身幅0.4cmを測り、重さ6.8gを量る。31は長さ5.2cm、身幅0.7cmを測り、重さ7.6gを量る。32は長さ5.1cm、身幅0.3cmを測り、重さ4.8gを量る。33は下部が欠損している。長さ5.0cm、身幅0.3cmを測り、重さ4.2gを量る。34は下部が欠損している。長さ2.2cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.4gを量る。35は下部が欠損している。長さ5.4cm、身幅0.4cmを測り、重さ7.4gを量る。36は下部が欠損し、身部に木片が付着している。長さ4.7cm、身幅0.3cmを測り、重さ3.4gを量る。37は下部が欠損している。長さ4.4cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.2gを量る。38は下部が欠損している。長さ3.1cm、身幅0.7cmを測り、重さ7.6gを量る。39は下部が欠損している。長さ3.2cm、身幅3.2cmを測り、重さ1.2gを量る。40は下部が欠損している。長さ6.1cm、身幅0.5cmを測り、重さ5.2gを量る。41は身部の一部が残存している。長さ4.5cm、身幅1.0cmを測り、重さ6.0gを量る。42は身部が残存している。長さ3.7cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.2gを量る。43は身部の一部が残存している。長さ3.3cm、身幅0.2cmを測り、重さ4.4gを量る。44は身部が一部残存している。長さ3.6cm、身幅0.5cmを測り、重さ1.8gを量る。45は身部が一部残存している。長さ1.6cm、身幅0.2cmを測り、重さ0.2gを量る。46は身部が一部残存している。長さ4.8cm、身幅6.5cmを測り、重さ6.6gを量る。47は下部が残存している。長さ8.7cm、身幅0.8cmを測り、重さ17.4gを量る。48は下部が残存し、身部に木片が付着している。長さ6.8cm、身幅0.7cmを測り、重さ9.6gを量る。49は身部が残存している。長さ3.6cm、身幅0.6cmを測り、重さ4.8gを量る。50は下部が残存している。長さ4.5cm、身幅0.4cmを測り、重さ3.4gを量る。51は下部が残存している。長さ3.2cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.8gを量る。52は下部が残存している。長さ3.0cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.0gを量る。53は身部の一部が残存している。長さ1.9cm、身幅0.2cmを測り、重さ0.4gを量る。

54は鉢である。長さ17.5cm、身幅1.3cmを測り、重さ53.6gを量る。

55・56は不明鉄製品である。55は最大長3.9cm、最大幅0.8cmを測り、重さ7.6gを量る。56は最大長3.3cm、最大幅0.6cm、厚さ0.2cmを測り、重さ8.6gを量る。

その他図示しなかったものとして、鉄滓6点がある。

SD02出土品(図版123の57~77, 図版124の78~90, 図版163): 57は自然堆積土から出土した、珠洲すり鉢の体部破片である。2.2cm幅に9目の卸目が1条確認できるが、磨耗が進んでいる。胎土は粗であり、にぶい黄褐色を呈する。外面は黄灰色を呈する。焼成は不良である。年代は不明である。

58~64は人為的埋土①から出土した遺物である。58は青磁碗である。内外面にオリブ灰色の釉を施す。外面に蓮弁文を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。龍泉窯系B1またはB2類に属する。

59は珠洲すり鉢の口縁部である。口径20cmである。2.5cm幅に8目の卸目が2条確認できる。胎土は密であり、黄灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。

60は瓷器系壺甕類の体部破片である。胎土は気泡を含みやや粗であり、暗灰色を呈する。焼成は良好である。

61は信楽壺の底部である。底径は12cmを測る。内面に自然釉の飛沫が確認できる。胎土は密であり、黄灰色を呈する。焼成は良好である。

62は銭貨である。直径2.5cm, 厚さ0.14cmを測り, 重さ2.8gを量る。銭名は開元通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は621年であり, 唐代のものである。

63・64は鉄釘である。63は下部が欠損している。長さ5.4cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ3.0gを量る。64は身部が残存している。長さ5.2cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ3.0gを量る。

65~77は人為的埋土②から出土した遺物である。65~68は珠洲である。65はすり鉢の体部破片である。2.7cm幅に9目の卸目が2条確認できる。胎土は密であり, 暗灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IVまたはV期に属し, 13世紀後葉~15世紀中葉のものである。66はすり鉢の底部である。底径13cmを測る。1.6cm幅に11目の卸目が2条確認できる。胎土は密であり, 暗灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IVまたはV期に属し, 13世紀後葉~15世紀中葉のものである。67は壺K種の体部破片である。外面は叩き調整の後, 磨き調整を施し, 1cm幅に7目の櫛目文1条を波状に施している。胎土は密であり, 灰色~黒褐色を呈する。焼成は良好である。年代は不明である。68は壺甕類の体部破片である。外面は幅3cmあたり8目の平行叩きを施した後, 一部を横推す。胎土は密であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。年代は不明である。

69~77は鉄釘である。69は長さ8.7cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ7.0gを量る。70は長さ6.9cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ6.4gを量る。71は下部が欠損している。長さ4.1cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ7.6gを量る。72は下部が欠損している。長さ1.9cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.4gを量る。73は頭部が残存している。長さ1.2cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.0gを量る。74は身部が残存している。長さ3.9cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.6gを量る。75は下部が残存している。長さ6.0cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ3.8gを量る。76は身部が残存している。長さ3.5cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ4.8gを量る。77は身部が残存している。長さ1.3cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ0.4gを量る。

78・79は人為的埋土から出土した遺物である。78は鉄釘である。下部が残存している。長さ1.2cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.4gを量る。

79は頁岩製砥石である。残存長3.6cm, 残存幅0.5cm, 厚さ9.0cmを測り, 重さ4.8gを量る。

80~90はSD02内で出土した遺物である。80・81は珠洲である。80は壺R種の底部である。底径9cmを測る。二次的に被熱しており, 外面は赤変し, 外底面及び内面に煤が付着している。胎土は密であり,

暗灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期またはV期に属し、13世紀後葉～15世紀中葉のものである。81は壺T種の体部破片である。内面に剝離痕を確認できる。外面は3cm幅あたり8目の平行叩きを施している。胎土は密であり、暗褐色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

82～90は鉄釘である。82は下部が欠損している。長さ3.9cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.8gを量る。83は下部が欠損している。長さ3.5cm、身幅0.5cmを測り、重さ5.8gを量る。84は下部が欠損している。長さ4.8cm、身幅0.5cmを測り、重さ2.8gを量る。85は身部が残存している。長さ3.9cm、身幅0.6cmを測り、重さ4.0gを量る。86は下部が欠損している。長さ2.5cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.8gを量る。87は身部が残存している。長さ2.1cm、身幅0.3cmを測り、重さ0.4gを量る。88は身部が残存している。木片に身部の片側が刺さっている。長さ0.4cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.4gを量る。89は下部が残存している。長さ5.4cm、身幅0.6cmを測り、重さ7.6gを量る。90は長さ5.3cm、身幅0.5cmを測り、重さ8.2gを量る。

SD03出土品 (図版124の91～93) : 91～93は珠洲である。91はすり鉢の口縁部である。口径29cmを測る。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV～2期に属し、14世紀前葉～14世紀中葉のものである。92はすり鉢の体部破片である。内面に1.6cm幅に6目の叩目が2条確認できる。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期またはV期に属し、13世紀後葉～15世紀中葉のものである。93は壺の体部破片である。外面に3cm幅あたり9目の平行叩きを施し、一部指押さえる。内面に篋掻きを4本施す。胎土は密であり、暗灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

SD04出土品 (図版124の94) : 94は珠洲壺R種の底部である。底径8cmを測る。内外面に轆轤撫を施す。底面より1cm上まで幅2cmの篋削りを施している。胎土は密であり、暗灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期またはV期に属し、13世紀末～15世紀中葉のものである。SK29出土の破片と接合する。

SD06出土品 (図版124の95・96) : 95は鉄釘である。下部が欠損している。長さ5.7cm、身幅0.4cmを測り、重さ5.4gを量る。

96は頁岩製砥石である。残存長2.7cm、残存幅2.6cm、厚さ0.4cmを測り、重さ4.6gを量る。長側面の一片に煤が付着している。上面が使用されており、擦痕が確認できる。生産地は不明である。

SD16出土品 (図版124の97～100) : 97～100は鉄釘である。97は下部が欠損している。長さ2.7cm、身幅0.6cmを測り、重さ2.6gを量る。98は身部の一部が残存している。長さ3.2cm、身幅0.5cmを測り、重さ2.6gを量る。99は下部が残存している。長さ3.7cm、身幅0.9cmを測り、重さ2.8gを量る。100は下部が残存している。長さ2.4cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.4gを量る。

SD33出土品 (図版124の101) : 101は流紋岩製砥石である。最大長10.9cm、最大幅5.5cm、厚さ6.2cmを測り、重さ401.0gを量る。上面が使用されており、擦痕が確認できる。切り出した際についた鋸目が短側面に確認できる。短側面に煤が付着している。生産地は愛媛県砥部近郊である可能性が高い。

SE01出土品 (図版125の102～112、図版164の1) : 102は瀬戸美濃平碗の体部破片である。内面に明緑灰色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。

103・104は珠洲である。103はすり鉢の体部破片である。内面には3.5cm幅に15目の卸目が3条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV～V期に属し、13世紀末～15世紀中葉のものである。104は壺の体部破片である。外面には3cmあたり12目の叩きを綾杉状に施し、内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期に属し、13世紀後葉～14世紀後葉のものである。

105・106は漆製品の椀皿類である。いずれも内外面ともに黒漆地に朱漆により文様を描く。残存状態が悪く、文様は不明である。木取りは横木取りである。

107～109は木製の箸である。107は両端が欠損している。全長4.7cmを測り、幅0.5cmを測る。側面は7面取りである。108は両端が欠損している。全長10.7cmを測り、幅0.5cmを測る。側面は6面取りである。109は両端が欠損している。長さ15.9cmを測り、幅0.7cmを測る。側面は7面取りである。

110は鉄釘である。身部の一部が残存している。長さ5.9cm、身幅0.5cmを測り、重さ5.8gを量る。

111・112は不明鉄製品である。いずれも鉄製の基部の可能性を示唆する。111は両端が欠損している。長さ10.9cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmを測る。重さは25.4gを量る。112は両端が欠損している。長さ15.7cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。重さは19.4gを量る。

SE02出土品(図版125の113・114, 164の1): 113は珠洲すり鉢の底部である。底径は15cmを測る。内面には2.9cm幅に13目の卸目が9条確認できる。底面には静止糸切り痕が確認できる。胎土はやや密であり、淡黄橙色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

114は漆製品の椀皿類である。口径は15cmを測る。体部は緩く内湾しながら立ち上がる。内外面ともに黒漆地の上に朱漆により手描きで草木文を描く。外面は劣化しており部分的に木地が見える。木取りは横木取りであり、轆轤によって成形している。

SE04出土品(図版125の115, 164の1): 115は瀬戸美濃すり鉢の体部破片である。内外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し、緑灰色を呈する。外面は一部露胎である。胎土はやや密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。

SE06出土品(図版125の116, 164の1): 116は珠洲すり鉢である。内面には卸目が2条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV～2期に属し、14世紀前葉～14世紀中葉のものである。

SE07出土品(図版125の117～120, 164の1): 117は土器皿の体～底部破片である。底径は8cmを測る。胎土はやや密であり、淡黄橙色を呈する。焼成は良好である。

118・119は瀬戸美濃である。118は平椀の体部破片である。内外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し、明緑灰色を呈する。外面は一部露胎である。内面には目跡が1つ確認できる。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。119は天目茶碗である。口径は12cmを測る。内外面に黒色の鉄釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後II期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。

120は珠洲すり鉢である。口径は29.8cmを測る。内面には卸目が1条確認でき、煤が付着している。胎土は密であり、灰色を呈する。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

SE08出土品(図版125の121～125, 図版126の126～134, 図版167の2・3): 121は瀬戸美濃梅瓶の体部破片である。外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し明緑灰色を呈する。胴部には1.0cm幅に5本の沈線が

めぐる。内面に幅約4mmの筧状工具による掻き上げを7本施した跡指押さえする。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸前期に属すると思われる、13世紀中葉のもの可能性を示唆する。SX09出土の破片と接合した。

122～126は珠洲である。122はすり鉢の体部破片である。内面には卸目が2条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅳ～Ⅴ期に属し、13世紀末～15世紀中葉のものである。123はすり鉢の底部である。底径は12.6cmを測る。内面が使用により、摩滅している。底面には静止糸切り痕が確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。時期は不明である。124はすり鉢の底部である。底径は16cmを測る。内面には4.0cm幅に14目の卸目が5条確認できる。底面には静止糸切り痕が確認できる。胎土はやや密であり、灰色を呈する。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。125は甕の底部である。底径は13cmを測る。外面には3cmあたり9目の平行叩きを施し、内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、青灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。126は甕の体部破片である。外面には3cmあたり9目の平行叩きを施し、付着物が確認できる。内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

127・128は瓷器系甕の体部破片である。いずれも内面には漆が付着している。胎土は密であり、明赤褐色を呈する。焼成は良好である。

129は銅鏡の縁部破片である。直径8cm、縁高1.0cm、縁厚0.2～0.5cmを測る。断面は方形である。

130は鉄製刀形刃物である。両端が欠損している。全長16.2cmを測る。刀身は長さ約9.2cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。基部は長さ7.0cm、幅1.0cm、厚さ0.2cmを測る。重さは22.2gを量る。両開式であり、刃部に関が明瞭である。

131～134は鉄釘である。131は下部が欠損している。長さ9.5cm、身幅0.5cmを測り、重さ11.0gを量る。身の部分が屈曲している。132は下部が欠損している。長さ5.3cm、身幅0.3cmを測り、重さ3.8gを量る。133は下部が欠損している。長さ4.7cm、身幅0.3cmを測り、重さ4.0gを量る。身の部分が屈曲している。134は身部の一部が残存している。長さ3.4cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.2gを量る。

SE09出土品（図版126の135～147、164の4）：135は土器皿の底部である。底面は回転糸切りである。胎土は密であり、浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

136は瓦器火鉢の体部破片である。胎土は密であり、浅黄色を呈する。焼成は良好である。

137は瀬戸美濃平椀の体部破片である。内面と外面上半に明緑灰色の灰釉を施す。内面には目跡が1つ確認できる。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。

138～139は珠洲である。138はすり鉢である。口径は38cmを測る。口縁端部に備目波状文を施す。内面下半には付着物が確認できる。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は不良である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。139は甕の体部破片である。外面には叩きを綾杉状に施し、内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、暗褐色を呈する。表面は青灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

140は鋏である。爪部が欠損している。長さは4.3cmを測り、身幅は0.4cmを測る。重さは1.8gを量る。

141～146は鉄釘である。141は下部が欠損している。長さは5.6cmを測り、身幅は0.4cmを測る。重さは

5.6gを量る。142は下部が欠損している。長さは3.4cmを測り、身幅は0.6cmを測る。重さは3.4gを量る。143は下部が欠損している。長さは3.1cmを測り、身幅は0.3cmを測る。重さは1.6gを量る。144は身部の一部が残存している。長さは6.3cmを測り、身幅は0.7cmを測る。重さは18.8gを量る。145は身部の一部が残存している。長さ2.6cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.6gを量る。146は下部のみ残存している。長さ2.3cm、身幅0.2cmを測り、重さ0.4gを量る。

147は不明鉄製品である。最大長1.9cm、最大幅1.2cm、厚さ0.2cmを測る。重さは2.8gを量る。

SE10出土品(図版126の148～167, 164の5): 148は瓦器火鉢の底部である。底径は23cmを測る。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。

149～152は珠洲すり鉢である。149～151は体部破片である。149は内面に卸目が2条確認できる。胎土はやや密であり、淡橙色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。150は2.3cm幅に6目の卸目が3条確認できる。胎土はやや密であり、淡橙色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。151は内面に卸目が2条確認できる。胎土は密であり、青灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。152は口径38cmを測る。口縁端部に波状文を施す。内面には3.6cm幅に12目の卸目が1条確認できる。胎土はやや密であり、明褐色を呈する。焼成はやや良好である。珠洲VI期に属し、15世紀中葉のものである。

153は不明銅製品である。断面は六角形と推定する。長さ5.5cm、幅0.9cm、厚さ0.1cmを測る。重さは2.0gを量る。

154～166は鉄釘である。154は下部が欠損している。長さ8.6cm、身幅0.8cmを測り、重さ20.2gを量る。155は下部が欠損している。長さ3.3cm、身幅0.5cmを測り、重さ3.6gを量る。木質が付着している。156は下部が欠損している。長さ2.0cm、身幅0.8cmを測り、重さ3.8gを量る。157は下部が欠損している。長さ5.7cm、身幅0.8cmを測り、重さ8.2gを量る。158は下部が欠損している。長さ4.3cm、身幅0.8cmを測り、重さ8.6gを量る。159は頭部のみ残存している。長さ1.0cm、身幅0.8cmを測り、重さ1.4gを量る。160は身部の一部が残存している。長さ6.7cm、身幅0.3cmを測り、重さ3.4gを量る。161は身部の一部が残存している。長さ4.6cm、身幅0.5cmを測り、重さ3.4gを量る。162は身部の一部のみ残存している。長さ3.0cm、身幅0.6cmを測る。重さ3.4gを量る。163は身部の一部のみ残存している。長さ2.2cm、身幅0.6cmを測る。重さ1.4gを量る。164は身部の一部が残存している。長さ1.3cm、身幅0.7cmを測り、重さ1.0gを量る。165は下部のみ残存している。長さ4.7cm、身幅0.8cmを測り、重さ4.2gを量る。身の部分が屈曲している。166は下部のみ残存している。長さ2.6cm、身幅0.3cmを測り、重さ0.8gを量る。

167は銭貨である。直径2.3cm、厚さ0.15cmを測り、重さ2.8gを量る。銭名は判読できない。

SE11出土品(図版127の168～182, 164の6): 168・169は珠洲である。168はすり鉢である。口径は34cmを測る。胎土はやや密であり、浅黄色を呈する。焼成はやや不良である。珠洲IV～3期に属し、14世紀後葉のものである。169は壺の体部破片である。外面には3cmあたり9目の平行叩きを綾杉状に施し、内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

170は鉄製刀形刃物の刀身部片である。長さ6.5cm、幅2.2cm、厚さ0.2cmを測る。重さは11.8gを量る。

171は不明鉄製品である。一部が欠損している。長さ5.6cm、幅1.5cm、厚さ0.6cmを測る。重さは28.6

gを量る。

172～182は鉄釘である。172は下部が欠損している。長さ6.2cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ12.4gを量る。173は長さ2.9cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ3.0gを量る。174は長さ5.4cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ5.0gを量る。175は長さ4.6cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ10.8gを量る。176は長さ5.8cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ7.2gを量る。177は長さ5.6cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ4.4gを量る。178は下部が欠損している。長さ4.2cm, 身幅0.8cmを測り, 重さ7.6gを量る。179は下部が欠損している。長さ4.2cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ3.6gを量る。180は下部のみ残存している。長さ7.1cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ5.4gを量る。181は下部のみ残存している。長さ3.2cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.0gを量る。182は下部のみ残存している。長さ5.6cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ12.4gを量る。

SE12出土品(図版127の183～200, 165の1): 183は瀬戸美濃平碗の体部破片である。内面には明緑灰色の灰胎を施し, 目跡が1つ確認できる。胎土は密であり, 灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後I～II期に属し, 14世紀後葉～15世紀初頭のものである。

184～186は珠洲である。184はすり鉢の体部破片である。内面に1条の卸目が確認できるが, 使用により磨滅している。胎土は密であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。時期は不明である。185はすり鉢の体部である。内面には3.3cm幅に9目の卸目が1条確認できるが, 使用により磨滅している。胎土は密であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。時期は不明である。186は壺の肩部破片である。内面上部と外面の一部に煤が付着している。外面には3cmあたり8目の叩きを平行に施し, 内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり, 青灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し, 14世紀末～15世紀中葉のものである。

187は燻しの可能性が高い。猿轡・壺金ともに先端部が欠損しており, 断面径は0.4cmを測る。壺内径は1.4cmを測る。重さはあわせて16.8gを量る。

188は鉄鍔である。基部のみが残存している。長さ9.3cm, 幅0.3cm, 厚さ0.3cmを測る。重さは13.4gを量る。

189～197・199は鉄釘である。189は下部が欠損している。長さ6.1cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ15.0gを量る。190は下部が欠損している。長さ2.2cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.8gを量る。191は下部が欠損している。長さ2.7cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.6gを量る。192は頭部のみ残存している。長さ1.5cm, 身幅0.8cmを測り, 重さ1.2gを量る。193は身部の一部が残存している。長さ4.0cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ6.4gを量る。194は身部の一部が残存している。長さ3.2cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ2.6gを量る。195は身部の一部が残存している。長さ2.5cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ1.2gを量る。196は下部のみ残存している。長さ2.6cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.4gを量る。197は下部のみ残存している。長さ2.2cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.8gを量る。199は頭部のみ残存している。長さ0.9cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.0gを量る。

198・200は不明鉄製品である。198は径2.3cm, 幅0.6cm, 厚さ0.3cmを測る。重さは4.0gを量る。200は最大長5.2cm, 最大幅1.0cm, 厚さ0.4cmを測る。重さは18.2gを量る。

SE13出土品(図版127の201-202, 図版165の2): 201は珠洲壺の体部破片である。外面には3cmあたり10目の平行叩きを施す。胎土は密であり, 青灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し, 14世紀末～15世紀中葉のものである。

202は鉄製刀形刃物である。両端が欠損している。全長21.0cmを測る。刀身部は長さ約12.3cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。基部は長さ8.7cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmを測る。重さは103.8gを量る。片開式であり、刃部側に鬚をもつ。

SE14出土品(図版127の203~206, 図版159の1, 図版165の2): 203は瓦器火鉢の体部破片である。外面に隆帯が1条確認できる。胎土は密であり、浅黄色を呈する。焼成は良好である。

204は白磁皿である。口径15.7cm、高台径7.5cm、器高4cmを測る。外面上半と内面に灰白色の釉を施し、内面見込みを蛇の目状に釉剥ぎする。外面下半は露胎であり、灰白色を呈する。

205は珠洲甕の体部破片である。外面には自然釉がかかり、平行叩きを施す。胎土はやや粗であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。

206は鉄釘である。身部の一部が残存している。長さは4.4cmを測り、身幅は0.5cmを測る。重さは4.8gを量る。

SE15出土品(図版128の207~216, 図版165の2): 207・208は瀬戸美濃である。207は灰釉陶器の底部である。器種は不明である。内面に灰釉を施すが、二次的に被熱し、明緑灰色を呈する。底面には回転糸切り痕が確認できる。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後期に属し、14世紀後半~15世紀中葉のものである。208は天目茶碗の体部破片である。内外面に黒褐色の鉄釉を施すが、外面は一部露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I~II期に属し、14世紀後半~15世紀初頭のものである。

209~216は鉄釘である。209は長さ6.2cm、身幅0.8cmを測り、重さ8.6gを量る。身の部分が屈曲している。210は下部が欠損している。長さ3.0cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.2gを量る。211は下部が欠損している。長さ3.5cm、身幅0.6cmを測り、重さ6.2gを量る。212は身部の一部が欠損している。長さ4.6cm、身幅0.9cmを測り、重さ10.4gを量る。213は身部の一部が残存している。長さ4.1cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.0gを量る。214は下部のみ残存している。長さ3.5cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.4gを量る。215は身部の一部が残存している。長さ2.7cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.0gを量る。216は下部のみ残存している。長さ2.7cm、身幅0.5cmを測り、重さ1.4gを量る。

SE16出土品(図版128の217~246, 図版169の3・4): 217・218は土器皿である。217は体部破片である。胎土は密であり、浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。218は底部である。底径は7cmを測る。底面は回転糸切りである。胎土は密であり、浅黄色を呈する。焼成は良好である。

219・220は瀬戸美濃天目茶碗である。219は体部破片である。内外面に暗褐色の鉄釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後III期に属し、15世紀前葉のものである。220は口径12.5cmを測る。内外面に黒色の鉄釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I期に属し、14世紀後半のものである。

221は青磁碗である。口径は17cmを測る。内外面は無文であり、口縁端部は外反する。全体にオリープ灰色の釉を厚く施す。補修の際用いたであろう漆が断面に付着している。胎土は密であり、灰白色を呈する。龍泉窯系碗D-I類に属する。

222は中国製天目茶碗である。口径は13.2cmを測る。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。

223~225は珠洲すり鉢である。223は口径26cmを測る。内面に卸目が1条確認できる。胎土は密であ

り、灰白色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。224は体部破片である。内面に卸目が1条確認できる。胎土はやや粗であり、灰白色を呈する。焼成はやや良好である。時期は不明である。225は体部破片である。内面に2.6cm幅に9目の卸目が3条確認できる。胎土は密であり、浅黄色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

226は鉄鏃である。鏃身部先端と茎部の大半が欠損している。全長は5.5cmを測る。鏃身部は長さ4.6cm、径1.0cmを測る。茎部は長さ0.9cm、径0.6cmを測る。重さは4.4gを量る。

227・228・230～239は鉄釘である。227は下部が欠損している。長さ6.1cm、身幅0.6cmを測り、重さ10.8gを量る。228は下部が欠損している。長さ5.0cm、身幅0.8cmを測り、重さ6.4gを量る。230は下部が欠損している。長さ3.4cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.0gを量る。231は身部の一部が残存している。長さ7.7cm、幅0.2cmを測り、重さ8.0gを量る。232は身部の一部が残存している。長さ2.1cm、身幅0.5cmを測り、重さ2.0gを量る。233は身部の一部が残存している。長さ2.4cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.0gを量る。234は身部の一部が残存している。長さ1.3cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.2gを量る。235は身部の一部が欠損している。長さ1.5cm、身幅0.8cmを測り、重さ0.6gを量る。236は下部のみ残存している。長さ3.7cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.2gを量る。237は下部のみ残存している。長さ2.6cm、身幅0.4cmを測り、重さ5.4gを量る。238は下部のみ残存している。長さ2.7cm、身幅0.4cmを測り、重さ0.8gを量る。239は下部のみ残存している。長さ1.4cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.4gを量る。木質が付着している。

229はくさびである。下部が欠損している。長さ6.4cm、身幅1.0cmを測り、重さ17.0gを測る。

240・241は不明鉄製品である。240は長さ3.3cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。重さは3.0gを量る。241は一部が欠損している。長さ6.6cm、幅1.3cm、厚さ0.7cmを測る。重さは35.0gを量る。

242～246は銭貨である。242は熙寧元寶である。直径2.2cm、厚み0.15cmを測り、重さ2.8gを量る。書体は真書体である。初鑄年代は1068年であり、北宋代のものである。243は紹聖元寶である。直径2.2cm、厚み0.12cmを測り、重さ2.0gを量る。書体は行書体である。初鑄年代は1094年であり、北宋代のものである。244は熙寧元寶である。直径2.4cm、厚み0.15cmを測り、重さ3.2gを量る。書体は篆書体である。初鑄年代は1068年であり、北宋代のものである。245は厚み0.12cmを測り、重さ1.0gを量る。外周部が若干欠損している。銭名は判読できない。246は厚み0.1cmを測り、重さ1.0gを量る。外周部が若干欠損している。銭名は判読できない。

なおSX06出土の破片と接合する珠洲すり鉢が出土している（図版145の758）。

SE17出土品（図版128の247～249、165の4）：247・248は鉄釘である。247は下部が欠損している。長さ4.8cm、身幅0.5cmを測る。重さ4.6gを量る。248は身部の一部が残存している。長さ2.7cm、身幅0.5cmを測る。重さ2.0gを量る。

249は不明鉄製品である。長さ3.8cm、幅2.4cm、厚さ0.4cmを測る。重さ8.4gを量る。

S101出土品（図版129の250・251、159の5、165の5）：250は須恵器杯身である。口径14.6cm、底径7.6cm、器高7.4cmを測る。内外面に墨あるいは煤が付着している。胎土はやや密であり、淡橙色を呈する。焼成は良好であるが、酸化している。9世紀代のものである。SK04出土の破片と接合した。

251は鉄片である。三辺が欠損している。現存長2.2cm、現存幅1.9cm、現存厚0.1cmを測り、重さ1.6gを量る。鍛造剥片の可能性が高い。

S102出土品(図版129の252~257, 162の3, 165の5): 252は瓦器火鉢である。口径26.3cm, 底径25.3cm, 器高10cmを測る。外面上部に菊花文スタンプを2個1単位で5単位分押印する。外面下半に篋磨きを、内面には指押さえを施す。底部ほぼ中央に径1cm程度の穿孔が1個所あり、底部外周の三箇所には脚部の接合痕を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。SK477出土の破片と接合した。

253は瀬戸美濃平碗である。口径は15.6cmを測る。内外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し明オリーフ灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後1期に属し、14世紀後葉~後葉のものである。

254は珠洲すり鉢の口縁部破片であり、波状文が確認できる。胎土は密であり、黄灰色を呈する。焼成は良好である。年代は不明である。

255・256は鉄釘である。255は下部が欠損している。長さ5.0cm, 身幅0.5cmを測り、重さ5.4gを量る。256は下部が残存している。長さ6.5cm, 身幅0.4cmを測り、重さ6.8gを量る。

257は不明鉄製品である。上部・下部が欠損している。長さ8.4cm, 身幅1.5cmを測り、重さ42.0gを量る。

S103出土品(図版129の258~266, 165の6): 258~263は珠洲である。258はすり鉢である。口径は28.2cmを測る。内面には2.8cm幅に9目の卸目が2条確認できる。胎土はやや密であり、黄灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。259はすり鉢の体部破片である。内面には3.1cm幅に8目の卸目が2条確認できる。二次的に被熱している。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期またはV期に属し、13世紀末~15世紀中葉のものである。260はすり鉢の体部破片である。内面には卸目が確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期またはV期に属し、13世紀末~15世紀中葉のものである。261は壺の体部破片である。外面には3cm毎に8目の平行叩きを施している。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。262は壺の体部破片である。外面には3cm毎に8目の平行叩きを施し、内面には当て具痕を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。263は壺の体部破片である。外面には3cm毎に7目の平行叩きを施している。二次的に被熱しており、外面には煤が付着している。胎土は密であり、にぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。

264は銭貨である。直径2.2cm, 厚さ0.13cmを測り、重さ1.4gを量る。8分の1が欠損している。銭名は判読できない。

265は鉄釘である。下部が欠損している。長さ7.3cm, 身幅0.5cmを測り、重さ11.8gを量る。

266は不明鉄製品である。上部・下部が欠損している。長さ4.9cm, 身幅1.4cmを測り、重さ20.8gを量る。鉄の可能性を示唆する。

S104出土品(図版130の267・268, 166の1): 267は瓷器糸壺甕類の体部破片である。胎土は密であり、外面がにぶい赤褐色を、胎土が灰色を呈する。焼成は良好である。

268は土鍾である。長さ5.1cm, 胴回り11.0cm, 孔径1.3cmを測り、重さ24.8gを量る。胴部に刻印を確認できる。胎土は密であり、橙色を呈する。焼成は良好である。

S106出土品 (図版130の269~284, 166の1) : 269は青磁柄の体部破片である。外面が被熱している。内外面に灰オリーブ色の釉を施す。胎土は密であり、灰色を呈する。龍泉窯系D-I類に属すと考えられる。

270は珠洲壺の肩部破片である。外面には3cm毎に12目の平行叩きを施している。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。

271~282は鉄釘である。271は長さ8.2cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ7.8gを量る。272は長さ5.7cm, 身幅0.6cm, 重さ7.2gを量る。273は下部が欠損している。長さ4.1cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ3.0gを量る。274は下部が欠損している。長さ5.7cm, 身幅0.7cmを測り, 重さ6.4gを量る。275は下部が欠損している。長さ4.7cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ4.0gを量る。276は身部の一部が残存している。長さ4.9cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ5.0gを量る。277は身部の一部が残存している。長さ4.8cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.0gを量る。278は身部の一部が残存している。長さ4.2cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ2.4gを量る。279は身部の一部が残存している。長さ3.4cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ3.6gを量る。280は身部の一部が残存している。長さ2.6cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.0gを量る。281は身部の一部が残存している。長さ2.0cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.2gを量る。282は身部の一部が残存している。長さ2.7cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.4gを量る。

283は不明鉄製品である。長さ4.9cm, 身幅3.9cmを測り, 重さ19.0gを量る。

284は銭貨である。直径2.4cm, 厚さ0.14cmを測り, 重さ2.2gを量る。銭種は判読できない。

S107出土品 (図版130の285・286, 166の1) : 285・286は信楽壺類の体部破片である。285は外面に自然釉が付着しているが、二次的に被熱し黒褐色を呈する。内面を指押さえる。胎土は密であり、灰黄褐色を呈する。焼成は良好である。286は外面を横撫でし、内面を指押さえる。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。

S108出土品 : SE08出土の破片と接合する瀬戸美濃梅瓶1点がある (図版125の121)。

SK03出土品 (図版130の287~298, 図版166の2) : 287は土器皿の体部破片である。胎土は密であり、黄褐色を呈する。焼成は良好である。

288~290は瀬戸美濃である。288は天目茶碗である。口径は12cmを測る。内外面に黒褐色の鉄釉を施すが、外面は一部露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後III期に属し、15世紀前葉のものである。289は平碗である。口径は15cmを測る。内外面に淡黄色の灰釉を施す。胎土は密であり、浅黄色を呈する。古瀬戸後II期に属し、14世紀後葉~15世紀初頭のものである。290は平碗の体部破片である。内外面に浅黄色の灰釉を施すが、外面は一部露胎であり、回転斲削り痕を確認できる。内面には目跡が1つ確認できる。胎土は密であり、淡黄色を呈する。古瀬戸後I~II期に属し、14世紀後半~15世紀初頭のものである。

291は壺器系類の体部破片である。外面の一部には漆が付着している。内面には煤が付着している。胎土は粗であり、灰褐色を呈する。焼成は良好である。

292は鋳である。爪部の一方が欠損している。長さ9.6cm, 身幅1.3cmを測る。重さ56.0gを量る。

293~298は鉄釘である。293は長さ6.4cm, 身幅0.5cmを測る。重さ8.4gを量る。294は身部の一部が残存している。長さ8.9cm, 身幅0.3cm, 厚さ0.3cmを測る。重さ9.8gを量る。295は身部の一部が残存している。長さ3.2cm, 身幅0.4cmを測る。重さ2.2gを量る。296は下部のみ残存している。長さ4.3cm, 身幅

0.4cmを測る。重さ2.6gを量る。297は下部のみ残存している。長さ7.1cm, 身幅0.4cmを測る。重さ4.6gを量る。298は下部のみ残存している。長さ3.5cm, 身幅0.2cmを測る。重さ2.6gを量る。

SK04出土品 (図版130の299~301, 図版166の3) : 299~300は鉄釘である。299は長さ5.2cm, 身幅0.2cmを測る。重さ4.2gを量る。300は身部の一部が残存している。長さ7.0cm, 身幅0.6cmを測る。重さ9.0gを量る。

301は黒曜石製石核である。最大長2.5cm, 最大幅3.9cm, 最大厚2.0cmを測り, 重さ16.0gを量る。小型剥片を剝離した石核である可能性を示唆する。縄紋時代のものである。

なおSI01出土の破片と接合する須恵器杯身が出土している (図版129の250)。

SK05出土品 (図版130の302, 図版166の3) : 302は瀬戸美濃平橋の底部である。付高台であり, 高台径は5cmを測る。内面に淡黄色の灰釉を施す。外面には灰釉の飛沫が付着している。断面に煤が付着している。胎土は密であり, 淡黄色を呈する。古瀬戸後1期に属し, 14世紀後半~後葉のものである。

SK06出土品 (図版130の303・304, 図版166の3) : 303・304は鉄釘である。

SK09出土品 (図版130の305・306, 図版131の307~309, 図版166の3) : 305~309は鉄釘である。305・307は下部が欠損している。長さ7.2cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ6.8gを量る。308は下部が欠損している。長さ3.5cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.8gを量る。309は身部の一部が残存している。長さ3.4cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.8gを量る。

SK11出土品 (図版131の310, 図版166の3) : 310は瀬戸美濃整類の体部破片である。外面に明緑灰色の灰釉を施す (外面に煤が付着している。)。古瀬戸後1期に属すると思われる, 14世紀後半のもの可能性を示唆する。

なおSK57出土の破片と接合する珠洲壺甕類が出土している (図版135の458)。

SK12出土品 (図版131の311~315, 図版166の3) : 311~314は鉄釘である。311は長さ5.7cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ3.2gを量る。312は長さ3.3cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ5.2gを量る。313は長さ4.0cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ2.4gを量る。314は下部が欠損している。長さ4.3cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ5.2gを量る。315は不明鉄製品である。最大長3.6cm, 最大幅0.3cmを測り, 重さ3.0gを量る。

SK15出土品 (図版131の316~318) : 316~318は鉄釘である。316は下部が欠損している。長さ2.8cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ3.4gを量る。317は身部の一部が残存している。長さ3.1cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ4.2gを量る。318は身部の一部が残存している。長さ2.1cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.6gを量る。

SK16出土品 (図版131の319~321) : 319は中国製天目茶碗である。口径は11cmを測る。内外面に鉄釉を施すが, 胎土は密であり, 灰白色を呈する。

320・321は鉄釘である。320は下部のみ残存している。長さ4.8cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ3.4gを量る。321は下部のみ残存している。長さ5.2cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ1.0gを量る。

SK17出土品 (図版131の322~339, 図版166の4, 図版177) : 322は白磁橋の体部破片である。いわゆる「枢府手」とよばれるものである。見込み型押しによる唐草文を施すが, 失透明性の灰白色釉を施すため, 文様がやや不鮮明である。胎土は密であり, 灰白色を呈する。白磁B群に属する。

323は瀬戸美濃底卸目皿の体部破片である。内外面に色の灰釉を施す。外面は一部露胎である。胎土は密であり, 黄灰色を呈する。古瀬戸中I~II期に属し, 13世紀後葉~14世紀前葉のものである。

324は瓷器系壺甕類の体部破片である。胎土は密であり, 褐灰色を呈する。焼成は良好である。SK19出

土の破片を接合した。

325は円盤形金銅製品である。直径4.9cm、厚さ0.2cmを測り、重さ26gを量る。表面には橋に二羽の鳥が飛ぶ図像を描く。うろこ状の模様は魚々子であり、大粒で列がそろわない室町時代の特徴をあらわす。航海の安全を祈願した住吉図と考えられる。鑄造製品であり、金メッキした鈕を2箇所蟻付けする。

326は鉄製刀形刃物である。鋒の一部が欠損している。刀身部は長さ20.8cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmを測る。茎部は長さ8.0cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る。重さ89.8gを量る。両開式である。

327～334は鉄釘である。327は長さ3.8cm、身幅0.2cmを測り、重さ4.2gを量る。328は長さ3.0cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.2gを量る。329は長さ3.2cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.0gを量る。330は長さ3.6cm、身幅0.1cmを測り、重さ2.0gを量る。331は下部が欠損している。長さ2.0cm、身幅0.4cmを測り、重さ3.6gを量る。332は下部が欠損している。長さ4.2cm、身幅0.4cmを測り、重さ4.2gを量る。333は下部が残存している。長さ3.2cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.2gを量る。334は下部が残存している。長さ3.0cm、身幅0.2cmを測り、重さ0.8gを量る。

335～339は不明鉄製品である。335は最大長10.2cm、最大幅1.3cmを測り、重さ21.4gを量る。336は最大長6.7cm、最大幅1.2cmを測り、重さ7.4gを量る。337は最大長5.4cm、最大幅0.8cmを測り、重さ12.2gを量る。338は最大長4.2cm、最大幅0.7cmを測り、重さ10.2gを量る。339は最大長3.5cm、最大幅1.4cmを測り、重さ7.2gを量る。

SK19出土品 (図版131の340・341) : 340・341は鉄釘である。340は下部が欠損している。長さ2.4cm、身幅0.5cmを測り、重さ0.8gを量る。341は下部が欠損している。長さ2.5cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.0gを量る。

SK20出土品 (図版131の342～344, 図版132の345～357, 図版167の1・2) : 342は白磁碗である。口径15cmを測る。いわゆる「椀府手」とよばれるものである。見込みに界線および型押しによる唐草文を施すが、失透性の灰白色釉を施すため、文様がやや不鮮明である。胎土は密であり、灰白色を呈する。B群に属する。

343は瀬戸美濃四耳壺の体部破片である。内外面に灰白～灰オリーブ色の灰釉を施す。胎土はやや密であり、灰白色を呈する。古瀬戸中Ⅲ～Ⅳ期に属し、14世紀中葉のものである。

344は珠洲壺Ⅰ種の体部破片である。外面には3cmあたり7目の平行叩きを施す。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅳ期に属し、13世紀末～14世紀後葉のものである。345は珠洲すり鉢である。口径29.4cm、底径11.2cm、器高13.1cmを測る。内面には3cm幅に14目の卸目が8条確認できる。胎土はやや粗であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅳ—Ⅱ期に属し、14世紀前葉～14世紀中葉のものである。

346・347は瓷器系壺甕類の体部破片である。ともに胎土は密であり、褐灰色を呈する。焼成は良好である。

348は不明鉄製品である。最大長15.7cm、最大幅0.4cmを測り、重さ17.8gを量る。

349～354は鉄釘である。349は長さ5.8cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.4gを量る。350は下部が欠損している。長さ2.0cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.2gを量る。351は下部が欠損している。長さ2.0cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.8gを量る。352は身部の一部が残存している。最大長6.8cm、最大幅0.5cmを測り、重さ14.6gを量る。353は長さ4.7cm、身幅0.5cmを測り、重さ4.0gを量る。354は下部が残存している。長

さ3.5cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ5.6gを量る。

355・356は不明鉄製品である。355は最大長2.5cm, 最大幅1.0cmを測り, 重さ2.8gを量る。356は最大長2.8cm, 最大幅0.3cmを測り, 重さ5.8gを量る。

357は銭貨である。直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.2gを量る。銭名は紹聖元寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1094年であり, 北宋代のものである。

SK24出土品(図版132の358~380, 図版167の2・3): 358は瀬戸美濃平碗である。口径16.8cmを測る。内外面に浅黄色の灰釉を施す。胎土は密であり, 浅黄褐色を呈する。古瀬戸後期に属し, 14世紀後半~15世紀中葉のものである。

359~362は珠洲である。359・360はすり鉢の体部破片である。359は内面には2.5cm幅に9目の卸目が2条確認できる。胎土は密であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV~V期に属し, 13世紀末~15世紀中葉のものである。360は内面には2.4cm幅に9目の卸目が3条確認できる。胎土はやや粗であり, 灰色を呈する。珠洲IV~V期に属し, 13世紀末~15世紀中葉のものである。361は壺R種の体部破片である。外面には自然釉がかかる。胎土は密であり, 灰白色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV~V期に属し, 14世紀末~15世紀中葉のものである。362は壺R種の底部である。胎土はやや粗であり, 灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲IV~V期に属し, 14世紀末~15世紀中葉のものである。

363は瓷器承壺甕類の体部破片である。胎土は密であり, 灰褐色を呈する。焼成は良好である。

364は鉄製くさびである。身部の一部が残存している。長さ8.3cm, 身幅1.6cmを測り, 重さ36.0gを量る。

365は鉄製刀形刃物である。鋒を含む身部が残存している。長さ13.9cm, 身幅2.4cm, 厚さ0.5cmを測り, 重さ95.4gを量る。

366~377は鉄釘である。366は長さ5.7cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ13.0gを量る。367は長さ5.1cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ5.0gを量る。368は下部が欠損している。長さ4.7cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ11.2gを量る。369は下部が欠損している。長さ3.4cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ4.2gを量る。370は下部が欠損している。長さ1.7cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ2.0gを量る。371は下部が欠損している。長さ6.5cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ10.2gを量る。372は下部が欠損している。長さ6.5cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ13.8gを量る。373は下部が欠損している。長さ3.4cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.6gを量る。374は身部の一部が残存している。長さ3.0cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.6gを量る。375は身部の一部が残存している。長さ7.6cm, 身幅1.3cmを測り, 重さ18.2gを量る。376は身部の一部が残存している。長さ4.8cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ5.8gを量る。377は身部の一部が残存している。長さ2.9cm, 身幅0.8cmを測り, 重さ3.6gを量る。

378は不明鉄製品である。最大長5.1cm, 最大幅0.7cmを測り, 重さ10.8gを量る。

379・380は銭貨である。379は直径2.5cm, 厚さ0.1cm, 重さ1.6gを量る。銭名は元□□□であり, 書体は不明である。初鑄年代は不明であり, 北宋代のものである。380は厚さ0.09cm, 重さ0.6gを量る。銭名は割読できない。

SK27出土品(図版133の381~394, 図版167の4・5): 381~385は珠洲である。381は壺の体部破片である。外面には3cmあたり7目の平行叩きを施す。胎土は密であり, 灰白色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し, 14世紀末~15世紀中葉のものである。382は甕の体部破片である。外面には3cmあ

たり8目の平行叩きを施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成はやや良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。383は壺の体部破片である。外面には3cmあたり8目の平行叩きを施す。胎土は密であり、灰黄褐色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。384は甕の体部破片である。外面には3cmあたり8目の平行叩きを施す。胎土はやや密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。385は珠洲甕の体部破片である。外面には3cmあたり8目の叩きを平行に施す。胎土は密であり、外面は灰黄褐色を呈する。焼成はやや良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。SX08出土の破片と接合した。

386～392は鉄釘である。386は下部が欠損している。長さ1.8cm、身幅0.6cmを測り、重さ2.8gを量る。387は下部が欠損している。長さ4.5cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.2gを量る。388は下部が欠損している。長さ7.3cm、身幅0.5cmを測り、重さ9.4gを量る。389は身部の一部が残存している。長さ7.6cm、身幅0.3cmを測り、重さ7.8gを量る。390は身部の一部が残存している。長さ5.2cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.2gを量る。391は身部の一部が残存している。長さ2.2cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.4gを量る。392は身部の一部が残存している。長さ1.9cm、身幅0.4cmを測り、重さ3.0gを量る。

393・394は銭貨である。393は厚さ0.08cmを測り、重さ0.6gを量る。2分の1が欠損している。銭名は判読できない。394は厚さ0.09cmを測り、重さ0.6gを量る。9分の5を欠損している。銭名は判読できない。

なおSK77出土の破片と接合する珠洲すり鉢1点が出土している。また図示しなかった遺物として骨片が多数出土している。

SK29出土品(図版133の395～423、図版174の3、図版167の6、図版168の1)：395～399は瀬戸美濃である。395は折縁小皿である。口径9.2cm、器高2.0cm、底径5.3cmを測る。内面と外面上半に灰釉を施す。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。後I期または後II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。396は折縁深皿である。口径は18.0cmを測る。内外面に灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。後I期に属し、14世紀後半のものである。397は折縁深皿である。口径は30.0cmを測る。内外面上半に灰釉を施し、内面下半に灰釉をハケ塗りする。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。後II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。398は折縁深皿である。口径は33.6cmを測る。内面と外面上半に灰釉を施す。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。後I期に属し、14世紀後半のものである。399は梅瓶である。口径は3.8cmを測る。外面と内面上端に灰釉を施すが、二次的に被熱し、灰オリーブ色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。前III期に属すると思われ、13世紀中葉のもの可能性を有する。

400～402は珠洲である。400はすり鉢である。口径は30.0cmを測る。内面には卸目が2条確認できる。二次的に被熱し、内外面の一部に煤が付着する。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。401は甕の体部破片である。外面には3cmあたり8目の平行叩きを施す。胎土はやや密であり、灰白色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。402は壺の体部破片である。外面には平行叩きを施す。胎土はやや密であり、外面は灰白色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀のものである。

403～417は鉄釘である。403は下部が欠損している。長さ2.7cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.2gを量る。

404は下部が欠損している。長さ4.0cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.6gを量る。405は下部が欠損している。長さ4.9cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ3.0gを量る。406は下部が欠損している。長さ3.0cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.8gを量る。407は下部が欠損している。長さ2.1cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.8gを量る。408は身部の一部が残存している。長さ4.1cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ2.8gを量る。409は身部の一部が残存している。長さ3.8cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.8gを量る。410は身部の一部が残存している。長さ2.9cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.8gを量る。411は身部の一部が残存している。長さ2.8cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.8gを量る。412は身部の一部が残存している。長さ2.1cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ2.6gを量る。413は身部の一部が残存している。長さ3.1cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ2.0gを量る。414は身部の一部が残存している。長さ3.1cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.6gを量る。415は身部の一部が残存している。長さ1.9cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.8gを量る。416は身部の一部が残存している。長さ1.7cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.6gを量る。417は身部の一部が残存している。長さ2.0cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.8gを量る。

418～421は不明鉄製品である。418は残存長1.8cm, 身幅0.7cmを測り, 重さ1.4gを量る。419は残存長1.3cm, 残存幅1.0cmを測り, 重さ0.6gを量る。420は残存長3.0cm, 最大幅1.3cmを測り, 重さ1.8gを量る。421は残存長2.7cm, 最大幅1.7cmを測り, 重さ4.8gを量る。

422は銭貨である。直径2.3cm, 厚さ1.6gを測り, 重さ1.6gを量る。銭名は判読できない。

423は頁岩製の砥石である。裏面は欠損している。残存長3.49cm, 残存幅2.3cm, 厚さ0.6cmを測り, 重さ6.2gを量る。長側面には切り出した際の鋸目が観察できる。二次的に被熱し, 短側面に煤が付着している。生産地は京都市西京区近郊である。

なおSK77出土の破片と接合する珠洲すり鉢1点(図版138の576), SD04出土の破片と接合する珠洲壺1点(図版124の94)が出土している。

SK31出土品(図版134の424～441, 図版168の1): 424は瀬戸美濃豆皿である。口径は6.8cmを測る。外面上半と内面全体に灰釉を施すが, 二次的に被熱し明緑灰色を呈する。外面下半は露胎である。胎土は密であり, 淡黄色を呈する。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期に属し, 14世紀後半～15世紀初頭のものである。

425は珠洲壺の体部破片である。外面には3cm毎に14目の平行叩きを施し, 内面には当て具痕を確認できる。胎土は密であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し, 14世紀末～15世紀中葉のものである。

426は鉄製刀形刃物である。全長35.3cmを測る。刀身部は長さ28.3cm, 幅3.4cm, 厚さ0.8cmを測る。茎部は長さ8.0cm, 幅3.0cm, 厚さ0.6cmを測る。重さは320.4gを量る。片開式であり, 刃部側に鬚を有する。茎部に目釘穴を1個有する。

427はくさびである。身部の一部が残存している。長さ3.5cm, 身幅1.2cmを測り, 重さ13.2gを量る。

428～435は鉄釘である。428は下部が欠損している。長さ5.3cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ9.0gを量る。429は下部が欠損している。長さ2.7cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ1.4gを量る。430は下部が欠損している。長さ2.0cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ0.4gを量る。431は身部の一部が残存している。長さ5.1cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ3.6gを量る。432は身部の一部が残存している。長さ3.8cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.4gを量る。433は身部の一部が残存している。長さ2.6cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ3.2gを量る。434は身部の一部が残存している。長さ2.8cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.0gを量る。435は身部の一部が残

存している。長さ2.5cm、身幅0.5cmを測り、重さ1.2gを量る。

436は不明鉄製品である。上部・下部が欠損している。現存長2.2cm、現存幅2.4cm、現存厚0.2cmを測り、重さ2.0gを量る。

437～441は銭貨である。437は直径2.3cm、厚さ0.09cmを測り、重さ1.6gを量る。左中部が若干欠損している。銭名は開元通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は621年であり、唐代のものである。438は直径2.5cm、厚さ0.13cmを測り、重さ2.8gを量る。右上部が若干欠損している。銭名は皇宋通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1038年であり、北宋代のものである。439は厚さ0.10cmを測り、重さ1.0gを量る。3分の2が欠損している。銭名は天禧通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1017年であり、北宋代のものである。440は厚さ0.12cmを測り、重さ1.2gを量る。左下部3分の2が欠損している。銭名は判読できない。441は直径2.5cm、厚さ0.10cmを測り、重さ1.2gを量る。左下部4分の1と、左上部が若干欠損している。銭名は判読できない。

その他に図示しなかったものとして、炭化物が多数出土している。

SK35出土品 (図版134の442) : 442は鉄釘である。身部の一部が残存している。長さ2.9cm、身幅0.2cmを測り、重さ0.4gを量る。

SK38出土品 (図版134の443, 図版168の2) : 443は鋼製の庫金具である。長さ3.7cm、身幅3.9cm、厚さ0.2cmを測り、重さ0.6gを量る。

SK41出土品 (図版134の444・445, 図版168の2, 図版169の1・2) : 444は瓦器火鉢の体部破片である。胎土はやや粗であり、黒色を呈する。

445は砂岩製硯である。平面台形を呈し、2面彫りこみがなされる。長さ16.3cm、身幅8.2cm、厚さ3.8cmを測り、重さ599.4gを量る。

SK43出土品 (図版134の446) : 446は鉄釘である。身部の一部が残存している。長さ4.7cm、身幅0.3cmを測り、重さ4.2gを量る。

SK44出土品 (図版134の447, 図版168の2) : 447は鏝である。長さ8.8cm、身幅1.2cmを測り、重さ48.6gを量る。

SK46出土品 (図版134の448～451, 図版168の2) : 448～450は鉄釘である。448は長さ3.9cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.0gを量る。449は下部が欠損している。長さ3.5cm、身幅0.5cmを測り、重さ2.8gを量る。450は下部が欠損している。長さ3.0cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.4gを量る。

451は頁岩製砥石である。長さ4.4cm、身幅2.9cmを測り、重さ17.0gを量る。上下面を使用しており、断面U字状の砥面を1面短辺方向に残す。生産地は京都市西京区近郊の可能性が高い。

SK48出土品 (図版134の452・453, 図版168の2) : 452は珠洲甕の体部破片である。外面には3cmあたり7目の平行叩きを施す。内面には当て具痕が確認できる。胎土はやや粗であり、灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

なおSX12出土の破片と接合するが、白磁釉1点出土している (図版147の825)。

453は不明鉄製品である。一部が残存している。最大長8.8cm、最大幅4.8cmを測り、重さ76.2gを量る。鉄鍋の可能性を示唆する。

SK52出土品 (図版135の454～457, 図版168の3) : 454～457は珠洲甕の体部破片である。454～456はいずれも外面には3cmあたり9目の平行叩きを施す。内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、

灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。457は外面には3cmあたり8目の平行叩きを施す。内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。断面に煤が付着している。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

SK57出土品(図版135の458, 図版168の3): 458は珠洲壺変類の体部破片である。外面には3cmあたり8目の平行叩きを施す。胎土は密であり灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。SK11の破片と接合した。

SK58出土品(図版135の459, 図版168の3): 459は鉄釘である。下部が欠損している。長さ3.5cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ4.4gを量る。

SK59出土品(図版135の460, 図版168の3): 460は珠洲すり鉢である。胎土はやや粗であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し, 14世紀末～15世紀中葉のものである。

SK60出土品(図版135の461～493, 図版136の494～543, 図版169の3): 461は瓦器火鉢の体部破片である。口径32cmを測る。胎土は密であり, 浅黄色を呈する。焼成は不良である。

462は珠洲壺の体部破片である。外面には3cmあたり8目の平行叩きを施す。内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し, 14世紀末～15世紀中葉のものである。

463は鉄釘である。下部が欠損している。長さ5.8cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ12.6gを量る。

464～542は銭貨である。464は厚さ0.15cm, 重さ1.8gを量る。銭名は判読できない。465は直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.6gを量る。銭名は元祐通寶であり, 書体は行書である。初鑄年代は1086年であり, 北宋代のものである。466は直径2.5cm, 厚さ0.13cm, 重さ2.0gを量る。銭名は景德元寶であり, 書体は不明である。初鑄年代は1004年であり, 北宋代のものである。467は直径2.5cm, 厚さ0.15cm, 重さ2.6gを量る。銭名は判読できない。468は直径2.5cm, 厚さ0.15cm, 重さ3.6gを量る。銭名は熙寧元寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1068年であり, 北宋代のものである。469は直径2.5cm, 厚さ0.13cm, 重さ2.6gを量る。銭名は元〇通寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は不明であり, 北宋代のものである。470は直径2.4cm, 厚さ0.15cm, 重さ3.2gを量る。銭名は元豊通寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1078年であり, 北宋代のものである。471は直径2.5cm, 厚さ0.15cm, 重さ3.4gを量る。銭名は皇宋通寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1038年であり, 北宋代のものである。472は直径2.5cm, 厚さ0.13cm, 重さ3.6gを量る。銭名は皇宋通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1038年であり, 北宋代のものである。473は直径2.4cm, 厚さ0.18cm, 重さ3.2gを量る。銭名は開元通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は621年であり, 北宋代のものである。474は直径2.4cm, 厚さ0.12cm, 重さ2.6gを量る。銭名は〇〇元寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は不明である。475は直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.0gを量る。銭名は景德元寶であり, 書体は不明である。初鑄年代は1004年であり, 北宋代のものである。476は直径2.5cm, 厚さ0.13cm, 重さ2.8gを量る。銭名は判読できない。477は直径2.5cm, 厚さ0.7cm, 重さ3.4gを量る。銭名は皇宋通寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1038年であり, 北宋代のものである。478は直径2.5cm, 厚さ0.10cm, 重さ2.8gを量る。銭名は祥符元寶であり, 書体は不明である。初鑄年代は1009年であり, 北宋代のものである。479は直径2.5cm, 厚さ0.16cm, 重さ4.0gを量る。銭名は政和通寶であり, 書体は分階である。初鑄年代は1111年であり, 北宋代のものである。480は直径2.4cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.0gを量る。銭名は元祐通寶であり, 書体は行書である。初鑄年代

は1086年であり、北宋代のものである。481は直径2.5cm、厚さ0.12cm、重さ3.2gを量る。銭名は開元通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は621年であり、唐代のものである。482は直径2.5cm、厚さ0.15cm、重さ3.8gを量る。銭名は皇宋通寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1038年であり、北宋代のものである。483は直径2.5cm、厚さ0.10cm、重さ2.6gを量る。銭名は□□通寶であり、書体は不明である。初鑄年代は不明である。484は直径2.4cm、厚さ0.17cm、重さ2.8gを量る。銭名は元豐通寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1078年であり、北宋代のものである。485は直径2.4cm、厚さ0.16cm、重さ2.8gを量る。銭名は政和通寶であり、書体は分階である。初鑄年代は1111年であり、北宋代のものである。486は直径2.4cm、厚さ0.13cm、重さ3.4gを量る。銭名は元豐通寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1078年であり、北宋代のものである。487は直径2.4cm、厚さ0.16cm、重さ2.8gを量る。銭名は皇宋通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1038年であり、北宋代のものである。488は直径2.5cm、厚さ0.10cm、重さ3.2gを量る。銭名は聖宋元寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1101年であり、北宋代のものである。489は直径2.5cm、厚さ0.14cm、重さ3.4gを量る。銭名は判読できない。490は直径2.5cm、厚さ0.14cm、重さ2.8gを量る。銭名は□□元寶であり、書体は不明である。初鑄年代は不明である。491は直径2.5cm、厚さ0.15cm、重さ3.6gを量る。銭名は元祐通寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1086年であり、北宋代のものである。492は直径2.4cm、厚さ0.16cm、重さ3.6gを量る。銭名は政和通寶であり、書体は不明である。初鑄年代は1111年であり、北宋代のものである。493は直径2.5cm、厚さ0.14cm、重さ3.4gを量る。銭名は祥符元寶であり、書体は不明である。初鑄年代は1009年であり、北宋代のものである。494は直径2.4cm、厚さ0.14cm、重さ3.4gを量る。銭名は判読できない。495は直径2.4cm、厚さ0.14cm、重さ3.6gを量る。銭名は元豐通寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1078年であり、北宋代のものである。496は直径2.5cm、厚さ0.16cm、重さ3.4gを量る。銭名は聖宋元寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1101年であり、北宋代のものである。497は直径2.4cm、厚さ0.12cm、重さ2.6gを量る。銭名は元豐通寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1078年であり、北宋代のものである。498は直径2.4cm、厚さ0.14cm、重さ3.0gを量る。銭名は開元通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は621年であり、唐代のものである。499は直径2.5cm、厚さ0.14cm、重さ3.6gを量る。銭名は聖宋元寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1101年であり、北宋代のものである。500は直径2.4cm、厚さ0.15cm、重さ3.4gを量る。銭名は紹聖元寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1094年であり、北宋代のものである。501は直径2.4cm、厚さ0.16cm、重さ3.6gを量る。銭名は元符通寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1098年であり、北宋代のものである。502は直径2.4cm、厚さ0.16cm、重さ2.6gを量る。銭名は判読できない。503は直径2.5cm、厚さ0.14cm、重さ3.4gを量る。銭名は嘉祐通寶であり、書体は不明である。初鑄年代は1056年であり、北宋代のものである。504は直径2.4cm、厚さ0.16cm、重さ3.8gを量る。銭名は紹聖元寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1094年であり、北宋代のものである。505は直径2.4cm、厚さ0.15cm、重さ4.0gを量る。銭名は皇宋通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1038年であり、北宋代のものである。506は直径2.6cm、厚さ0.14cm、重さ3.0gを量る。銭名は天禧通寶であり、書体は不明である。初鑄年代は1017年であり、北宋代のものである。507は直径2.5cm、厚さ0.14cm、重さ3.4gを量る。銭名は皇宋通寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1038年であり、北宋代のものである。508は直径2.4cm、厚さ0.14cm、重さ3.4gを量る。銭名は聖宋元寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1101年であり、北宋代のものである。509は直径2.4cm、厚さ0.12cm、

重さ3.0gを量る。銭名は皇宋通寶であり、書体は不明である。初鑄年代は1038年であり、北宋代のものである。510は直径2.5cm, 厚さ0.12cm, 重さ3.2gを量る。銭名は熙寧元寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1068年であり、北宋代のものである。511は直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.6gを量る。銭名は明道元寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1032年であり、北宋代のものである。512は直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.6gを量る。銭名は天聖元寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1023年であり、北宋代のものである。513は直径2.4cm, 厚さ0.16cm, 重さ3.8gを量る。銭名は熙寧元寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1068年であり、北宋代のものである。514は直径2.4cm, 厚さ0.13cm, 重さ3.8gを量る。銭名は聖宋元寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1101年であり、北宋代のものである。515は直径2.5cm, 厚さ0.10cm, 重さ3.4gを量る。銭名は政和通寶であり、書体は分開である。初鑄年代は1111年であり、北宋代のものである。516は直径2.4cm, 厚さ0.10cm, 重さ2.2gを量る。銭名は皇宋通寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1038年であり、北宋代のものである。517は直径2.4cm, 厚さ0.15cm, 重さ3.2gを量る。銭名は聖宋元寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1101年であり、北宋代のものである。518は直径2.5cm, 厚さ0.10cm, 重さ2.2gを量る。銭名は開元通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は621年であり、唐代のものである。519は直径2.5cm, 厚さ0.11cm, 重さ2.4gを量る。銭名は政和通寶であり、書体は分開である。初鑄年代は1111年であり、北宋代のものである。520は直径2.4cm, 厚さ0.10cm, 重さ2.6gを量る。銭名は熙寧通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1068年であり、北宋代のものである。521は直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.4gを量る。銭名は景德通寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1004年であり、北宋代のものである。522は直径2.4cm, 厚さ0.14cm, 重さ2.6gを量る。銭名は元豐通寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1078年であり、北宋代のものである。523は直径2.4cm, 厚さ0.13cm, 重さ3.4gを量る。銭名は熙寧元寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1068年であり、北宋代のものである。524は直径2.4cm, 厚さ0.12cm, 重さ3.0gを量る。銭名は聖宋元寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1101年であり、北宋代のものである。525は直径2.6cm, 厚さ0.15cm, 重さ2.8gを量る。銭名は皇宋通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1038年であり、北宋代のものである。526は直径2.4cm, 厚さ0.15cm, 重さ3.6gを量る。銭名は聖宋元寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1101年であり、北宋代のものである。527は直径2.4cm, 厚さ0.17cm, 重さ3.8gを量る。銭名は元豐通寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1078年であり、北宋代のものである。528は直径2.4cm, 厚さ0.18cm, 重さ4.2gを量る。銭名は紹聖元寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1094年であり、北宋代のものである。529は直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.6gを量る。銭名は元^〇通寶であり、書体は行書である。初鑄年代は不明であり、北宋代のものである。530は直径2.5cm, 厚さ0.10cm, 重さ2.8gを量る。銭名は天聖元寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1023年であり、北宋代のものである。531は直径2.4cm, 厚さ0.12cm, 重さ3.4gを量る。銭名は元符通寶であり、書体は行書である。初鑄年代は1098年であり、北宋代のものである。532は直径2.4cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.6gを量る。銭名は元豐通寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1078年であり、北宋代のものである。533は直径2.4cm, 厚さ0.10cm, 重さ2.4gを量る。銭名は^〇元^〇寶であり、書体は不明である。初鑄年代は不明である。534は直径2.4cm, 厚さ0.10cm, 重さ2.2gを量る。銭名は開元通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は621年であり、北宋代のものである。535は直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ2.8gを量る。銭名は皇宋通寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1038年であり、北宋代のものである。536は直径

2.5cm, 厚さ0.17cm, 重さ4.0gを量る。銭名は判読できない。537は直径2.5cm, 厚さ0.11cm, 重さ2.6gを量る。銭名は皇宋通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1038年であり, 北宋代のものである。538は直径2.5cm, 厚さ0.15cm, 重さ3.4gを量る。銭名は皇宋通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1038年であり, 北宋代のものである。539は直径2.4cm, 厚さ0.11cm, 重さ3.4gを量る。銭名は元豊通寶であり, 書体は行書である。初鑄年代は1078年であり, 北宋代のものである。540は直径2.4cm, 厚さ0.15cm, 重さ3.8gを量る。銭名は元符通寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1098年であり, 北宋代のものである。541は直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.0gを量る。銭名は祥符元寶であり, 書体は不明である。初鑄年代は1009年であり, 北宋代のものである。542は直径2.5cm, 厚さ0.14cm, 重さ3.6gを量る。銭名は祥符元寶であり, 書体は不明である。初鑄年代は1009年であり, 北宋代のものである。543は直径2.4cm, 厚さ0.15cm, 重さ3.6gを量る。銭名は元祐通寶であり, 書体は行書である。初鑄年代は1086年であり, 北宋代のものである。

SK61出土品(図版136の544, 図版168の4): 544は鉄製刀形刃物の基部の一部である。長さ9.1cm, 幅1.6cm, 厚さ0.2cmを測り, 重さ36.8gを量る。

SK64出土品(図版136の545, 図版168の4): 545は鉄製刀形刃物の鋒部である。長さ7.3cm, 幅1.7cm, 厚さ0.5cmを測り, 重さ32.0gを量る。

SK65出土品: 鉄製品が1点出土しているが, 細片のため図示し得なかった。

SK67出土品(図版137の546~548, 図版168の4): 546・547は瀬戸美濃である。546は花瓶の頸部破片である。補修の際用いたであろう漆が断面に付着している。外面に明緑灰色の灰釉を施す。内面は露胎である。胎土は密であり, 色調は淡灰色を呈する。古瀬戸後期に属し, 14世紀後半~15世紀中葉のものである。547は壺類の体部破片である。内外面ともに明緑灰色の灰釉を施す。胎土はやや密であり, 色調は灰白色を呈する。古瀬戸後I期に属すと考えられ, 14世紀後半の可能性を有する。

548は珠洲壺R種の体部破片である。二次的に被熱している。胎土は密であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IVまたはV期に属し, 13世紀末~15世紀中葉のものである。

その他に図示しなかったものとして, 遺構内に集中して, 炭化物が多数出土している。

SK71出土品(図版137の549~551, 図版168の4): 549~551は鉄釘である。549は下部が欠損している。長さ2.9cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ3.6gを量る。550は下部が欠損している。長さ3.0cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.0gを量る。551は下部が残存している。長さ5.0cm, 身幅1.0cmを測り, 重さ9.4gを量る。

SK72出土品(図版137の552・553, 図版168の4): 552・553は鉄釘である。552は下部が欠損している。長さ16.8cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ34.2gを量る。553は身部の一部が残存している。長さ6.6cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ7.4gを量る。

SK73出土品(図版137の554, 図版168の4): 554は鉄釘である。長さ5.0cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ7.2gを量る。

SK74出土品(図版137の555, 図版168の4): 555は鉄釘である。下部が残存している。長さ7.5cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ7.6gを量る。

SK78出土品(図版137の556~574, 図版168の5): 556~574は銭貨である。556は直径2.4cm, 厚さ0.10cmを測り, 重さ2.0gを量る。銭名は開元通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は621年であり, 唐

代のものである。557は直径2.5cm, 厚さ0.13cmを測り, 重さ3.0gを量る。右中部が若干欠損している。銭名は宋通元寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は960年であり, 北宋代のものである。558は直径2.4cm, 厚さ0.09cmを測り, 重さ2.6gを量る。左部が若干欠損している。銭名は太平通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は976年であり, 北宋代のものである。559は直径2.5cm, 厚さ0.12cmを測り, 重さ3.0gを量る。銭名は淳化元寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は990年であり, 北宋代のものである。560は直径2.5cm, 厚さ0.12cmを測り, 重さ3.2gを量る。銭名は景德元寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1004年であり, 北宋代のものである。561は直径2.5cm, 厚さ0.10cmを測り, 重さ2.8gを量る。左上部が若干欠損している。銭名は祥符元寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1009年であり, 北宋代のものである。562は直径2.6cm, 厚さ0.11cmを測り, 重さ2.0gを量る。右下部4分の1と, 左下部が若干欠損している。銭名は祥符元寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1009年であり, 北宋代のものである。563は直径2.4cm, 厚さ0.11cmを測り, 重さ2.8gを量る。外周部が若干欠損している。銭名は天聖元寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1023年であり, 北宋代のものである。564は直径2.5cm, 厚さ0.10cmを測り, 重さ3.4gを量る。銭名は皇宋通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1038年であり, 北宋代のものである。565は直径2.5cm, 厚さ0.10cmを測り, 重さ2.4gを量る。右下部が若干欠損している。銭名は皇宋通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1038年であり, 北宋代のものである。566は直径2.5cm, 厚さ0.14cmを測り, 重さ3.4gを量る。銭名は嘉祐通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1056年であり, 北宋代のものである。567は直径2.4cm, 厚さ0.10cmを測り, 重さ2.4gを量る。右下部が若干欠損している。銭名は熙寧元寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1068年であり, 北宋代のものである。568は直径2.4cm, 厚さ0.09cmを測り, 重さ2.2gを量る。外周部が若干欠損している。銭名は元豐通寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1078年であり, 北宋代のものである。569は直径2.2cm, 厚さ0.10cmを測り, 重さ2.2gを量る。外周部が若干欠損している。銭名は元豐通寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1078年であり, 北宋代のものである。570は直径2.4cm, 厚さ0.10cmを測り, 重さ2.6gを量る。銭名は政和通寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1111年であり, 北宋代のものである。571は直径2.5cm, 厚さ0.13cmを測り, 重さ3.6gを量る。外周部が若干欠損している。銭名は嘉定通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1208年であり, 南宋代のものである。572は直径2.4cm, 厚さ0.12cmを測り, 重さ2.5gを量る。銭名は紹定通寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1228年であり, 南宋代のものである。573は直径2.5cm, 厚さ0.10cmを測り, 重さ2.0gを量る。下部が若干欠損している。銭名は景□寶であり, 書体は真書である。574は直径2.4cm, 厚さ0.08cmを測り, 重さ2.2gを量る。右上部が若干欠損している。銭名は判読できない。

SK77出土品(図版137の575~579, 図版138の580~598, 図版159の4, 図版168の4, 図版174の4): 575は瀬戸美濃卸皿である。口径15.0cm, 底径7.2cm, 器高2.8cmを測る。内外面に灰釉を施し, 浅黄色を呈する。内面には卸目が確認できる。卸目は磨減していない。底部は回転糸切りである。胎土は密であり, 灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し, 15世紀前葉のものである。

576~580は珠洲である。576はすり鉢である。口径26.4cmを測る。内面には3.5cm幅に12目の卸目が4条確認できる。胎土は密であり, 淡橙色を呈する。焼成は不良である。珠洲Ⅴ期に属し, 14世紀末~15世紀中葉のものである。SK27・29出土の破片と接合した。577~579は壺Ⅱ種の体部破片である。577は外面には3cmあたり9目の平行叩きを施す。胎土は密であり, 暗赤褐色を呈する。焼成は良好である。珠

洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。578は外面には3cmあたり9目の平行叩きを施す。内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。579は外面には3cmあたり8目の平行叩きを施す。内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。580は甕の体部破片である。外面には平行叩きを施す。胎土は密であり、暗赤褐色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

581は鉄製刀形刃物である。一部が残存している。長さ3.8cm、身幅2.0cm、厚さ0.4cmを測り、重さ9.8gを量る。

582は鉄製くさびである。下部が欠損している。長さ5.1cm、身幅1.7cmを測り、重さ41.8gを量る。

583は鉄鏃である。基部の一部が残存している。長さ9.7cm、身幅0.4cmを測り、重9.8gを量る。

584～598は鉄釘である。584は長さ6.4cm、身幅0.4cmを測り、重さ4.0gを量る。585は長さ5.3cm、身幅0.4cmを測り、重さ5.0gを量る。586は長さ6.7cm、身幅0.7cmを測り、重さ7.0gを量る。587は長さ5.0cm、身幅0.4cmを測り、重さ3.4gを量る。588は下部が欠損している。長さ6.5cm、身幅0.4cmを測り、重さ3.2gを量る。589は下部が欠損している。長さ4.6cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.4gを量る。590は下部が欠損している。長さ3.4cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.6gを量る。591は下部が欠損している。長さ5.5cm、身幅0.3cmを測り、重さ3.0gを量る。592は二本が付着している。一方は下部が欠損している。長さ3.9cm、身幅0.5cmを測る。もう一方は下部が残存している。長さ2.5cm、身幅0.2cmを測る。あわせて重さ7.0gを量る。593は身部の一部が残存している。長さ2.5cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.2gを量る。594は身部の一部が残存している。長さ1.9cm、身幅0.5cmを測り、重さ2.4gを量る。595は下部が残存している。長さ4.7cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.6gを量る。596は下部が残存している。長さ4.8cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.0gを量る。597は下部が残存している。長さ3.2cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.8gを量る。598は下部が残存している。長さ2.2cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.0gを量る。

SK79出土品 (図版138の599～612, 図版164の4・5): 599は土器皿である。胎土は密であり、淡黄色を呈する。焼成は良好である。

600は青磁椀である。口径15cmを測る。内外面にオリブ灰色の釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。龍泉窯系D-II類に属する。

601・602は珠洲すり鉢である。601は口径32cmを測る。内面には2.2cm幅に6目の卸目が2条確認できる。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。602は体部破片である。内面には卸目が3条確認できる。胎土はやや粗であり、灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲IV～V期に属し、13世紀末～15世紀中葉のものである。

603～610は鉄釘である。603は長さ9.6cm、身幅0.4cmを測り、重さ5.4gを量る。604は長さ4.9cm、身幅0.2cmを測り、重さ1.4gを量る。605は下部が欠損している。長さ5.0cm、身幅0.3cmを測り、重さ3.4gを量る。606は下部が欠損している。長さ3.2cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.8gを量る。607は下部が欠損している。長さ3.6cm、身幅0.2cmを測り、重さ1.8gを量る。608は下部が欠損している。長さ2.3cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.4gを量る。609は身部の一部が残存している。長さ4.7cm、身幅0.2cmを測り、重さ3.8gを量る。610は身部の一部が残存している。長さ2.8cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.4gを量る。

611は流紋岩製砥石である。長さ8.9cm、身幅3.5cmを測り、重さ141.4gを量る。短側面を除く四面全

てが使用されており、砥面がやや鼓状に湾曲している。断面U字状の砥面を1面短辺方向に残す。

612は銭貨である。直径2.4cm、厚さ0.10cm、重さ2.4gを量る。銭名は嘉祐通寶であり、書体は真書である。初鋳年代は1056年であり、北宋代のものである。

SK342出土品(図版139の613~618): 613~614は瀬戸美濃である。613は平椀の体部破片である。内外面に灰釉を施し、明緑灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後I~II期に属し、14世紀後半~15世紀初頭のものである。614は碗形鉢の体部破片である。内外面に灰釉を施し、明緑灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後I~II期に属し、14世紀後半~15世紀初頭のものである。

615は青白磁合子の身の体部破片である。外面は膨らみをもつ花弁状の文様を施す。内外面に釉を施し、明青灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。

616~618は鉄釘である。616は長さ5.6cm、身幅0.4cmを測り、重さ5.8gを量る。617は身部の一部が残存している。長さ4.8cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.8gを量る。618は身部の一部のみ残存している。長さ2.8cm、身幅0.7cmを測り、重さ2.4gを量る。

SP0074出土品(図版139の619、図版172の2): 619は越前甕である。口径47cmを測る。胎土はやや密であり、にぶい赤褐色を呈する。焼成は良好である。越前II期に属し、13世紀後半のものである。

SP0082出土品(図版139の620、図版172の2): 620は瀬戸美濃天目茶碗の体部破片である。内外面に鉄釉を施し、黒色を呈する。外面は一部露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後I~II期に属し、14世紀後半~15世紀初頭のものである。

SP0114出土品(図版139の621、図版172の2): 621は鉄釘である。身部の一部のみ残存している。長さ1.6cm、身幅0.3cmを測り、重さ0.6gを量る。

SP0171出土品(図版139の622、図版172の2): 622は鉄釘である。身部の一部のみ残存している。長さ1.8cm、身幅0.2cmを測り、重さ0.8gを量る。

SP0191出土品(図版139の623・624、図版172の2): 623・624は不明鉄製品である。623は最大長3.3cm、最大幅0.1cmを測り、重さ2.4gを量る。624は最大長1.8cm、最大幅0.3cmを測り、重さ1.0gを量る。

SP0195出土品(図版139の625、図版172の2): 625は不明鉄製品である。最大長6.5cm、最大幅0.3cmを測り、重さ4.4gを量る。

SP0220出土品(図版139の626、図版172の2): 626は鉄釘である。身部の一部のみ残存している。長さ4.8cm、身幅0.3cmを測り、重さ6.8gを量る。

SP0228出土品(図版139の627、図版172の2): 627は鉄釘である。下部が欠損している。長さ4.3cm、身幅0.4cmを測り、重さ4.0gを量る。

SP0236出土品(図版139の628、図版172の2): 628は瀬戸美濃平椀の体部破片である。内外面に灰オリープ色の灰釉を施す。外面は一部露胎である。胎土は密であり、浅黄~灰白色を呈する。古瀬戸後I~II期に属し、14世紀後半~15世紀初頭のものである。

SP0344出土品(図版139の629、図版172の2): 629は鉄釘である。下部が欠損している。長さ1.7cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.0gを量る。

SP0355出土品(図版139の630、図版172の2): 630は銅製片口の注口部である。長さ3.6cm、身幅5.5cm、厚さ0.2cmを測り、重さ18.8gを量る。鑄造製品である。

SP0356出土品(図版139の631, 図版172の2): 631は珠洲壺T種の体部破片である。外面には3cmあたり13目の平行叩きを施す。胎土は密であり、青灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。

SP0571出土品(図版139の632, 図版172の2): 632は銅製鏡の鈕部である。最大長3.1, 最大幅3.6cm, 重さ13.2gを量る。

SP0587出土品(図版139の633・634, 図版171の1): 633・634は珠洲のすり鉢である。633は口径28cmを測る。胎土はやや密であり灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。634は口径28cmを測る。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。

SP0665出土品(図版139の635, 図版170の1): 635は石製品である。最大長13.5cm, 最大幅8.7cm, 最大高7.2cmを測り, 重さ1434gを量る。石材は変成岩の可能性が高い。

SP0692出土品(図版139の636, 図版170の1): 636は珠洲壺の体部破片である。外面には3cmあたり7目の平行叩きを施す。胎土は密であり、灰黄色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。

SP0725出土品(図版139の637, 図版170の1): 637は不明銅製品である。一部が残存している。長さ6.1cm, 身幅4.1cm, 厚さ0.1cmを測り, 重さ11.2gを量る。

SP0742出土品(図版140の638, 図版170の1): 638は瀬戸美濃縁釉小皿である。口径12cmを測る。口縁部に灰白~灰オリーブ色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前葉のものである。

SP0751出土品(図版140の639, 図版171の3): 639は瀬戸美濃縁釉深皿である。口径30cm, 底径19cm, 器高7cmを測る。内外面に浅黄色の灰釉を施す。底面は露胎である。胎土は密であり、浅黄色を呈する。古瀬戸中Ⅳ期に属し、14世紀中葉のものである。

SP0762出土品(図版140の640, 図版170の2): 640は珠洲すり鉢である。口径25cmを測る。胎土はやや粗であり、にぶい黄橙色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。

SP0770出土品(図版140の641, 図版170の2): 641は珠洲壺の体部破片である。外面には3cmあたり7目の平行叩きを施す。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末~15世紀中葉のものである。

SP0773出土品(図版140の642, 図版170の2): 642は珠洲すり鉢の体部破片である。内面には2.1cm幅に6目の卸目が4条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅳ~Ⅴ期に属し、13世紀末~15世紀中葉のものである。

SP0817出土品(図版140の643, 図版170の2): 643は鉄製刀形刃物の刃部片である。長さ12.1cm, 身幅1.4cm, 厚さ0.45cmを測り, 重さ31.4gを量る。

SP0854出土品(図版140の644, 図版170の2): 644は珠洲すり鉢である。口径32cmを測る。胎土はやや密であり、黄灰色を呈する。焼成は不良である。珠洲Ⅳ-Ⅲ期に属し、14世紀後葉のものである。

SP0920出土品(図版140の645, 図版159の6): 645は瓦器火鉢である。口径32cmを測る。口縁部付近と胴部上半に2条の突帯をもち、その間に連続スタンプ文を施す。また格座間状の窓をもつ。内面を指押

さえる。胎土はやや粗であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。

SP0927出土品(図版140の646, 図版171の2): 646は壺器系壺変類の体部破片である。内面全面に漆が附着している。胎土は密であり、にぶい褐色を呈する。焼成は良好である。

SP0943出土品(図版140の647, 図版171の2): 647は鉄釘である。下部が欠損している。長さ2.5cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ4.4gを量る。

SP0948出土品(図版140の648, 図版171の2): 648は珠洲すり鉢の底部である。底径34.8cmを測る。胎土はやや粗であり, 灰色を呈する。焼成は不良である。

SP0949出土品(図版140の649, 図版171の2): 649は肥前系陶器すり鉢の底部である。底径13cmを測る。胎土は密であり, 暗赤色を呈する。17世紀後葉のものである。

SP1015出土品(図版141の650, 図版171の2): 650は珠洲壺Ⅱ種の体部破片である。外面には3cmあたり10目の平行叩きを施す。胎土はやや密であり, 青灰色を呈する。珠洲Ⅴ期に属し, 14世紀末~15世紀中葉のものである。

SP1025出土品(図版141の651~653, 図版171の2): 651~653は鉄釘である。651は身部の一部が残存している。長さ2.1cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ2.2gを量る。652は下部が残存している。長さ2.5cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.6gを量る。653は身部の一部が残存している。長さ1.9cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.0gを量る。

SP1026出土品(図版141の654, 図版171の2): 654は中国製天目茶碗の体部破片である。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。胎土は密であり, 灰白色を呈する。焼成は良好である。

SP1028出土品(図版141の655, 図版171の2): 655は不明鉄製品である。最大長6.4cm, 最大幅2.8cmを測り, 重さ35.4gを量る。

SP1033出土品(図版141の656, 図版171の2): 656は珠洲すり鉢の体部破片である。内面には卸目が確認できる。胎土はやや粗であり, 灰白色を呈する。焼成は不良である。珠洲Ⅳ~Ⅴ期に属し, 13世紀末~15世紀中葉のものである。

SP1037出土品(図版141の657, 図版171の2): 657は鉄釘である。下部が残存している。長さ5.6cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ3.2gを量る。

SP1048出土品(図版141の658, 図版171の2): 658は鉄釘である。身部の一部が残存している。長さ4.8cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ3.6gを量る。

SP1090出土品(図版141の659, 図版171の2): 659は鉄釘である。下部が残存している。長さ1.4cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ0.4gを量る。

SP1072出土品(図版141の660, 図版171の2): 660は不明鉄製品である。2個の鉄製品が錆着している。大きい方は最大長5.4cm, 最大幅0.5cmを測り, 小さい方は最大長2.6cm, 最大幅0.3cmを測る。重さはあわせて12.6gを量る。

SP1124出土品(図版141の661, 図版171の2): 661は土器皿の体部破片である。外面を横撫でする。胎土は密であり, 橙褐色を呈する。

SP1132出土品(図版141の662~664, 図版171の1): 662~664は珠洲壺の体部破片である。662は外面に3cmあたり8目の平行叩きを施す。胎土はやや密であり, 褐灰~青灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し, 14世紀末~15世紀中葉のものである。663は外面に3cmあたり9目の平行叩きを施す。

胎土は密であり、褐灰～灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。664は外面には3cmあたり9目の平行叩きを施し、内面には当て具痕が確認できる。胎土は密であり、灰～褐灰色を呈する。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

SP1142出土品(図版141の665, 図版171の1): 665は珠洲壺T種の体部破片である。外面には3cmあたり12目の平行叩きを施す。胎土は密であり、青灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期に属し、13世紀後葉～14世紀後葉のものである。

SP1148出土品(図版141の666, 図版171の1): 666は瓦器火鉢の底部である。底径31.8cmを測る。内面は二次的に被熱している。補修の際用いたであろう漆が断面に付着している。胎土はやや粗であり、灰白色を呈する。焼成は不良である。

SX01出土品(図版142の667・668, 図版171の4): 667・668は珠洲壺の体部破片である。667は外面には3cmあたり6目の平行叩きを施す。胎土はやや密であり、外面は灰黄褐色、内面はふい黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。珠洲V期に属し、14世紀末から15世紀のものである。668は外面には3cmあたり7目の平行叩きを施す。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀のものである。

なおその他に図示しなかった遺物として炭化物が出土している。

SX03出土品(図版142の669～676, 図版171の4): 669～670は土器皿の底部である。669は底径8.0cmを測る。底面は回転糸切りである。胎土は密であり、淡黄色を呈する。焼成は良好である。670は底径8.0cmを測る。底面は回転糸切りである。胎土は密であり、淡黄色を呈する。焼成は良好である。

671・672は瀬戸美濃平碗である。671は体部破片である。内面と外面上半に灰釉を施す。内面に目跡を一つ残す。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。後I期または後II期に属し、14世紀後半から15世紀初頭のものである。672は体部破片である。内面と外面上半に灰釉を施すが、二次的に被熱し、淡黄色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。後I期または後II期に属し、14世紀後半から15世紀初頭のものである。

673～676は鉄釘である。673は長さ3.4cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.2gを量る。674は下部が欠損している。長さ5.0cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ2.4gを量る。675は身部の一部が残存している。長さ2.0cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ1.6gを量る。676は下部が残存している。長さ4.8cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.2gを量る。

なおその他に図示しなかった遺物として炭化物が出土している。

SX04出土品(図版142の677～686, 図版143の687～705, 図版144の706～719, 図版160の1・2, 図版162の1, 図版171の4, 図版178の6): 677は土器皿である。小片のため口径は復原できなかった。内外面に轆轤撫でを施す。胎土は密であり、淡黄色を呈する。焼成は良好である。

678・685は青磁碗である。678は体部破片である。内外面は無文であり、オリーブ灰色の釉を施す。胎土は密であり、灰褐色を呈する。龍泉窯系D類に属する。685は口径17.4cm, 器高6.6cm, 底径5.7cmを測る。口縁部は直口である。内外面は無文であり、オリーブ灰色の釉を施すが、内面と高台に輪状に釉剥きを施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。龍泉窯系E類に属する。

679～684は瀬戸美濃である。679は平碗である。口径15.0cm, 器高6.5cm, 底径5.0cmを測る。内面と外面上半に灰釉を施すが、二次的に被熱し、明綠色を呈する。内面に目跡を3つ残す。外面下半は露胎で

ある。胎土は密であり、灰白色を呈する。後Ⅱ期に属し、14世紀後葉から15世紀初頭のものである。680は椀形鉢の体部破片である。内面と外面上半に灰釉を施す。外面下半は露胎であり、右回転の寛削りを施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。後Ⅰ期または後Ⅱ期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。681は天目茶碗である。口径は13.0cmを測る。内面と外面上半に鉄釉を施すが、二次的に被熱し、暗青灰色を呈する。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。後Ⅰ期に属し、14世紀後葉のものである。682は天目茶碗の底部である。高台は削り出しており、径4.0cmを測る。内面に鉄釉を施す。外面は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。後Ⅰ期に属し、14世紀後葉のものである。683は卸皿である。底径は8.0cmを測る。内面の卸目は摩滅していない。内面と外面上半に灰釉を施すが、二次的に被熱し、明緑色を呈する。外面下半は露胎であり、底部は回転糸切りである。胎土は密であり、灰白色を呈する。中期に属し、13世紀後葉～14世紀中葉のものである。684は仏花瓶である。口径は6.0cmを測る。内外面に灰釉を施すが、二次的に被熱し、浅黄色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。中期に属し、13世紀後葉から14世紀中葉のものである。

686～690は珠洲である。686はすり鉢である。口径34.0cm、器高14.0cm、底径16.8cmを測る。外面下半に指圧痕を残す。内面には3.1cm幅に10目の卸目が確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。Ⅳ—Ⅱ期に属し、14世紀前葉～14世紀中葉のものである。SD01出土の破片と接合した。687はすり鉢の体部破片である。内面には卸目が確認できるが、摩滅している。胎土はやや粗であり、灰色を呈する。焼成は良好である。年代は不明である。688はすり鉢の体部破片である。内面には3.1cm幅に14目の卸目が4条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅳ期または珠洲Ⅴ期に属し、13世紀末～15世紀中葉のものである。689は壺Ⅰ種である。口径17.0cm、器高推定40.0cm、底径10.3cmを測る。口縁部外面にネズミが齧ったと考えることのできる剝離痕、内面全体に剝離痕が認められる。外面には3cmあたり9目の平行叩きを施す。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。SX16・17出土の破片と接合した。690は壺の体部破片である。外面には3cmあたり9目の平行叩きを施す。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

691～693は壺器系壺變類の体部破片である。692は内面に漆が付着している。胎土はやや密であり、にぶい赤褐色を呈する。焼成は良好である。693は内面全体に漆が付着している。胎土はやや密であり、にぶい赤褐色を呈する。焼成は良好である。694は内面全体に漆が付着している。胎土はやや密であり、にぶい橙色を呈する。焼成は良好である。

694は流紋岩製の砥石である。残存長10.5cm、残存幅6.6cm、厚さ7.2cmを測り、重さ459.0gを量る。被熱しており、一部に火ハゼと煤を観察できる。3面が使用されており、擦痕を観察できる。

695は鉄製の刀形刃物の基部である。残存長5.6cm、残存幅1.8cmを測り、重さ13.4gを量る。

696は鏡である。爪部の一方が欠損している。残存長6.4cm、最大幅1.1cmを測り、重さ18.0gを量る。

697～714は鉄釘である。697は長さ5.7cm、身幅0.5cmを測り、重さ5.2gを量る。698は長さ6.4cm、身幅0.5cmを測り、重さ2.6gを量る。699は長さ4.5cm、身幅0.4cmを測り、重さ3.8gを量る。700は長さ3.0cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.4gを量る。701は長さ4.5cm、身幅0.5cmを測り、重さ2.6gを量る。702は復原長4.5cm、身幅0.2cmを測り、重さ3.2gを量る。703は下部が欠損している。長さ2.8cm、身幅0.5cmを測り、重さ2.2gを量る。704は下部が欠損している。長さ2.3cm、身幅0.5cmを測り、重さ1.2gを量る。

る。705は下部が欠損している。長さ4.7cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ3.0gを量る。706は下部が欠損している。長さ2.4cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.8gを量る。707は下部が欠損している。長さ1.6cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.2gを量る。708は下部が欠損している。長さ2.0cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.2gを量る。709は身部の一部が残存している。長さ3.5cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.2gを量る。710は身部の一部が残存している。長さ3.1cm, 身幅0.7cmを測り, 重さ2.4gを量る。711は頭部と下部を欠損している。長さ1.8cm, 身幅0.7cmを測り, 重さ1.8gを量る。712は下部が残存している。長さ2.7cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.6gを量る。713は下部が残存している。長さ5.5cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.0gを量る。714は下部が残存している。長さ3.5cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.0gを量る。

715~718は不明鉄製品である。715は最大長2.1cm, 最大幅0.9cmを測り, 重さ2.0gを量る。716は最大長1.5cm, 最大幅0.3cmを測り, 重さ0.2gを量る。717は残存長0.7cm, 最大幅0.9cmを測り, 重さ0.2gを量る。718は最大長17.0cm, 最大幅12.6cm, 厚さを測り, 重さ441.0gを量る。

719は銭貨である。直径2.3cm, 厚さ0.13cmを測り, 重さ0.6gを量る。上部3分の2が欠損している。銭名は□元□どおりであり, 書体は真書である。初鑄年代は不明である。

SX05出土品(図版144の720~757, 図版171の2・3): 720は土器皿である。口径は8.4cmを測る。二次的に被熱している。胎土は密であり, 淡黄橙色を呈する。焼成は良好である。

721~725は瀬戸美濃である。721~724は天目茶碗である。口径は12.2cmを測る。内外面に鉄釉を施す。胎土は密であり, 灰白色を呈する。後II期に属し, 14世紀後葉~15世紀初頭のものである。722は体部破片である。内面と外面上半に鉄釉を施し, 外面下半にうすく黒褐色の釉を施す。胎土は密であり, 灰白色を呈する。後II期に属し, 14世紀後葉~15世紀初頭のものである。723は内面と外面上半に鉄釉を施す。外面下半は露胎である。胎土は密であり, 灰白色を呈する。後II期に属し, 14世紀後葉~15世紀初頭のものである。724は底部である。高台は削り出しており, 径4.0cmを測る。内面に鉄釉を施し, 高台外面にうすく釉を施す。胎土は密であり, 灰白色を呈する。後II期に属し, 14世紀後葉~15世紀初頭のものである。725は梅瓶である。外面に灰釉を施すが, 二次的に被熱し, 明緑灰色を呈する。肩部と胴部外面には, それぞれ1.0cm幅に5本の沈線がめぐる。内面には接合痕と指圧痕が確認できる。胎土は密であり, 灰白色を呈する。前III期に属すると思われる, 13世紀中葉のもの可能性を有する。

726は壺器系壺甕類の体部破片である。内面に漆が付着している。胎土はやや密であり, にぶい赤褐色を呈する。焼成は良好である。

727~748は鉄釘である。727は長さ6.5cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ3.0gを量る。728は長さ4.5cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ6.6gを量る。729は下部が欠損している。長さ4.6cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ3.0gを量る。730は下部が欠損している。長さ5.0cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.8gを量る。731は下部が欠損している。長さ3.5cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ3.8gを量る。732は下部が欠損している。長さ2.3cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ7.8gを量る。733は下部が欠損している。長さ2.1cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.2gを量る。734は身部の一部が残存している。長さ3.0cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.6gを量る。735は身部の一部が残存している。長さ2.4cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.4gを量る。736は身部の一部が残存している。長さ1.8cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.8gを量る。737は身部の一部が残存している。長さ4.8cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ2.0gを量る。738は身部の一部が残存している。長さ4.0cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ4.4gを量る。739は身部の一部が残存している。長さ3.0cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.2gを量

る。740は身部の一部が残存している。長さ2.2cm, 身幅0.8cmを測り, 重さ3.0gを量る。741は身部の一部が残存している。長さ2.2cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ0.8gを量る。742は身部の一部が残存している。長さ3.0cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.4gを量る。743は身部の一部が残存している。長さ1.6cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.4gを量る。744は身部の一部が残存している。長さ2.0cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.2gを量る。745は身部の一部が残存している。長さ1.6cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ0.4gを量る。746は身部の一部が残存している。長さ1.1cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ0.4gを量る。747は下部が残存している。長さ3.9cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ2.4gを量る。748は下部が残存している。長さ7.5cm, 身幅0.7cmを測り, 重さ8.6gを量る。

749・750は不明鉄製品である。749は最大長4.0cm, 最大幅3.0cmを測り, 重さ26.6gを量る。750は最大長4.8cm, 最大幅5.2cmを測り, 重さ22.4gを量る。

751～757は銭貨である。751は直径2.2cm, 厚さ0.1cmを測り, 重さ1.8gを量る。銭名は祥符元寶であり, 書体は行書である。初鑄年代は1009年であり, 北宋代のものである。752は銭貨である。直径2.4cm, 厚さ0.12cmを測り, 重さ3.0gを量る。銭名は皇宋通寶であり, 書体は篆書である。初鑄年代は1038年であり, 北宋代のものである。753は銭貨である。直径2.3cm, 厚さ0.13cmを測り, 重さ3.2gを量る。銭名は熙寧元寶であり, 書体は真書である。初鑄年代は1068年であり, 北宋代のものである。754は銭貨である。厚さ0.09cmを測り, 重さ1.6gを量る。外周部が欠損する。摩滅しており, 銭名は判読できない。756は銭貨である。直径2.4cm, 厚さ0.09cmを測り, 重さ0.4gを量る。下部3分の2が欠損している。摩滅しており, 銭名は判読できない。757は銭貨である。厚さ0.09cmを測り, 重さ0.4gを量る。摩滅しており, 銭名は判読できない。

その他, 細片のため図示できなかったものとして, 銭貨4点が出土している。

SX06出土品 (図版145の758～784, 図版173の1): 758・759は珠洲すり鉢である。758は口径25.0cmを測る。口縁端部に波状文を施す。内面には2.6cm幅に8目の卸目が5条確認できる。胎土は密であり, 青灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し, 14世紀末～15世紀中葉のものである。SE16出土の珠洲すり鉢と接合した。759は底径8.2cmを測る。内面には3.1cm幅に14目の卸目が5条確認できる。内面に煤が付着している。胎土は密であり, 灰黄色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期または珠洲V期に属し, 13世紀末～15世紀中葉のものである。

760～783は鉄釘である。760は下部が欠損している。長さ2.2cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ2.0gを量る。761は下部が欠損している。長さ3.4cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.4gを量る。762は下部が欠損している。長さ1.8cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.4gを量る。763は下部が欠損している。長さ1.8cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.8gを量る。764は頭部上端と下部が欠損している。長さ2.3cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.2gを量る。765は身部の一部が残存している。長さ4.0cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ2.4gを量る。766は身部の一部が残存している。長さ6.9cm, 身幅0.8cmを測り, 重さ7.0gを量る。767は身部の一部が残存している。長さ4.7cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ3.2gを量る。768は身部の一部が残存している。長さ3.4cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ4.2gを量る。769は身部の一部が残存している。長さ3.6cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.6gを量る。770は身部の一部が残存している。長さ3.5cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ2.0gを量る。771は身部の一部が残存している。長さ3.4cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.8gを量る。772は身部の一部が残存している。長さ3.1cm, 身幅0.7cmを測り, 重さ2.8gを量る。773は身部の一部が残存して

いる。長さ2.0cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.4gを量る。774は下部が残存している。長さ2.1cm, 身幅0.2cmを測り, 重さ0.2gを量る。775は下部が残存している。長さ3.5cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.8gを量る。776は身部の一部が残存している。長さ4.2cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ2.2gを量る。777は身部の一部が残存している。長さ3.9cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ2.2gを量る。778は身部の一部が残存している。長さ3.0cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.6gを量る。779は身部の一部が残存している。長さ3.4cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ1.2gを量る。780は身部の一部が残存している。長さ2.4cm, 身幅0.3cmを測り, 重さ0.6gを量る。781は身部の一部が残存している。長さ2.6cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.0gを量る。782は身部の一部が残存している。長さ1.9cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ0.6gを量る。783は頭部と身部が欠損している。推定長3.8cm, 身幅0.4cmを測り, 重さ1.2gを量る。

784は鉄製刀形刃物の身部である。残存長2.4cm, 身幅2.2cmを測り, 重さ3.8gを量る。

なおその他に図示しなかった遺物として炭化物多数と種子が出土している。

SX07出土品 (図版145の785~793, 図版173の2・3): 785・786は白磁陶である。785は内面と断面が二次的に被熱し, 明オリープ灰色を呈する。胎土は密であり, 灰白色を呈する。C群に属する。786は口径18.0cmを測る。内外面に明青灰色の釉を施す。胎土はやや粗であり, 灰白色を呈する。C群に属する。

787~791は珠洲すり鉢である。787は体部破片である。内面には卸目が2条確認できる。胎土はやや粗であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期または珠洲V期に属し, 13世紀末~15世紀中葉のものである。788は口径25.4cmを測る。外面が二次的に被熱し, 一部に煤が付着する。内面には6条の卸目が確認できるが, 使用により摩滅している。胎土は密であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し, 14世紀末~15世紀中葉のものである。789は口径29.8cmを測る。内面には3.7cm幅に9目の卸目が2条確認できる。二次的に被熱し, 煤が付着する。胎土はやや粗であり, におい橙色を呈する。焼成は不良である。珠洲V期に属し, 14世紀末~15世紀中葉のものである。790は口径30.8cmを測る。内面には卸目が2条確認できる。胎土は密であり, 灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し, 14世紀末~15世紀中葉のものである。791は底部である。底径は12.0cmを測る。内面は使用により摩滅している。二次的に被熱し, 外面下半に煤が付着する。胎土はやや粗であり, 灰白色を呈する。焼成は不良である。卸目が摩滅し時期は不明である。

792・793は鉄釘である。792は下部が欠損している。長さ3.2cm, 身幅0.6cmを測り, 重さ3.8gを量る。793は身部の一部が残存している。長さ1.8cm, 身幅0.5cmを測り, 重さ1.0gを量る。

SX08出土品 (図版146の794~804, 図版173の4): 794~800は瀬戸美濃平焼である。794は内面と外面上半に灰釉を施すが, 二次的に被熱し, オリープ黄色を呈する。外面下半は露胎であり, 煤が付着する。胎土は密であり, 灰黄色を呈する。後III期またはIV期(古)に属し, 15世紀前葉~中葉のものである。795は口径14.2cmを測る。内外面に灰釉を施すが, 二次的に被熱し, 灰オリープ色を呈する。胎土は密であり, 灰白色を呈する。後I期に属し, 14世紀後半のものである。796は口径16.2cmを測る。内外面に灰釉を施すが, 二次的に被熱し, 大部分が剝離している。胎土はやや密であり, 灰白色を呈する。後II期に属し, 14世紀後葉~15世紀初頭のものである。797は口径16.8cmを測る。内外面に灰釉を施すが, 二次的に被熱し, 全面にわたって剝離している。胎土はやや密であり, 灰白色を呈する。後II期に属し, 14世紀後葉~15世紀初頭のものである。798は内面と外面上半に灰釉を施すが, 二次的に被熱し, 浅黄色を呈する。外面下半は露胎である。胎土はやや密であり, 灰白色を呈する。後I期またはII期に属し, 14

世紀後半～15世紀初頭のものである。799は内面に目跡を一つ残す。内面と外面上半に灰釉を施すが、二次的に被熱し、浅黄色を呈する。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。後I期またはII期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。800は内面に目跡を一つ残す。内面に灰釉を施すが、二次的に被熱し、浅黄色を呈する。外面は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。後I期またはII期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。

801・802は青磁碗である。801は底径4.5cmを測る。内外面は無文であり、釉を施すが、底部内面には釉を施さず、畳付けを釉剥ぎする。二次的に被熱し、明緑灰色を呈する。胎土はやや粗であり、灰白色を呈する。龍泉窯系D—I類に属する。802は内外面無文であり、オリーブ灰色の釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。龍泉窯系D—I類に属すると思われる。

803は信楽壺甕類である。外面に自然釉がかかる。二次的に被熱し、煤が付着する。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。

804は不明鉄製品である。残存長3.5cm、残存幅7.5cmを測り、重さ43.0gを量る。

なおSK27出土の破片と接合する珠洲甕1点が出土している(図版133の385)。また図示しなかった遺物として、炭化物・骨片が出土している。

SX09出土品(図版146の805～813、図版173の5)：805は青磁碗である。口径は14.0cmを測る。口縁部は端反りである。内外面は無文である。釉を施すが二次的に被熱し、明オリーブ灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。龍泉窯系D—II類に属する。

806は瀬戸美濃折縁深皿である。口径は31.2cmを測る。内外面に灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。後II期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。

807～809は珠洲すり鉢である。807は口径35.6cmを測る。口縁端部に1条、内面上部に2条の波状文を施す。内面には卸目が1条確認できる。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末から15世紀中葉のものである。808は底径12.6cmを測る。二次的に被熱する。胎土は密であり、青灰色を呈する。珠洲V期に属し、14世紀末から15世紀中葉のものである。SX13、SP1561出土の破片と接合した。809は体部破片である。内面には卸目が2条確認できる。胎土はやや密であり、灰色を呈する。珠洲IV期またはV期に属し、13世紀末～15世紀中葉のものである。焼成はやや良好である。

810～813は鉄釘である。810は下部が欠損している。長さ3.5cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.6gを量る。811は下部が欠損している。長さ3.7cm、身幅0.4cmを測り、重さ3.6gを量る。812は下部が欠損している。長さ4.4cm、身幅0.4cmを測り、重さ3.2gを量る。813は身部の一部が残存している。長さ2.4cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.2gを量る。

なおSE08出土の破片と接合する瀬戸美濃梅瓶1点が出土している(図版125の121)。その他図示しなかったものとして炭化物が出土している。

SX10出土品(図版146の814～817、図版173の3)：814～817は鉄釘である。814は長さ5.1cm、身幅0.4cmを測り、重さ6.2gを量る。815は身部の一部が残存している。長さ8.2cm、身幅0.6cmを測り、重さ24.0gを量る。816は身部の一部が残存している。長さ3.4cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.4gを量る。817は身部の一部が残存している。長さ1.4cm、身幅0.3cmを測り、重さ0.4gを量る。

SX11出土品(図版146の818、図版173の3)：818は珠洲甕の体部破片である。外面には3cmあたり9目

の平行叩きを施す。二次的に被熱する。胎土はやや粗であり、外面は灰色、内面はにぶい橙色を呈する。焼成はやや不良である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

SX12出土品 (図版147の819～834, 図版159の2・3, 図版160の3, 図版173の3, 図版174の1) : 819は土唾である。長4.0cm, 胴回り11.6cm, 幅3.7cmを測り、重さ55.6gを量る。外面に指圧痕を残す。胎土は密であり、にぶい黄橙色を呈する。焼成はやや良好である。

820～822は瀬戸美濃である。820は平碗の体部破片である。内面と外面上半に灰釉を施す。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰色を呈する。後I期またはII期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。821は天目茶碗である。口径12.6cm, 器高7.2cm, 底径4.2cmを測る。内面と外面上半に鉄釉を施す。外面下半は露胎であり、篋削りを施す。高台は削り出している。補修の際用いたであろう漆が断面の一部に付着している。胎土は密であり、灰白色を呈する。後II期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。822は緑釉小皿である。口径は11.8cmを測る。内外面の上半に灰釉を施すが、二次的に被熱し、浅黄色を呈する。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。後II期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。

823・824は青磁碗である。823は見込みにも釉を施すが、二次的に被熱し、オリープ灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。龍泉窯系D類に属す可能性を示唆する。824は底部破片である。内外面は無文であり、釉を施すが、見込みが二次的に被熱し、灰オリープ色を呈する。胎土はやや粗であり、灰白色を呈する。龍泉窯系D類に属す可能性を示唆する。

825は白磁碗の体部破片である。二次的に被熱する。胎土は密であり、灰白色を呈する。C群に属する。SK48出土の破片と接合した。

826は青磁稜花盤である。口径は28.0cmを測る。内外面に明緑灰色の釉を施す。内面に蓮弁文を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。

827～829は珠洲すり鉢である。827は口径29.0cmを測る。内面には2.2cm幅に9目の卸目が1条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。IV—3期に属し、14世紀後葉のものである。828は体部破片である。内面には卸目が1条確認できる。二次的に被熱しており、外面に煤が付着する。胎土はやや密であり、にぶい黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。珠洲IV期または珠洲V期に属し、13世紀末～15世紀中葉のものである。829は口径32.0cm, 器高12.7cm, 底径12.3cmを測る。内面には3.0cm幅に9目の卸目が13条確認できるが、内面下半は摩滅している。二次的に被熱し、内外面に輪状に煤が付着している。底部に穿孔らしき痕跡が認められる。胎土はやや密であり、灰色を呈する。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。SX15出土の破片と接合した。

830は不明銅製品である。現存長1.4cm, 現存幅2.8cmを測り、重さ5.0gを量る。

831～834は鉄釘である。831は下部が欠損している。長さ6.6cm, 身幅0.3cmを測り、重さ2.0gを量る。832は下部が欠損している。長さ1.6cm, 身幅0.3cmを測り、重さ1.2gを量る。833は下部が欠損している。長さ3cm, 身幅0.3cmを測り、重さ1.6gを量る。834は身部の一部が残存している。長さ3.9cm, 身幅0.4cmを測り、重さ3.0gを量る。

その他に図示しなかったものとして、骨片多数、炭化物、種子が出土している。

SX13出土品 (図版147の835～856, 図版174の1) : 835は珠洲甕の体部破片である。外面には3cmあたり8目の平行叩きを施す。二次的に被熱する。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠

洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

837は鉄製刀形刃物の基部である。残存長4.1cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.8gを量る。

838は甲冑の小札である。残存長5.1cm、身幅2.3cmを測り、重さ4.6gを量る。穿孔は二行で八孔残存する。

839～852は鉄釘である。839は長さ5.2cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.8gを量る。840は下部が欠損している。長さ4.2cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.6gを量る。841は下部が欠損している。長さ3.2cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.4gを量る。842は長さ3.5cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.8gを量る。843は長さ3.9cm、身幅0.4cmを測り、重さ1.6gを量る。844は下部が欠損している。長さ3.6cm、身幅0.2cmを測り、重さ1.4gを量る。845は下部が欠損している。長さ3.1cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.4gを量る。846は下部が欠損している。長さ2.4cm、身幅0.2cmを測り、重さ1.0gを量る。847は下部が残存している。長さ3.8cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.2gを量る。848は身部の一部が残存している。長さ3.5cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.6gを量る。849は下部が残存している。長さ6.4cm、身幅0.5cmを測り、重さ5.4gを量る。中央付近に鉄製品が銕着している。850は下部が残存している。長さ9.4cm、身幅0.3cmを測り、重さ9.2gを量る。851は身部の一部が残存している。長さ2.8cm、身幅0.3cmを測り、重さ0.6gを量る。852は身部の一部が残存している。長さ2.6cm、身幅0.4cmを測り、重さ2.4gを量る。853は身部の一部が残存している。長さ1.6cm、身幅0.4cmを測り、重さ0.6gを量る。

836・854～856は不明鉄製品である。836は残存長1.0cm、残存幅1.2cmを測り、重さ0.4gを量る。854は残存長3.1cm、残存幅1.7cmを測り、重さ11.6gを量る。855は残存長2.9cm、身幅2.0cmを測り、重さ2.2gを量る。板状であるが上部に空洞が確認できる。856は残存長2.1cm、身幅1.1cmを測り、重さ1.2gを量る。

なおSX09出土の破片と接合する珠洲すり鉢1点が出土している(図版146の808)。その他に図示しなかったものとして、炭化物和骨片が出土している。

SX14出土品(図版148の857～860、図版174の2)：857は瀬戸美濃平碗である。口径は16.8cmを測る。内外面に灰釉を施す。胎土は密であり、淡黄色を呈する。後II期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。

858は中国製天目茶碗の体部破片である。内面と外面上半に鉄釉二重がけを施すが、二次的に被熱し、黒色を呈する。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰黄色を呈する。

859・860は鉄釘である。859は長さ4.5cm、身幅0.5cmを測り、重さ5.0gを量る。860は鉄釘である。下部が欠損している。残存長3.2cm、身幅0.2cmを測り、重さ1.8gを量る。

その他に図示しなかったものとして、炭化物和骨片が出土している。

SX15出土品(図版148の861・862、図版174の2)：861は鉄釘である。下部が欠損している。長さ3.6cm、身幅0.5cmを測り、重さ4.2gを量る。

862は銭貨である。直径2.4cm、厚さ0.1cmを測り、重さ3.2gを量る。銭名は嘉祐元寶であり、書体は真書である。初鑄年代は1056年であり、北宋代のものである。

なおSX12出土の破片と接合する珠洲すり鉢1点が出土している(図版147の829)。その他に図示しなかったものとして、炭化物が出土している。

SX16出土品(図版148の863、図版174の2)：863は鉄釘である。下部が欠損している。長さ2.1cm、身

幅0.6cmを測り、重さ1.4gを量る。

なおSX04出土の破片と接合する珠洲壺1点が出土している（図版130の689）。

SX17出土品（図版148の864～872、図版174の2）：864は瀬戸美濃仏花瓶である。口径は7.0cmを測る。内外面に灰釉を施すが二次的に被熱し、浅黄色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。中期に属し、13世紀後葉～14世紀中葉のものである。

865は不明鉄製品である。長さ3.3cm、身幅2.9cmを測り、重さ6.8gを量る。

866～872は鉄釘である。866は長さ8.3cm、身幅0.4cmを測り、重さ9.2gを量る。867は下部が欠損している。長さ5.7cm、身幅0.3cmを測り、重さ3.4gを量る。868は下部が欠損している。長さ4.6cm、身幅0.3cmを測り、重さ2.8gを量る。869は下部が欠損している。長さ3.3cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.8gを量る。870は下部が欠損している。長さ3.6cm、身幅0.2cmを測り、重さ2.6gを量る。871は下部が欠損している。長さ2.3cm、身幅0.3cmを測り、重さ1.4gを量る。872は鉄釘である。下部が残存している。長さ5.0cm、身幅2.5cmを測り、重さ3.4gを量る。

なおSX04出土の破片と接合する珠洲壺1点が出土している（図版130の689）。

SX20出土品（図版148の873・874、図版174の2）：873・874は珠洲すり鉢である。873は口径30.0cmを測る。内面に煤が付着する。胎土は密であり、暗灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。874は口径35.0cmを測る。内面には御目が1条確認できる。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。

SX21出土品（図版149の875～882、図版174の3、図版178の4・5）：875・876は瓦器火鉢である。875は体部破片である。2条の突帯をもち、その間に連続スタンプ文を施す。外面は灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。876は体部破片である。突帯を1条残す。外面は灰色を呈する。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。

877は鉄製鉈である。残存長21.4cm、刃部残存長11.2cm、刃部幅3.8cm、刃部厚0.9cm、茎部長9.6cm、茎部幅2.1cm、柄部残存長9.7cm、柄部最大幅4.1cmを測り、重さ531.8gを量る。柄は木製の2枚の板であり、刃部を挟み込んで目釘と鉄環で固定する。刃部は刃側に反り、先端を欠損している。

878～881は鉄釘である。878は長さ6.3cm、身幅0.6cmを測り、重さ7.8gを量る。879は身部の一部が残存している。長さ3.9cm、身幅0.6cmを測り、重さ2.2gを量る。880は身部の一部が残存している。長さ2.8cm、身幅0.6cmを測り、重さ1.2gを量る。881は下部が欠損している。長さ1.8cm、身幅0.6cmを測り、重さ2.0gを量る。

882は銭貨である。直径2.3cm、厚さ0.13cmを測り、重さ2.8gを量る。銭名は元豐通寶であり、書体は篆書である。初鑄年代は1078年であり、北宋代のものである。

その他に図示しなかったものとして、炭化物多数と骨片が出土している。

(b) 第86・87次調査遺構外出土遺物（図版149の883～892、図版150～158、図版160の4～6、図版161、図版162の2、図版174の6～図版176、図版178の1・3）

古代土器（図版149の883、図版174の6）：883は據文土器である。口径は推定で24cmである。外面に篋状の工具で施されたと推察する平行沈線が確認できる。胎土はやや粗く、黄褐色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

中世土器（図版149の884・885、図版174の6）：884・885は土器皿である。884は口径10cm、器高は2cm、底径は9.6cmを測る。胎土は密であり、黄橙色を呈する。焼成は良好である。1群に属し、13世紀後半～14世紀前半のものである。包含層から出土した。

885の口径は推定で18.2cmである。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。2群に属し、15世紀後半～15世紀末のものである。出土地点は確認できなかった。

土製品（図版149の886・887、図版174の6）：886・887は土錘である。886は長さ4.9cm、胴回り11.6cm、孔径約1.4cmを測り、重さ54.2gを量る。外面に円形の刻印を5個施す。胎土はやや粗く、浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

887は長さ5.6cm、胴回り5.0cm、孔径約0.6cmを測り、重さ12.2gを量る。胎土は密であり、橙色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

瓦器（図版149の888～892、図版150の893～898、図版174の6、図版175の1）：888～898は瓦器火鉢である。888は口径25cmを測る。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

889は口径30cmを測る。胎土は密であり、灰白色を呈する。内外面は黒灰色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

890は口径30cmを測る。口縁部付近に2条の突帯をもち、その間に連続スタンプの花菱文を印文する。全体的に摩滅している。胎土はやや密であり、赤褐色を呈する。焼成は不良である。出土地点は確認できなかった。

891は口径30.4cmを測る。口縁部付近に2条の突帯をもち、その間に連続スタンプの花菱文を施す。口縁部内面は摩滅している。胎土はやや密であり、赤褐色を呈する。焼成は不良である。包含層から出土した。

892は口径39.1cmを測る。口縁部に2条の突帯をもち、その間に菱文を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。内外面は黒色を呈する。焼成は良好である。補修の際用いたであろう漆が断面に付着している。包含層から出土した。

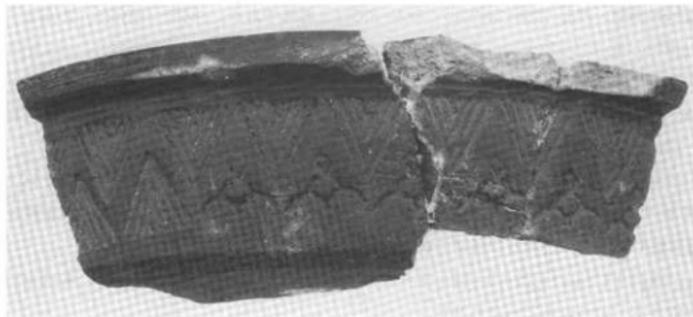
893は口径26cmを測る。口縁部に2条の突帯をもつと推され、その間に花卉文を印文する。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は外面が黒色を、胎土は灰白色を呈する。包含層から出土した。

894は口径36cmを測る。口縁部に2条の突帯をもつと推され、その間に雷文を施す。また内湾する体部に1条の突帯を持ち、上部に唐草文を、下部に菊花文を施す。胎土は密であり、灰色を呈する。内外面は黒色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

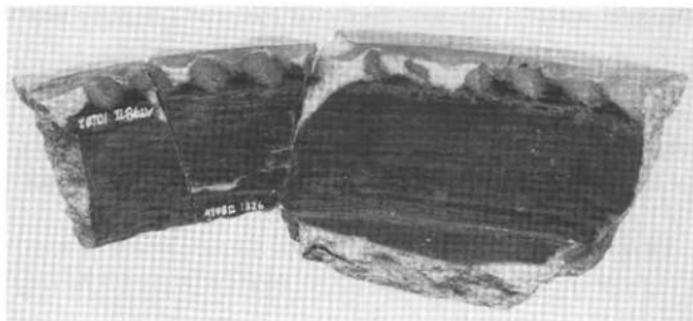
895は口径26.6cm、底径は22.6cmを測る。外面に鋸歯文状の文様を施し、口縁部内面は波状突帯をもつ。また内面には幅1mmの篋磨きを施し、その後赤色漆を塗布する。胎土は密であり、海綿状骨針を含む(第7図)。明黄褐色から灰色を呈する。内外面は灰褐色を呈する。焼成は不良である。包含層から出土した。

896は体部破片である。窓をもつ。外面を篋磨きし、桜花文を施す。胎土はやや密であり、黄橙色を呈する。内外面は黒灰色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

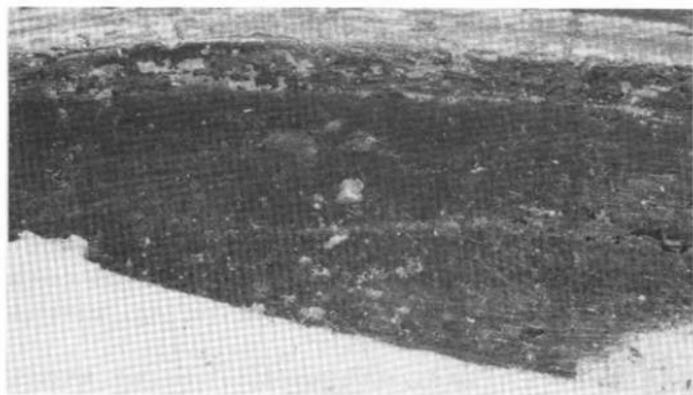
897は体部破片である。口縁部付近に2条の突帯をもち、その間に連続スタンプの雷文を施す。胎土はやや粗く、黄灰色を呈する。内外面は黒灰色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかつ



1. 瓦器火鉢 (895の表面)



2. 瓦器大鉢 (895の裏面)



3. 瓦器大鉢胎土中海綿状骨針拡大写真 (中央上の白い針状のもの)

第7図 海綿状骨針を含む瓦器火鉢

た。

898は体部破片である。外面に2条の突帯をもち、その間に菊花文と花菱文を組み合わせた連続スタンプを施す。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。内外面は灰色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

瀬戸美濃（図版150の899～921、図版151の922～937、図版160の4、図版161の2・3、図版162の2、図版175の2～5）：899～903は平碗である。899は口径16cmを測る。内外面に浅黄色の灰釉を施す。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸中IV期に属し、14世紀中葉のものである。包含層から出土した。

900は口径17cmを測る。内面と外面上半に浅黄色の灰釉を施す。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。胎土は密であり、灰黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後I期に属し、14世紀後半のものである。包含層から出土した。

901は口径20cmを測る。内面と外面上半に明緑灰色の灰釉を施す。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後III期に属し、15世紀前葉のものである。包含層から出土した。

902は底部である。底径は5.4cmを測る。内面と外面上半に明緑灰色の灰釉を施す。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。胎土はやや密であり、淡黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後I期に属し、14世紀後半のものである。包含層から出土した。

903は底部である。高台は削り出しており、径5.2cmを測る。内面と外面上半に明緑灰色の灰釉を施す。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後IV期（古）に属し、15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

904・906は浅碗である。904は口径12cmを測る。内外面上半に褐色から黒褐色の鉄釉を施し、下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後III期に属し、15世紀前葉のものである。出土地点は確認できなかった。906は底部である。高台は削り出しており、径は4cmを測る。内面に明緑灰色の灰釉を施す。外面は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。見込みには目跡を2つ確認できる。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後II期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。出土地点は確認できなかった。

905は縁軸小皿である。口径は12cmを測る。内面と外面に明緑灰色の灰釉を施し、内底は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後II期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。包含層から出土した。

907～909は天目茶碗である。907は口径13cm、器高は6.8cm、底径は4cmを測る。高台は削り出している。内面と外面上半に黒色の鉄釉を施し、外面下半にうすく暗褐色の錆釉を施す。補修の際用いたであろう漆が断面に付着している。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後III期に属し、15世紀前葉のものである。包含層から出土した。

908は口径12cmを測る。内面と外面上半に黒褐色の鉄釉を施す。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後II期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。包含層から出土した。

909は底部である。底径は5.2cmを測る。内面と外面上半に暗褐色の鉄釉を施し、外面下半に薄く暗赤

褐色の錆釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸中Ⅲ期に属し、14世紀中葉のものである。包含層から出土した。

910は折縁小皿である。口径は9.2cm、器高は2.3cm、底径は4.9cmを測る。底面を回転糸切りで切り離す。内面と外面上半に淡黄色の灰釉を施し、外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅰ期または後Ⅱ期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。出土地点は確認できなかった。

911～914は縁釉小皿である。911は口径12cmを測る。内外面上半に浅黄色の灰釉を施し、下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前葉のものである。包含層から出土した。

912は口径13cmを測る。内外面上半に明緑灰色の灰釉を施し、下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅱ期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。出土地点は確認できなかった。

913は口径9cm、底面は5.2cmを測る。底面を回転糸切りで切り離す。内外面上半に褐色から黒褐色の鉄釉を施し、下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前葉のものである。包含層から出土した。

914は底部である。底径は5.6cmを測る。底面を回転糸切りで切り離す。外面上半に明緑灰色の灰釉を施し、内底に刷毛塗りを施す。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸Ⅱ期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。出土地点は確認できなかった。

915は折縁小皿である。口径は9.6cmを測る。内面と外面上半に淡黄色の灰釉を施し、外面下半は露胎である。外面に煤が付着している。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅰ期または後Ⅱ期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。包含層から出土した。

916・917は卸皿である。916は内外面上半に浅黄色の灰釉を施し、下半は露胎である。胎土はやや密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸中Ⅳ期に属し、14世紀中葉のものである。出土地点は確認できなかった。

917は卸皿の底部である。底径は8cmを測る。底面を回転糸切りで切り離す。外面上半に浅黄色の灰釉を施し、下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後期に属し、14世紀中葉～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

918・919は豆皿である。918は口径6cmを測る。内面と外面上半に淡黄色の灰釉を施し、外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅰ期から後Ⅱ期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。包含層から出土した。

919は豆皿の底部である。底径は5.0cmを測る。底面を回転糸切りで切り離す。内面に緑灰色の灰釉を施し、外面は露胎である。胎土はやや粗く、灰色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後ⅠからⅡ期に属し、14世紀後半～15世紀初期のものである。出土地点は確認できなかった。

920は八稜皿である。口径は13cmを測る。口縁端部を花卉状に削りとり、内面と外面上半に淡黄色の灰釉を施す。外面下半は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅰ期または後Ⅱ期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。包含層から出土した。

921は折縁深皿である。口径は32cm、器高は9.9cm、底径は16.7cmを測る。脚部を有している。内面上

半と外面下位まで明緑灰色の灰釉を施し、内外底に刷毛塗りを施す。二次的に被熱している。胎土は密であり、灰黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅰ期に属し、14世紀後半のものである。包含層から出土した。

922・923は直縁大皿である。922の口径は推定で31cmを測る。口縁は輪花風に指押さえを施す。内外面に明緑灰色を施し、断面に煤が付着している。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅱ期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。包含層から出土した。923は口径27cmを測る。内外面に緑灰色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅱ期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。包含層から出土した。

924は椀型鉢である。口径は26cmを測る。内外面に浅黄色の灰釉を施すが、二次的に被熱し、釉が部分的に剝離している。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅲ期～Ⅳ期（古）に属し、15世紀前葉～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

925は盤類の底部である。底径は15cmを測る。補修の際用いたであろう漆が断面に付着している。内面と外面状半に明緑灰色の灰釉を施す。外面下半は露胎であり、回転彫削り痕を確認できる。胎土はやや密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。後Ⅰ期に属すと考えられ、14世紀後半の可能性を示唆する。包含層から出土した。

926は柄付片口の注口部である。内外面に緑灰色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸中期に属し、13世紀後葉～14世紀中葉のものである。包含層から出土した。

927はすり鉢型鉢である。口径は16cm、器高は5.7cm、底径は5cmを測る。外面上半と内面状半に褐色の錆釉を施すが、外面の釉は剝離している。胎土はやや密であり、淡黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅱ期に属し、14世紀後葉～14世紀初頭のものである。包含層から出土した。

928はすり鉢型鉢と推察する。底径は7cmを測る。底面を回転糸切りで切り離す。内面に浅黄色の灰釉を施し、外面は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅰ期に属すると考えられ、14世紀後半の可能性を示唆する。包含層から出土した。

929は小鉢である。口径は15cmを測る。内外面に浅黄色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅳ期（古）に属し、15世紀中葉のものである。出土地点は確認できなかった。

930は瓶子である。口径は推定で3.8cmを測る。内外面に浅黄色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸前Ⅳ期に属し、13世紀後葉のものである。包含層から出土した。

931は仏花瓶である。口径は3.6cmを測る。外面と口縁内面下部まで緑灰色の灰釉を施すが、二次的に被熱しており、外面と口縁端部の釉が剝離している。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸中期に属し、13世紀後葉～14世紀中葉のものである。出土地点は確認できなかった。

932は仏花瓶の体部破片である。外面に暗褐色の鉄釉を施し、内面は露胎である。外面に3本の平行沈線を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸中Ⅰ期からⅡ期に属し、13世紀後葉～14世紀前葉のものである。包含層から出土した。

933は尊式花瓶である。外面に明緑灰色の灰釉を施し、内面は露胎である。外面が二次的に被熱している。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅰ期からⅡ期に属し、14世紀後半～15世紀初頭のものである。出土地点は確認できなかった。

934は四耳壺である。口径は10cmを測る。内外面に明緑灰色の灰釉を施すが、二次的に被熱しており部分的に剝離している。胎土は密であり、灰黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸前II期に属し、13世紀前葉～13世紀中葉のものである。包含層から出土した。

935は筒形香炉である。口径は11cm、器高は5.6cm、底径は7.3cmを測る。脚部を有している。底面を糸切り底で切り離す。内面上位と外面下位に明緑灰色の灰釉を施し、ほぼ全面が二次的に被熱している。胎土は密であり、淡灰黄色を施す。焼成は良好である。古瀬戸後I期に属し、14世紀後半のものである。包含層から出土した。

936は袴腰形香炉である。口径は13cmを測る。内面上部と外面に明緑灰色の灰釉を施し、内面下半は露胎である。胎土は密であり、端白色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後II期に属し、14世紀後葉～15世紀初頭のものである。包含層から出土した。

937は桶の体部破片である。内外面途中まで黒褐色の鉄釉を施す。胎土は密であり、褐灰色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後IV期(古)に属し、15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

青磁(図版151の938～946、図版152～図版153の970、図版161の1、図版175の5・6): 938～957は椀である。938は口径16.6cmを測る。口縁部が外反する。内外面に浅黄色の釉を施す。外面に3本の沈線を巡らせ、内面に割花文を施す。胎土は密であり、灰黄色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系I類に属する。包含層から出土した。

939は椀の体部破片である。内外面に割花文を施し、断面に煤が付着する。内外面にオリーブ黄色の釉を施す。胎土はやや粗く、浅黄色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系I類に属する。包含層から出土した。

940は椀の体部破片である。外面に細長い鎮蓮弁文を施すが、内外面に明緑灰色の釉を厚く施すため、蓮弁のかたちがやや不鮮明である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系B0類に属する。出土地点は確認できなかった。

941は椀の底部である。底径は4.5cmを測る。高台は断面が三角形である。全面に明緑灰色の釉を施した後、畳付けの釉を削り取っている。露胎部と施釉部の境は赤褐色を呈する。釉を厚く施すため、鎮蓮弁文をもつものか無文のものであるかは不明である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系B0類に属する。包含層から出土した。

942は椀である。口径15cmを測る。内外面に透明感のあるオリーブ黄色の釉を施し、外面に幅広でやや粗雑な鎮蓮弁文を施す。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系B1類に属する。包含層から出土した。

943は椀である。口径17cmを測る。内外面に明オリーブ灰色の釉を施す。外面に片切り彫りによる鎮蓮弁文を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系B1類に属する。包含層から出土した。

944は椀である。口径17.2cmを測る。内外面に透明感のある明緑灰色の釉を施し、外面に細長くやや粗雑な蓮弁文を寛描きする。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系B2類に属する。包含層から出土した。

945は椀である。口径15.2cm、器高6.3cm、底径5.4cmを測る。内外面は無文であり、口縁部が外反する。透明感のあるオリーブ黄色の釉を薄く施すため、外面の回転寛削り痕が明瞭である。高台外面まで

施釉し、畳付に及んだ部分は削り取る。見込みに界線および印花文を施す。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系D-I類に属する。包含層から出土した。

946は碗である。口径19.4cmを測る。口縁部直下の外面を指でおさえて回転させ、口縁を端反らせる。外面に斜めに長さ約2cmの彫文を施す。内外面に灰オリーブ色の釉を施す。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

947は碗である。口径18.9cmを測る。内外面は無文であり、口縁端部がやや丸みをもって端反る。内外面に緑灰色の釉をやや厚めに施す。補修の際用いたであろう漆が断面に付着している。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は不良である。龍泉窯系D-II類に属する。包含層から出土した。

948は碗の底部である。底径5.9cmを測る。緑灰色の釉を高台外面途中まで厚く施す。見込みに印花文を施し、補修の際用いたであろう漆が断面に付着している。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系D-II類に属する。包含層から出土した。

949は碗の底部である。底径5.9cmを測る。透明感のある明オリーブ灰色の釉を薄く施すため、外面の回転削り痕が明瞭である。高台外面まで施釉し、畳付に及んだ部分は削り取る。見込みに界線および印花文を施し、三叉トチンであろう目跡を観察する。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系D-I類と推察する。包含層から出土した。

950は碗である。口径17cmを測る。口縁部に大きめの玉縁をもち、内外面にオリーブ灰色の釉を厚く施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系D-II類に属する。出土地点は確認できなかった。

952は碗の底部である。底径6cmを測る。器壁は厚く、緑灰色の釉を厚く施す。全面施釉後、外底の釉を輪状に掻き取っている。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系D-II類に属すると推察する。包含層から出土した。

953は碗の体部破片である。いわゆる「人形手」とよばれる青磁で、内面に型押しによる文様を施す。内外面に失透明性の明緑灰色釉を厚く施しているため、文様の輪郭が不鮮明である。胎土はやや粗く、灰色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

954は碗の体部破片である。内外面が無文であり、器壁が厚い。内外面に暗オリーブ灰色の釉を厚く施し、内面に印花文を施す。破面の状態から、意図的に打ち欠いたものであると推察する。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。龍泉窯系D-II類に属する。包含層から出土した。

955は碗の底部である。底径7.8cmを測る。全面に緑灰色の釉を厚く施した後、見込みと外底の釉を輪状に掻き取ると推察する。胎土はやや粗く、浅黄橙色を呈する。焼成は不良である。包含層から出土した。

956は碗の底部である。底径6.6cmを測る。明緑灰色の釉を高台内面まで施すが、部分的に外底にも及ぶ。畳付の釉は掻き取るが、削り残しが目立つ。見込みの釉は円形に掻き取っている。破面の状態から、高台径に沿って意図的に打ち欠いたものであると推察する。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

957は碗の底部である。底径5cmを測る。器壁は厚く、内外面にオリーブ灰色の釉を厚く施す。釉は畳付を越えて高台内面途中にまで及ぶが、外底は無釉で削り痕が明瞭である。破面の状態から、高台径に沿って意図的に打ち欠いたものであると推察する。胎土は密であり、褐灰色を呈する。焼成は良好で

ある。龍泉窯系D-II類に属すると推察する。包含層から出土した。

958は小杯である。口径11.2cm、器高3.1cm、底径5.4cmを測る。玉縁状の口縁を有する。全面に透明感のある明黄褐色の釉を厚く施すが、外底は部分的に無釉である。胎土はやや粗く、浅黄色を呈する。焼成は不良である。包含層から出土した。

959は皿である。口径12cmを測る。内外面は無文であり、口縁端部がやや丸みをもって端反る。内外面に明緑灰色の釉をやや厚めに施す。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

960は稜花盤である。口径28.4cmを測る。口縁部は端反り、口縁部直下に稜花の単位ごとに花卉状の篋描き文を入れ、内外面に篋および櫛状の施文具による5条の緩やかな波状文を縦方向に施す。内外面にオリブ灰色の釉を厚く施す。外面の一部は二次的に被熱している。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

961は盤である。口径は24.9cmを呈する。口縁を外に折り曲げ、さらに端部を垂直につまみあげて仕上げる。内面に篋描き文を約0.2cm間隔で施す。内外面にオリブ灰色の釉を厚めに施す。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は不良である。包含層から出土した。

962は杯である。口径は20.6cmを測る。口縁を外に折り曲げ、端部を垂直につまみあげている。内外面に緑灰色の釉を施す。内面には蓮弁文を型押ししている。胎土は密であり、灰白色を呈する。包含層から出土した。

963は盤である。963は口径23cmを測る。口縁を水平に折り曲げ、さらに端部を垂直につまみあげて仕上げる。内外面に明緑灰色の釉を厚く施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

964は盤の体部破片である。内外面に透明感の強いオリブ灰色の釉を施し、篋描き文を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

965は水盤の体部破片である。全面にオリブ灰の釉を厚く施す。体部に突起状の飾が見られる。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

966は盤の底部である。底径14cmを測る。全面にオリブ灰色の釉を厚く施し、外底の釉を輪状に掻き取っている。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

967は八角杯である。口径8.4cmを測る。内外面に緑灰色の釉を厚く施す。外面の一部が二次的に被熱している。胎土は密であり、灰白色を呈する。包含層から出土した。

968・969は花瓶の体部破片である。ともに外面にオリブ灰色の釉を厚く施し、内面は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

970は人物形燭台の裾側面部分である。内部を空洞に製作する。明緑灰色の釉を底部直上まで施し、内面は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。包含層から出土した。

白磁(図版153の971~991):971は碗である。口径16.4cmを測る。口縁はやや小さく薄めの玉縁である。内外面に灰白色の釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。IV-I類に属する。出土地点は確認できなかった。

972は碗である。口径13cmを測る。口縁端部の釉を剥ぎ取る、いわゆる口禿げのものであり、内外面に灰白色の釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。A群に属する。包含層から

出土した。

973は皿の体部破片である。いわゆる「枢府手」とよばれるものである。見込みに界線および型押しによる唐草文を施すが、内外面に失透明性の灰白色釉を施すため、文様がやや不鮮明である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。B群に属する。出土地点は確認できなかった。

974は碗の体部破片である。いわゆる「枢府手」とよばれるものである。見込みに型押しによる帯文および花文を施すが、内外面に失透明性の明青灰白色の釉を施すため、文様がやや不鮮明である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。B群に属する。包含層から出土した。

975は碗である。口径15cmを測る。透明感の強い灰色の釉を薄く施しているため、外面の回転篋削り痕が明瞭である。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。C群に属する。包含層から出土した。

976は碗である。口径15.6cmを測る。口縁部は丸みもち、口縁部直下に稜をもつ。内外面に灰白色の釉を薄く施す。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。森田分類のC群、金武分類のV—b類に属する。包含層から出土した。

977は杯である。口径16cmを測る。器壁は厚く、口縁部はやや端反る。内外面に灰黄色の釉を施す。胎土はやや粗く、淡黄色を呈する。焼成は良好である。C群に属するが、色調・釉調・厚さから考え、やや異質な一群であると推察する。出土地点は確認できなかった。

978は碗の体部破片である。内面と外面上半に灰白色の釉を施す。外面下部は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。内底見込みに界線および印花文を施す。胎土はやや粗く、灰色を呈する。焼成は良好である。C群に属する。包含層から出土した。

979は碗の体部破片である。内面に透明感のある灰色の釉を施し、見込みに界線および印花文を施す。外面は露胎であり、回転篋削り痕を確認する。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。C群に属する。包含層から出土した。

980は碗の体部破片である。器壁は厚く、腰部は丸みをもつ。内面と外面上半に灰黄色の釉を施し、見込みに界線を施す。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕が確認できる。補修の際用いたであろう漆が断面に付着している。胎土はやや粗く、淡黄色を呈する。焼成は良好である。C群に属するが、色調・釉調・厚さから考え、やや異質な一群であると推察する。包含層から出土した。

981は碗の底部である。底径は5cmを測る。器壁は厚く、畳付の幅は広く斜めに切る。内面と外面上半に明青灰色の釉を施し、見込みに界線を施す。外面下部は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。C群に属する。包含層から出土した。

982は碗の底部である。底径は5cmを測る。器壁は厚く、畳付の幅を広く水平に切る。内面と外面上半に黄色味を帯びた灰白色の釉を施し、見込みに印花文を施す。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。胎土はやや粗く、淡黄色を呈する。焼成は良好である。C群に属するが、色調・釉調・厚さから考え、やや異質な一群であると推察する。包含層から出土した。

983は皿である。口径11.4cm、器高3.3cm、底径4.2cmを測る。高台部の挟り込みは入れない。内面と外面上半に灰黄色の釉を施す。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は不良である。D群に属する。包含層から出土した。

984は皿である。口径9.8cmを測る。内面と外面上半に灰黄色の釉を施し、見込みの釉は掻き取る。外

面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。胎土は密であり、灰黄色を呈する。焼成は良好である。D群に属する。出土地点は確認できなかった。

985は皿の底部である。底径4.2cmを測る。高台に抉り込みを入れ、それとは別に幅1mmの溝のような刻みを1本入れる。内面と外面上半に淡黄色の釉を施す。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。外底に墨書を施す。胎土はやや粗く、灰黄色を呈する。焼成は不良である。D群に属する。包含層から出土した。

986は皿の底部である。底径7.2cmを測る。内面と外面上半に灰白色の釉を施し、見込みの釉を輪状に掻き取る。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。外底は露胎であるが、高台際から高台内面と一部外底に釉を掻き取った痕跡がみられる。この高台部に付着した釉は意図的に施したものではなく、偶然かかったものを剥いだ裏と推察する。胎土はやや粗く、淡黄色を呈する。焼成は不良である。包含層から出土した。

987は柄の底部である。底径6.3cmを測る。内面に淡黄色の釉を施し、見込みに三叉トチンと思われる痕跡が認められる。高台部は露胎であり、削り込みは浅く、畳付は摩滅している。破面の状態から、高台径に沿って意図的に打ち欠いたものであると推察する。胎土は密であり、浅黄色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

988は器種不明であるが、底部破片である。底径は3.5cmを測る。器壁は薄く、細く高い高台を有する。内面と高台外面途中までにやや青みのかかった浅黄色の釉を施す。高台内は露胎である。胎土は密であり、浅黄橙色を呈する。焼成は不良である。出土地点は確認できなかった。

990は杯の底部である。底径3.2cmを測る。高台部の抉り込みは入れない。内面と外面上半に灰白色の釉を施す。外面下半は露胎であり、回転篋削り痕を確認できる。高台部に墨が付着する。胎土は密であり、淡黄色を呈する。焼成は不良である。D群に属する。包含層から出土した。

991は四耳壺の体部破片である。内外面に灰白色の釉を薄く施す。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。

青白磁 (図版153の992～994)

992は合子の身である。口径8.4cm、底径5.4cmを測る。外面は膨らみをもつ花卉状の文様を施す。内面と高台外面までに明青灰の釉を施すが、口縁直下と外面下半から高台外面までの釉は掻き取る。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

993は小壺の身である。口径6cmを測る。外面に浮き彫り状の蓮弁文を施す。全面に明緑灰の釉を施すが、内外面の口縁端部の釉は掻き取っている。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

994は梅瓶の体部破片である。外面に明緑灰色の釉を施し、2条沈線および渦文を施す。内面は露胎である。外面は二次的に被熱している。胎土は密であり、淡黄色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

中国製陶磁器 (図版153の995～100, 図版175の5) : 995は褐釉壺である。口径は8cmを測る。内外面に明黄色を部分的に施す。胎土は密であり、褐色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

996は褐釉陶磁の四耳壺で、肩部に横位に耳が付く。外面に褐色の釉を施す。内面は露胎である。胎土は粗く、明赤褐色を呈する。焼成は良好である。タイ製の可能性もある。包含層から出土した。

997は茶入の体部破片である。外面に鉄釉を施し、内面は露胎である。胎土は密であり、黄灰色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

998は褐釉壺の体部破片である。外面に黒褐色釉を施し、内面は露胎である。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

999は天目茶碗である。口径は11cmを測る。体部内外面に縦方向に茶色の筋がある、いわゆる禾目天目である。口縁はほぼ直立し、内外面に黒褐色の鉄釉を施す。胎土は密であり、灰黄色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

1000は天目茶碗の底部である。底径は3.9cmを測る。高台脇を水平に削り込む。内外面に縦方向に茶色の筋がある、いわゆる禾目天目である。内面と外面上半にガラス質の黒色の鉄釉を施す。外面下半は露胎であり、回転削り痕を観察できる。見込みの釉は非常に厚く、使用痕であろう擦痕を多数観察できる。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

青花(図版153の1001~1005) 1001は碗である。口径は12cmを測る。釉下に白化粧土を施し、内面口縁直下に界線、外面に太く滲んだ文様をもつ。胎土はやや粗い陶器質であり、にぶい褐色を呈する。焼成は不良である。漳州窯系であり、J群に属する。包含層から出土した。

1002は皿である。口径は14.2cmを測る。体部が深く、浅鉢と呼ぶべきものである。口縁部は端反り、端部を肥厚させてつまみあげるものである。内面口縁直下に界線、体部に文様を施す。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。H群に属する。包含層から出土した。

1003は皿である。口径は12cm、底径は4.3cmを測る。いわゆるつば皿で、内湾する胴部から斜めにつばがつく器形である。釉下に厚さ2mm程の白化粧土を施し、内面に文様を施す。全施釉後に疊付けの釉を掻き取らないため、砂が付着している。胎土は粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。漳州窯系であり、F群粗製に属する。包含層から出土した。

1004は碗の底部である。底径は5cmを測る。全体に丸味をもった器形である。全施釉後に疊付けの釉を掻き取らないため、粒砂状のものが付着している。外面に草花文および二条界線、見込みに界線および文様を有するが、やや滲んだ感がある。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。焼成は良好である。漳州窯系であり、F群に属する。包含層から出土した。

1005は皿である。釉下に1mmほどの白化粧土を施し、内面に文様をもつ。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。漳州窯系であり、K1群に属する可能性が高い。出土地点は確認できなかった。

1006は皿の底部である。底径は6.4cmを測る。見込みに界線および玉取獅子文を施しており、その文様構成から、口縁部が外反する可能性が高いと考える。全面施釉後、疊付けを釉割きし、砂敷きで焼成している。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。B-VII群に属する。出土地点は確認できなかった。

1007は皿の底部である。底径は3.3cmを測る。高台外面まで施釉し、疊付けは面の細かい篋削りまたは拭き取りを数回行っており、高台断面は丸い。外底は露胎で、放射状のカンナ削り痕が認められる。見込みに文様を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。E群に属する。包含層から出土した。

1008は皿の底部である。底径は6cmを測る。全面施釉後、疊付けは面の細かい篋削りまたは拭き取りを

数回行っており、高台断面は丸い。外底には放射状のカンナ削り痕が認められる。高台外面に二条界線、見込みに界線および文様を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。E群に属する。出土地点は確認できなかった。

朝鮮製陶磁器 (図版154の1009～1013) : 1009は朝鮮製陶碗の底部である。底径は5cmを測る。表面に白と黒の斑点のある、いわゆる「そば茶碗」である。腰部が膨らみ、見込みに段を持つ。内面は青白色、外面は灰白色の釉を薄く施す。胎土はやや粗く、表面は灰色で、中心は黄褐色を呈する。焼成は不良である。A類に属する。出土地点は確認できなかった。

1010は象嵌青磁碗の体部破片である。外面に3本の界線を施すが、埋め込みはされていない。内面には白・黒象嵌による波線状の文様を施す。内外面に透明感のある暗めの緑灰色の釉を施す。胎土はやや粗く、灰色を呈する。焼成は良好である。高麗末期から李朝初期のものである。包含層から出土した。

1011は象嵌青磁碗の体部破片である。外面に白象嵌による2本の界線を施し、内面に白・黒象嵌による文様、内外面に緑灰色の釉を施す。胎土はやや粗く、灰色を呈する。焼成は良好である。高麗末期から李朝初期のものである。包含層から出土した。

1012は象嵌青磁碗の体部破片である。外面には界線および雲文と推察する文様を施し、内面には白象嵌による円文、界線、草花文を施す。内外面に透明感の強い緑灰色の釉を施す。胎土はやや粗く、灰色を呈する。焼成は良好である。高麗末期から李朝初期のものである。包含層から出土した。

1013は象嵌青磁碗の体部破片である。外面に白象嵌による2本の界線を施す。透明感のある暗めの緑灰色の釉を施す。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。高麗末期から李朝初期のものである。包含層から出土した。

珠洲 (図版154の1014～1018, 図版155～図版157の1034, 図版176の1・2) 1014～1026はすり鉢である。1014の口径20.6cm, 底径11.4cm, 器高8.5cmを測る。内面に1.8cm幅に6目の卸目を8条確認できるが、内面下半は摩滅している。二次的に被熱し、内面に煤が付着している。底部に穿孔らしき痕跡が認められる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1015はすり鉢である。口径30cmを測る。内面には2.4cm幅に8目の卸目を2条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV—2期に属し、14世紀前葉～14世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1016はすり鉢である。口径32cmを測る。内面に卸目を2条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV—2期に属し、14世紀前葉～14世紀初頭のものである。包含層から出土した。

1017はすり鉢である。口径25cmを測る。内面に2.6cm幅に9目の卸目を3条確認できる。胎土はやや粗く、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV—3期に属し、14世紀後葉のものである。包含層から出土した。

1018はすり鉢である。口径30cmを測る。内面に3.2cm幅に15目の卸目を1条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV—3期に属し、14世紀後葉のものである。出土地点は確認できなかった。

1019はすり鉢である。口径34cmを測る。内面に1.2cm幅に6目の卸目を2条確認できる。胎土はやや密

であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅳ—3期に属し、14世紀後葉のものである。包含層から出土した。

1020はすり鉢である。口径28cmを測る。内面に3cmあたり12目の卸目を1条確認できる。また二次的に被熱し、内外面に煤が付着しており、また部分的に赤変している。胎土はやや密であり、灰黄色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。出土地点は確認できなかった。

1021はすり鉢である。口径は32cmを測る。内面に3.4cm幅に13目の卸目を2条確認できる。また二次的に被熱し、内外面に煤が付着している。胎土は密であり、暗オリーブ灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1022はすり鉢である。口径は32cmを測る。口縁端面に波状文を施す。内面に3.1cm幅に11目の卸目を5条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1023はすり鉢である。口径は27cmを測る。口縁端面に波状文を施す。内面に2.8cm幅に9目の卸目を3条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。出土地点は確認できなかった。

1024はすり鉢である。口径は33cmを測る。口縁端部に波状文を施す。内面に卸目が1条確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。包含層から出土した。

1025はすり鉢である。口径は36cmを測る。口縁端面に波状文を施す。内面には3cmあたり8目の卸目を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1026はすり鉢である。口径は44cmを測る。口縁端面に波状文を施す。内面に2.5cm幅に7目の卸目を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1027は壺である。口径は12cmを測る。外面に3cm幅に12目の平行叩きを施し、内面には当て具痕を確認できる。外面に抽象文を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1028は壺である。口径は16cmを測る。胎土は密であり、暗灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1029は甕の体部破片である。外面に3cmあたり12目の平行叩きを施し、内面には当て具痕を確認できる。胎土はやや粗く、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1030は壺である。口径は24cmを測る。外面に平行叩きを施し、内面に当て具痕を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。出土地点は確認できなかった。

1031は甕である。口径は36cmを測る。外面に平行叩きを施し、内面に当て具痕を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲Ⅳ期に属し、13世紀末～14世紀後葉のものである。

出土地点は確認できなかった。

1032は甕である。口径は43cmを測る。外面には平行叩きを施し、内面に当て具痕を確認できる。二次的に被熱し、内面に煤が付着している。胎土は密であり、灰色を呈する。珠洲V期に属し、14世紀末から15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

1033は甕である。口径には48cmを測る。外面に3cmあたり10目の平行叩きを施し、内面に当て具痕を確認できる。胎土は密であり、灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲IV期に属し、13世紀末～14世紀後葉のものである。包含層から出土した。

1034は甕である。口径は44cmを測る。外面に3cmあたり8目の平行叩きを施し、内面には当て具痕を確認できる。外面に竹管文を印刻する。胎土はやや粗く、暗灰色を呈する。焼成は良好である。珠洲V期に属し、14世紀末～15世紀中葉のものである。包含層から出土した。

信楽 (図版157の1035～1038) : 1035は壺である。口径は9cmを測る。外面に自然釉がかかり、内面は指押さえする。胎土は密であり、灰白色を呈する。内外面は黄褐色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

1036は壺である。口径は14cmを測る。外面に自然釉が付着しており、二次的に被熱している。胎土は密であり、灰色を呈する。内外面は黒色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

1037は壺である。口径は16cmを測る。外面に自然釉がかかる。胎土は密であり、灰白色を呈する。内外面は赤褐色を呈する。焼成は良好である。出土地点は確認できなかった。

1038は壺類の底部である。底径は19cmを測る。胎土は密であり、灰白色を呈する。内外面は明黄褐色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

瓷器系 (図版154の1039) : 1039は瓷器系すり鉢の体部破片である。内面に卸目を2条確認できる。胎土は密であり、橙色を呈する。焼成は良好である。包含層から出土した。

越前 (図版154の1040) : 1040は越前甕である。口径は42cmを測る。胎土は密であり、灰色を呈する。内外面は褐色を呈する。焼成は良好である。越前II期に属し、13世紀後半のものである。出土地点は確認できなかった。

古瀬戸以降の瀬戸美濃 (図版154の1041・1042, 図版176の3) : 1041は折縁皿である。口径は15cmを測る。内外面に部分的に灰白色をともなった緑灰色の灰釉を施す。胎土は密であり、灰白色を呈する。焼成は良好である。大窯第4段階前葉に属し、16世紀末のものである。包含層から出土した。

1042は志野菊花皿である。口径は12.8cm, 底径は7cmを測る。口縁端部を輪花状に削り取り、外面を線彫りし、内面を指押さえして花卉状に仕上げる。内外面に淡白色の長石釉を施す。胎土は密であり、淡黄色を呈する。焼成は良好である。登窯IからII小期に属し、17世紀前葉のものである。包含層から出土した。

肥前系陶器 (図版157の1043～1045, 図版176の3) : 1043は碗の底部である。底径は7cmを測る。内面と外面上半に灰オリーブ色の釉を施し、外面下半は鉄釉を施す。外面に鉄釉による文様を施す。外面に煤が付着している。胎土は密であり、灰色を呈する。唐津I期に属し、16世紀後葉のものである。包含層から出土した。

1044は皿の底部である。底径は4.6cmを測る。線彫りおよび印花を施し、白化粧を塗った後これを拭き取った、いわゆる「三島手」のものであり、見込みに目跡を二つ確認できる。暗赤褐色の釉を全面に施

す。胎土は密であり、にぶい赤褐色を呈する。唐津II期に属し、17世紀前半のものである。出土地点は確認できなかった。

1045はすり鉢の口縁部である。口径は32cmを測る。内面に3cm幅に9目の卸目を2条確認できる。内外面に暗赤褐色の鉄釉を施す。胎土は密であり、明褐色を呈する。18世紀から19世紀初頭のものである。包含層から出土した。

肥前系磁器(図版157の1046~1050, 図版176の3): 1046は碗である。口径は9.7cm, 器高は5cm, 底径は3.7cmを測る。体部外面に二重網目文, 体部内面に網目文, 見込みにはコンニャク印判による五弁花文を描く。高台内には銘歌を入れる。全体に透明釉を施す。胎土は密であり, 灰白色を呈する。焼成は良好である。18世紀のものである。出土地点は確認できなかった。

1047は碗である。口径は10cmを測る。外面に芙蓉文および植物文を描き, 口縁部内面には雷文を描く。内外面に透明釉を施す。胎土は密であり, 灰白色を呈する。焼成は良好である。18世紀のものである。包含層から出土した。

1048は端反り碗蓋である。口径は10cmを測る。外面に植物文を描く。全体に透明釉を施す。胎土は密であり, 灰白色を呈する。焼成は良好である。18世紀末のものである。出土地点は確認できなかった。

1049はお神酒徳利の底部である。底径は4.1cmを測る。外面に蛸草文を描く。外面から高台内にかけて透明釉を施すが, 内面は露胎である。胎土は密であり, 灰白色を呈する。焼成は良好である。18世紀後半のものである。包含層から出土した。

1050は紅皿である。口径4.3cm, 器高1.5cm, 底径1.7cmを測る。外面に型押しによる菊花を表す。口縁部および内面に灰白色の釉を施し, 外面は露胎である。胎土は密であり, 灰白色を呈する。焼成は良好である。18世紀のものである。包含層から出土した。

金属製品(図版157の1051~1054, 図版158の1055・1056, 図版176の3, 図版178の1・3): 1051は銅製鐔である。長さ4.4cm, 幅2.5cm, 厚さ0.2cmを測る。内法長2.9cm, 内法幅最大0.95cm, 最小0.3cmを測る。重量は7gを量る。端が小花弁状の凹凸をなす。表面の端際には装飾と推察する列点を打つ。列点は楕円形をなす。鋒部に近い方が歪曲している。包含層から出土した。

1052は不明銅製品である。底径は2.4cm, 残存高は1.7cmを測る。包含層から出土した。

1053は銅製金具である。直径3.9cm, 奥行き約0.3cm, 厚さ0.15cm, 孔径0.3cmを測る。重さは4gを量る。縁が推定14弁の花弁状を呈し, 中央に孔を有する。その形態から鑄造品と推測する。箱の座金具として用いられたと考える。右部を欠失し, 歪曲している。包含層から出土した。

1054は銅製金具である。長さ1.9cm, 幅0.5cm, 厚さ上部0.5cm, 下部0.35cmを測る。頭部は長さ1.25

第1表 遺物執筆分担一覧表

SD出土遺物	遠野いずみ
SE, SK03・04・05出土遺物	渡辺 樹
SI, SK31・41・64・67・74・76出土遺物	真井田宏彰
広瀬, 真井田, 渡辺の報告分を除くSK, SP出土遺物	宮川 俊輔
SX, SK16・27・29出土遺物	広瀬 直樹
遺構外出土遺物	貫井 美鈴

cm, 幅1.15cm, 厚さ0.2cmを測る。重さは2.4gを量る。飾り釘であり、亜六角形の頭部と断面多角形の釘部からなる。頭頂部は4方向に凹みを有する。包含層から出土した。

1055は鉄製刀形刃物である。全長32.3cmを測る。刀身部は長さ21.1cm, 幅3.1cmを測る。茎部は長さ11.2cm, 幅2.5cm, 鋒部は幅0.65cmを測る。重さは256.2gを量る。鋒のごく先端を除いてほぼ完形である。両関式である。茎部の上部中央に目釘穴を1個穿孔する。出土地点は確認できなかった。

1056は鉄製刀形刃物の身部の一部である。長さ22.3cmを測る。刀身部は長さ19.7cm, 幅2.3cmを測る。茎部は長さ1.7cm, 幅0.4cm, 鋒部は幅0.4cmを測る。重さは82.4gを量る。鋒切先と茎部の大部分が欠失している。欠失部分を考慮すると、全長30cmに近いと推定する。刀身部に錆, 蝕を有さないため, 小型品であると考えられるが, そのなかでも最大級品であると推察する。両関式であり, 刀身部側の関の方が垂直気味である。包含層から出土した。

石製品 (図版158の1057~1063, 図版160の5・6, 図版169の1・2, 図版176の4) : 1057は頁岩製砥である。長さ12.5cm, 幅6.2cm, 厚さ2.2cmを測る。重さは0.85gを測る。包含層から出土した。

1058は流紋岩製砥石である。長さ22.7cm, 幅5.0cm, 厚さ5.5cmを測る。重さは0.85gを量る。包含層から出土した。生産地は愛媛県砥部近郊あるいは熊本県天草の可能性が高い。

1059は頁岩製砥石である。長さ6.1cm, 幅3.4cm, 厚さ1.4cmを測る。重さは30.8gを量る。側面から短片の折れ面に付けて墨が付着している。砥面の一部に擦痕を観察できる。生産地は京都府西京区近郊である。包含層から出土した。

1060は泥岩製砥石である。長さ4.2cm, 幅2.6cm, 厚さ2.1cmを測る。重さは27.4gを量る。上面および両側面に鋸痕を観察できる。包含層から出土した。生産地は長崎県対馬の可能性が高い。

1061は砂岩製砥石である。長さ6.3cm, 幅6.7cm, 厚さ2.7cmを測る。重さは44.9gを量る。両面の一部に擦痕を観察できる。包含層から出土した。

1062は砥石の可能性ある。石材は砂岩である。長さ7.3cm, 幅3.5cm, 厚さ2.0cmを測る。重さは76.4gを量る。短側面を除く全面に使用にともなうと思われる光沢を確認できる。包含層から出土した。

1063は珪質頁岩製石鎌である。最大長3.0cm, 最大幅1.8cm, 最大厚0.3cmを測り, 重さ1.0gを量る。片面中央付近にアスファルトが付着している。茎部と逆刺部の片側が欠損している。縄文時代のものである。包含層から出土した。

第3章 考 察

1 遺物の考察

(1) 出土土器・陶磁器の組成

(a) 分析の視点と方法

ここでは第86・87次調査区出土土器・陶磁器について分析を行なう。今回の調査区では各遺構・包含層から総数8225点の遺物が出土している。その内訳は剥片2点、石器1点などの縄文遺物、須恵器3点、赤彩土器2点、撥文土器1点などの古代遺物、中世土器54点、中世陶器2918点、中世磁器974点、近世土器3点、近世陶器892点、近世磁器2013点、不明土器2点、不明陶器92点、不明磁器2点、土製品25点、木製品20点、金属製品2点、銅製品39点、鉄製品808点、鉄滓21点、鉄片1点、銭貨293点、石製品56点である。なお、今回は中世の土器・陶磁器3946破片（接合前）、733.42個体についてのみ触れ、近世陶磁器については省略することとする。

分析の方法としては全出土遺物の地点・遺構・層位、種類・器種、型式、法量、破片数、口縁部個体数を記録し、これをもとにデータベースを作成した。土器・陶磁器の分析には、原則として口縁部計測法（宇野1981, 1992）を用いたが、一部破片数計算法を採用した。なお2時期にわたるもの（例：珠洲IV期からV期）は、破片数および個体数をそれぞれの時期に分配して計算している。また可能性が高いが断言できないもの（例：古瀬戸前III期か）については、別の時期である可能性も否定できないが、より可能性の高い時期に加算することとした。

また瀬戸美濃、珠洲、貿易陶磁の分類・年代観については、瀬戸美濃は藤澤良祐氏（藤澤1982, 1991, 1995a）、珠洲は吉岡康暢氏（吉岡1994）、貿易陶磁は国立歴史民族博物館の分類（国立歴史民俗博物館1994）に準拠した。ただし青磁龍泉窯系D類は上田秀夫氏（上田1982）に従ってD-I類とD-II類に細分し、中世前期の貿易陶磁は横田賢次郎氏・森田勉氏（横田・森田1978）、白磁ヒロースクタイプは金武正紀氏（金武1988）、漳州窯系青花は森毅氏（森1995）、朝鮮製茶碗は岩田隆氏（岩田1985）の分類に従った。また今回出土した朝鮮半島製象嵌青磁については、生産地側での意見の相違や、高麗末期と李朝初期の大別が困難であることなどから、下地安広氏の提唱を受け「象嵌青磁」という名称を用いる（下地1997）。

(b) 遺物組成

土器・陶磁器の種類別構成比（第2表、第8図）

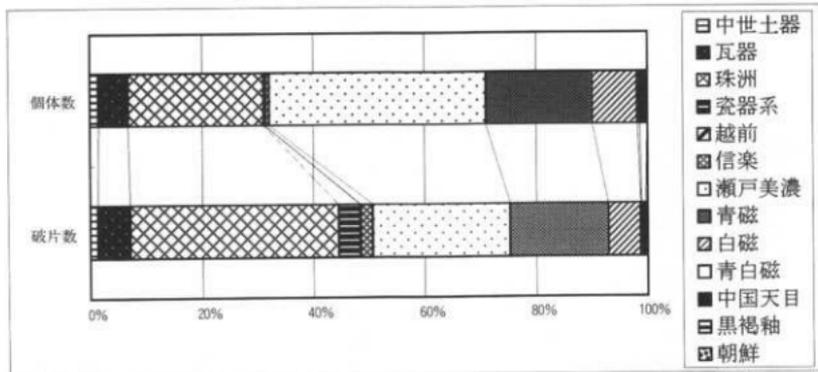
口縁部計測法により比率を算出した結果、国産土器・陶磁器は70.9%、貿易陶磁器は29.1%であり、貿易陶磁器に対して国産陶磁は約2.4倍の比率を占めた。その内訳は国産土器・陶磁器が中世土器・瓦器・珠洲・甕器系・越前・信楽・瀬戸美濃、貿易陶磁器が青磁・白磁・青白磁・中国天目・黒褐釉陶器・朝鮮象嵌青磁である。それぞれの破片数および個体数を算出し、種類別の構成比グラフを表した。その結果、全体の中では瀬戸美濃が38.9%、珠洲が24.2%、青磁が19.2%を占め、際立って多いことがわかる。また珠洲、越前・信楽などの甕器系陶器の占める割合は、破片数と個体数では差異がみられた。これは壺・甕のように法量の大きい遺物は、破損した場合、一個体であっても多くの破片に分かれてしまっ

第2表 中世土器・陶磁器 種類・器種別組成表

	種類	器種	用途	破片数(点)	百分率(%)	個体数(個)	百分率(%)	
国産陶磁 2973点 43.363個 70.95%	中世土器	皿	食膳具	54	1.4	0.928	1.5	
		瓦器	火鉢	暖房具	225	5.7	3.254	5.3
	珠洲	鉢形土器	暖房具	3	0.1	0	*	
		壺K種	貯蔵具	6	0.2	0	*	
		壺T種	貯蔵具	300	7.6	0.925	1.5	
		壺R種	貯蔵具	64	1.6	0.468	0.8	
		壺	貯蔵具	298	7.6	0.470	0.8	
		壺類	貯蔵具	85	2.2	0.240	0.4	
		すり鉢	調理具	723	18.3	12.718	20.8	
		瓷器系	壺	貯蔵具	90	2.3	0.108	0.2
			壺類	貯蔵具	61	1.5	0	*
			すり鉢	調理具	2	0.1	0	*
	越前	壺	貯蔵具	3	0.1	0.089	0.1	
	信楽	壺	貯蔵具	65	1.6	0.400	0.7	
		壺	貯蔵具	1	*	0	*	
		壺類類	貯蔵具	20	0.5	0	*	
	瀬戸美濃	天目茶碗	食膳具	122	3.1	4.366	7.1	
		小天目茶碗	食膳具	3	0.1	0	*	
		平碗	食膳具	297	7.5	5.119	8.4	
		浅碗	食膳具	3	0.1	0.233	0.4	
		平底末広碗	食膳具	7	0.2	0.267	0.4	
		縁袖小皿	食膳具	54	1.4	3.443	5.6	
		折縁小皿	食膳具	17	0.4	1.145	1.9	
		卸皿	食膳具	26	0.7	1.100	1.8	
		底卸目皿	食膳具	3	0.1	0.258	0.4	
		豆皿	食膳具	10	0.3	0.808	1.3	
		八稜皿	食膳具	1	*	0.125	0.2	
		皿類	食膳具	1	*	0	*	
		小杯	食膳具	1	*	0.092	0.1	
		折縁深皿	食膳具	100	2.5	2.768	4.5	
		直縁大皿	食膳具	8	0.2	0.229	0.4	
		柄付片口	調理具	3	0.1	0	*	
		桶	貯蔵具	4	0.1	0	*	
		卸目付大皿	食膳具	4	0.1	0.108	0.2	
		播鉢型小鉢	食膳具	5	0.1	0.192	0.3	
		碗型鉢	食膳具	23	0.6	0.250	0.4	
		小鉢	食膳具	6	0.2	0.242	0.4	
		盤鉢類	食膳具	84	2.1	0	*	
		瓶子	貯蔵具	4	0.1	0.167	0.3	
		樽式花瓶	貯蔵具	24	0.6	0.425	0.7	
		仏花瓶	貯蔵具	8	0.2	0.642	1.0	
		花瓶	貯蔵具	12	0.3	0	*	
		四耳壺	貯蔵具	26	0.7	0.383	0.6	
茶壺		貯蔵具	3	0.1	0	*		
合子または水滴		貯蔵具	1	*	0	*		
梅瓶		貯蔵具	17	0.4	0.458	0.7		
壺瓶類		貯蔵具	11	0.3	0	*		
袴腰形香炉		その他	4	0.1	0.225	0.4		
筒形香炉		その他	12	0.3	0.633	1.0		
筒形容器	貯蔵具	1	*	0	*			
不明	不明	67	1.7	0.083	0.1			

	種類	器種	用途	破片数(点)	百分率(%)	個体数(個)	百分率(%)	
貿易陶磁 974点 17.756個 29.05%	青磁	碗	食膳具	627	15.9	10.053	16.4	
		皿	食膳具	10	0.3	0.267	0.4	
		小杯	食膳具	2	0.1	0.092	0.1	
		杯	食膳具	3	0.1	0.142	0.2	
		八角杯	食膳具	1	*	0.167	0.3	
		水盤	その他	2	0.1	0	*	
		稜花盤	食膳具	4	0.1	0.125	0.2	
		鉢	食膳具	1	*	0.017	*	
		盤鉢類	食膳具	34	0.9	0.667	1.1	
		花瓶	貯蔵具	3	0.1	0	*	
		香炉	その他	5	0.1	0.183	0.3	
		人物形燭台	その他	1	*	0	*	
		不明	不明	1	*	0	*	
		白磁	碗	食膳具	103	2.6	1.698	2.8
	皿		食膳具	108	2.7	2.558	4.2	
	杯		食膳具	14	0.4	0.375	0.6	
	小瓶		貯蔵具	1	*	0.333	0.5	
	花瓶		貯蔵具	1	*	0	*	
	四耳壺		貯蔵具	1	*	0	*	
	不明		不明	3	0.1	0	*	
	青白磁	合子	貯蔵具	3	0.1	0.125	0.2	
		梅瓶	貯蔵具	2	0.1	0	*	
		小壺	貯蔵具	1	*	0.117	0.2	
	中国陶磁	天目茶碗	食膳具	28	0.7	0.771	1.3	
		四耳壺	貯蔵具	2	0.1	0	*	
		壺	貯蔵具	6	0.2	0.067	0.1	
		茶入	その他	2	0.1	0	*	
		不明	不明	1	*	0	*	
	朝鮮陶磁	象嵌青磁碗	食膳具	4	0.1	0	*	
	合計				3946	100.0	61.118	100.0

*は存在するが個体数比率が数値として表れないもの。



第8図 中世土器・陶磁器種類別構成比

めである。このため、後に述べる珠洲の個別分析には口縁部計測法を用い、比較的破片数と個体数の比率に差の少ない貿易陶磁の個別分析には破片数計算法を用いて分析を行なうこととした。なお瀬戸美濃においても破片数と個体数の占める割合に差がみられたが、破片数計算法の方がより様相を掴むことができると考え、瀬戸美濃の個別分析には破片数計算法を採用した。

土器・陶磁器の用途別構成比（第3表、第9～12図）

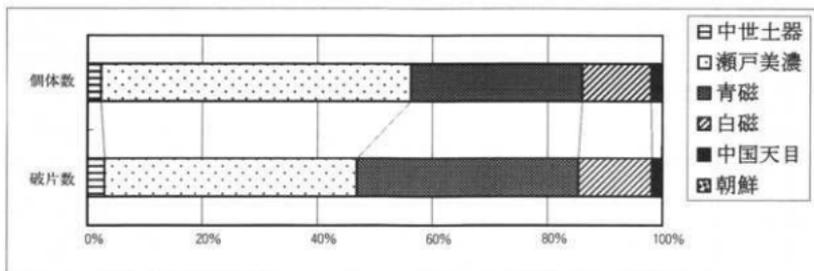
今回出土した土器・陶磁器を、用途別に食膳具・調理具・貯蔵具・暖房具・その他の5つに分類した。その内容は例として、食膳具には中世土器皿、瀬戸美濃・貿易陶磁の椀・皿・盤・鉢類、調理具には珠洲・瓷器系すり鉢・瀬戸美濃柄付片口、貯蔵具は珠洲・瓷器系・瀬戸美濃・貿易陶磁器の壺瓶壺類、その他には瀬戸美濃・貿易陶磁の香炉・花瓶・茶入といった付加価値が高いものとした。しかしどの器種をどの用途に含むかについては意見の分かれるところであり、また一つの器種が特定の用途に限られていたのか、あるいは多目的に使用されていたのかについては慎重になる必要がある。

全体の中で占める割合は、口縁部計測法で算出したところ、食膳具が63.2%と最も多く、続いて調理具が20.8%を占めている。なお、これまで調理具に含んでいた瀬戸美濃御皿、瀬戸美濃および青磁の盤類は摩滅痕がほとんどみられず、実際に調理に使用したのか疑わしいため、今回は食膳具に含めることとした。ただし青磁水盤だけは華道に使用されたと考え、その他に含めた。

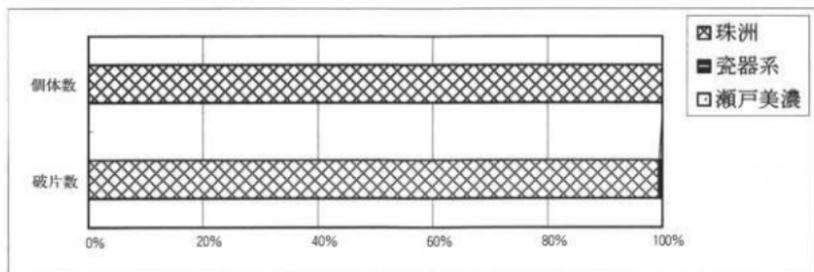
第3表 中世土器・陶磁器 用途・種類別組成表

用途	種類	破片数(点)	百分率(%)	個体数(個)	百分率(%)
食膳具 1768 〔38.604〕	中世土器	54	1.4	0.928	1.5
	瀬戸美濃	775	19.6	20.745	33.9
	青磁	682	17.3	11.528	18.9
	白磁	225	5.7	4.632	7.6
	中国陶磁	28	0.7	0.771	1.3
	朝鮮陶磁	4	0.1	0	*
暖房具 228 〔3.254〕	瓦器	228	5.8	3.254	5.3
貯蔵具 1073 〔4.351〕	珠洲	753	19.1	2.103	3.4
	瓷器系	151	3.9	0.108	0.2
	越前	3	0.1	0.089	0.1
	信楽	86	2.2	0.400	0.7
	瀬戸美濃	63	1.6	1.008	1.6
	白磁	2	0.1	0.333	0.5
	青白磁	6	0.2	0.242	0.4
	中国陶磁	8	0.2	0.067	0.1
調理具 728 〔12.718〕	珠洲	723	18.3	12.718	20.8
	瓷器系	2	0.1	0	*
	瀬戸美濃	3	0.1	0	*
その他 78 〔2.108〕	瀬戸美濃	64	1.6	1.925	3.1
	青磁	11	0.3	0.183	0.3
	白磁	1	*	0	*
	中国陶磁	2	0.1	0	*
不明 72 〔0.083〕	瀬戸美濃	67	1.7	0.083	0.1
	青磁	1	*	0	*
	白磁	3	0.1	0	*
	中国陶磁	1	*	0	*
合計		3946	100.0	61.118	100.0

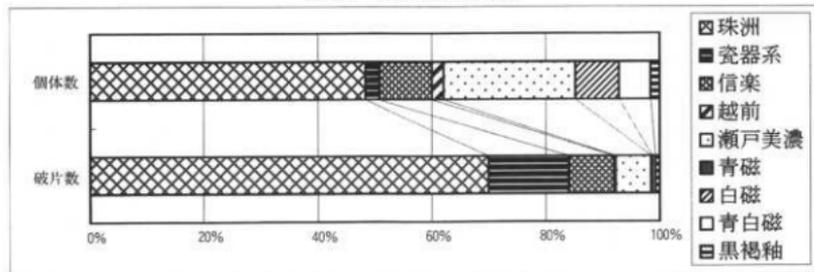
括弧内数値は個体数。*は存在するが個体数比率が数値として表れないもの。



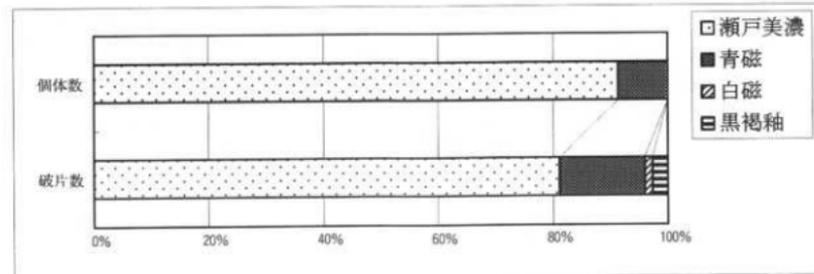
第9図 食膳具種類別構成比



第10図 調理具種類別構成比



第11図 貯蔵具種類別構成比



第12図 その他種類別構成比

第4表 珠洲器種・時期別一覧表

(上段：破片数, 下段：個体数)

	Ⅲ期か	Ⅳ-2期	Ⅳ-3期	Ⅳ期	Ⅳ~Ⅴ期	Ⅴ期	Ⅵ期	不明	合計
壺K種				2 (0)		4 (0)			6 (0)
壺T種	2 (0)			33 (0)	5 (0.05)	257 (0.875)		3 (0)	300 (0.925)
壺R種				2 (0)	57 (0.343)	5 (0.125)			64 (0.468)
甕				12 (0.083)	20 (0)	266 (0.387)			298 (0.47)
壺甕					1 (0)	73 (0.14)		11 (0.1)	85 (0.24)
すり鉢		93 (3.101)	34 (1.815)	7 (0.203)	198 (0.13)	264 (7.393)	3 (0.075)	124 (0)	723 (12.718)
合計	2 (0)	93 (3.101)	34 (1.815)	56 (0.287)	281 (0.523)	869 (8.92)	3 (0.075)	138 (0.1)	1476 (14.821)

食器具では、破片数計算法で比率を算出した結果、瀬戸美濃が43.8%、青磁が38.6%、白磁が12.7%を占め、貿易陶磁の方が瀬戸美濃よりもやや高い比率を示すことがわかる(第9図)。

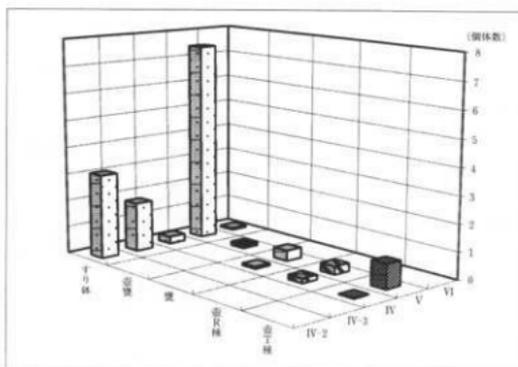
次に調理具では珠洲のすり鉢が大半を占め(第10図)、図示しなかったが暖房具では瓦器が全体を占めている。

貯蔵具では、珠洲が半数を占め、瀬戸美濃、信楽が続く。しかし瀬戸美濃・中国陶磁は主に調度品あるいは茶壺としての色彩が強く、また信楽壺についても茶を購入した際にもたらされたと考えられ、珠洲とは異なる特別な役割を担っていたと考える(第11図)。

最後に、その他に含めた宗教あるいは茶・華・香道に関する分野についてみると、その大半を瀬戸美濃が占めていることがわかる。これに天目茶碗の数量を加えると、その様相はさらに濃くなる(第12図)。

珠洲の器種別・時期別出土量(第4表, 第13図): 口縁部計測法により算出した。

まず器種ごとの構成比をみると壺T種が6.3%、壺R種が3.2%、甕が3.2%、壺甕類が1.0%、すり鉢が86.4%を占め、圧倒的にすり鉢の比率が高い。時期別出土量の変化は、まずⅢ期と考えられる壺T種が若干みられるが、まとまった出土はⅣ期からである。Ⅳ期にはすり鉢のみが出土していたが、Ⅴ期になると十三湊遺跡で主体的にみられる器種が出揃い、出土量は急増する。しかしⅥ期には激減する。こ

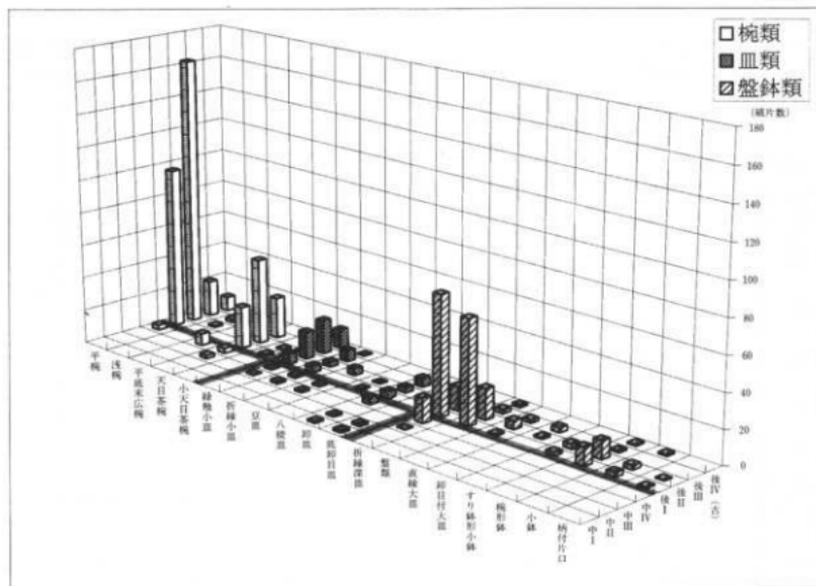


第13図 珠洲器種・種類別出土量(個体数)

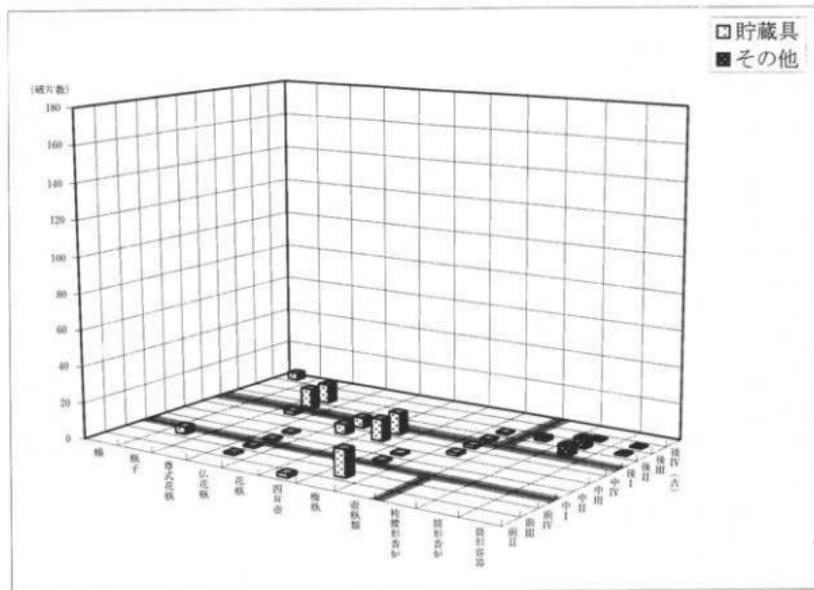
の変遷はすり鉢によるものであり、壺・甕ではⅣ期からⅤ期にかけての増加はそれほど際立ったものではない。しかしⅣ期からⅤ期にかけては、生産地ではすり鉢は増産、壺・甕は減産する傾向にあり、Ⅳ期からⅤ期にかけての壺・甕の増加は、本調査区の活動がこの時期に活発化したことを表していると考えられる。

瀬戸美濃の器種別・時期別出土量(第5表, 第14・15図): 破片数計算法により算出した。

前述した通り、瀬戸美濃は本調査



第14図 瀬戸美濃食膳具・調理具 器種・時期別出土量 (破片数)



第15図 瀬戸美濃貯蔵具・その他 器種・時期別出土量 (破片数)

第5表 瀬戸美濃器種・時期別一覧表

	前I期	前期Ⅱ小	前期Ⅱ大	前期Ⅲ	中I期	中I～Ⅱ期	中I期	中Ⅱ期	中Ⅲ～Ⅳ期	中Ⅳ期	中Ⅳ期小	中Ⅳ～後I期	中Ⅴ期
文目茶碗								2 (0)		3 (0.13)		1 (0)	
小文目茶碗										3 (0.2)			
茶碗													
洗杓													
平底末次碗										7 (0.267)			
縁飾小皿									1 (0.16)				
折縁小皿									3 (0.267)				
御匙					1 (0)		1 (0.083)			4 (0.183)			2 (0)
漆刷目皿						3 (0.256)							
豆皿									2 (0.183)				
八景皿													
皿類													
小杯													
折縁皿									1 (0)	13 (0.167)		2 (0.13)	
縁飾大皿													
柄付片口													2 (0)
箸													
柄付大皿													
楕圓形小鉢													
碗形鉢													
小鉢													
飯椀													
飯子				4 (0.187)									
壺式花瓶											2 (0.183)		
仏花瓶			2 (0)			2 (0)							4 (0.642)
花瓶									11 (0)				
陶耳壺	2 (0.383)								24 (0)				
茶壺													
合子or水筒													
陶瓶		16 (0.456)				2 (0)							
豆皿類									3 (0)				6 (0)
特殊形香炉													
筒形香炉													
筒形寄蓋													
不明													
合計	2 (0.383)	16 (0.456)	2 (0)	4 (0.187)	1 (0)	7 (0.256)	1 (0.083)	2 (0)	46 (0.61)	30 (0.947)	2 (0.183)	3 (0.19)	14 (0.642)

区全体の38.9%（口縁部計測法による）を占めており、詳細な時期別の分類も可能であるため、調査区における遺物量の時期別変化をよく表していると考えられる。そのために地土器が存在せず、年代決定を搬入陶磁器に頼らざるを得ない本遺跡においては、最も基本となる資料である。

今回の調査区からは瀬戸美濃製品は972片出土しており、全部で34器種に細分できた。時期的に見て

(上段：破片数，下段：個体数)

後I期	後I期a	後I～II期	後II期	後II～III期	後III期	後III期a	後III～IV(古)期	後IV(古)期	後期	不明	合計	
22 [1, 206]		5 (0.14)	46 [2, 094]		1 [0.12]	24 [0.675]			14 (0)	2 (0)	122 (4, 366)	
		2 (0)							1 (0)		3 (0)	
33 [0, 728]		129 [0, 636]	99 [2, 994]			16 [0, 425]		11 (0)	3 [0.106]	2 (0.225)	1 (0)	297 (5, 119)
			1 (0)			2 (0.233)						3 (0.233)
												7 (0.267)
5 (0.135)		2 (0)	16 [0, 427]			17 [1, 822]		6 (0.4)	2 (0.5)			54 (3, 443)
1 (0)		6 [0, 67]				5 [0, 075]	2 [0, 083]	1 [0, 05]				17 [1, 145]
4 (0.193)			3 [0, 208]			5 [0, 442]				5 (0)	1 (0)	26 (1, 1)
												3 (0.268)
		8 [0, 635]										10 (0.808)
		1 [0, 125]										1 (0.125)
												1 (0)
									1 (0.092)			1 (0.092)
68 [2, 019]	4 (0)	2 (0)	13 [0, 392]									109 (2, 768)
1 (0.033)			5 [0, 158]			2 [0, 036]						8 (0.229)
		1 (0)										3 (0)
												4 (0)
									4 (0)			4 (0.108)
	2 (0)		1 [0, 067]			3 [0, 042]						4 (0.108)
			3 [0, 192]									5 (0.192)
			21 [0, 25]									23 (0.25)
			6 [0, 192]					2 (0)				6 (0.242)
5 (0)	44 (0)	24 (0)		6 (0)			1 (0)	3 (0)		1 (0)		94 (0)
												4 (0.167)
1 (0.083)		21 [0, 158]										24 (0.425)
												8 (0.642)
									1 (0)			12 (0.942)
												26 (0.383)
									3 (0)			3 (0)
									1 (0)			1 (0)
												17 (0.458)
		2 (0)										11 (0)
			2 [0, 108]						1 (0)	1 (0.117)		4 (0)
5 (0)		1 (0)	2 [0, 342]	2 [0, 292]		1 (0)						12 (0)
						1 (0)						1 (0)
												67 (0.93)
143 (4, 389)	50 (0)	230 (2, 798)	193 (5, 982)	5 (0.292)	2 [0, 12]	74 (3, 751)	3 (0.083)	23 (0.45)	16 (0.658)	97 (0.1)	6 (0.117)	973 (23, 761)

も、古瀬戸前II期から後IV期(古)まで多岐にわたることから、一つのグラフに表すことが不可能であった。そのためグラフを食膳具・調理具と貯蔵具・その他の二つに分けることにした。

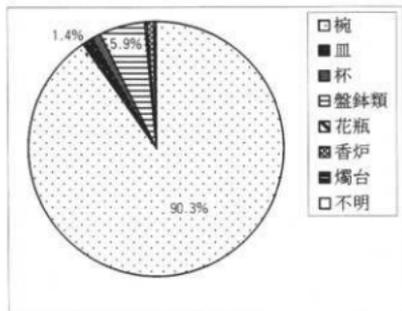
まず食膳具・調理具をみると、平碗が瀬戸美濃全体の30.6%、天目茶碗が12.6%を占めており、圧倒的に碗類が多い。碗類は中III～IV期に若干みられるようになるが、後I期になって急激に増加し、後II

期にさらに増加を続け、後Ⅲ期になって激減する。小型の皿類や盤鉢類の出現・量的変遷は椀類に類似するものの、前者では後Ⅲ期に、後者では後Ⅰ期に出土量のピークがある（第14図）。

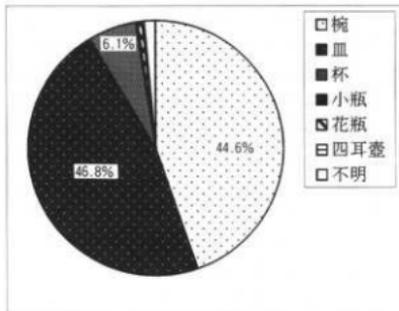
次に貯蔵具・その他では、まず壺瓶類の出土は、前Ⅱ期から中Ⅳ期に集中していることがわかるが、後期には中Ⅳ期に生産が始まる尊式花瓶、後Ⅳ期にみられる桶以外はみられない。香炉類は前・中期には存在せず、後期になってみられる（第15図）。

要約すると、前期には四耳壺・梅瓶などの大型器種が若干見られ、中期にもその様相が続くが、後期には姿を消す。後Ⅰ期には全体的に出土量が急増する。特に中Ⅲ期から出土がみられた平椀・天目茶碗・緑釉小皿・折縁深皿などの椀皿類においてその傾向が顕著である。後Ⅱ期には器種により若干の差異があるものの、後Ⅰ期よりもさらに増加する。しかし後Ⅲ期になると減少し、後Ⅳ期（古）にはほとんどみられなくなる。

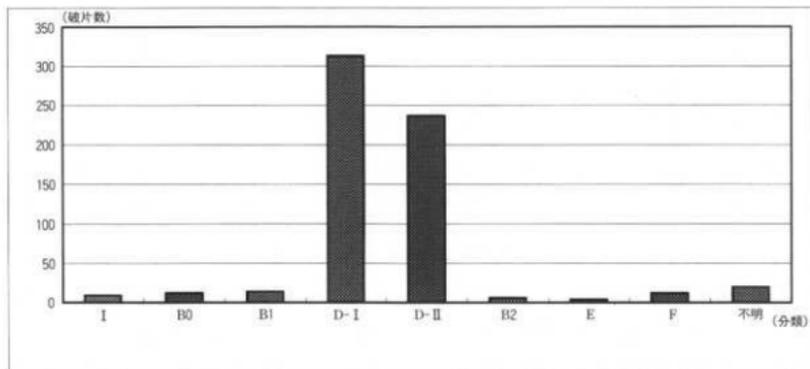
以上の結果、今回の調査区における瀬戸美濃は、古瀬戸中期後半を境に、使用形態が壺瓶類といった大型で調度品としての色彩の強いものから椀皿類といった日用品へと変化することがわかった。この現象は生産地側の生産状況に類似している。



第16図 青磁器種別構成比 (破片数)



第17図 白磁器種別構成比 (破片数)



第18図 青磁椀分類別出土量 (破片数)

第6表 青磁器種・時期別一覽表

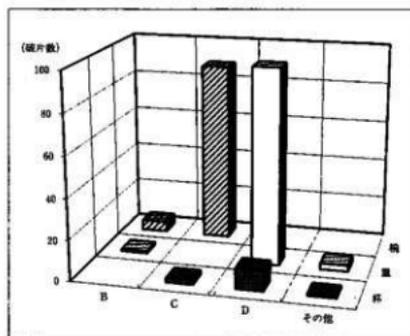
(上段:破片数,下段:個体数)

	I類	BO類	BO類小	B1類	B1類小	B2類	B2類小	D-I類	D-I類小	D-II類	D-II類小	D類	D類小	E類	F類	不明	合計
碗	9 (0.13)	11 (0)	1 (0.07)	9 (0.3)	5 (0)	5 (0.15)	1 (0)	59 (3.14)	154 (0.03)	121 (5.20)	16 (0.20)	81 (0.42)	119 (0.02)	4 (0.10)	12 (0.08)	20 (0.16)	627 (10.00)
皿																10 (0.27)	10 (0.27)
小杯																2 (0.09)	2 (0.09)
杯																3 (0.14)	3 (0.14)
八角杯																1 (0.17)	1 (0.17)
模花盤																4 (0.13)	4 (0.13)
水盤																2 (0)	2 (0)
盤類																34 (0.67)	34 (0.67)
鉢																1 (0.02)	1 (0.02)
花瓶																3 (0)	3 (0)
香炉																5 (0.18)	5 (0.18)
人物形燭台																1 (0)	1 (0)
不明																1 (0)	1 (0)
合計	9 (0.13)	11 (0)	1 (0.07)	9 (0.3)	5 (0)	5 (0.15)	1 (0)	59 (3.14)	154 (0.03)	121 (5.20)	16 (0.20)	81 (0.42)	119 (0.02)	4 (0.10)	12 (0.08)	87 (1.83)	694 (11.67)

第7表 白磁器種・時期別一覽表

(上段:破片数,下段:個体数)

	IV-1類	A群	B群	C群	C群小	D群	D群小	不明	合計
碗	1 (0.03)	2 (0.15)	5 (0.08)	84 (1.21)	5 (0.2)			6 (0.03)	103 (1.7)
皿			1 (0)			93 (2.07)	4 (0.02)	10 (0.47)	108 (2.56)
杯		1 (0.13)		2 (0.1)		10 (0.14)		1 (0.01)	14 (0.38)
小瓶								1 (0.33)	1 (0.33)
花瓶								1 (0)	1 (0)
四耳壺								1 (0)	1 (0)
不明								3 (0)	3 (0)
合計	1 (0.03)	3 (0.28)	6 (0.08)	86 (1.31)	5 (0.2)	13 (2.21)	4 (0.02)	23 (0.84)	231 (4.97)



第19図 白磁器種・分類別出土量(破片数)

ある(第17図)。

白磁ではB群は若干数しかみられないが、C群は急激に増加し、D群はさらに増えるが、E群は皆無である。また白磁における器種別・分類別出土量をみると、C群はその大半を椀が占め、D群では皿が圧倒的に多い(第19図)。このことは白磁の役割が時間を経て椀から皿へ移行したためであると考えられる。

(c) 古瀬戸後II期における生産地と消費地の様相—小長曾窯跡との比較—(第8表, 第20・21図):
破片数計算法により算出した。

瀬戸美濃の個別分析の項で、今回の調査区における器種の・量的変遷は、生産地の動向を受けたものであると述べた。そのためここでは、生産地との比較をより詳しく行なう。

前述の通り、瀬戸美濃では古瀬戸後II期の製品が最も多く出土しており、十三湊における瀬戸美濃の様相をよく表していると考えられる。そこで生産地であり、古瀬戸後II期に比定されている小長曾窯跡(河合1998)と比較し、消費地である十三湊遺跡の瀬戸美濃の様相について検証する。ただし、ここでは確実に古瀬戸後II期の製品であると断言できるものだけを抽出しており、2時期にわたるものや後II期の可能性が高いが断言できないものは除外している。

古瀬戸後II期における器種別構成比を見ると、椀類が第86・87次調査区では76.7%、小長曾窯跡では52.5%であり、両者ともに最も多く出土している。しかしその内訳をみると、第86・87次調査区では天目茶碗と平碗の割合が1:2であるのに対し、小長曾窯跡では1:8であり、今回の調査区は生産地に比べ、天目茶碗が高い比率で出土していることがわかる。

また今回の調査区からは後II期の壺瓶類、内耳鍋、手付鍋が出土していない。前者はすでに述べた通り、中期後半からは生産量が激減する傾向にあり、全国的に壺瓶類の需要が低かったことを反映したためと考えられる。後者の出土がみられない理由は、岩木山麓での鉄生産や、煤の付着した珠洲のすり鉢がみられることから、十三湊遺跡における煮炊具は鉄鍋と珠洲のすり鉢でまかなっていたためと推測する。しかし鉄鍋は、今回の調査区において可能性の高い鉄製品が1点みられただけであり(図版134の453)、煤の付着したすり鉢の出土もわずしかみられない。

出土量を見てみると、今回の調査区では193点であったのに対し、小長曾窯跡ではその約89倍の17,210点が出土しており、数量的に大きな差がみられる。しかしながら今回の調査区は小長曾窯跡ほど多様な

貿易陶磁の器種別構成比・型式別出土量(第6・7表, 第16~19図):破片数計算法により算出した。

種類別にみると、青磁が全体の17.6%、白磁が5.9%を占めている。青磁・白磁での器種別構成比をみると、青磁では椀が90.3%、皿が1.4%であり、椀が圧倒的に多いが(第16図)、白磁では椀が44.6%、皿が46.8%ではほぼ同じ比率を示している(第17図)。型式分類別にみると、青磁では龍泉窯系I・B0・B1類はわずしかみられないが、D-I類の出土量は際立って多く、D-II類がこれに続いている。B2・E・F類の出土は若干で

第8表 第86・87次調査区・小長曾窯跡出土 古瀬戸後II期瀬戸美濃器種別組成表

第86・87次調査区			
	器種	破片数(点)	個体数(個)
碗類 148 (5.088)	天目茶碗	48	2.094
	平碗	99	2.994
	浅碗	1	0
皿類 18 (0.635)	縁軸小皿	15	0.427
	卸皿	3	0.208
盤鉢類 20 (0.809)	折縁深皿	13	0.392
	直縁大皿	5	0.158
	卸目付大皿	1	0.067
	播鉢型小鉢	3	0.192
その他 5 (0.45)	袴腰形香炉	2	0.108
	筒形香炉	3	0.342
合計		193	6.982

括弧内数値は個体数。

小長曾窯跡				
	器種	破片数(点)	個体数(個)	
碗類 9030 (424)	天目茶碗	959	72	
	平碗	8061	351	
	浅碗	9	1	
	平底碗	1	0	
	縁軸小皿	1378	129	
皿類 1995 (196)	折縁小皿	286	43	
	卸皿	286	14	
	折縁中皿	25	3	
	豆皿	18	7	
	八稜皿	2	0	
盤鉢類 1849 (11)	折縁深皿	222	1	
	直縁大皿	400	1	
	柄付片口	47	6	
	卸目付大皿	12	0	
	播鉢	20	0	
	碗型鉢	66	1	
	小鉢	6	0	
	盤類	1076	2	
	壺瓶類 455 (15)	瓶子	32	0
		水注	13	1
尊式花瓶		173	9	
花瓶		8	0	
水滴		2	1	
四耳壺		13	0	
茶壺		44	1	
合子		6	3	
壺瓶類		164	0	
その他 2890 (17)		袴腰形香炉	166	7
	筒形香炉	29	0	
	筒形容器	355	6	
	内耳鍋	408	2	
	手付鍋	2	0	
	片口	10	0	
	燗台	21	2	
不明	不明	2890	0	
合計		17210	663	

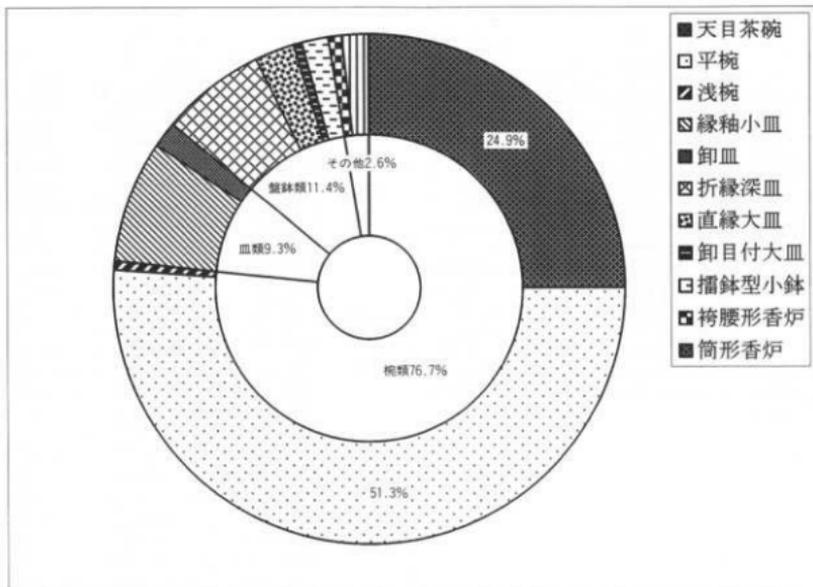
器種構成は見られないものの、碗類が全体の半数以上を占めており、続いて皿類・盤鉢類がそれぞれ10%前後を占めているなど、構成比の上では共通性が見られた。

以上の結果、第86・87次調査区における瀬戸美濃の様相は、全体的にみても、特定の時期に絞ってみても、生産地とほぼ同じ変化をしていると考える。しかし生産地と比べ、碗皿類、特に天目茶碗の割合が高いことや、壺瓶類・鍋類がみられないことなどの相違点がみられた。こうした相違点の生じた理由としては、生活していた人々の階層や生活習慣、他種との競合などが挙げられる。

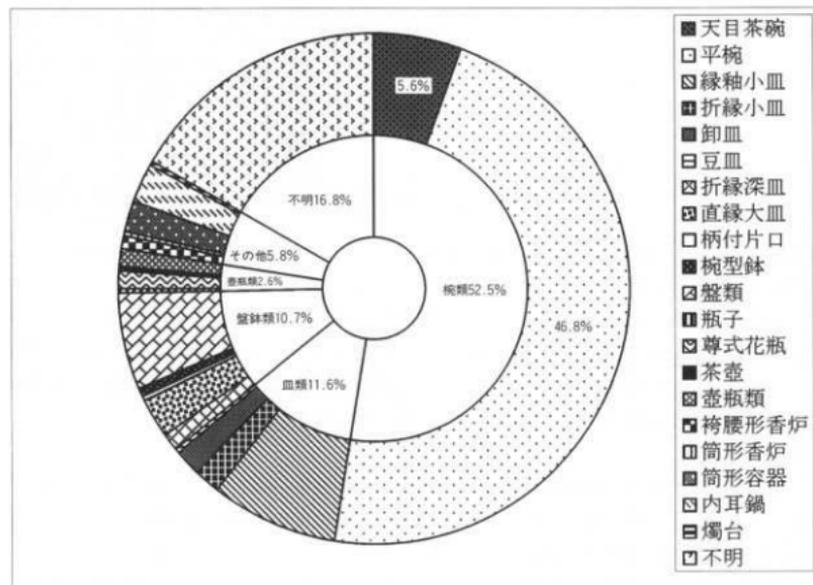
(d) 小 結

まず種類別の分析では国産陶磁が貿易陶磁の比率を上回り、全体を占める割合は瀬戸美濃、珠洲、青磁の順に多かった。この結果は、これまでの領主館地区・家臣団屋敷地区の調査成果と合致する。

用途別での分析では、食膳具が最も高い比率を占め、以下調理具、貯蔵具、暖房具、付加価値の高いその他と続いており、食膳具、貯蔵具、その他には複数生産地の競合がみられた。この現象には小野氏



第20図 第86・87次調査区古瀬戸後II期 瀬戸美濃器種別構成比(破片数)



第21図 小長曾窯跡 同構成比(破片数)

の指摘にあるように、土器・陶磁器間での機能的、価値・価格の補完関係が影響しているといえる（小野1997）。機能的補完関係の面では、宴席用の土器皿、喫茶用の中国・瀬戸美濃天目茶碗、象嵌青磁碗と、通常の食事に使う瀬戸美濃平碗・小皿類、青磁・白磁碗皿類との関係、また貯蔵用の珠洲壺甕類と茶の販売用の信楽壺・甕との関係など、時と場に応じた目的別の使い分けがみられた。価値・価格の補完関係については、食膳具では貿易陶磁と瀬戸美濃はおおよそ拮抗しており、貯蔵具・その他では瀬戸美濃の比率の方が圧倒的に多いことから、貿易陶磁の価格と流通量に応じた瀬戸美濃の代用品としての使用が想定できた。

また今回の調査区における珠洲・瀬戸美濃製品の器種および時期ごとの変遷は、各生産地の状況に極めて似通っているといえ、この現象は、これらの製品が生産地から当地にそのままたらされた結果であると推察する。しかし本調査区の瀬戸美濃天目茶碗は生産地に比べ高い比率を示しており、珠洲V期に減産する壺・甕の比率が本調査区ではIV期よりも増加するなどの違いがみられた。

また出土量のピークは、珠洲ではV期に、瀬戸美濃では古瀬戸後II期にあり、出土量と遺跡の盛衰が比例するのであれば、第86・87次調査区における最盛期は14世紀後葉から15世紀初頭に求めることができる。廃絶期については、本調査区と普正寺遺跡における瀬戸美濃の時期別出土量を比較した結果、本調査区は普正寺遺跡が飛砂活動によって廃絶した1441年前後よりも、やや早い段階に終焉を迎えたと推察する。この結果は古瀬戸後IV（新）期以降の製品や、大窯第4段階前葉以前の大窯製品、明末期以前の青花が皆無であることから類推できる。

以上、第86・87次調査区における出土土器・陶磁器の考察を行なった。しかし生産地との比較を試みたものの、ほぼ遺跡内での考察に終わってしまった。また補完関係についても、本調査区が存続した期間全体で検証したにすぎず、短い時間内にそれぞれがどのように存在し合い、どのように変化していったのか、その変化の要因が何であるのかについて踏み込むことができなかった。（貫井美鈴）

（註）分類名は工藤清泰氏（工藤1999）に準拠した。

（2）十三湊遺跡第86・87次調査区出土遺物の分布—地理情報システム（GIS）の活用—

（a）方 法

十三湊遺跡第86・87次調査は、十三小学校のグラウンド内の約3080㎡を対象に実施した。その結果、土器・陶磁器をはじめとして、10,000点を越す遺物が出土した。これまで、富山大学考古学研究室の調査では、すべての出土遺物の空間分布状況を色々な方法で記録し、分析に生かしてきた。今回の調査では平板を使用し、遺物出土地点平面図を作成し、標高値を記録した。しかし、第86・87次調査区は非常に広く、出土遺物も大量であるため、地理情報システム（Geographic Information System以下、GISと略記）を用いて図化と分析を行なうこととした。

本来、GISは地理学の分野で使用されてきたシステムである。考古学の分野では、新納泉氏が簡易地理情報ソフトIDRISIを用い、岡山県定北古墳の玄室床面に用いる石材の最短入手ルートを想定した論考などがある（新納 他1995）。拙稿ではGISソフトの一つであるARC/INFOを用いて、富山県黒川上山古墓群の造墓過程、墓地の構造を復原した（戸藤1998）。これは、地形と墳墓の平面図を重ね合わせ、鳥瞰図を作成し、平面図からはわかりにくい墓地の景観を復原したものである。次に、各墳墓の重心からThies-

sen多角形を発生し、多角形の領域面積と墳墓の面積、土量から墳丘規模が次第に縮小する過程を捉え、墓地の構造を明らかにした。さらに造墓方法、造骨器や土器の年代観、埋葬方法から造墓年代が不明の墳墓について年代を推し、造墓過程の復原を行った。

GISは学際的なシステムであるが、考古学においても遺跡・遺構・遺物の空間情報や属性情報を蓄積することで、研究目的に応じ、高度な分析を容易に行なうことができる点で非常に有用である。また先に示した、新納氏の論考や拙稿から、考古学情報について数値的な裏付けを与えることが可能であり、墳墓群が持つ空間関係や遺跡群と地域の地形との関わりのようなレベルで論じることも可能である。さらに、GISはデータを簡単に更新することができることも特徴であり、workstationという作業環境下にあるため、LANで研究室同士を結ぶことができる。この場合、ARC/INFOは外部からの書き換えが不可能のデータベースとして大学や研究機関が管理し、端末はIDRISIなどを用いて、研究者や個人が利用することになるであろう。端末機としては、汎用コンピューター、ミニコンピューター、パーソナルコンピューターなどの幅広い利用が可能である。

なお本稿では、UNIX workstation内で稼働する次のソフトウェアを使用した。OSはSUN社製solaris ver.1.0.2を、GISソフトはESRI社製ARC/INFOver.7.2.1をそれぞれ利用した。成果図の出力はHewlett-Packard社製、DesignJet 750cを用いて行った。

本稿では、遺物を種類と用途ごとに分類し、第86・87次調査区内において、どのような分布を示すのかを捉えらえることを目標とした。GISは地形、地質、水系のような地理情報と、分析しようとする対象物とを組合わせて分析することができる。しかし、十三湊遺跡は砂州上の極めて平坦な遺跡であり、地形の起伏は小さい。そこで、第86・87次調査区の遺構の全体平面図を地理情報として考え、堀と溝の区画遺構と遺物の種類との関係を分析することで、遺跡の中での各区画の性格について考えた。なお、ここでいう対象物は出土遺物のことである。遺物については出土地点をデジタイザーによって取込んだ。遺物のX-Y座標値は、デジタイザー上の座標値を、国土座標である平面直角座標系に変換する作業を行なうことで与えた。また、国土座標に変換することで、異なるテーマの図面を重ね合わせることができる。本稿では、平面直角座標として、北緯40°00'00"東経140°50'00"を原点とする第X座標系を使用した。次に、出力した遺物地点図と、調査区全体平面図とを重ね合わせ、成果図とした。

以下に示す種類・用途を遺物毎に入力した。

①種類 出土した遺物の種類として、次の14種類がある。

- 1 貿易陶磁 2 瀬戸美濃 3 珠洲 4 甕器系 5 中世土器 6 瓦器 7 鉄製品
- 8 銅製品 9 古銭 10 石製品 11 土製品 12 木製品 13 自然遺物 14 その他

②用途 出土遺物の用途としては、次の14種類を挙げた。

- 1 食膳具 2 調理具 3 貯蔵具 4 茶道具 5 調度品 6 武具 7 工具(釘、くさび、鋸)
- 8 文房具 9 漁具 10 仏具 11 暖房具 12 装飾品 13 工業廃棄物 14 その他

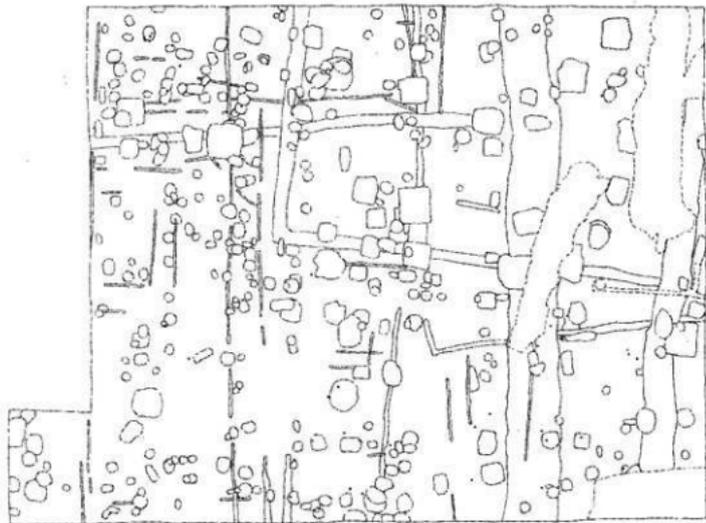
この内、装飾品は主として装身具のことであり、工業廃棄物は鉄洋や銅洋のような金属手工業起源の遺物である。

(戸簾暢宏)

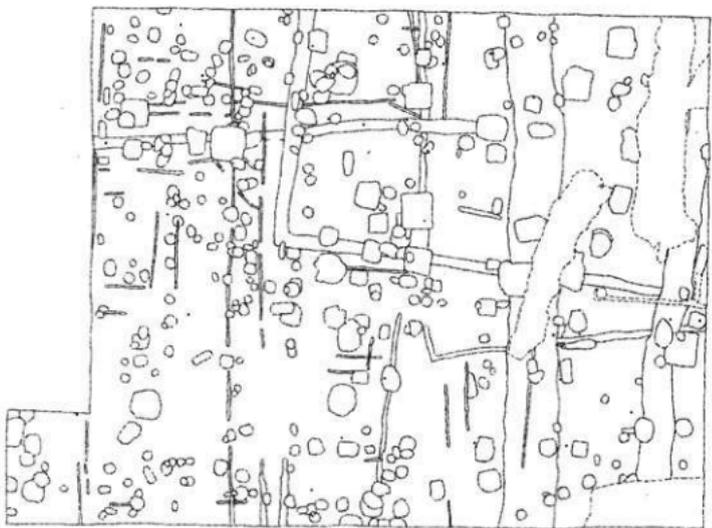
(b) 出土遺物の分布 (第22~26図)

ここでは、出土遺物の分布を主として用途別にみることによって、遺跡内の格差にもとづく空間の違いについて考えてみる。格の高い遺物と考えられる土器・銅製品・茶道具・調度品・文房具・仏具・装

0 10m

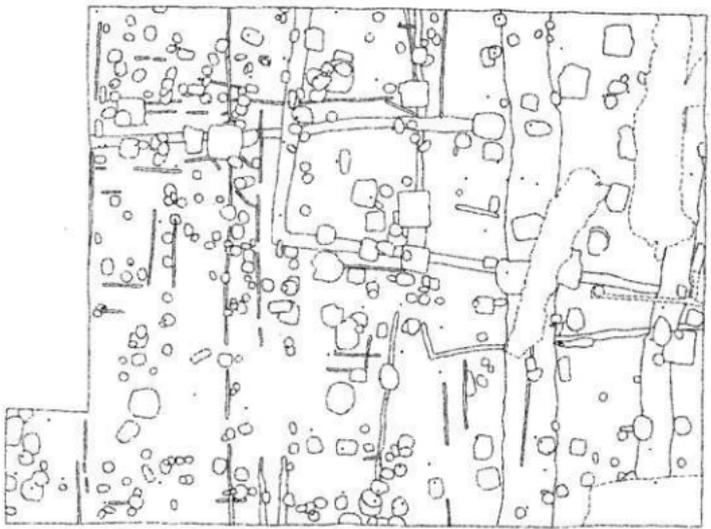


第22図 土器分布図



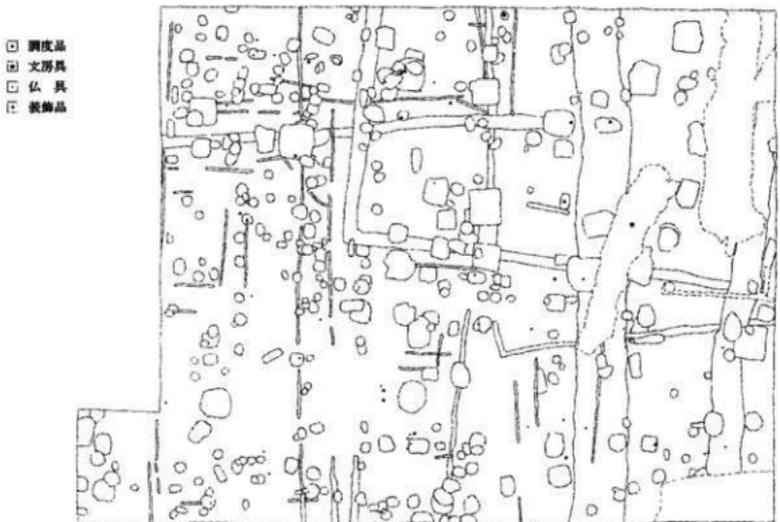
第23図 銅製品分布図

0 10m



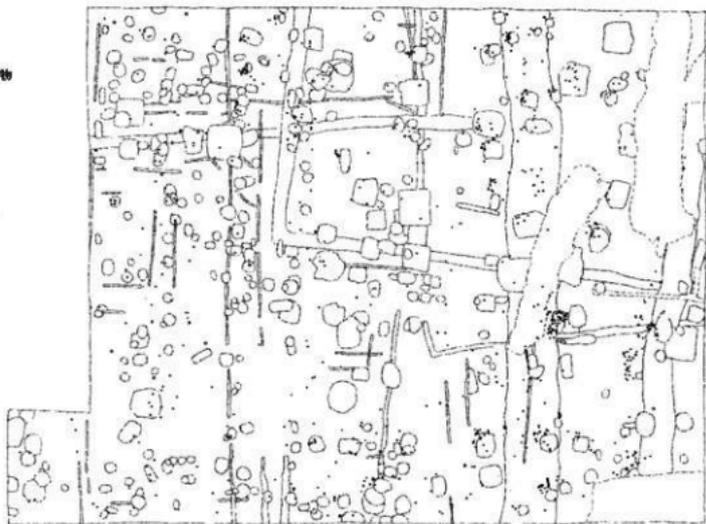
第24圖 茶道具分布図

0 10m



第25図 用途別出土遺物分布図(1)

0 10m



第26圖 用途別出土遺物分布圖(2)

飾品はSD02以北に集中し、職能民の生業に関係すると考えられる工具・漁具・工業廃棄物はSD02以南に集中する傾向が見られるのではないかと予測したが、格の高い遺物に関しては空間の分布に大きな差異はみられず、工具に関しては予想された結果とは逆にSD02以北に集中する傾向が見られた。工具がSD02以北に集中した原因に関しては今回作成した分布図が時期ごとではないことを考慮すると、SD02廃絶後に竪穴建物が多く作られるようになる時期の遺物を多く含むためと考えられる。

(c) 遺物の接合状況 (第27～32図)

第86・87次調査区において出土した中世の土器・陶磁器類総数3946点のうち、接合を確認できた資料は240例であった。遺物ごとの傾向を読み取るために遺物の種類ごとに図版の作成を行ったが、各遺物の種類ごとで異なった傾向はみられなかった。これらの接合資料は調査区内に広く分布しており、同一遺構内での接合にとどまるものから、40m以上はなれたところにある別の遺構のものと同接合したものまで存在する。同一遺構内での接合にとどまる資料が少ないため、遺物は二次的に移動していると考えられ、本来それぞれが使用されていた地点で出土したと認識することは難しい。しかしSD02によって区画された、北側の領主館と推定される範囲と南側の家臣団屋敷と推定される範囲の遺物が接合した資料は少なく、それらの資料もSD02廃絶後の時期にあたることから、SD02が利用されていた時期には堀の北側と南側で陶磁器使用の場が明確に分けられていたと考えられる。

今回の調査区では出土遺物の分布状況から遺跡内の格差にもとづく空間の違いはみられなかったが、接合状況から、堀を境界とする陶磁器使用の場の違いがあったことがわかった。また遺物の移動状況に関しては江馬氏館や一乗朝倉氏遺跡といった城館跡によく見られるような現象(小野1991, 中田1997)を十三湊遺跡の領主館周辺である今回の第86・87次調査区においても示唆できるであろう。(渡辺 樹)

(d) 小 結

GISに関しては、今回は膨大な数の出土遺物を整理し、遺跡全体の中での遺構とのかかわりを考えるため、実験的に利用した。その成果として、分布図作成に格段の効率化を図れたこと、堀を境界として陶磁器使用の場が明確に分かれることを示すことができた。これらの成果から、地形と遺構とのかかわりの中でしか論じざるを得なかった、地理学寄りの分析手法から出土遺物と遺構という、より考古学的な視点からの分析を可能とするに至ったといえよう。汎用的な利用には解決すべき問題が残るが、今後も考古学に積極的に応用し、利用の幅を広げて行きたいと考えている。(戸簾暢宏)

(註)出土遺物の属性分類は、宇野隆夫氏による食器の使用法の復原(宇野1997b)を参考に戸簾と渡辺が行った。

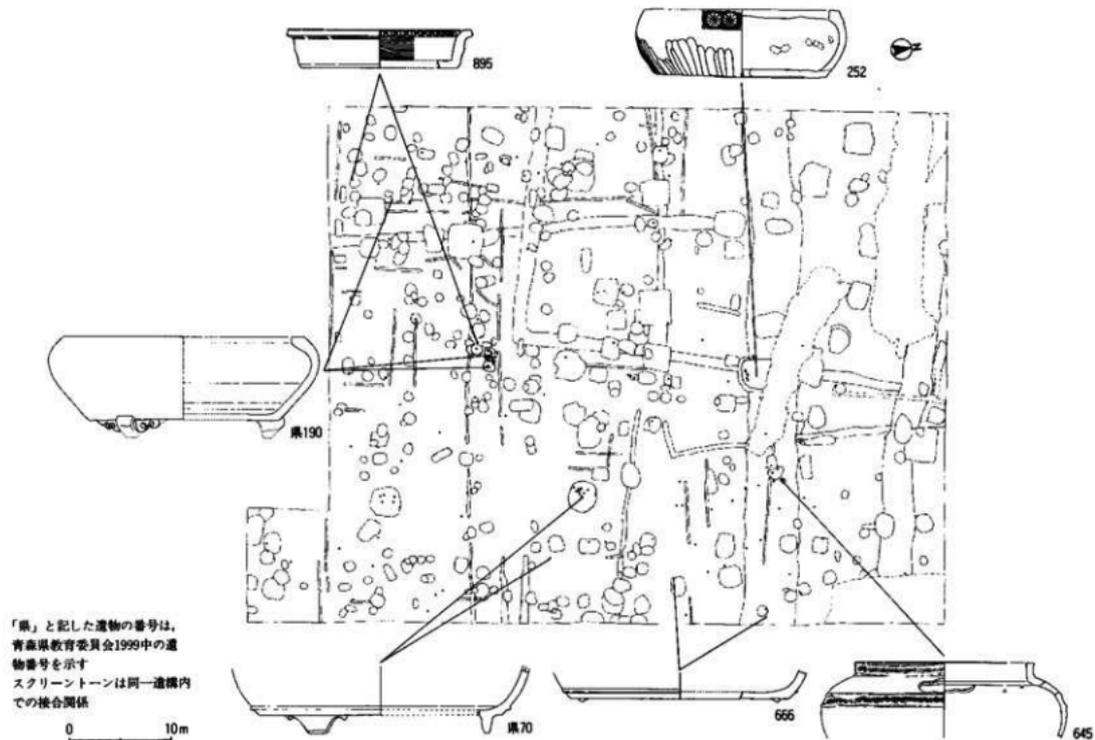
(付記)本稿の作成にあたり、富山大学人文学部講師内山純蔵氏にご指導を頂いたことを記して謝意を表したい。

(3) 銭 貨

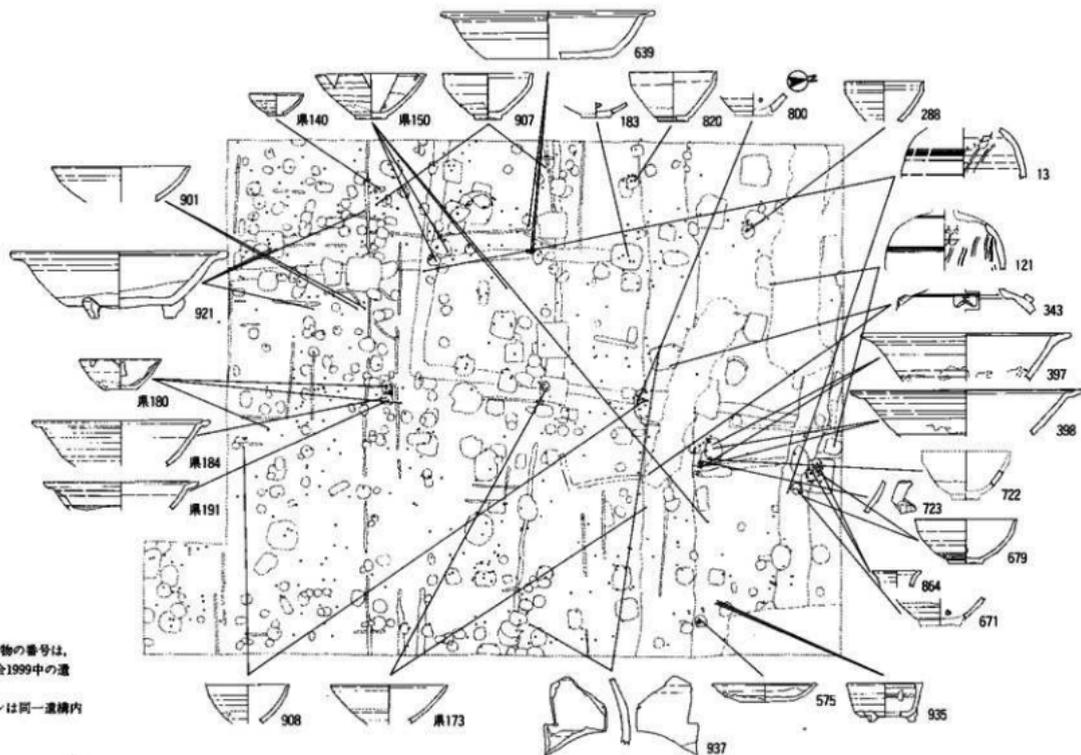
(a) はじめに

出土銭貨は一括出土銭の時期比定が行われ(鈴木1999, 永井編1994・1996)、六道銭から経済的側面、あるいは銭貨自体の意味や一括出土銭の性格についても活発な研究が行われている(網野1994, 橋口1993・1997・1999)。

だが出土銭貨の中には、調査区内から散発的に出土し、一般的には良好な資料とはいえないものが

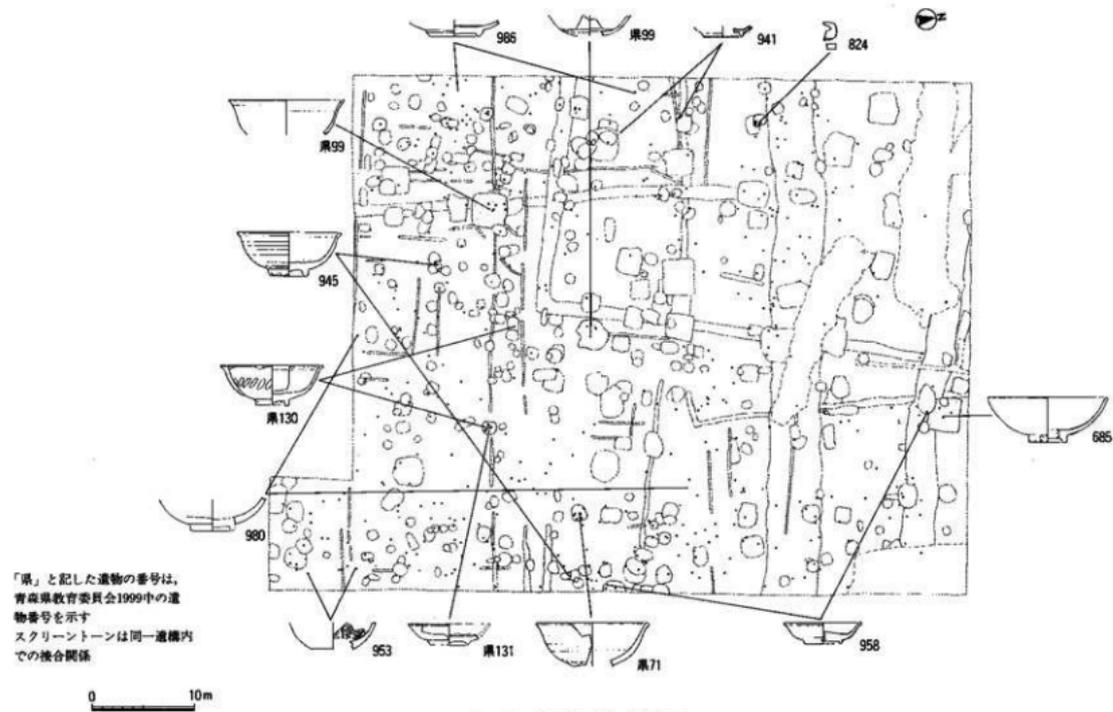


第27図 瓦器接合関係図

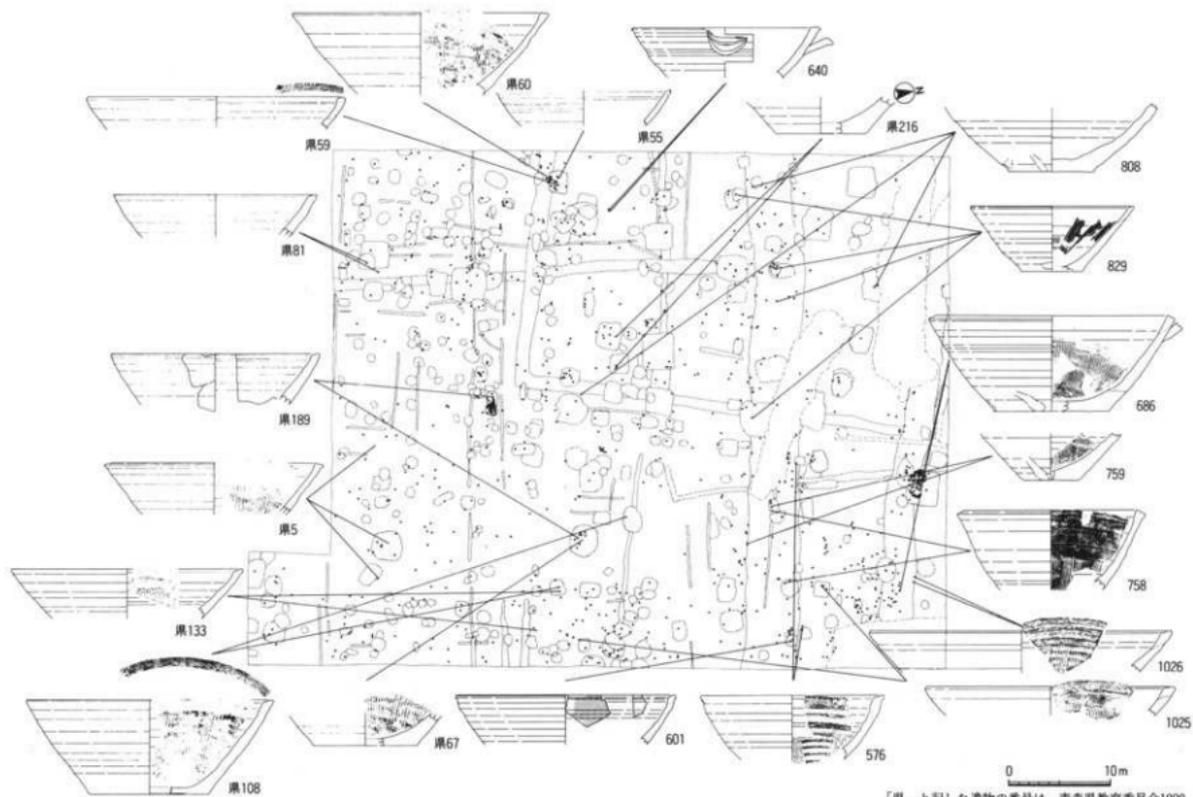


「黒」と記した遺物の番号は、
青森県教育委員会1999中の遺
物番号を示す
スクリーン・トーンは同一遺構内
での接合関係

第20図 瀬戸美濃接合関係図

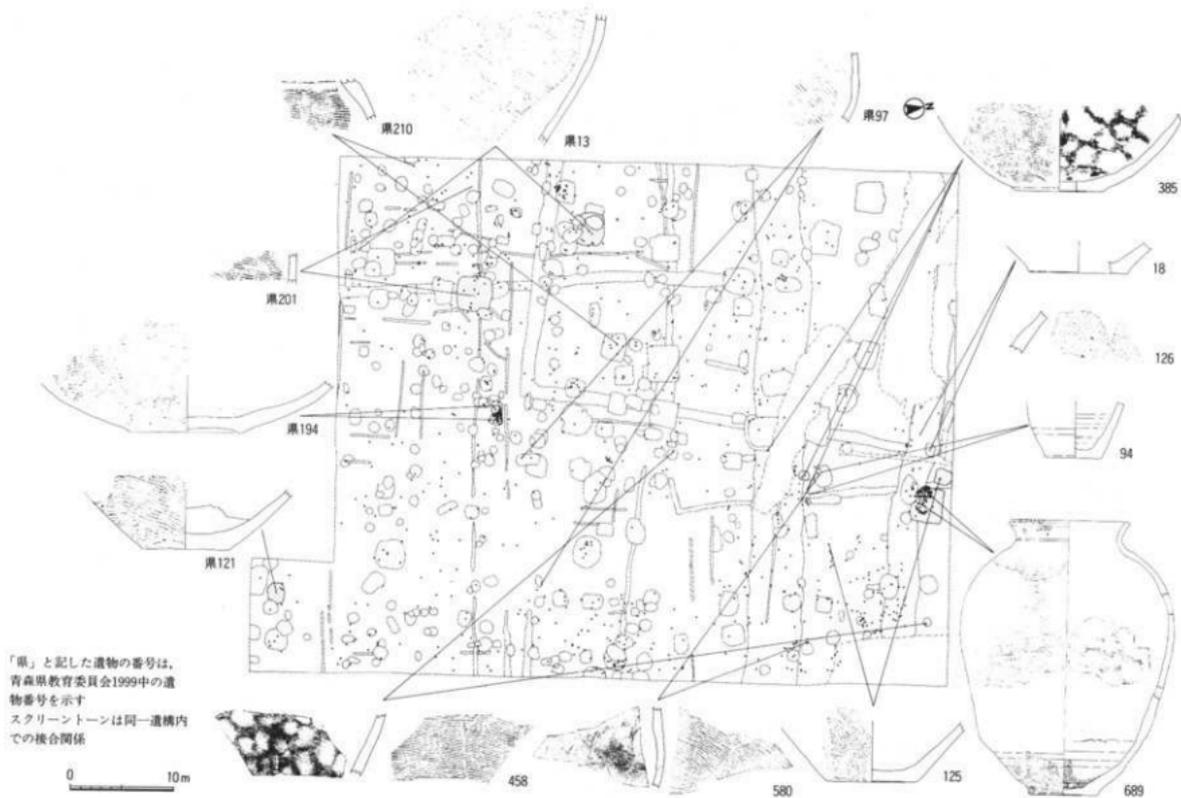


第29図 貿易陶磁接合関係図

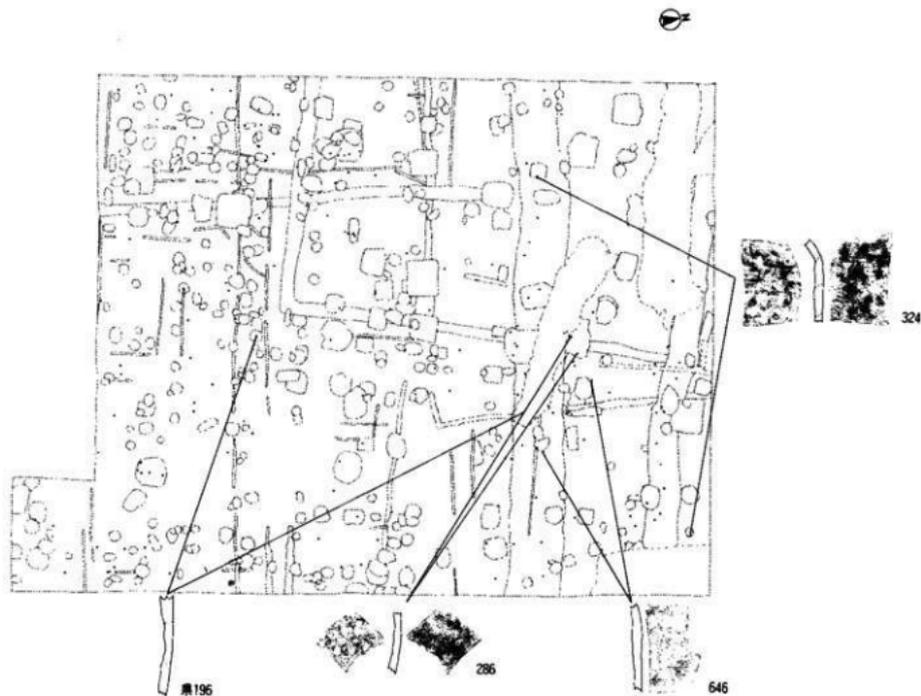


第30図 珠洲すり鉢接合関係図

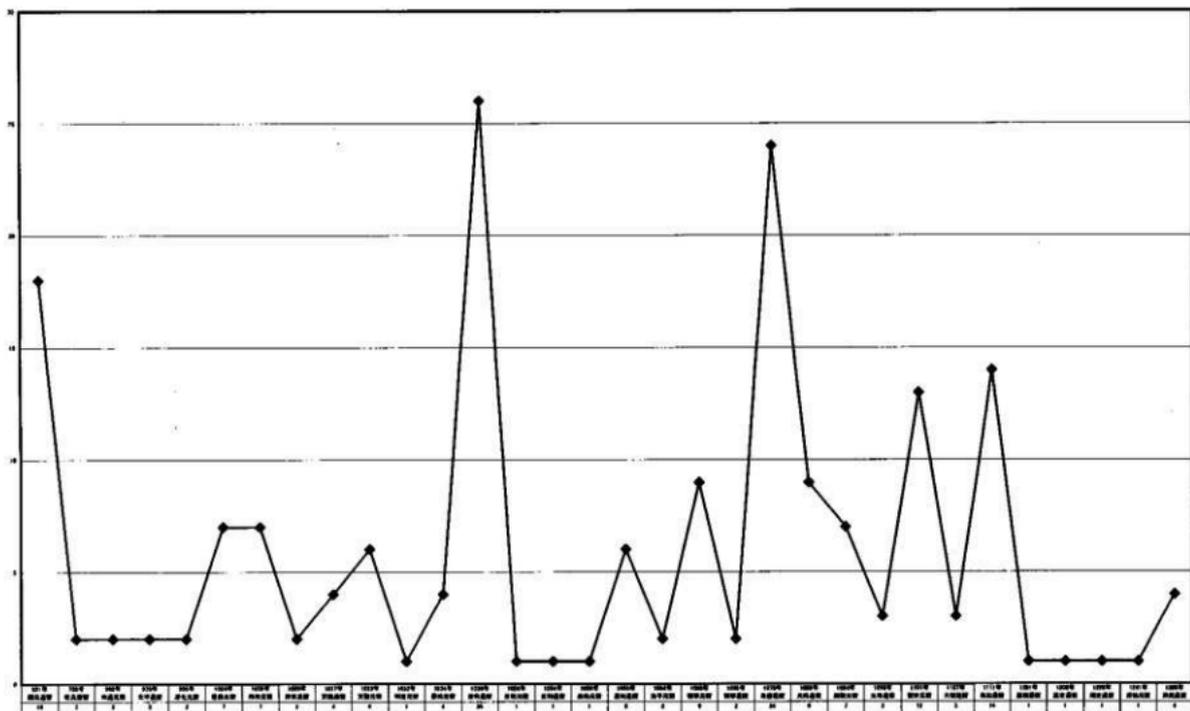
「鉢」と記した遺物の番号は、青森県教育委員会1999
中の遺物番号を示す
スクリーン・トーンは同一遺構内での接合関係



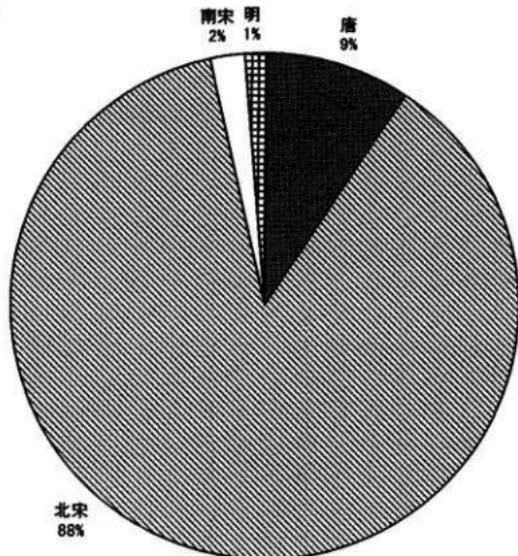
第31図 珠洲壺・繋合関係図



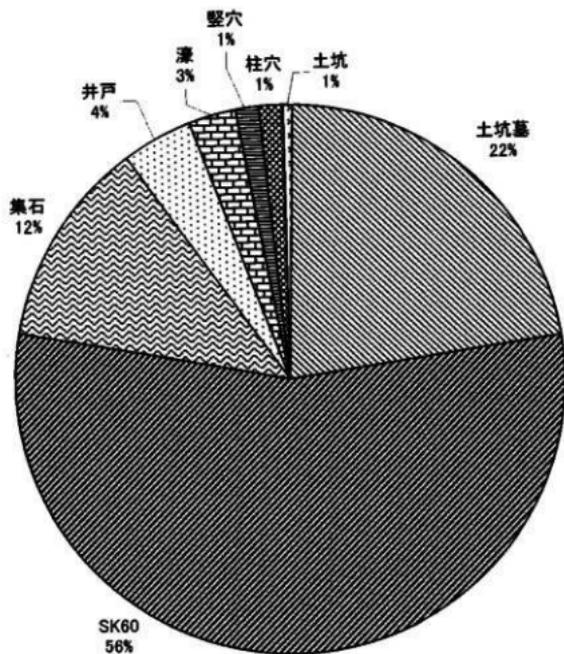
第32図 瓷器系陶器・信楽接合関係図



第33図 第86・87次調査出土銭貨構成



第34図 第86・87次調査出土銭貨鑄造国



第35図 銭貨出土遺構の性格

ある。遺跡調査における出土銭貨の多くはこのようなものであり、発掘によって得られたこれらの銭貨を活用することが本稿の課題である。今年度の成果を加えつつ、中世港湾遺跡として流通のネットワークで重要な役割を果たした十三湊遺跡を中心に銭貨の様相を述べていきたい。

(b) 98年度調査出土銭貨の分類

本年度の調査では、包含層から135枚、遺構内から144枚、計279枚の銭貨が出土した。本来は銭貨が本銭であるか模倣銭であるか、あるいは今回判読不能として扱ったものに含まれるであろう無文銭の問題を明らかにして考えるべきではあるが、ここでは銭文上の分類（永井1999）のみにとどめてその構成を提示する（第33図）。

判読可能なものは32種類186枚であった。銭貨名別に分類すると、最も多いのは皇宋通寶（1038年括弧内は初鑄年以下同様）の26枚である。ついで、元豊通寶（1078年）24枚、開元通寶（621年）18枚、聖宋通寶（1102年）13枚、政和通寶（1111年）14枚、熙寧元寶（1068年）10枚と続く。

最古銭は開元通寶、最新銭は洪武通寶（1368年）である。鑄造国は、唐、北宋、南宋、明があるが、中でも北宋銭が最も多い。北宋銭162枚（84%）、唐銭20枚（11%）、南宋銭4枚（2%）、明銭4枚（2%）の順である（第34図）。

遺構の性格別にみても、土坑114枚（79%）、集石18枚（12%）、井戸6枚（4%）、漆4枚（3%）、竪穴2枚（1%）、柱穴2枚（1%）となる（第35図）。土坑のなかでSK60の緋銭（さし銭）83枚（56%）をのぞくと、他の土坑からの出土は33枚（23%）である。この中の32枚（22%）については、炭化物、骨片、鉄釘のうち1つ以上を伴し土坑墓からの出土である。

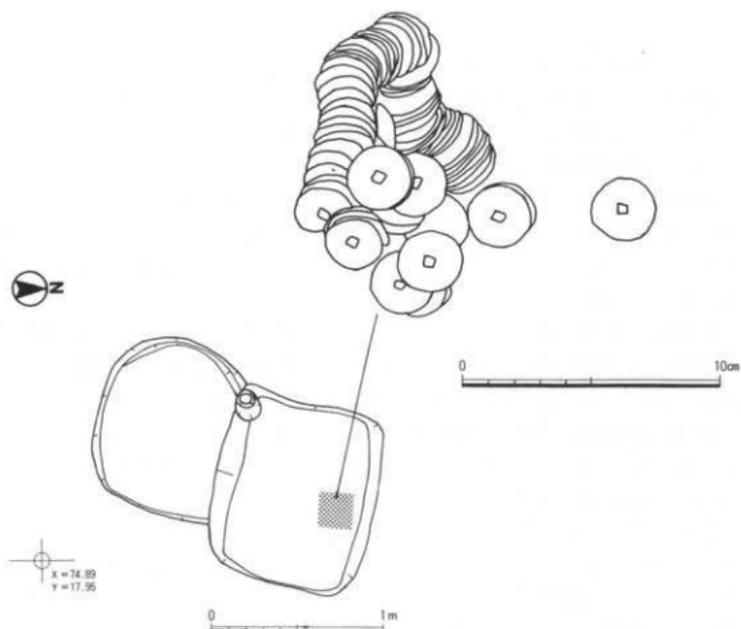
また特殊な例として、雨乞銭と呼ばれる銭文の四隅に穴をあけたものが1点出土している。

(c) SK60出土の緋銭について

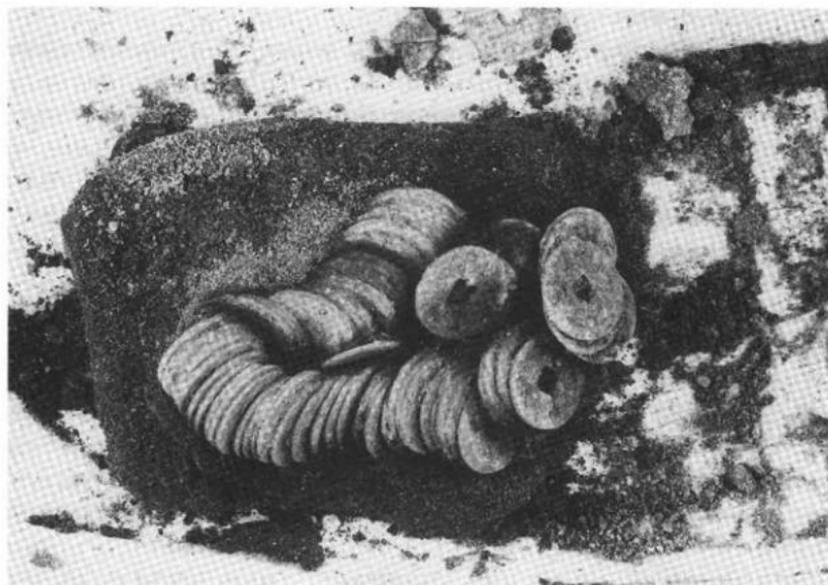
SK60は、十三湊遺跡を東西に走るSD02の南側に位置する。またSK60の南にはSD02に並行する道路が存在する。土坑は平面形が方形であり長径104cm、短径94cm、深さ48cmである（第36図）。SK60では、緋銭が一層出土している（第36・37図）。緋銭は、皇宋通寶14枚、元豊通寶10枚、聖宋通寶8枚、開元通寶・政和通寶各5枚、祥符通寶（1008年）・熙寧元寶・元祐通寶（1086年）各4枚、景德元寶（1004年）・紹聖元寶（1094年）・元符通寶（1098年）各3枚、天聖元寶（1013年）2枚、天禧通寶（1017年）・明道元寶（1032年）・嘉祐通寶（1056年）・熙寧通寶（1068年）各1枚、判読不能13枚からなり、縞から外れたものと考えられる元豊通寶1枚と合わせて計83枚となる（第38図）。

この緋銭の年代観を推定するため、鈴木公雄の一括出土銭の時期区分を参考として考えていきたい。最古銭は621年の開元通寶、最新銭は1111年の政和通寶である。開元通寶以外が北宋銭であり、64枚（78%）をしめる。出土銭貨の初鑄年が上限年代を示すと考えれば、1期の年代決定銭種である皇宋元寶（1253年）・景定元寶（1260年）・咸淳元寶（1266年）以前を初鑄年とする銭貨ばかりである。だが83枚の出土のみでこれを1期のものとするには確証がもてない。しかし、3期の年代決定銭種である至正通寶（1351年）・天定通寶（1360年）・大中通寶（1361年）・大義通寶（1361年）・洪武通寶（1368年）のうち、洪武通寶については日本国内にある程度の量が入っており、少ない枚数の一括出土銭のなかにも一定量出土しても不思議ではない。従って、洪武通寶が緋銭の中にないという事実は年代観の一つの大きな基準になると考える。

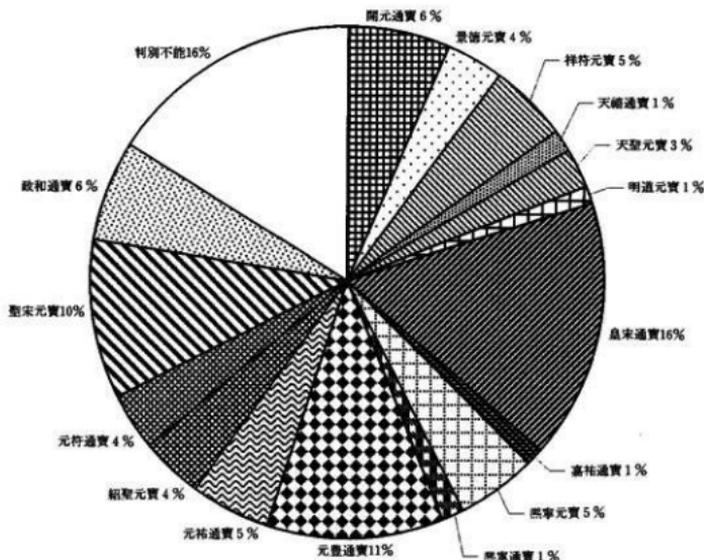
また外容器は確認できなかったが、遺構内の相伴遺物として、瓦器火鉢、瀬戸美濃天目茶碗（後I



第36図 SK60緡銭出土状況図（縮尺1/20，銭の縮尺1/2）



第37図 SK60出土緡銭



第38図 緋銭銭種構成

期)、珠洲壺(V期)が出土した。瀬戸美濃天目茶碗は14世紀末~15世紀初頭、珠洲は14世紀末~15世紀中葉の年代観が与えられる。また瓦器は東北地方に見られるのは15世紀代になってからという見解がある(近江1997)。よってこの緋銭は、鈴木3の3期以前のものであり、SK60の年代は、15世紀初頭と考えるのがもっとも整合性が高いと考える。

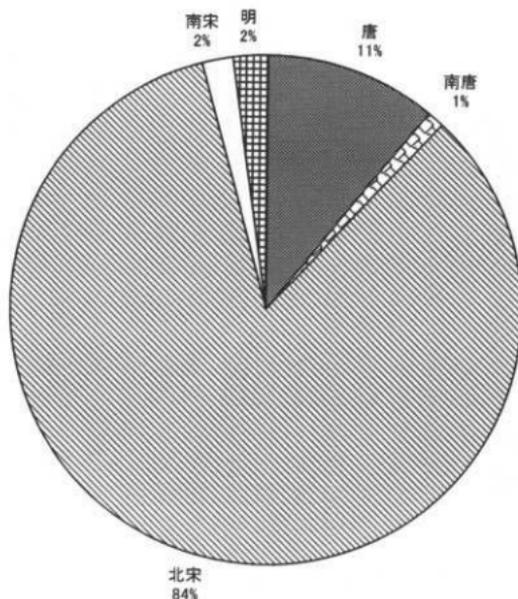
この土坑の性格について考えると、堀、溝付近からの出土という点では、内山俊身が述べているように、「一遍上人聖絵」巻五第四段の常陸の国で溝の中から銭を掘り出している場面に類似する(内山1998)。工藤清泰によれば青森県浪岡城においても境界を示す堀からの出土例がある(工藤1995)。このSK60の銭も呪的な埋納銭としての性格を考察することが出来る。またSK60は推定安藤氏館と濵の南側、家臣団屋敷と東西に走る道の北側に位置し、呪的な埋納銭をもつ境界としての評価を与えたい。

SD02は遺跡全体からみると、安藤氏館と家臣団屋敷地区の境界である。その境界が廃絶することは、他の境界を維持する機能を持つものが必要となり、SK60に銭を埋納した可能性が高い。SK60は、15世紀初頭の安藤氏館およびそこを中心とする境界の維持を果たすためのものであったと考える。

(d) 十三湊遺跡の出土銭貨

93年度の歴博の調査以降、合計で562枚が出土している(市浦村教育委員会・富山大学考古学研究室1997)。今回の調査で資料的に倍増したことになる。最古銭は開元通寶であり、最新銭は中世に限ると永樂通寶(1408年)である。今回の調査で、十三湊遺跡での未発見銭種を確認した。新たな銭貨は、宋通元寶(960年)、淳化元寶(990年)、明道元寶(1032年)、至和通寶(1054年)、熙寧通寶(1068年)、大觀通寶(1107年)、嘉定通寶(1208年)、紹定通寶(1228年)、淳祐元寶(1241年)の9種である。

鑄造国は、唐銭35枚(9%)、北宋銭351枚(88%)、南宋銭9枚(2%)、明銭5枚(1%)となる(第



第39図 十三湊遺跡出土銭貨製造国

39図)。銭種では、皇宋通寶の60枚が最も多く、元豊通寶57枚、開元通寶32枚、元祐通寶28枚、熙寧元寶23枚、聖宋通寶22枚、政和通寶20枚が中世銭貨400枚のうち各々5%以上を占める。これらはすべて北宋銭であり、洪武通寶、永樂通寶の割合はこれらに比べ低い。上述のような傾向に対して、嶋谷和彦は「出土銭貨の最新銭が、その遺構・遺跡の上限年代を示すと考えれば、15世紀第一四半期という十三湊遺跡の衰退の一端が窺える」(嶋谷1997)という見解を示している。

(e) 東北地方及び日本海側中世遺跡との比較

東北地方及び日本海側の中世遺跡における出土銭貨の様相から十三湊遺跡を検討する。遺跡によって出土枚数に開きがあるので判別可能な中世銭貨の割合から比較していく(第40・41図)。

青森県境関館遺跡(青森県教育委員会1986)は、珠洲、瀬戸美濃、青磁、白磁などの年代観により、13世紀前半から16世紀代の活動が窺える。最盛期は14世紀後半から15世紀前半であり、十三湊と同じく安藤氏に関連する遺跡と推定される。銭貨は、合計683枚が出土し、うち618枚が判読できる。最古銭は開元通寶、最新銭は寛永通寶である。最多の銭貨は、熙寧元寶、元豊通寶でともに76枚出土している。以下、元祐通寶61枚、開元通寶49枚、皇宋通寶48枚と続く。

青森県根城跡(八戸市教育委員会1993)は、珠洲、瀬戸美濃、青磁、肥前磁器など中近世の陶磁器が出土している。年代は、12世紀から20世紀が与えられている。南部氏は、建武元年(1334)から寛永4年(1627)までここに居を構えた。合計1195枚の銭貨が出土し、判別可能な銭貨は、634枚である。最古銭は開元通寶、最新銭は宣徳通寶(1433年)である。最も出土枚数が多いのは、永樂通寶であり139枚に

のはる。ついで洪武通寶114枚、元豊通寶53枚、皇宋通寶44枚、開元通寶39枚と続く。

青森県尻八館跡（尻八館調査委員会1981）は、13世紀後半から16世紀の年代観が与えられる。銭貨は、193枚以上出土している。判別可能な119枚中、最古銭は和同開珎を除くと開元通寶である。最新銭は永楽通寶である。出土枚数は、洪武通寶13枚、永楽通寶12枚、元豊通寶11枚、皇宋通寶11枚、聖宋元寶7枚と続く。

青森県浪岡城跡（平山1999）は、15世紀から16世紀の建物の変遷が明らかにされている。多くの一括出土銭の事例があり、判別可能なものは7420枚である。最古銭は開元通寶であり、最新銭は洪徳通寶（1470年）である。洪武通寶の出土枚数が最も多く1185枚である。以下、皇宋通寶644枚、元豊通寶617枚、永楽通寶596枚、元祐通寶482枚と続く。

秋田県後城跡（秋田地所・秋田県教育委員会1978）は、珠洲系陶器、瀬戸美濃、青磁、白磁、染付などの年代観によって13世紀から16世紀中葉にかけての遺跡と考えられている。そして、15世紀代から16世紀代がその最盛期であった。津軽十三湊から分離した安藤氏の初期の居城とする説もある。最古銭は開元通寶



1十三湊遺跡 2尻八館跡 3境岡館遺跡
4浪岡城跡 5根城跡 6後城跡 7普正寺遺跡

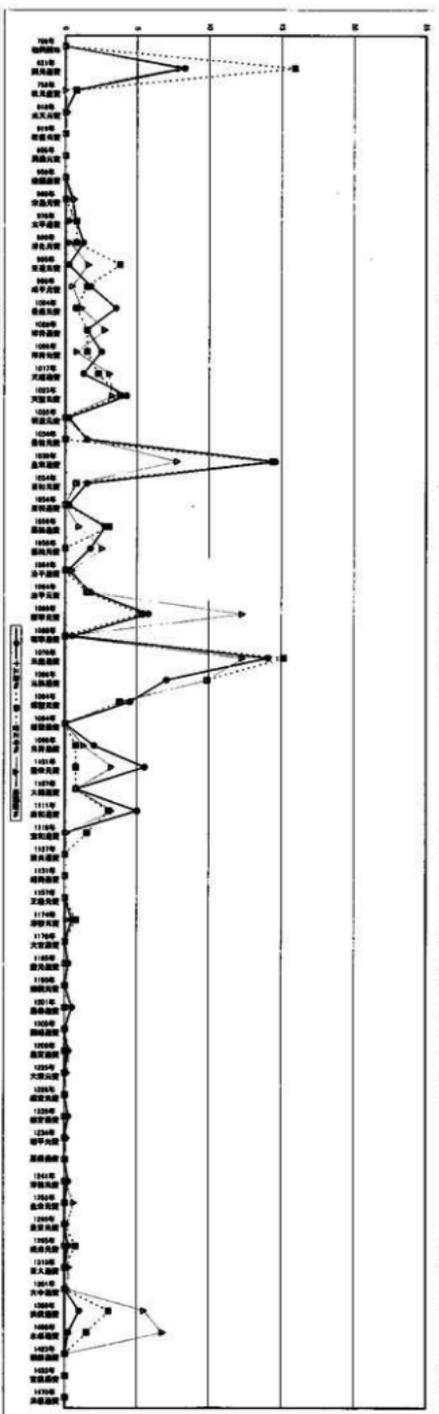
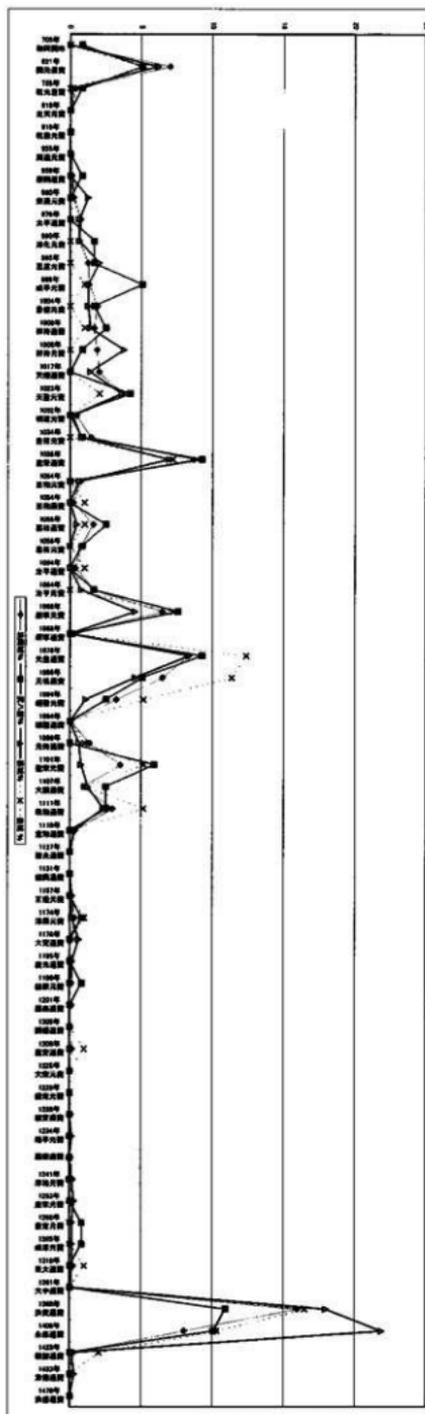
第40図 対象遺跡位置図

であり、寛永通寶2枚を除くと最新銭は朝鮮通寶（1423年）である。洪武通寶が最も多く16枚出土している。元豊通寶12枚、元祐通寶11枚、永楽通寶10枚、治平通寶7枚と続く。

石川県普正寺遺跡（石川県埋蔵文化財センター1984）は、14世紀に集落としての活動が始まり、15世紀初めに最盛期を迎えているが、15世紀中頃には砂丘のため廃絶をむかえている。犀川河口に位置し、北加賀地方の中核港湾集落と考えられている。162枚の出土銭貨のうち、132枚が判別可能であった。最古銭は開元通寶、最新銭は永楽通寶である。最多の出土銭貨は、開元通寶21枚であり以下元豊通寶20枚、皇宋通寶19枚、元祐通寶13枚、熙寧元寶7枚と続く。

これらの遺跡を比較した結果、出土銭貨のピークは、皇宋通寶から政和通寶に至る部分および、明初期の洪武通寶、永楽通寶の部分に認めることが出来る（第39図）。前者は、各遺跡とも似たような動きを示しており、これらの遺跡が最盛期を迎えていた、13世紀から14世紀の日本海側における銭貨流通の様相を示すと考える。後者の明代の洪武通寶、永楽通寶の部分は、十三湊遺跡、境岡館遺跡、普正寺遺跡

第41圖 遠時別出土鈔貨構成



と後城遺跡、尻八館、根城の2つのグループに分かれる。十三湊、境関館、普正寺は、三者の洪武通寶、永樂通寶の平均が約3.2%であるのに対して、浪岡城、後城、尻八館、根城は約18%にもなる。

これは、15世紀中葉前後に衰退、廃絶を迎えた遺跡と、15世紀中葉以降も一定の営みが継続されていた遺跡を示すと考える。

(f) おわりに

以上のように、遺跡の出土銭貨は、必ずしも一括の出土ではない。だが資料的には、遺跡の盛衰を推定する点において一括出土銭と同じく有効である。一括出土銭ほど時期を限定できないという欠点は持っているが、人の手から離れてしまい、動きの止まった出土銭よりも銭貨のもつ経済流通の側面を鮮明に捉えることができる。本稿では、出土銭貨の比率を示しパターン化し分析を加えた。特に十三湊のような流通拠点と推定される遺跡では、出土銭貨の比率が遺跡あるいは遺跡内の場の盛衰を示すことが出来ると考える。またSK60の摺銭の意味は十三湊遺跡の南限から出土した23,442枚の一括出土銭との関係も考えられるのではないだろうか。今後の課題としては、SK60の摺銭の性格を十三湊遺跡の南限から出土した23,442枚の一括出土銭との関係からも考える必要がある。また遺跡内あるいは遺跡単位の比較から性格、盛衰、更にそれらの普遍性・地域性といった点も検討が可能であろう。(四部 来)

(註1)ただし、この時期区分は、1000枚以上の一括埋蔵銭を対象としている。

(註2)十三湊遺跡南限付近から出土した一括埋蔵銭は、永樂通寶を最新銭とする鈴木¹¹の4期(15世紀第2四半期～第3四半期)、永井の4期(15世紀第1四半期～第2四半期)に該当する。この資料中の永樂通寶出現率は、7.7%である。他の鈴木4期の一括出土銭事例における平均が3.48%であるのに対して、青森県の事例はいずれも高い数値を示している。これが銭貨流通の違いによるものか、埋蔵銭種の選択を意味するものかは今後の課題である。十三湊遺跡の既往の調査区からの出土銭貨の様相とは異なっており、埋蔵年代のみならず遺跡内の空間構造等にも注意が必要であろう。

(4) 砥石

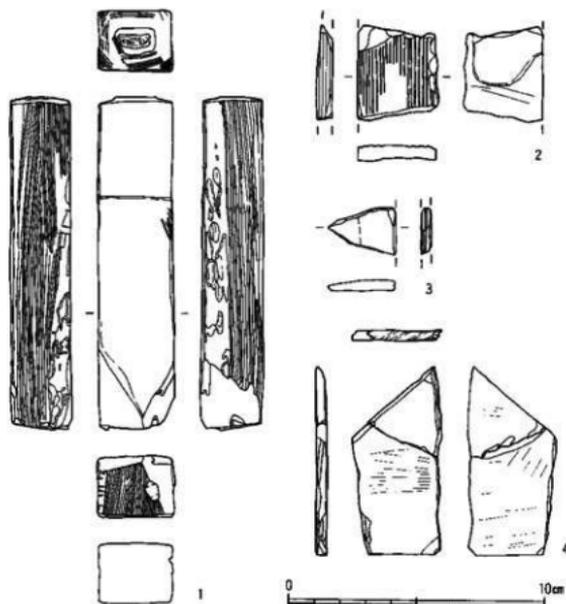
(a) はじめに

十三湊遺跡は本州島と北海道・樺太などをつなぐ北方交易の港の役割を担っていたと考えられており、いわゆる「三津七湊」の一つに数えられる。その交易品については、陶磁器類の考察がよく知られるところである。しかしその他の材質の製品、例えば木・金属・石製品についての様相の把握にはまだ至っていないのが実情である。そうした研究の現状の中で草戸千軒町遺跡においては、福島政文によって、砥石がある程度特定の生産地から消費地へ搬入されているということが明らかにされており(福島1996)、陶磁器の様相と比較しても興味深い。そこで本稿では十三湊遺跡出土の砥石を分析し、従来の土器・陶磁器の研究とは別の角度で当遺跡の実態に迫ってみたい。

なお本稿で分析する資料は、第10・11次調査(青森県教育委員会1996)、第15・16・17次調査(同1997)、第18・76次調査(青森県市浦村教育委員会未刊行)、第74・75次調査(青森県教育委員会1998)、第86次調査(青森県市浦村教育委員会・富山大学考古学研究室、本調査区)、第87次調査(青森県教育委員会1999)の出土砥石である。

(b) 研究方法

砥石の分析方法としては、福島政文の論考を参考に、石材を基にした砥石の分類と、寸法・重量を基



第42図 砥石(仕上げ砥)の諸例

(全て筆者が実測。1のみ第18次調査区出土。2～4は第86・87次調査出土)

熊本県), 仕上げ砥では鳴滝砥(現, 京都府), 対馬砥(現, 長崎県)などがある。先学の成果によって、先に挙げた石材の他、中砥の浄教寺砥(現, 福井県), 上野系砥(現, 群馬県), 「在地産A」と呼ばれる現, 新潟県北部～山形県に分布する砥石(沙見1999, 水戸1999)などの石材の同定がなされているので、筆者もそれにならいたい。ただし石材の比定は肉眼観察によって行っており、現状において感覚的であるとの誘いは免れない。例えば「鳴滝砥」については、丹波国～山城国にかけてひろがるいくつもの砥石産出坑のうち、範囲を限定して「鳴滝」と呼称されている歴史の経緯がある(沙見前掲)が、筆者は遺跡出土の砥石を「鳴滝」「鳴滝近郊」というように分別できないし、そこまで細別する必要性を感じない。従って「丹波・鳴滝系砥石」と呼称しておく。なお「在地系」という項目を設けているが、これは生産地の不明な各種石材を指しており、実際に「在地」のものである保証には乏しい。ただし砂岩製砥石の多くについては、遺構に出土する礫で同一の石材を目にしているので在地産の可能性は高いと思う。

計量の前に個別資料の計測についても、若干述べておく必要があろう。計測方法については、砥石が製品状態において直方体に加工されている(第42図の1)ことから、その加工痕のある面とその対向面との距離を測り、長さ・幅・厚さとした。しかし砥石は身を減らしてこそ存在意義を有する品であるため、完形で遺跡に出土することはほとんど無く、どの面にも加工痕を残していないことはしばしばである。従って加工痕の見当たらない資料に関しては、①平面形が線対称形をなしているものはその対称軸および直交する軸の最大長を計測する。②平面不整形のものは竹岡敏樹の礫の計測法(竹岡1989)を参

にした計量的研究を中心にやりたい(福島前掲)。

具体的には、砥石を石材別・用途別に分類し、製作時の加工痕が残存しているか、製作当初の姿(=原形)を留めているかという資料の区別化をはかり、しかる後に全資料に対して長さ・幅・厚さ・重量について計測を行った。

ここで砥石石材の同定について、三補足したい。中世の砥石は、砥ぎの用途別に「荒砥」「中砥」「仕上げ砥」という区別をされており、それぞれに対応した石材産出地(=砥石生産地)が存在する。従って砥石は石材産出地の名前で呼称されるのが通常である。例として、中砥では伊予砥(現, 愛媛県), 天草砥(現,

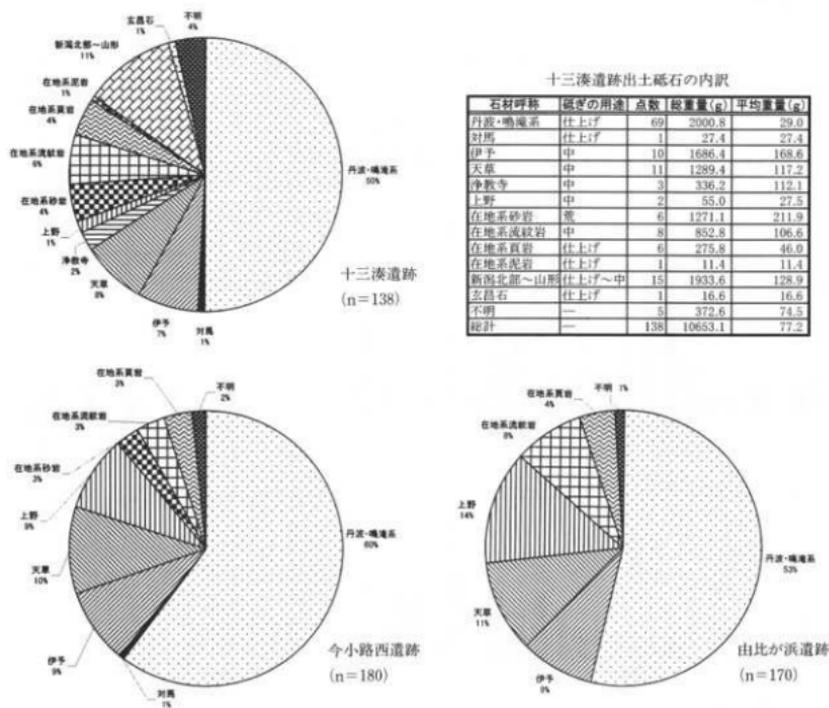
考にして、最大長を通る線分を軸として計測する。という方法をとった。これによって、復原できうる限りの砥石の大きさを示すことができると考えている。

こうした計測を行なうのは、資料の大きさ（寸法、見かけの大きさ、重量など）に関する問題について、数値として示す必要があると考えるからである。一般に砥石は、出土状態では先に述べた事情によりすでに変形しているの、「生の」状況を示していない。そのため加工痕のついた資料はともかく、それ以外の多くの資料について寸法を測ることについて、忌避感を感じられていると思う。しかし「使用後の」寸法・形態であることに留意してそれを利用すれば、遺跡毎の砥石の利用量という、量的な側面での、より豊かな情報を引き出すことができるのではないかと考えるのである。

(c) 分析結果

従来考えられている、中・近世の十三湊遺跡の時間的推移を大まかに説明すると、遺跡の形成期であるⅠ期（13世紀後半～14世紀初）、繁栄期であるⅡa・Ⅱb期（14世紀後半～15世紀前半）、繁栄期の都市計画を破壊するⅡc期（15世紀中頃）、近世の町として再開されるⅢ期（17世紀以降）の諸段階に区分される（青森県市浦村教育委員会1996、青森県市浦村教育委員会・富山大学考古学研究室1998）。

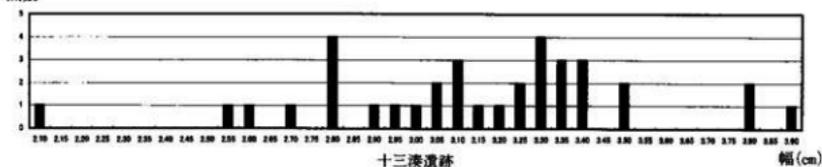
しかし分析する砥石は出土地点が不明であったり、包含層のものであることが多く、時期毎に詳細に



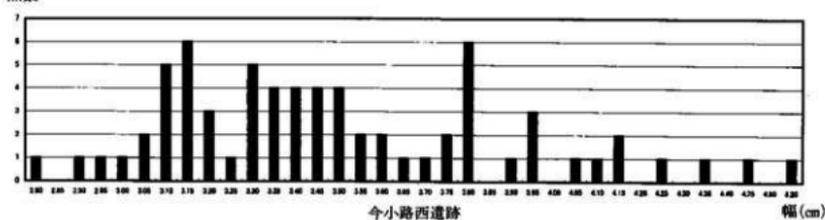
分析することは困難である。従って本稿では、遺構外出土の資料を、形態や加工痕跡から中世と近世～現代と区別して、中世の砥石は「14世紀後半～15世紀中頃の資料」と概括して考察する。I期の資料であることを考慮の外においたのは、調査区においてI期の遺構形成は僅少であり、人口の集住をみとめられないので、砥石の持ち主もおおよそI期よりはII期以降に存在していたであろう、という推測をしたためである。遺構出土の砥石にI期のものが1点も無いこともいくらかの傍証となるであろう。

石材別構成比：まず石材別に内訳を作成すると、十三湊遺跡出土の砥石のほぼ半数が丹波・鳴滝系の仕上げ砥石で占められていることが分かる(第43図)。微量に存在する他の石材の仕上げ砥石を加えると、仕上げ砥石は半数を少し越えることになる。また対馬産砥石の出土量が圧倒的に少ないことは特徴的である。広島県草戸千軒町遺跡の「泥岩製砥石」(福島前掲)はほぼ対馬産砥石と見てよいであろうから、これは対照的な状況であるといえる。草戸千軒町遺跡で対馬産砥石が漆器製作の道具として用いられ、その分布の集中する地点が漆器製作の場であると示唆されている事実を考慮すると、少なくとも重ね塗りを行なうような高級な漆器の製作跡は、十三湊遺跡では現在のところ存在していない可能性を指摘できる。また僅か1点ではあるが、硯石の剝離した剥片を砥石に転用したものがある。これは短側縁を斜めに切断しており、表面積の一番広い面の両方が研がれている(第42図の4)。石質から仕上げ砥石に使用されていることは間違いないであろう。

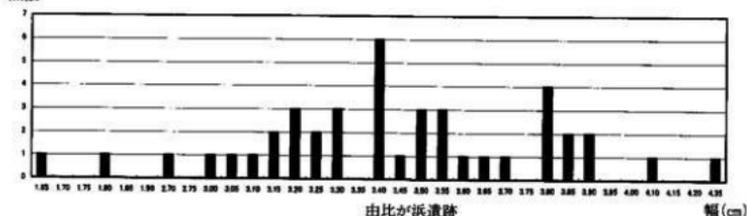
点数



点数



点数



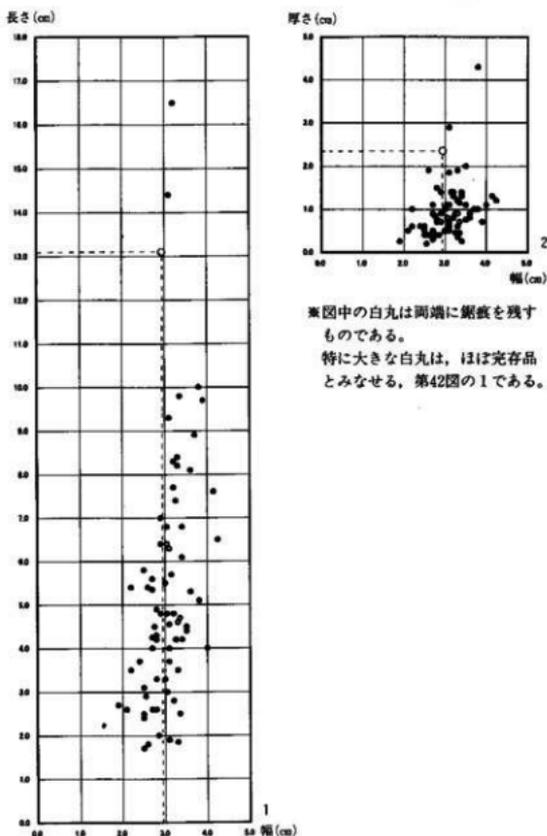
第44図 仕上げ砥の切り出し幅の分布(1)

内沢の第2位以下には、新潟北部～山形の中世遺跡で散見する石材（「在地産A」）、伊予・天草系の砥石などの中砥が続く。中砥は数の上で特に優越する石材は無いが、十三湊遺跡の近隣にあたる新潟北部～山形の砥石がやや優っているかもしれない。ところで日本海沿岸地域において最も高名な、浄教寺砥石が微量なのは注目できる。このことについては、十三湊遺跡が朝倉氏の一乗谷入府以前に存在した遺跡であるため、浄教寺砥石の活発な搬入がなかったという可能性もある。しかし最近の論考から、浄教寺砥石はその生産地の所在する越前国でも「面」的な分布を見せず、むしろ濃密な分布を示すのは特定の遺跡である、即ち「点」的に存在するということが述べられているため（富山1999）、浄教寺砥石は何らかの選択性を強く反映して搬入されている可能性が示唆される。

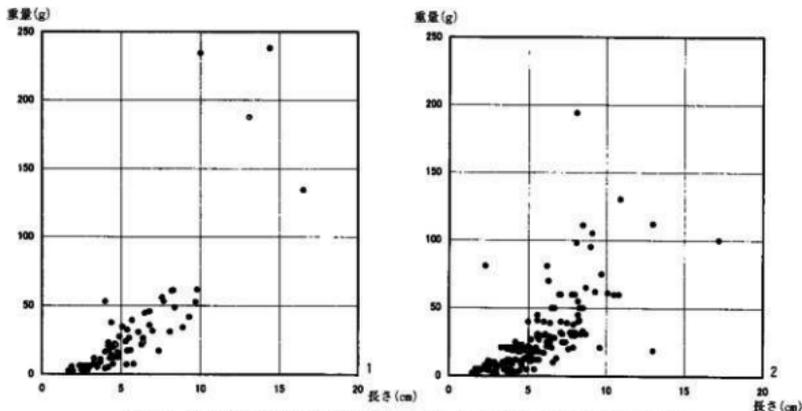
砂岩、即ち荒砥の出土は6点であり、特に遺跡のどこかに集中して出土することも無い。砂岩製砥石は目の粗さから、補修用に使われたというよりは、おそらく金属加工業に従事する工人によって使用された

ことが推測される。十三湊遺跡における荒砥の出土状態は、極めて散漫であり、当地において工人の居住区はまだ見つかってはいないとみることできる。しかし砂岩は出土量がもともとかなり少ないものであり、遺跡によっては出土しないこともある。また工人の全てが荒砥を用いるわけではないことは自明である。従って少なくとも金属加工業という職種については、十三湊遺跡においてまだ密集した形態をみる事ができていないと結論するのが妥当であろう。

個別資料の分析：ここからは「仕上げ砥」「中砥」「荒砥」というそれぞれの用途毎の分析において得られた結果を述べる。まず仕上げ砥石から述べたい。丹波・鳴滝系砥石および「在地産頁岩」がこれに相当する。長側面の両面に切截時の鋸痕を残している砥石のみ抽出して、幅を計測したところ、正規分布をとらず2.80cm、3.05～3.10cm、3.3cm前後のそれぞれに峰が現れた(第44図)。しかし1寸=3.03cmとして敢えて計算を



第45図 十三湊遺跡出土仕上げ砥の幅と長さ・厚さの分布
(1: 幅と長さの分布, 2: 幅と厚さの分布)



第48図 仕上げ砥の長さ¹⁾と重量の分布 (1:十三湊遺跡, 2:草戸千軒町遺跡)

※十三湊遺跡の白抜きの点は、長さが完存のものを示す。

試みると、先程の峰はそれぞれ9分、1寸強、1寸1分に相当する。憶測を重ねると、これら仕上げ砥石を切り出す目的の幅は1寸であり、その前後1分が切断の際の誤差として考えることができる。とはいえ実際には、この峰以外の数値に収まっている資料も存在しているので積極的に支持できない。なお十三湊遺跡では長さ・幅が完存している状態の丹波・鳴滝系砥石が1点出土している(第40図の1)。その寸法は長さ13.1cm、幅2.95cm、厚さ2.3~2.4cmである。長さ・幅ともに1寸=3.03cmで割り切れるものではない。こうした現状では、計測した寸法を当時の尺度に復元する試みは避けておくのが穏当といえよう。

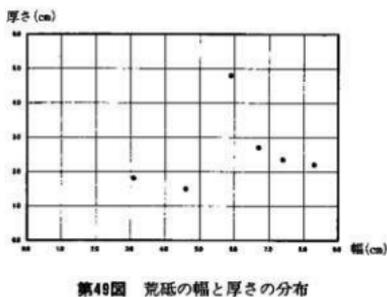
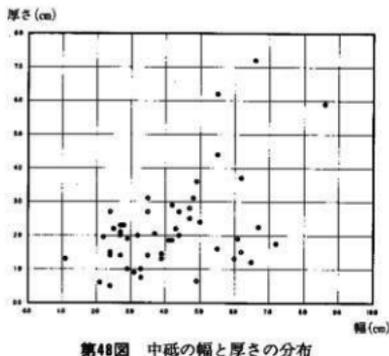
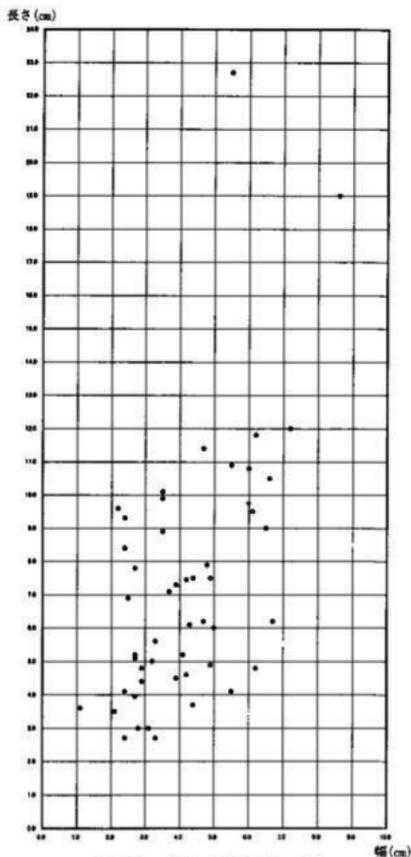
出土した仕上げ砥石の長さは様々である(第45図)。先述した、製品の状態でほぼ完存している砥石が標準的な仕上げ砥の寸法であると考えて比較すると、仕上げ砥石の3分の2以上がその半分の長さに満たない。長さ・幅ともに3cmに満たない砥石の破片も存在する。こうした砥石は厚みも0.5cm前後と薄いことが多いので、当然重量は軽い。長さ²⁾と重量の関係を示した図を参照する(第46図)と、そうした砥石の一群が看取されるであろう。

中砥には比較的大型で断面が正方形に近いものがある一方、板状の形態をなし、仕上げ砥に近い幅と厚みをもつものもある(第47・48図)。同じ産出地の砥石の中でも、そういう二種類の形態の違いを見ることがある。新海北部~山形、上野、伊予・天草系の砥石がそうである。これらの石材は幅広い石質の違いをみせるので、そうした石質に応じて研ぐ対象を変えていたのではないかと推測する。その結果、製品状態において何種類かの形態に分化することもあったのであろう。

荒砥は点数が少ないので多くを述べることはできないが、幅と厚さについて中砥と比較する(第48・49図)と、幅は比較的大型であるが厚みに関してはほぼ同程度であり、幅広の板状をなしている。しかし製品時の状態を残している資料が存在しないので、砂岩製砥石の原形について多くを述べることはできない。

(d) 他遺跡との比較—今小路西遺跡と由比が浜中世集団墓地遺跡を中心に—

以上の分析によって得られた、十三湊遺跡の砥石についての情報は、他遺跡と比較してどのような成果を得ることができるか。本稿では物資の大消費地の一つである、鎌倉との比較を以て考えたい。鎌

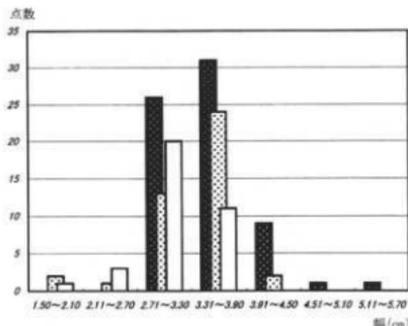


※図中の黒丸が新潟県北部一山形、上野、伊予、天草産の中砥である。

倉の様相の代表として、今小路西遺跡(今小路西遺跡発掘調査団1990)と由比が浜中世集団墓地遺跡(由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査団1997)(以下「由比が浜遺跡」と略)の出土砥石を分析したので、それらとの比較を述べたい。

石材別構成比(第43図)：十三湊遺跡と鎌倉とを比較して対照的なのは、中砥について、十三湊遺跡においては日本海に連絡できる場所に産出地が概ね集中しており、鎌倉においては上野系砥石が優越している点である。これは中砥の流通規模は、列島では日本海岸・太平洋岸で二分される可能性を示唆する。

また丹波・鳴滝系砥石が鎌倉では5割を越すのに対して、十三湊遺跡では若干満たないのは、供給量の差を示すのかもしれない。仕上げ砥は主に刃物の補修道具として、あらゆる階層に必須のものであったと考えられている(福島前掲)。その供給量が若干ではあるものの十三湊遺跡で鎌倉よりも量に不足のあることは指摘する必要がある。おそらくは新潟北部一山形県に分布する砥石や、「在地系頁岩」の中



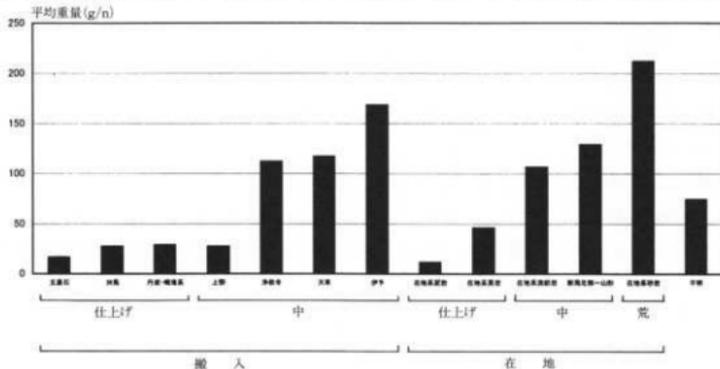
■今小路西 □由比が浜 ○十三湊

第50図 仕上げ砥の切り出し幅の分布(2)

にまとめた石材の一部によって、丹波・鳴滝系砥石の不足分を補充していたのではないかと推察する。個別資料の分析：本稿では、残存状況が良好であるため比較が一番可能な、仕上げ砥石を論じたい。まず仕上げ砥石の幅の分布を調べると、幾分差異を見ることができる。先述した結果から、1寸=3.03cmを中心として、前後1分=0.30cm分を「切り出し時の誤差」と考慮した、2.71~3.30cm分を一つの区間として前後0.60cm毎の度数分布を検討したところ、今小路西遺跡→由比が浜遺跡→十三湊遺跡へと幅の大きさの減少を見る(第50図)。分析した遺跡が不足しているものの、これが砥石の規格の時期的な推移と見ることも可能である。しかし、もし砥石の規格にそれほど変化が無いとすれば、この分析から、仕上げ砥石の寸法が遺跡毎に差異を有していることが判然とする。それを踏まえると、十三湊遺跡は鎌倉に比べると寸法の小さい仕上げ砥石を用いていたことが分かる。三遺跡の仕上げ砥石のほとんどは同じ丹波・鳴滝系砥石であるから、この寸法の差は生産地によるものではなく、消費地における再加工の結果であると考えられる。そして区間をより小さく、0.50cm刻みにして観察すると、今小路西遺跡が十三湊遺跡と同様、二項分布あるいはそれ以上の分布の峰をみせるのに対して、由比が浜遺跡は正規分布に近い分布を示しているようにみえる(第44図)。正規分布をとるほど、規格性の高い砥石の切り出しが可能であったことを示すのではないかと推察する。

これら2つの度数分布から、消費地内部には砥石などの石材加工を行なう工人が存在しており、その結果、遺跡毎に砥石の寸法について微妙な差異を生むのであると推察する。鎌倉においては由比が浜遺跡で、砥石(あるいは硯)鋸が方形竪穴建物22から出土しているということもこの推測の傍証になるであろう。

ところで別の要素である、長さや重量からみた場合どうであろうか。ここで十三湊遺跡出土の砥石を、



第51図 十三湊遺跡出土砥石の平均重量

在地一搬入の二者に区分して、それぞれの平均重量を比較した(第51図)。廃棄状態の砥石の重量が軽いほど、それはその砥石が極限まで消費されたと推されるが、この図から、搬入の方が若干ではあるが、軽いことがわかる。参考に重量の計測値が報告書に記載されている、草戸千軒町遺跡とはほぼ全てが搬入品と推することのできる。仕上げ砥において比較しても、十三湊遺跡の方が小型・軽量の傾向に分布しているようである(第46図)。

結論としてこれらの比較から、仕上げ砥石、特に丹波・鳴滝系砥石が鎌倉に比べてやや不安定な十三湊遺跡では、仕上げ砥石を小さく再分割したり、得られた仕上げ砥石を極限近くまで使用する(図42の3、4)ことによって消費効率を高めていたという実態が窺えた。

(e) おわりに

本稿では十三湊遺跡出土の砥石について、産出地の同定できるものについて主に分析を試みた。不十分な結果が多いものの、他の遺跡と比較した場合、相違点が浮き彫りになることは非常に多いと予想できる。今後も他遺跡との比較を通して、現在の推察とした印象を、ある程度確固としたものとして把握できるように努力したい。また十三湊遺跡の砥石について丹波・鳴滝系砥石の「不足状態」を導いたわけであるが、論拠はまだ不十分であるので省察は別稿に期したい。それには遺跡の年代的位置づけや、砥石の空間的分布などにも注意を払う必要がある。本稿はそういった考古学的研究の基礎的な作業に不足な面をなお多く残しており、今後の課題としたい。

本稿は1999年11月に行われた第12回北陸中世考古学研究会「中世北陸の石文化Ⅰ」に発表した原稿を加筆修正したものである。その際北陸中世考古学研究会の皆様には重要なご教示を得た。なお資料の実見に際して青森県教育庁文化課鈴木和子氏、青森県市浦村教育委員会柳原滋高氏、鎌倉考古学研究所沙見一夫氏のご厚意を賜った。更に沙見氏には、資料の産出地同定から分析観点の諸点に至るまで、丁寧なご教示を賜った。また加筆修正の際には大学院演習において前川要教授、高橋浩二講師、富山大学大学院生の諸氏からご指導ご教示を賜った。末筆ながら記して謝意申し上げます。(田中 学)

(註1) 砥石を切り出す1基々々の産出坑毎に、微妙な石質の違いを見えるという点では、仕上げ砥石の産出坑群と「鳴滝」との関係は、窯(あるいは支群単位)毎に製品の質を異ならせる、陶磁器の窯跡群と窯1基との関係に類似すると考えてよいであろう(沙見一夫氏のご教示による)。

(註2) 砥石の加工痕跡の分析については、内田1990に詳しい。

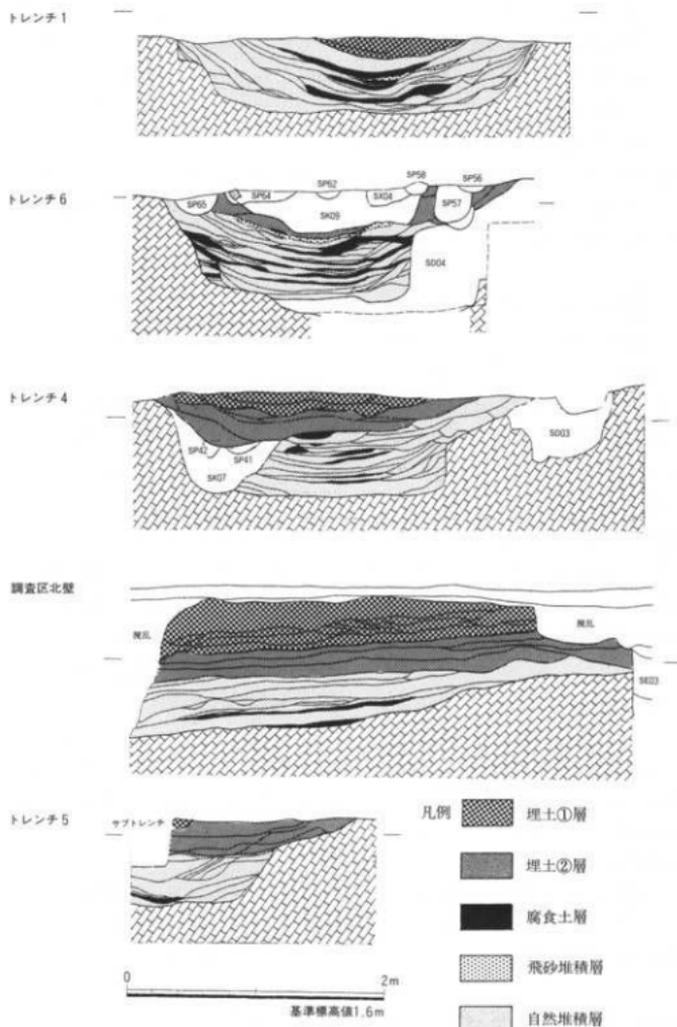
(註3) 分析した鎌倉の二遺跡、特に今小路西遺跡の、年代的位置づけについては、研究者間で一致した見解を得ていると必ずしも言えないが、本稿では今小路西遺跡を13世紀前葉から15世紀前半、由比が浜遺跡を13世紀後半から15世紀初頭と、それぞれの遺跡の開始から終焉を概括したかたちで、十三湊遺跡と比較した。

(註4) 近世高嶋硯の加工においても、原石からの切り出しでは1分の誤差は通例であるという(垣内光次郎氏のご教示による)。

2 遺構の考察

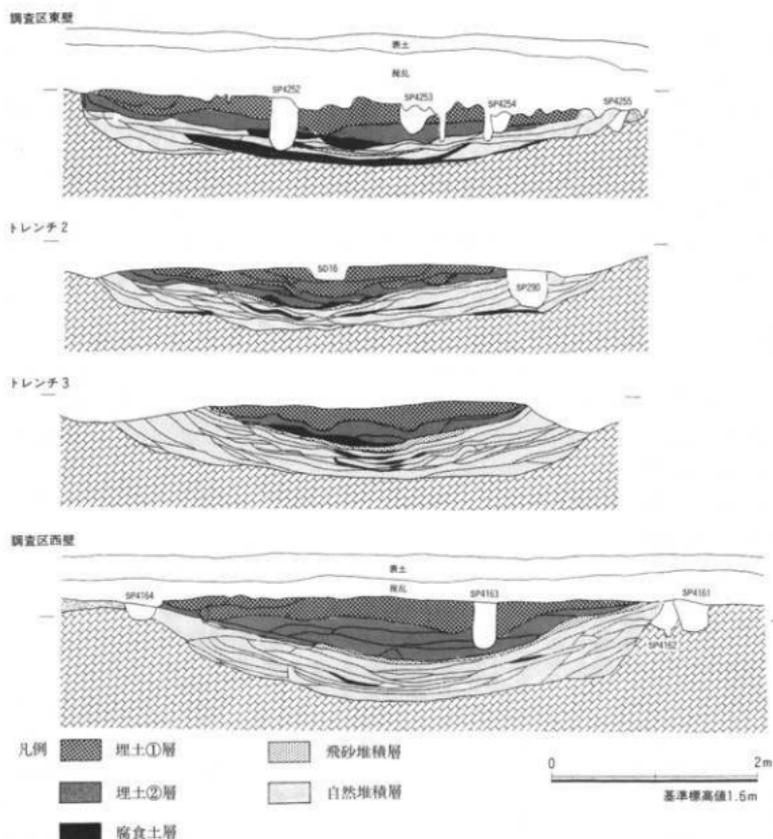
(1) 区画遺構

十三湊遺跡第86・87次調査区において、堀2条、溝・柵88条を検出した。それらのうち大規模な区画



第52図 SD01土層堆積模式図

遺構として十三湊の都市空間形成に重要な役割を果たすと考えられる堀2条 (SD01, SD02) および溝2条 (SD03, SD17) について埋土の分類を行い、埋没過程から堀・溝の性格及び廃絶時期を明らかにする。埋土の分類を行えなかった同規模の溝3条 (SD04, SD22, SD72) についても主軸方位・遺構の先



第53図 SD02土層堆積模式図

後関係から上記の堀2条、溝2条と合わせた変遷について考察を行なう。

(a) 堀 (SD01・02)

埋土分類 (第52・53図)：埋土を大きく5つの性格ごとに区分した。なお区分について補足しておく、腐食土層は一定期間滞水した結果堀底に堆積するシルト状の土であり、飛砂層は十三湊遺跡が砂州上に立地していることから起きる砂の飛来によって堆積する粒子のそろった砂層であり、どちらも自然に堆積した層であることは明らかである。しかし土質・堆積状態等において他の自然堆積土と明確に区別できることから、それぞれの層を他の自然堆積土とは別に区分することとし、その堆積状況を観察した。その結果、堀は2条ともほぼ同じ堆積過程をたどったことがわかる。

基本的に、堀を掘削した後、水の流れのあるところでよくみられるレンズ状の堆積(斜層理)に似た

堆積を重ねる間に飛砂が一度堆積し、そのち水の流れがおさまり有機物が底の方へ堆積してシルト質の腐食土層を形成する。そして最後に黒褐色の土を埋めて堀を廃棄している。埋土①・②中とその直下において、炭化米（付章 第三節参照）や焼土と炭化物を伴う被熱した獣骨・人骨を集中して検出したことから、堀の本来の機能を停止するため、自然堆積で埋まりきらなかったくぼみに炭化米や動物遺体を廃棄すると共に埋土①・②を入れ平坦にしたと考えられる。ただしSD01トレンチ4では腐食土層堆積後、土坑SK07を掘削してから人為的に埋めている。このことより、自然堆積が進んでから遺構を掘りこんでいるため、自然堆積から人為的埋土①・②を埋めるまでに時間的な空隙が存在していたと考えられる。またSD01調査区北壁（図版88）で堀の縦断面を観察したところ、自然堆積土の上にはほぼ水平に人為的埋土が堆積していることから、堀底に溜まる自然堆積土を掘削・除去するなどの補修工事は行っており、堀が比較的短期間でその機能を失ったことがわかる。

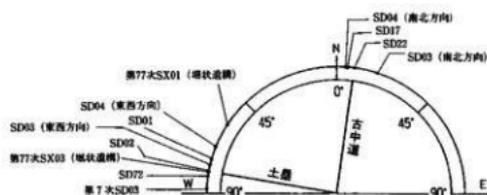
出土遺物：SD01から出土した獣骨・人骨の出土位置については、上記のとおりである。人骨はいずれも被熱している。このことから人骨はSD01で焼かれて埋葬されたものか、別の場所で焼かれた後安置されたものかのいずれかである。焼土は土層として顕著には見られず、部分的に混入したものと考えられるため、別の場所で焼かれた後に焼土や炭化物と共に安置されたと考えられる。動物遺体出土内容の詳細は、付章の論考を参照されたい（付章 第二節）。

自然堆積層遺物はSD01では珠洲すり鉢1点、刀の鞘に付属する銅製金具（折金）1点、SD02では珠洲すり鉢1点が自然堆積層から出土しているが、年代を特定できるものはSD01の珠洲すり鉢1点のみであり珠洲IV-3期に属し、14世紀後葉のものである。人為的埋土からはSD01では52点、SD02では33点の遺物が出土しており、堀を廃棄する際に捨てられたものとする。出土遺物より廃絶時期を検討すると、瀬戸美濃は古瀬戸後I～II期に属し14世紀中葉～15世紀初頭、珠洲は珠洲V期に属し14世紀末～15世紀中葉の年代を下限とすることから、この時期の末には廃絶したものと考えられる。

主軸方位（第54図）：主軸方位はSD01がN-74.5°-W、SD02がN-80.0°-Wである。これらは、十三湊の都市軸線である「古中道」（主軸方位：N-7.5°-E）と十三湊を南北に分割する東西方向の「土塁」（主軸方位：N-80.5°-W）とほぼ一致している。よって堀はいずれも計画的な遺構の配置を行なった十三湊II a期（14世紀後半頃）には成立していたと考えられる。

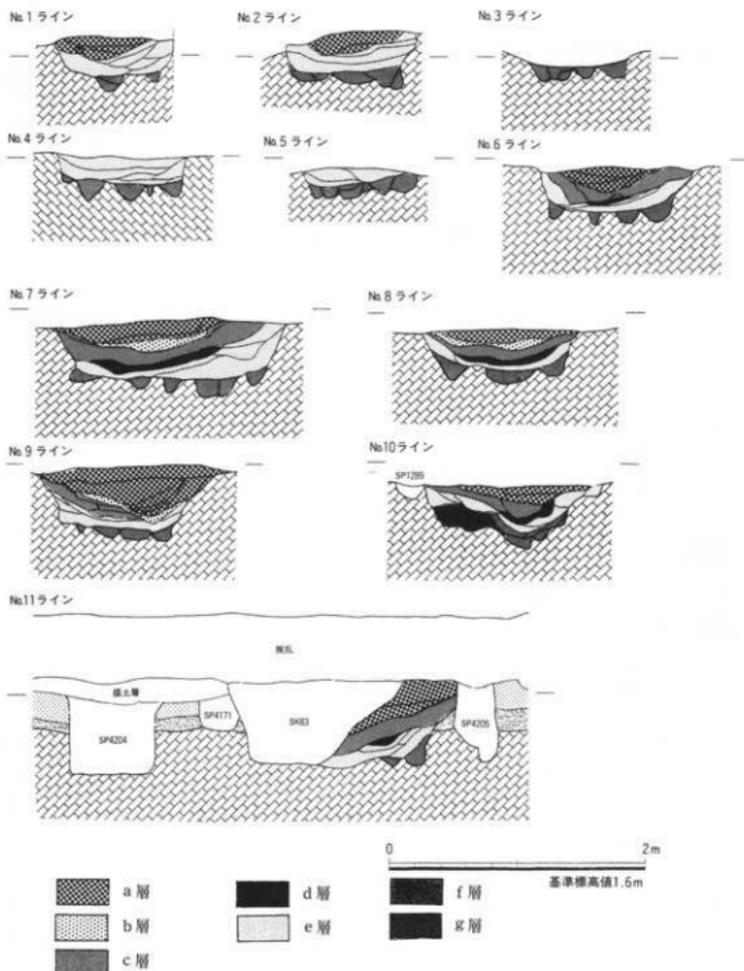
SD01は第7次調査（市浦村教育委員会1996）で検出したSD03と同遺構である可能性が、またSD02は第77次調査（市浦村教育委員会・富山大学考古学研究室1998）で検出したSX01と同遺構である可能性が高く、堀が本調査区の東西へさらに伸びることを確認できた。

(b) 区画溝 (SD03, SD17・22, SD04)

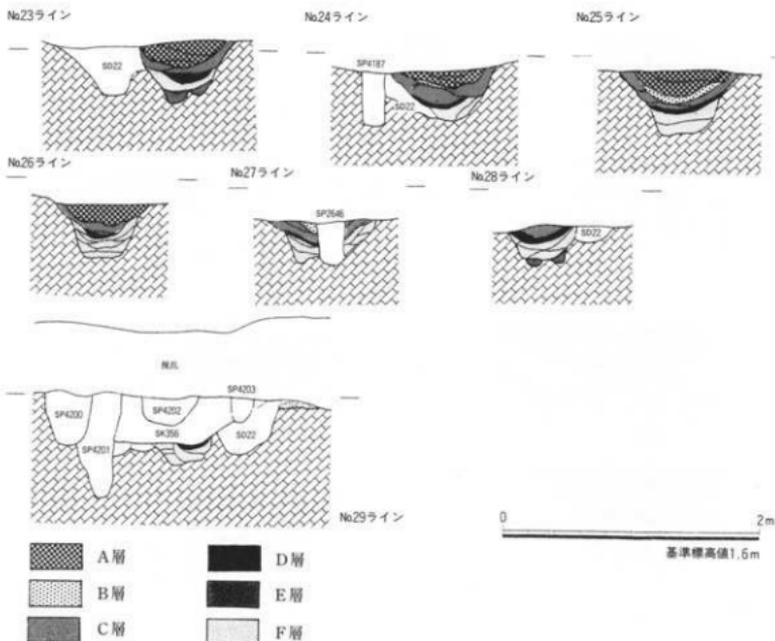


第54図 溝・堀方位と古中道・土塁方位との関連図

区画溝については、第86・87次調査で新たに検出されたものが多い。なかでも方形に屋敷地を取り巻いていたと考えられるSD03, SD04を検出した。**埋土分類（第55・56図）：**埋土に明確な差異が認められなかったSD04を除いて、SD03, SD17の埋土は大きく6ないし7の層に区分できる。a：溝を最終



的に埋め戻した人為的な層，b：飛砂層①，c：腐食土層①，d：飛砂層②，e：腐食土層②，f：溝を掘削した際の耕具痕中に堆積した層，g：SD03の一部においてのみ確認できた人為的盛土層である。SD03とSD17は切りあいから新旧関係があるものの，基本的にはほぼ同一の堆積状況であり，上記の基本層序を統一して用いた。ただし両者の混同を避けるためSD03については，a・b・c…と小文字で，SD17はA・B・C…と大文字で表記した。SD03・SD17は腐食土・飛砂層をそれぞれ2層ずつ堆積していることからいずれも比較的長期間にわたって機能していた溝と考えられる。c層，e層は溝が自然に土砂を



第56図 SD17土層堆積模式図

堆積していく過程において、一定期間溝底として機能していたことをあらわしている。8層の役割については、X座標74.8~74.72、Y座標17.9~18.12において北側溝肩がテラス状になっており、ほぼ同範囲で溝底に8層が盛り土されて土橋状に盛り上がっていることから(No.10ライン)この部分が、SD03の内と外をつなぐ導入部であった可能性が高い。また、SD17は以前ほぼ同じ場所に溝(SD22)を掘っていたことが平面プランおよびNo.23・28ラインの断面より確認できる。

方形区画溝であるSD03とSD17がほぼ同一の堆積状況であり、規模もほぼ同様であることから、本調査では南北方向の区画溝と確認したSD17も方形区画溝であると想定される。また、SD03とSD17の先後関係は、SD17よりSD03が新しいものである。

また、SD04は断面U字形で(図版91)、一度掘り直していることや溝底にシルトが堆積していることから用水路の機能がより強いと考えられ、比較的狭く深く掘っていることが特徴的であるため、SD03やSD17、SD22と時期を別にする溝と考えられる。

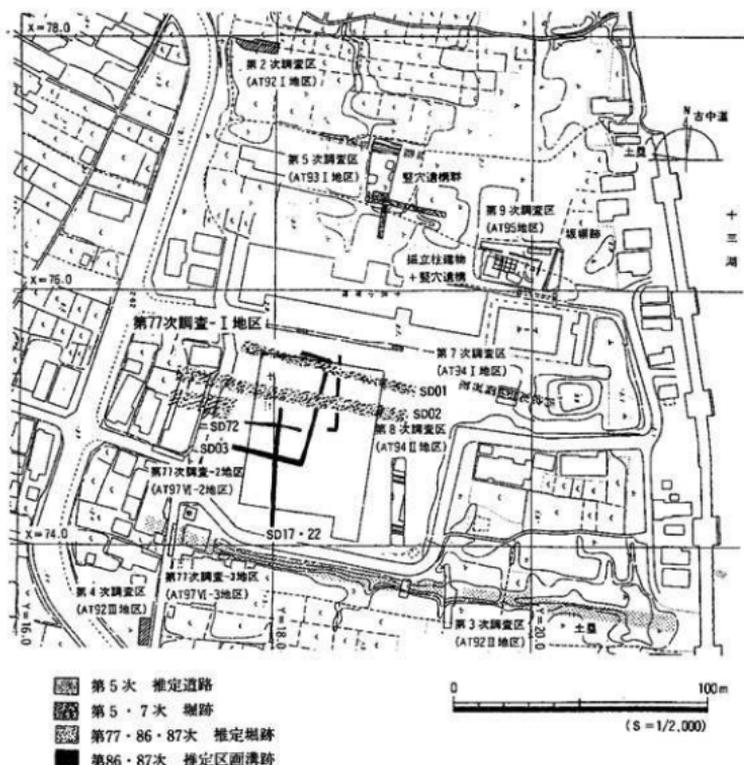
以上より区画溝はSD04、SD22・SD17、SD03と大きく3つの段階に分けられる。

出土遺物: SD03で埋土中から珠洲IV-2期に属し、14世紀前葉~14世紀中葉のすり鉢が1点、珠洲IVまたはV期に属し、13世紀後葉~15世紀中葉のすり鉢が1点、珠洲V期に属し、14世紀末葉~15世紀中葉の甕が1点出土している(図版124の91~93)。SD17、SD22では年代を特定する遺物は出土しなかった。

SD04では珠洲IVまたはV期に属し、13世紀後葉～15世紀中葉の珠洲壺R種が出土している。ただし、いずれも年代を特定する遺物の出土が少ないため、出土遺物から各々の溝の年代を明確に区分することは難しい。またSD03, SD17で獣骨がいずれもc層（腐食土）から出土した。

主軸方位（第54図）：それぞれの主軸方位はSD03の東西方向がN-77.5°-W、南北方向がN-18.5°-E、SD04の東西方向がN-86.5°-W、南北方向がN-4.0°-E、SD17がN-5.0°-E、SD22がN-8.0°-E、SD72がN-82.0°-Wである。このことから、主軸方位は一定の幅を持ちながらも十三湊の都市軸線を代表する古中道（主軸方位：N-7.5°-E）と土塁（主軸方位：N-80.5°-W）の主軸方位をほぼ踏襲していると考えられる。SD72は、主軸方位が若干ずれるが平面形及びその座標が近接していることからSD04と同一時期に同一の機能を有していた溝の可能性もある（第57図）。SD72が切り合い関係よりSD17, SD22以前に成立していることから、SD04が堀以前の大規模区画遺構のなかで最も古いものであると想定する。

堀の成立をⅡa期とするならば、先後関係からこれら区画溝はⅡa期以前に成立したものである。従来Ⅱ期をもって十三湊における都市計画の端緒とされてきたが、それ以前の区画遺構が既に都市計画の



第57図 第86・87次調査区周辺中世遺構概略図

軸線に基づいていることになる。このことは、都市軸線の主軸方位が前期土塁の成立するII a・b期(14世紀後半～15世紀初頭)以前にすでに概念として成立していた可能性を示唆する。これらの溝は先後関係や断面形の差異から成立時期が3段階に区分できるが、主軸方位に差異が認められないことから、いずれもI b期ないしII a期直前の間に廃絶し、II a期には堀がその主軸方位を踏襲してより大規模な区画を行ったと考えられる。

(c) 小 結

本年度の調査で、新たに堀成立以前の大規模区画遺構を主に5条検出した。出土遺物による明確な時期区分はできなかったが、切り合い関係等からSD04・SD72→SD22→SD17→SD03の順に変遷していったと考えられる。これらの溝を廃絶し、より大きな区画を設けて区画の内と外とを精神的に遮断したものが堀SD01・02である。今回方形に区画する溝を検出したことで、堀成立以前の屋敷地の規模を推定することができた。一方未だ方形区画という形態では検出されていないが、堀については既調査区の結果を併せると南北間約100mの間隔をもっており、したがって堀によって区画される屋敷地は南北約100mの規模をもつと想定される。室町時代～戦国時代にかけて日本各地で居館の堀が大型化し、居館の住人とその他を隔絶することによって威厳を高める傾向があり(山本雅和1995)、十三漆においてもこの傾向になったものと思われる。ただし、SD01・02は断面形が逆台形であり、素掘りで肩に石垣や土塁を伴わないため、堀の機能として防衛的要素は希薄である。掘り直しもほとんどおこなっていないため、自然堆積が進み、比較的短期間で廃絶されたと考える。堀以前の区画溝が、頻繁に掘り直しを行い本来の役割である用水路としての性格を保ちつづけることと対照的である。堀を掘るための労働力の掌握と、大規模な区画を施すことによって区画の内と外の格を明確に区別する役割を堀の成立に見出せると考える。

今回検出した大規模な区画溝の主軸方位は、堀の主軸方位、即ちII a・b期に成立したと考えられる都市軸線に則っている。また埋土の堆積状況より、区画溝は何度も掘り直されており、溝として機能した期間が比較的長いと考えられる。このことよりII a期以前から、都市軸線の概念は成立しており、II a期になると土塁や堀のような、より大規模な区画遺構へと転換していくと考えられる。それは、用水路としての機能を重視していた区画溝から、囲まれている居館の住人の身分をその他と明確に区別する視覚的效果を狙ったものに変わっていったことを示唆している。

(遠野いずみ)

(2) 井 戸

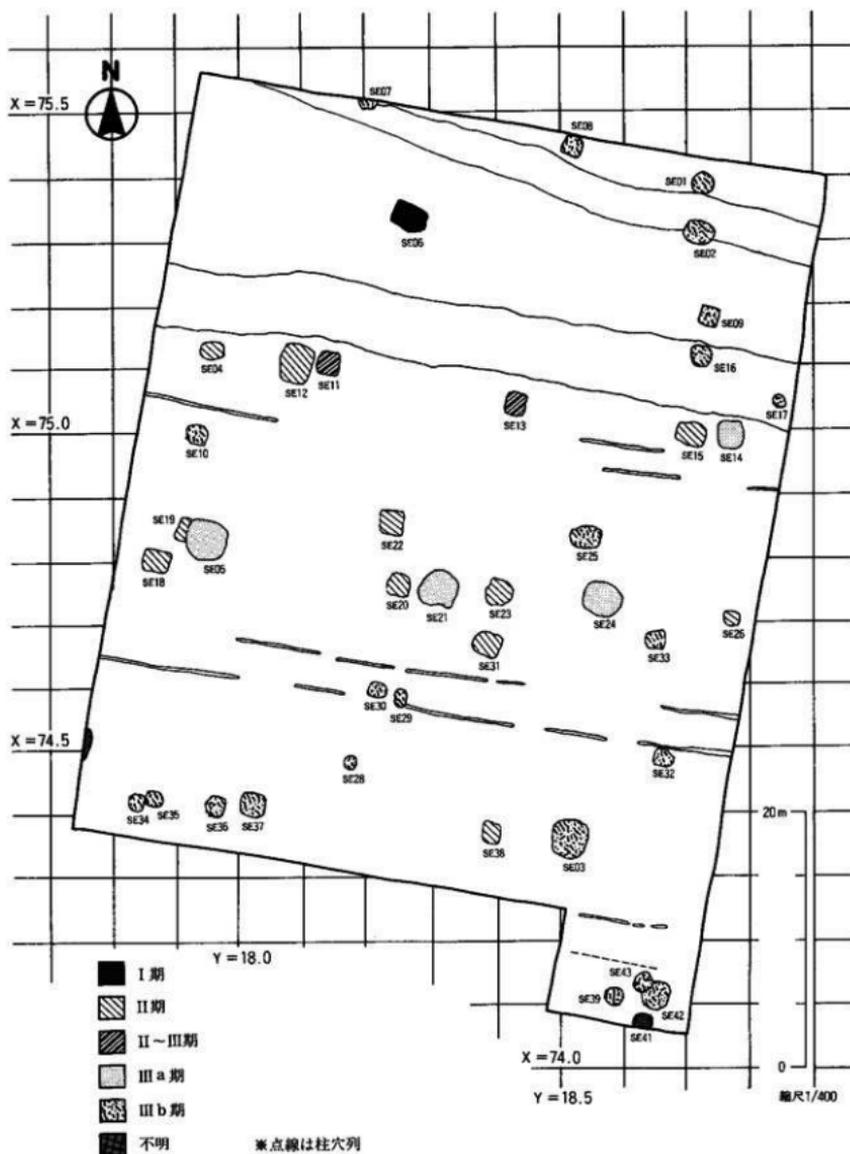
十三漆遺跡ではこれまでに多くの井戸が検出されている。第86・87次調査においても42基の井戸跡を検出した。本稿では検出した井戸を出土遺物や遺構の先後関係から時期別に理解する試みを行い、井戸の掘削技術・廃棄の方法を復原することで十三漆遺跡における井戸の性格を明らかにすることを目的とする。また、領主館跡と推定される第18・76次調査区において検出した井戸との比較・検討もあわせて行いたい。

(a) 井戸の変遷 (第58図・第9表)

井戸の時期決定: 他の遺構との先後関係、遺構出土遺物に着目して井戸の時期を検討した結果、以下のように大きく4つの時期に分けることが可能であった。出土遺物の伴同関係は第9表に示している。

1期 (14世紀前葉～中葉)

この時期に当たる井戸はSE06のみであり、SD01・02が成立する以前のものである。年代を示す遺物と



第58圖 時期別井戸分布図

第9表 井戸出土遺物共伴関係一覧表

時期	遺構名	青磁		瀬戸美濃												珠洲		瓦類	土師	その他			
		前期	中期	中Ⅲ～Ⅳ期	中Ⅳ期	中Ⅴ期	後Ⅰ期	後Ⅰ～Ⅱ期	後Ⅱ期	後Ⅱ～Ⅲ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期	Ⅳ～Ⅴ期	Ⅴ期	Ⅵ期								
1期	SE06															1							
	SE04																						
	SE12																				鉄製品14		
	SE15																					鉄製品8	
	SE18		1																			漆製品1, 鉄製品1, 鉄製品8, 鏡蓋3	
	SE19																						
2期	SE20		1																			鉄製品5, 石製品1, 鏡蓋1	
	SE22					2																土器系1	
	SE23																					鉄製品3	
	SE26																					鉄製品5	
	SE31																					漆製品1, 鉄製品1, 鏡蓋1	
	SE38																						鉄製品2
2～3a期	SE11																					鉄製品13	
	SE13																					鉄製品1	
3a期	SE05																					土器系2, 鉄製品1, 古鏡2	
	SE14		1																			鉄製品1	
	SE21		2				1															鉄製品1, 石製品2	
3b期	SE25																					鉄製品1	
	SE01																					漆製品2, 木製品3, 鉄製品3	
	SE03		1																			土器系1, 木製品5, 鉄製品10, 石製品1	
	SE07																						
	SE08																					1	
	SE09																					土器系2, 銅鏡1, 鉄製品5	
	SE10																					鉄製品7	
	SE16		1																			鉄製品1, 鉄製品12, 鏡蓋1	
	SE17																					3 1 1	
	SE24																					2 中国製天目茶碗1, 鉄製品16	
	SE28																					鉄製品3	
	SE29																					1	
	SE30																					土器系1, 鉄製品3	
	SE32																						3 2
	SE33																						1 1
	SE34																						鉄製品1
	SE35																						1 1
	SE36																						鉄製品1
	SE37																						土器系1
	SE39																						1 1
SE42																						鉄製品1	
SE43																						2 1	
SE44																							
SE45																						鉄製品2	
SE46																							
SE47																						漆製品1	
不明	SE41																					鏡蓋1	

※表の数値は出土点数(複合後)

して、珠洲Ⅳ-2期に比定される珠洲すり鉢が出土している。

2期 (14世紀後葉-15世紀初頭)

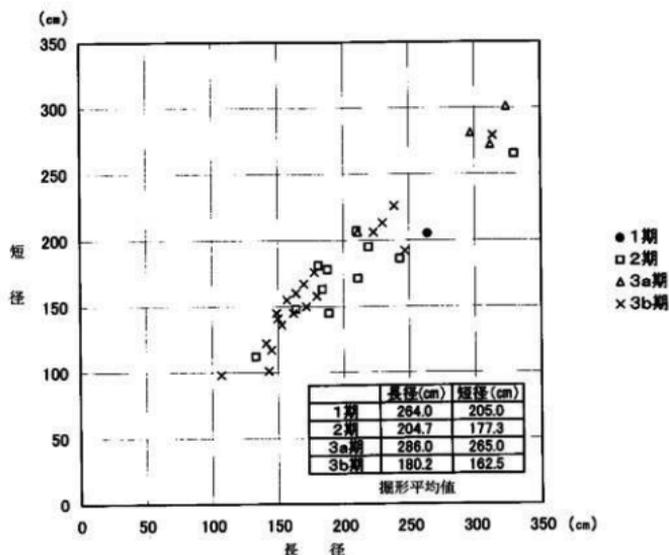
この時期に当たる井戸にはSE04・12・15・18・19・20・22・23・26・31・38がある。この時期は今回の調査区における、領主館地区の最盛期に当たると考えられる時期であり、SD01・02や、SA04とSA22およびSD14・32を一群とする布掘り櫓を対とする東西道路敷、SD39およびSA10・12・13・19を一群とする布掘り櫓とSA06・09・14・15・17を一群とする布掘り櫓を対とする東西道路敷によって形成された区画のもとに集中的に井戸が作られており、SD02以北には井戸が存在せず、SD39およびSA10・12・13・19を一群とする布掘り櫓とSA06・09・14・15・17を一群とする布掘り櫓を対とする東西道路敷よりも南に掘削されているのはSE38のみである。古瀬戸後Ⅱ期の年代に比定される瀬戸美濃がこの時期の指標となる遺物と考えられる。

3a期 (15世紀前葉)

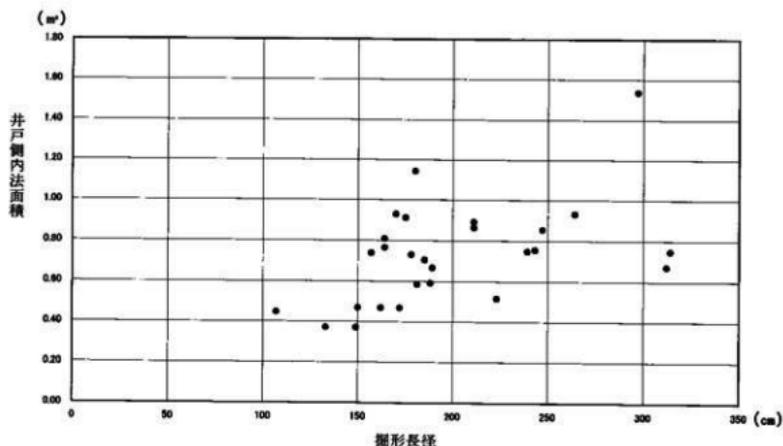
この時期に当たる井戸にはSE05・14・21・24がある。これらの井戸は2期の区画遺構に従うかたちで掘削されている。したがって、この時期はSD01・02が廃絶しているものの、なお継続して最盛期の区画に従って井戸が掘削される時期といえる。2期との時期差を示す遺物として、SE14・21・24から瓦器火鉢が出土している。

3b期 (15世紀前葉)

この時期は井戸の数が全時期を通して最も多い、基数のうえで考えれば井戸の最盛期とも呼べる時期であり、SE01・02・07をはじめとして19基が存在する。最盛期の区画遺構を掘削・破壊する最終段階であり、3a期までとは逆にSD02以北と、SD39およびSA10・12・13・19を一群とする布掘り櫓とSA06・



第59図 井戸平面規模時期別分布図



第60図 掘形長径・井戸側内法面積相関関係図

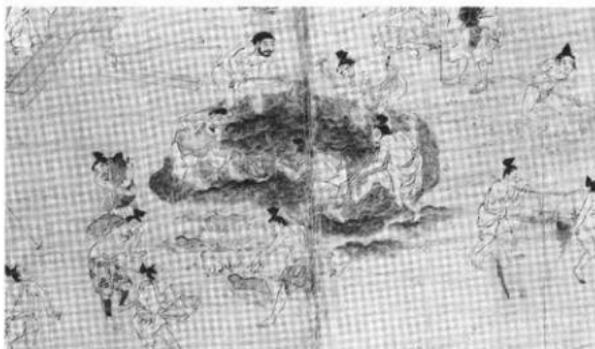
09・14・15・17を一群とする布掘り柵を対とする東西道路敷以南に井戸が集中的に作られるという特徴をもつ。この時期の指標となる遺物として、SE03・16・25・35・37・42から古瀬戸後Ⅲ期の年代に比定される瀬戸美濃が出土している。古瀬戸後Ⅳ期の遺物は出土しておらず、15世紀前葉のうちに廃絶したものと思われる。

井戸の平面規模(第59図)：ここでは井戸の平面規模の分布を時期別に示した。1期の井戸は2基しか検出されず、傾向を読み取るには不十分であるが、2期の井戸は長径180～250cm、短径150～200cmの範囲に、3a期の井戸は長径300cm前後、短径270～300cmの範囲にまとまりがみられ、3b期の井戸は長・短径ともに180cm以下のものの割合が多い。大まかにみれば、中型の井戸が多い2期から、3a期になると大型化し、3b期には2期のものよりも小型化する傾向を読み取ることができる。第57図中には時期別の平面規模の平均値も示した。

3a期には4基しか存在しない井戸が3b期になると19基に増加し、規模が大型のものから小型のものへと変化するという現象から、3a期と3b期のあいだに、井戸1基あたりの使用人数の減少があったのではないかと推察した。しかし、掘形長径と井戸側内法面積の相関図を作成してみたところ(第60図)、相関関係はみられず、井戸側の規模は掘形の規模に左右されないといえる。掘形の規模が大きくても井戸側の規模が同じであるならば得られる水の量に差異は生じない。したがって、掘形の規模の差は井戸掘削時の技術の相違によるものと考えられ、井戸1基あたりの使用人数に相違はなかったと考えられる。

遺構配置、平面規模をふまえた時期の特定：ここで、遺構の先後関係、出土遺物のみでは時期を特定し得なかった井戸について、時期区分によって明らかになった遺構配置と、時期ごとの平面規模の情報をふまえた上であらためて時期の推察を行いたい。先の条件で時期を特定することが出来なかった井戸はSE11・13・27・28・34・41の6基であるが、SE27・41は遺構の大半が調査区外にあり、平面規模に関する情報が得られないため検討の対象としない。

SE11・13に関しては、年代を示す遺物が珠洲V期に比定される破片のみの出土であり、1期を除く全ての時期に当てはまる可能性が考えられたが、最盛期の区画に従って掘削されており、堀形の平面規模も中型であることから、2期または3a期に属するものと推察される。



第61図 井戸掘削の光景 (中央公論新社 1992『当麻曼荼羅縁起』上巻第3段より転載)

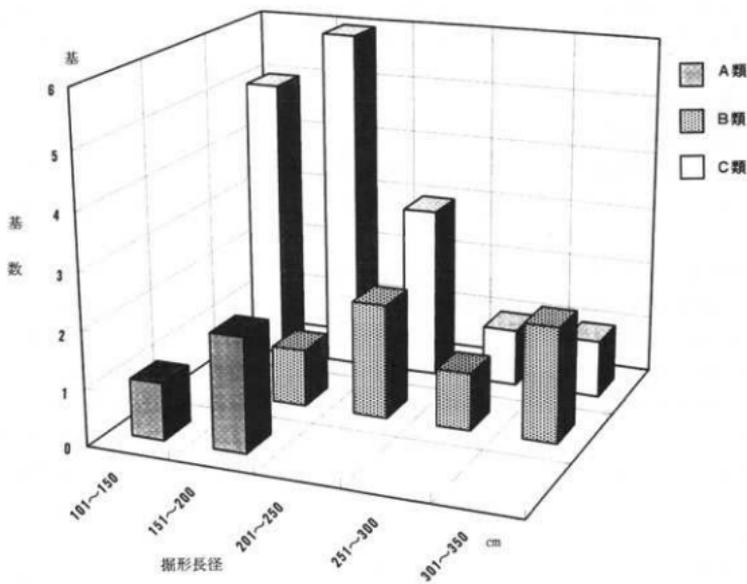
SE28・34はSD39およびSA10・12・13・19を一群とする布掘り櫓とSA06・09・14・15・17を一群とする布掘り櫓を対とする東西道路敷よりも南に掘削されており、堀形の平面規模も小型であることから3b期に属する可能性が高い。

(b) 井戸の掘削・廃棄法の復元的研究

ここでは井戸の土層の堆積状況および井戸側の形態から、井戸が掘削時と廃棄時の状況の復元を試みた。

井戸掘削の手順：

①井戸側を設置するための掘形を掘る (第61図)。



第62図 断面形別掘形規模

掘形の平面形は円形もしくは方形（ともに不整なものを含む）を呈するものが大半を占める。規模に規格性は見られない。

ここで掘形の断面形と平面規模の関係について触れておきたい(第62図)。断面形の分類に関しては先に第6図に示したとおりである。A類は掘形の長径が200cm以下の小規模なものしか存在しない。B類とC類はともに様々な規模のものが存在するが、B類は中～大規模なもの割合がやや多く、C類は小～中規模に集中する傾向を読み取ることができる。

B類に大規模なものが多いのは、深い穴を掘る際にテラス状の部分を作業場として設けるため、他の種類の井戸に比べて径が大きくなると考えたが、断面形の違いと掘形の深さに関連はみられず、断面形の相違は掘削技術の相違によると考えられる。

②井戸側を設置する。

井戸側は大半が掘形のほぼ中央に設置されるが、まれに端に寄せて作られるものもある。隅柱・縦板ともに下方先端を加工して尖らせているため、隅柱と横棧を組んだ状態で地中に打ち込んだ後、周囲に縦板を打ち込んだものと推測される。縦板の継ぎ目に厚さ5mm程度の添え板を何枚か重ねて当てるものもある。

③井戸側の周りに裏込めの土を入れる。

裏込めには地山の土と良く似た砂または砂質土を使用し、礫を詰め込んでいる例はみられない。おそらく掘形を掘った際の土をそのまま利用したものと思われる。

④井戸側内の土を出し、浄水施設を設置する。

浄水施設として用いられているものは大半が曲物であるが、SE24だけは板を四角に組んだものを使用している。SE24は3a期の井戸であるが、同様のものが第77次調査区で検出した近世の井戸にも使用されており注目される。

井戸廃棄の手順：

①井戸側内を埋め戻す

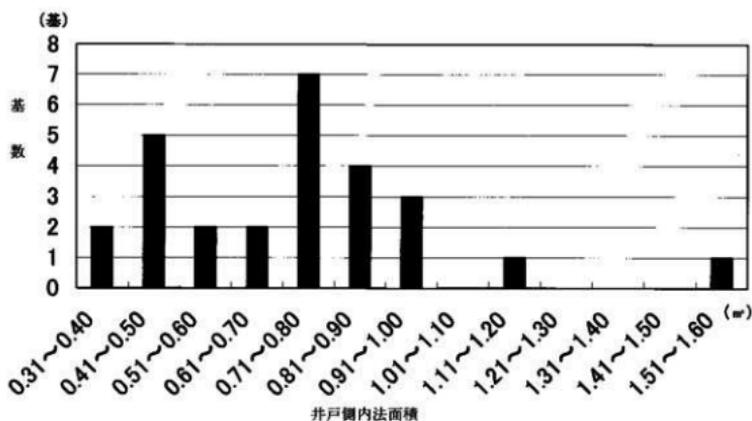
井戸側そのものが残存していない場合でも土層断面に井戸側の痕跡がみられることが多く、井戸側を抜き取ることなく埋めたと考えられる。また、SE08・22では井戸側の埋土に礫が詰め込まれており注目される。

②二次的に掘削を行って井戸側上部を破壊し、掘削坑を埋める。

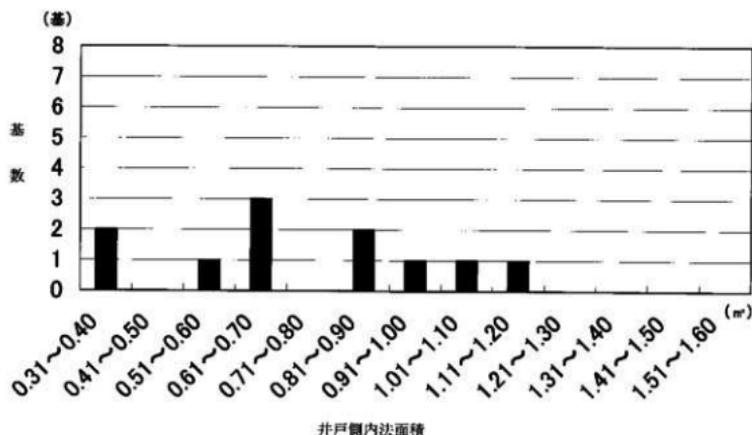
井戸の上部に掘りこまれた穴は、土層の堆積の状態から井戸側内が埋められた後に掘られたものと推察されるため、本報告書では二次掘削坑と呼ぶこととする。井戸側内が埋められた状態で井戸側の木材を抜き取ることは困難であり、実際の残存状況を含めて考えると、この穴は井戸側を抜き取るためというよりは破壊するために掘られたものと考えられ、何らかの儀礼的な意味をもつものと思われる。草戸千軒町遺跡において一部確認されたような、廃棄時に竹を同時に埋設した例（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996）は確認されなかったが、有機物の残りにくい土壌であるという地理的条件を加味すると、そうした風習がなかったと断定することはできない。今回の調査で検出された井戸42基のうち、二次掘削坑が確認されたものは36基であり、86%を占める。二次掘削坑に礫を詰め込んだものは、二次掘削坑が確認された36基のうち8基存在する。時期別に見ると2期のものが1基、3a期のものが3基、3b期のものが4基存在し、SD01・02が廃絶した後のものが多い。

(c) 第18・76次調査区との比較 (第63・64図)

井戸側の構造は、確実に分かるものに関しては「縦板組隅柱横棧どめ」のみであり、領主館地区との間に構造の違いは認められない。そこで、今回は領主館跡と推定される第18・76次調査区で検出された



第63図 井戸側内法面積度数分布 (第86・87次調査区)



第64図 井戸側内法面積度数分布 (第18・76調査区)

井戸とのあいだで井戸側の規模の比較を行ったが(第63・64図)、ここでも両者のあいだに大きな差異はみられなかった。

(d) 小 結

本稿では井戸を時期別に捉える試みを行った。その結果、今回調査した地区がSD01・02廃絶後にも数多くの井戸が掘られ、生活の場として使用されていたこと、堀が廃絶した後もしばらくの間はそれまでの区画を利用して生活が営まれていたことが明らかになった。

また、掘削技術・廃棄の方法を復元的に研究することによって十三湊遺跡における井戸の構造上の特徴を一部明らかにすることができた。しかし、掘形の断面形や、平面規模の差についてどのような技術の相違によるのかははまだ不明であり、今後の検討が必要である。

井戸側の規模を通して、領主館と推定される地区との比較を試みたが、両者に明確な違いはみられなかった。井戸側の構造にも大きな差異はみられないため、井戸に関しては領主館の内外における格の違いはなかったと考えることができるが、現時点では資料不足の感は否めず、今後の発掘成果を受けて様々な角度から比較・検討されることを望む。

(3) 竪穴遺構

竪穴遺構は、中世の東北地方北部に普遍的に認められる建物の一形態であり、その機能については住居・倉庫・工房などと様々に論じられているが、確定できる証拠が少なくその機能については不明な点もみうけられる遺構である(高橋信雄1989, 高橋奥右衛門1992, 飯村1994)。

十三湊遺跡第86・87次調査においては、14基の竪穴遺構を検出した。そのうちSI05・14は西壁土層断面でのみの確認であり、SI07・08については半分近くが後世の攪乱によって削平され、調査も検出のみにとどめているために、本考察ではその4基を除いた10基を対象とする。また、十三湊遺跡第5次調査のSB03・04(国立歴史民俗博物館1995)、第9次調査のSI01(青森県市浦村教育委員会1996)、及び第18・76次調査のSI02・03・04(市浦村教育委員会未刊行)の6基については十三湊遺跡における竪穴遺構の傾向を把握するために重要であると考え、加えて考察をおこなうこととする(第10表)。

以上のように、本考察では16基を対象として、十三湊遺跡における竪穴遺構の性格について検討したい。

(a) 分 類

検出した竪穴遺構について、平面形と主柱穴の有無によって分類した(第65図)。

第10表 既調査区竪穴遺構計測表

調査区	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	主軸方位	分類	時期	出土遺物	引用参考文献
第5次調査	SB03	280	240	N-2.0°-E	C	II a・b	磁器・青磁	国立歴史民俗博物館1995
	SB04	340	310	N-16.0°-E	A	II a・b	土師器・瀬戸・鉄製品	『国立歴史民俗博物館研究報告』第64巻 青森県市浦村教育委員会1996 『十三湊遺跡』
第9次調査	SI01	600	340	N-72.0°-W	C	II a・b	瓦器・土師器・土師・陶器・瀬戸・ 灰器系・青磁・白磁・青白磁・中国 鉄製品(磁律を含む)・磁器・銅製品	『十三湊遺跡』
	*SI02	460	260	N-78.0°-W	C	II c	瓦器・土師器・陶器・瀬戸・灰器系 青磁・鉄製品(磁律を含む)・銅製品	未刊行
	*SI03	480	240	N-43.0°-E	C	II c	瓦器・土師器・羽白・陶器・瀬戸・ 灰器系・青磁・鉄製品(磁律を含む)	
第18・76次調査	*SI04	450	230	N-26.0°-E	C	II c	瓦器・土師・羽白・陶器・瀬戸・ 灰器系・青磁・鉄製品(磁律を含む)・ 磁器・銅製品	
	SI11	265	238	N-15.0°-E	B	II c	瓦器・陶器・瀬戸・灰器系・鉄製品 磁石	青森県教育委員会1999 『十三湊遺跡IV』
	SI12	335	332	N-10.0°-E	A	II c	磁器・白磁・鉄製品	
	SI13	295	268	N-11.0°-E	A	II a・b	瓦器・白磁・鉄製品	

*報告書未刊行のため整理表を用いた。
第18・76次調査の竪穴遺構については藤原直氏の調査結果を頂いた。

A類は平面形が方形を呈し壁際に明確な柱穴をもつもので、第5次調査SB04, SI01・03・04・09・10・12・13が相当する。壁際にみられる明確な柱穴は4本から8本あり、上屋を支えていたと推察できる。SI01・03・04・09・10・12では壁際に沿って周溝が確認できる。

B類は平面形が方形を呈し明確な柱穴をもたない、もしくは柱穴を伴わないもので、SI02・06・11が相当する。SI02・06は柱穴を多数確認したが、上屋を支えていたと捉えることができるような明確な柱穴はない。SI11には柱穴が確認できない。本調査区でのみ確認できた。

C類は平面形が長方形を呈し明確な柱穴をもたない、もしくは柱穴を伴わないもので、第5次調査SB03, 第9次調査SI01, 第18・76次調査SI02・03・04が相当する。平面規模ではA・B類とは違った分布が認められる(第66図)。なお、本調査区では確認できなかった。

(b) 所属時期の決定

竪穴遺構の時期の決定は、共存する遺物が極めて少ないことから出土遺物のみで考えるのは困難である。このため、遺構出土遺物の年代観に、他の遺構との先後関係及び遺構の配置によって所属時期の決定をおこなった。なお時期の決定は従来のものに従うこととする(青森県市浦村教育委員会1996)。

十三湊II a・b期(14世紀後半～15世紀前半)

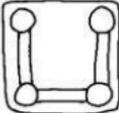
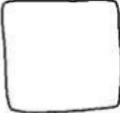
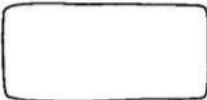
十三湊が港町として最も繁栄する時期である。第5次調査SB03・04, 第9次調査SI01, SI04・09・10・13が相当する。

十三湊II c期(15世紀中葉)

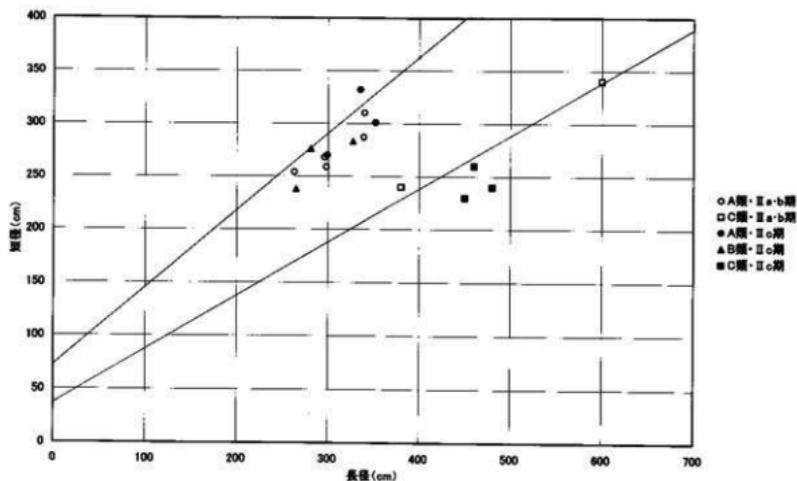
十三湊の都市計画的な主軸方位をもつ遺構が掘削・破壊される形で、新たな遺構の配置がみられる時期である。第18・76次調査SI02・03・04, SI01・02・03・06・11・12が相当する。

(c) 分 析

以上のように検討した分類と時期の関係から、形態・平面規模・主軸方位・分布についての分析をお

形態・分類	備 考
A類 	・平面形が方形を呈し、壁際に明確な柱穴をもつもの。 周溝をもつものが多い。 第5次調査SB04, SI01・03・04・09・10・12・13
B類 	・平面形が方形を呈し、明確な柱穴をもたない、もしくは柱穴を伴わないもの。 SI02・06・11
C類 	・平面形が長方形を呈し、明確な柱穴をもたない、もしくは柱穴を伴わないもの。 第5次調査SB03, 第9次調査SI01, 第18・76次調査SI02・03・04

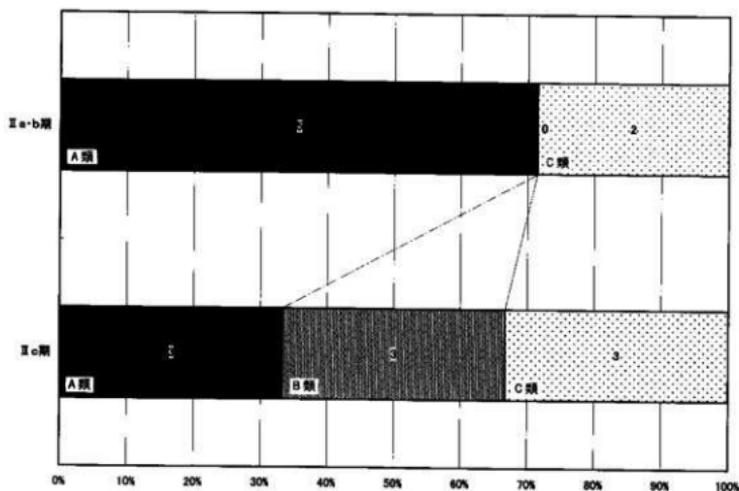
第65図 竪穴遺構分類図



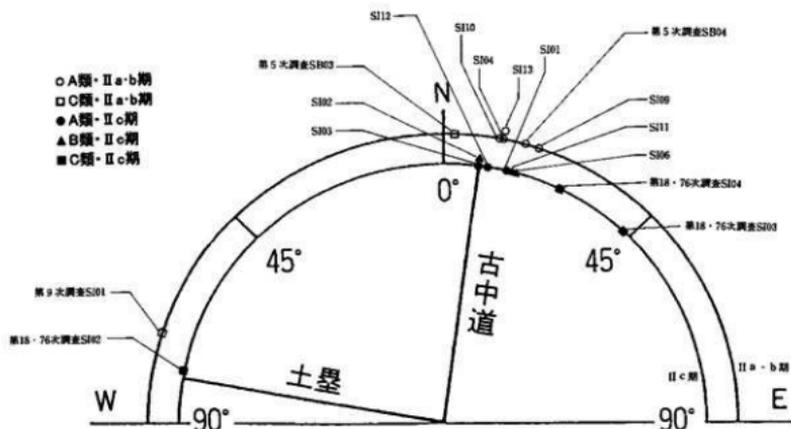
第66図 竪穴遺構平面規模分布図

こないたい。

形態：分類による形態差と時期の関係をみると、II a・b期からII c期にかけてA類が減少しB・C類が増加する傾向がみられる(第67図)。このことから時期によって竪穴遺構の形態に相違があらわれると考えたい。なお、B類に関してはII c期になって出現するように見えるが、資料の不足から断定する



第67図 竪穴遺構時期別構成比



第68図 竪穴遺構主軸方位

ことはできない。

平面規模：時期によって平面規模のまとまりに相違がないかということを明らかにするために散布図を作成したが、一定のまとまりは読みとれず、時期と平面規模の間には関連が認められなかった（第66図）。

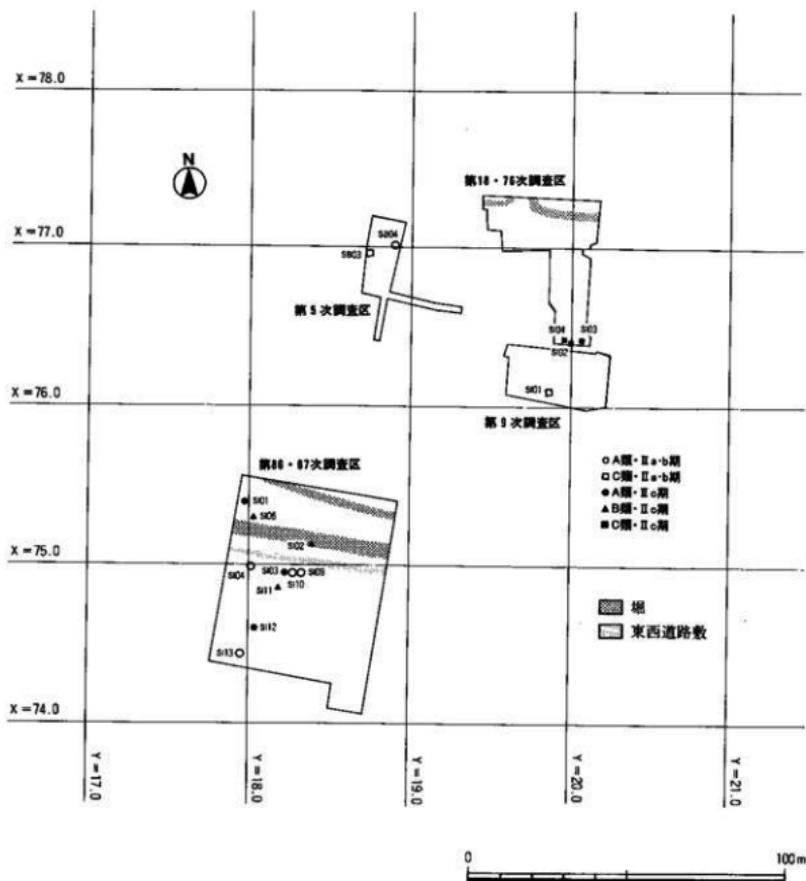
主軸方位：時期ごとに主軸方位を照らし合わせてみると、II a・b 期では従来報告された（市浦村教育委員会1996）区画遺構の主軸方位の範囲（N-11.5°-EからN-17.8°-E, N-74.0°-WからN-76.8°-W）に対し若干その範囲をこえる幅はもつものの、概ねその範囲内で一定のまとまりをもつことがわかる。しかし、II c 期では従来報告された区画遺構の主軸方位の範囲（N-2.0°-WからN-7.0°-E, N-78.3°-WからN-89.0°-W）内におさまらず、主軸方位はまとまりをもたなくなることが窺える（第68図）。

分布：第69図は竪穴遺構の分布を、分類と時期の情報を加えてあらわしたものである。本調査区はA・B類のみで占められており、C類はみられなかったのに対し、推定安藤氏跡付近（第5・9・18・76次調査区）ではA類が1基みられるだけで、C類が主体を成している。このことから、両調査区における竪穴遺構の分布による形態には何らかの相違があったと考えたい。

また、本調査区においては、II a・b 期に比定されるSA22とSA04・SD14・32を一群とする布掘り堀を対する東西道路敷によって形成された区画にそってSI04・09・10が形成されるなど、計画性が存在したことを推察することが可能であるが、II c 期になるとその区画にとらわれなくなり、竪穴遺構は分散していくであろうことが窺える。

(d) 小 結

以上のように竪穴遺構についての分析をおこなってきた。その結果、時期によって竪穴遺構の形態及び主軸方位には相違がみられるが、平面規模には相違がみられないこと、本調査区とその北側にある推定安藤氏跡付近にみられる竪穴遺構には、その分布についての形態差が認められることを指摘できた。



第69図 竪穴遺構分布図

主軸方位については、資料が少ないことから踏み込んだ分析はできないが、竪穴遺構に関していうとII a・b期には区画遺構の主軸に沿ってまとまりをもっていたものが、II c期になると区画遺構の主軸に竪穴遺構の主軸が沿わなくなってくる可能性を考えたい。

また、本調査区と推定安藤氏館跡付近にみられる竪穴遺構の形態差については、以下のように考えたい。まず、形態差をもつ竪穴遺構同士で分布を異にすることについては時期的、機能的、階層的、職能的相違があった可能性を考えることができる。しかし、両地区ともにII a・b期、II c期のものが存在していることから、時期的相違があった可能性は低い。また、本調査区の竪穴遺構はその規模から住居としての機能を求めることは難しく、出土遺物(SI01・11出土の鉄片)から工房跡であると推察でき、

推定安藤氏館跡付近にみられる竪穴遺構も同様に出土遺物（第18・76次調査SI03・04出土の羽口・鉄袴）から工房跡であることが窺える。このように、二つの調査区における竪穴遺構は共に工房跡であると考えられるため、機能的相違があった可能性も低い。むしろ、C類が検出されているのは推定安藤氏館跡のみであり、本調査区ではA・B類のみ確認できたという、分布による形態差からは竪穴遺構が地区によって明確に区別されていたと考えることができ、そこには階層的、職種の相違があったことが窺える。しかし、現段階での資料の不足から、具体的にどのような相違があったのかという詳細については保留し、地区毎に階層的あるいは職種の相違があったのではないか、という示唆に止めておく。

（真井田宏彰）

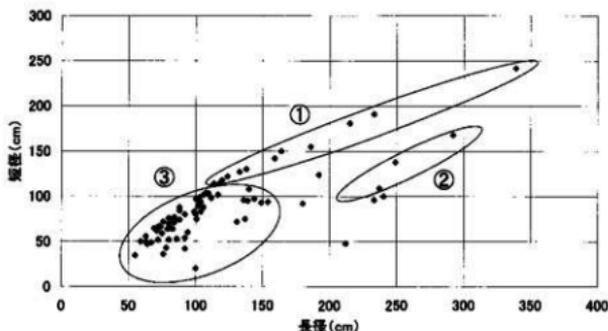
（註）第5次調査区については報告書に従った（国立歴史民俗博物館1995）。その他の調査区については遺構中央の傾きを計測し、その際周溝のあるものはその傾きも考慮した。また、C類は長軸の傾きを計測した。

（4）土坑および土坑墓

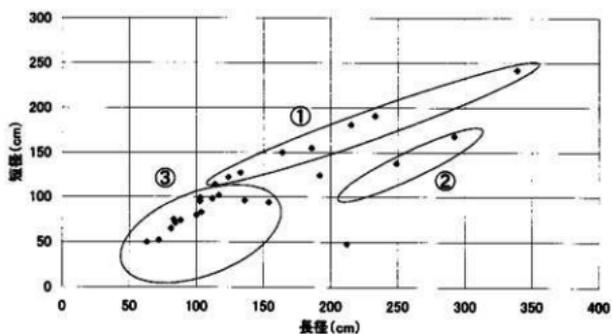
十三湊遺跡第86次調査において、土坑70基を検出した。これらは規模、出土遺物から性格の異なるものとして、いくつかに分類が可能である。各土坑の役割を確定することはできなかったが、そのなかから土坑墓である可能性が高いものを抽出できたので、それらを中心に考察を行なう。

（a）分類

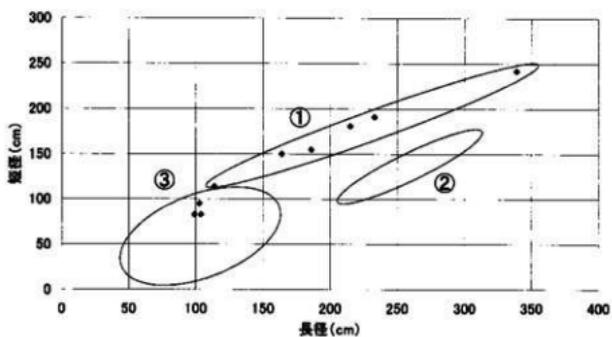
まず、鉄釘・銭貨・骨片・刀形刃物・炭化物を含む土坑の規模分布図を作成した（第70～75図）。鉄釘・炭化物は木棺の可能性をもつものとして、銭貨・刀型刃物は副葬品として、骨片は人骨の可能性を考えて抽出した。炭化物と骨片はある程度の大きさをもつものに限定した。銭貨と骨片が出土した土坑には土坑墓としての可能性が特に高く、それに鉄釘・刀子が伴えばさらに高い可能性を得る。それぞれのグラフを比較してみると、遺物が出土した土坑には共通した分布範囲が確認できる。長径100～250cm、短径100～200cmの範囲であり、長径と短径の比率にも一定の関係を表している。第77次調査では長径150cm・短径100cm以下のものが検出されたが、今回の調査ではその中間にあたる規模の土坑墓も確認されたことになる。またそれらの土坑群より長径が長めの土坑も少数ながら確認できる（第76図）。



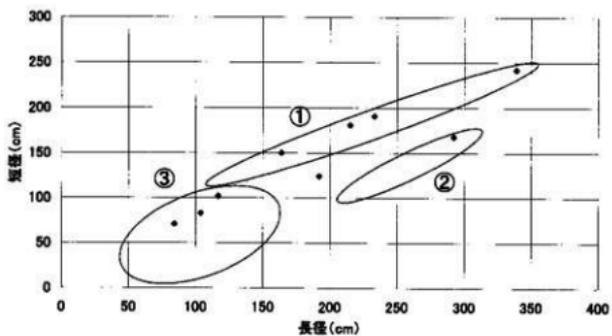
第70図 土坑規模分布図



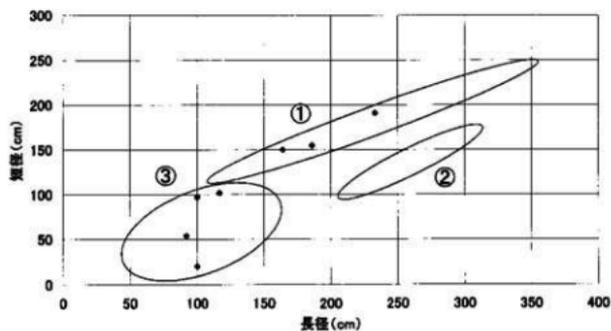
第71圖 鐵釘出土土坑規模分布圖



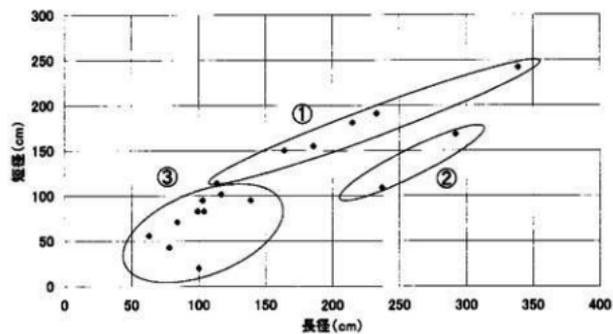
第72圖 錢貨出土土坑規模分布圖



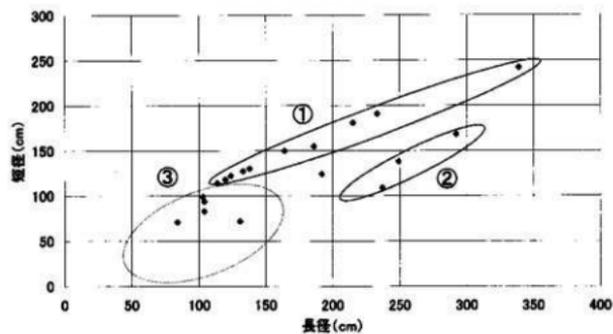
第73圖 骨片出土土坑規模分布圖



第74图 刀型刃物出土土坑规模分布图



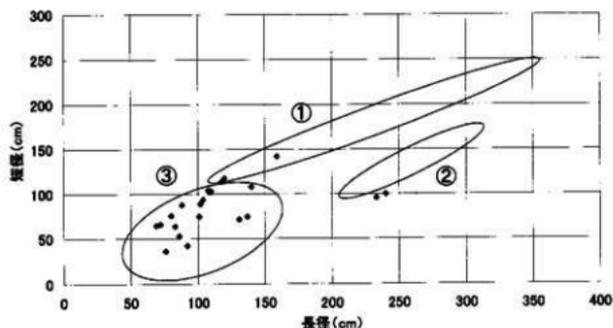
第75图 炭化物出土土坑规模分布图



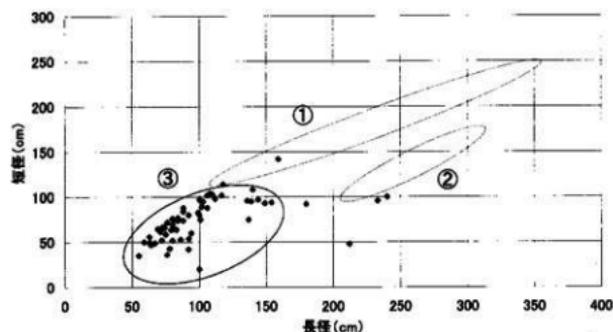
第76图 土坑规模分布图

第11表 第86次調査土坑出土遺物一覽表

分類	No.	長さ	短径	灰化物	骨片	磨削	舌鏃	刀子	石鏃	石鏃	種類
①期	SK03	132	127			○					後Ⅰ・Ⅱ期
	SK04	192	124		○						
	SK12	94	71		○						
	SK17	164	190		○	○		○			中Ⅰ・Ⅱ期
	SK20	339	242		○	○					中Ⅰ・Ⅱ期
	SK24	233	191		○	○	○		○		後期
	SK27	104	83		○	○	○				Ⅴ期
	SK29	215	181		○	○	○				前期から後Ⅰ・Ⅱ期
	SK31	188	155		○	○	○		○		後Ⅰ・Ⅱ期
	SK35	100	80				○				
	SK60	103	95		○		○				後Ⅰ期
	SK64	100	20		○				○		Ⅴ期
	SK67	83	56		○						後Ⅰ期か
	SK76	99	83					○			Ⅳ・Ⅴ期
	SK77	117	102		○	○	○		○		後Ⅱ期
SK79	114	114		○	○	○				Ⅳ・Ⅴ期	
②期	SK09	292	168		○	○					
	SK16	249	138			○					
	SK28	237	109		○						
③期	SK01	75	59								
	SK02	59	50								
	SK05	79	64								後Ⅰ期
	SK06	136	96			○					
	SK07	80	70								
	SK08	80	52				○				
	SK10	64	47								
	SK11	92	80								後Ⅰ期か
	SK13	94	60								Ⅴ期
	SK14	71	62								
	SK15	83	75			○					
	SK18	78	43		○						
	SK19	55	35								
	SK21	74	66								
	SK22	78	72								
	SK23	180	92								
	SK25	212	48				○				
	SK26	67	49								
	SK30	73	67								
	SK32	84	74								
	SK33	84	77								
	SK34	100	97						○		
	SK36	149	93								
	SK37	138	130								
	SK38	88	84								
	SK39	106	102								
	SK40	108	88								
	SK41	144	87								
	SK42	84	76								
	SK43	88	74				○				
	SK44	52	不明								
	SK45	101	75								
	SK46	112	98				○				
	SK47	140	108								
SK48	102	89								Ⅴ期	
SK49	240	100									
SK50	137	75									
SK51	92	42									
SK52	159	142								Ⅴ期	
SK53	69	65									
SK54	88	88									
SK55	118	114									
SK56	110	103									
SK57	72	66								Ⅴ期	
SK58	154	94				○					
SK59	108	104								Ⅳ・Ⅱ期	
SK61	92	54						○			
SK62	104	84									
SK63	83	64									
SK65	139	95		○							
SK66	131	72									
SK69	86	53									
SK70	120	118									
SK71	233	96									
SK72	72	52				○					
SK73	81	65				○					
SK74	83	90				○					
SK75	80	76									
SK78	103	99				○					
SK341	78	36									
SK342	124	122				○					



第77図 対象遺物未出土土坑規模分布図



第78図 一般土坑規模分布図

そこで遺物が出土しており、長径・短径とも100cm以上のもの、および100cm未満のものについては、先にあげた対象の遺物が2種類以上出土した土坑を土坑墓として分類する。その総数は19基となり、さらに規模の違いで2つの類型に分けられる。一般の土坑を含めて、土坑は3つの類型に分類できる(第11表)。

①類：長径：短径3：2であり、長径・短径ともに100cm以上のもの(長径・短径が100cm以下のものも若干含む)。

②類：①類よりも長径が長くなるもの。

③類：一般的な土坑群。

遺物の出土状況や従来墓と認識されている規模の傾向から、①類の方が②類よりも土坑墓として一般的であると考えられる。例として、SK17は先にあげた対象遺物を5つと、それに加え金銅製品を出土したことから、土坑墓群の中でも特殊なものであると考える。また小規模な土坑SK12は、被熱した骨片や炭化物が大量に密集して出土したことから、火葬墓であるとする。第77次調査で検出された火葬墓群(市浦村教育委員会1998)と比べると、SK12は規模が小さく掘りこみも浅いが、骨片などの出土状況から

別の施設で火葬した後に埋葬したという点で共通すると考える。SK12以外の、①・②類の土坑は土葬墓と考えられるが、埋土の堆積状況や平面形からの分類は困難であり、決定的な確証は得られていない。

③類は、対象の遺物を出土しないことがほとんどであり、平面円形を呈し、長径150cm以下、短径120cm以下に収まることが多い(第77図)。対象の遺物が1種類のみ出土した土坑についても同様のことがいえる。こうした土坑は土坑墓として分類しなかった(第78図)。

(b) 年代

出土遺物からみると、瀬戸美濃は古瀬戸後I期から後II期に、珠洲はIV期からV期に集中しており、ほとんどの土坑の成立時期は14世紀後半から15世紀中頃にあたと考える。また堀01・02との新旧関係を確認かできる土坑が19基あり、その内訳は、堀以前の土坑が1基、堀廃絶後の土坑が18基である。堀が15世紀の早いうちに廃絶されることを考えると、これらの土坑は15世紀の初頭から中頃にかけて成立したと考えられる。ところで土坑墓として分類した土坑に限ると、古瀬戸中期に属する瀬戸美濃の出土が19基中2基確認できる。これは土坑墓の成立時期を示すものとしてよりも、長期にわたって使用された陶器が副葬品とされたと考えの方が妥当であろう。

(c) 分布

土坑墓として分類した土坑はSK60を除きSD02以北に分布しており、SD02を境界として墓域が形成された可能性も考えられるが、第87次調査(青森県教育委員会1999)で検出された土坑の中に土坑墓の可能性をもつものが無いとはいえないので、断定できない。しかしSD02以南の土坑墓の可能性をもつ土坑は長径100cm～200cm、短径50cm～100cmとSD02以北の土坑墓と比べて規模が小さい。そのことからSD02が、規模をはじめとする土坑墓の性格を規定する境界となったとも考えられる。つまり、堀は廃絶以前も以後も、何らかの境界として機能した可能性がある。なおその他の一般的な土坑は、遺跡全体に広く分布している。

(d) 小 結

各土坑には断面形や堆積状況についての共通性があまりみられなかったため、規模と出土遺物から分類を行い、考察とした。今回検出した土坑の中で土坑墓の可能性をもつものは、比較的大型のものであった。しかし土坑墓であると断定するまでに至らなかったものも多く、今後の更なる調査が期待される。

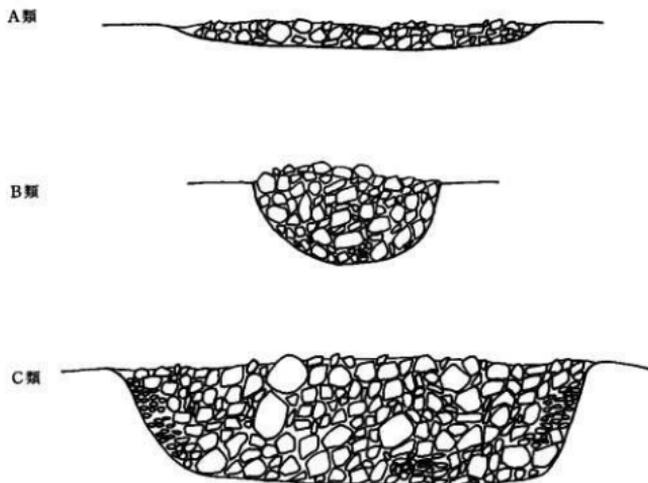
(宮川俊輔)

(5) 集石遺構

十三湊遺跡第86・87次調査地区において、集石遺構17基を検出した。また、第18・76次調査地区、第77次調査地区においても集石遺構が検出されている。これら集石遺構は十三湊遺跡衰退期の遺構である。しかし、どのように形成されたのか、あるいはどういった意図でつくられたのかといったことはいまだ確定していない。そこで本稿では、十三湊遺跡第86・87次調査で検出された集石遺構を中心に、第18・76次調査、第77次調査で検出された集石遺構を加えて検討し、十三湊遺跡における集石遺構の性格を探る一助としたい。

(a) 分類

本稿での集石遺構の定義を述べておく。まず礫が密集して確認されていること。一般的な土坑のようにまばらに少量の礫が混入するのではなく、ほぼ遺構埋土全体に礫が混入するものとした。次に集石と



第79図 集石遺構分類図

いう状態が一つの遺構を形成していること。明らかに他の遺構の廃棄に伴うと判断した遺構は除外した。例えば井戸の廃棄に伴う集石は集石遺構として扱わない。以上、大きく二つの条件に合致するものを集石遺構としてとらえることとする。

今回の調査で確認された集石遺構について、主に形態に着目して以下の3つの類型に分類した(第79図)。

A類:掘り込みが浅いか、またはほとんど掘り込まず、比較的広くかつ不定形に広がるもの。

B類:明確に掘り込みが確認でき、比較的深く、平面形が円形または方形で長短径がほとんど変わらないもの。

C類:掘り込みが深く、比較的大型で、礫をある程度意図的に配列すると考えられるもの。

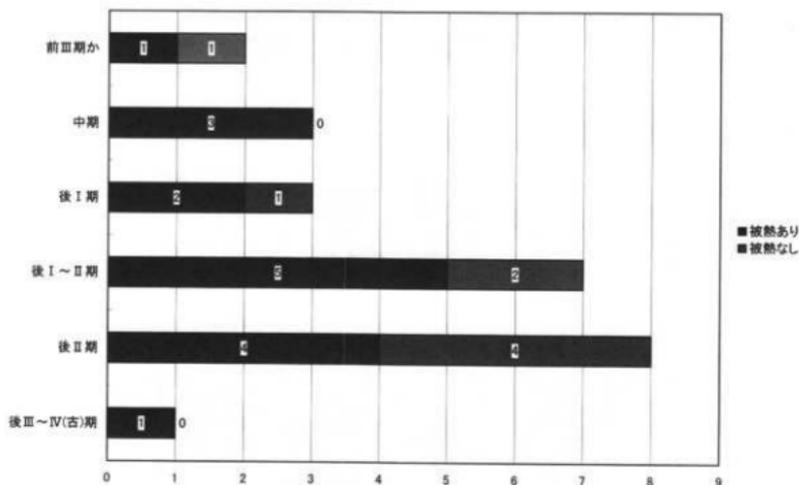
ある程度共通項を持つものを同一のまとまりとみなしたが、遺構の個体差が大きいため、さらに細分することも可能であろう。暫定的な分類ではあるが、ここではこの分類にしたがって考察してみたい。

本年度調査区では、A類5基、B類11基、C類1基が確認されている。これらの遺構はすべて礫の被熱が確認されている。被熱した礫が出土することが、集石遺構の特徴といえるだろう。

A類は、SX01・04・05・08・09が該当する。それぞれ規模には違いが見られるが、比較的掘り込みが浅い、または掘り込まないことが特徴である。また、礫の密度は小さく、礫が不整形に散布されているような状態を呈する。例外はSX04で、平面形がほぼ正方形となる。すべての遺構で礫の被熱が確認できる。

B類は、SX03・07・10・11・12・13・14・15・16・17・21が該当する。規模は直径0.8から1.2mの間に収まり、円形あるいは方形を呈する。明確な掘り込みが確認できる。礫の密度は高く、すべての遺構で礫の被熱が確認できる。

C類はA・B類のように乱雑に礫が入っているのではなく、小型の礫、大型の礫がそれぞれまとまっ



第80図 集石遺構出土の瀬戸美濃被熱破片点数 (接合後)

ている状態を確認できる。上記の分類では「意図的な配列」という言葉を使ったが、実際には何かを意図して礫が詰められたかどうかは不明である。しかし他と区別する意味でここではあえて「配列」という言葉を使用した。本年度調査区においてはSX06のみ確認したが、第77次調査区のSX02もC類に分類できると考える。規模に違いが見られるもの、深く掘り込んでおり断面が台形状を呈する点、大小の礫を配列する点、礫に被熱が確認できる点、鉄釘をはじめ鉄製品が多く出土する点(第77次SX02:30点、本年度調査SX06:24点)、SD02を壊している点など共通する要素が多く見られる。第77次調査区SX02は火葬施設の可能性が指摘されており、本年度調査区のSX06を含めて火葬施設として検討する必要があるだろう。

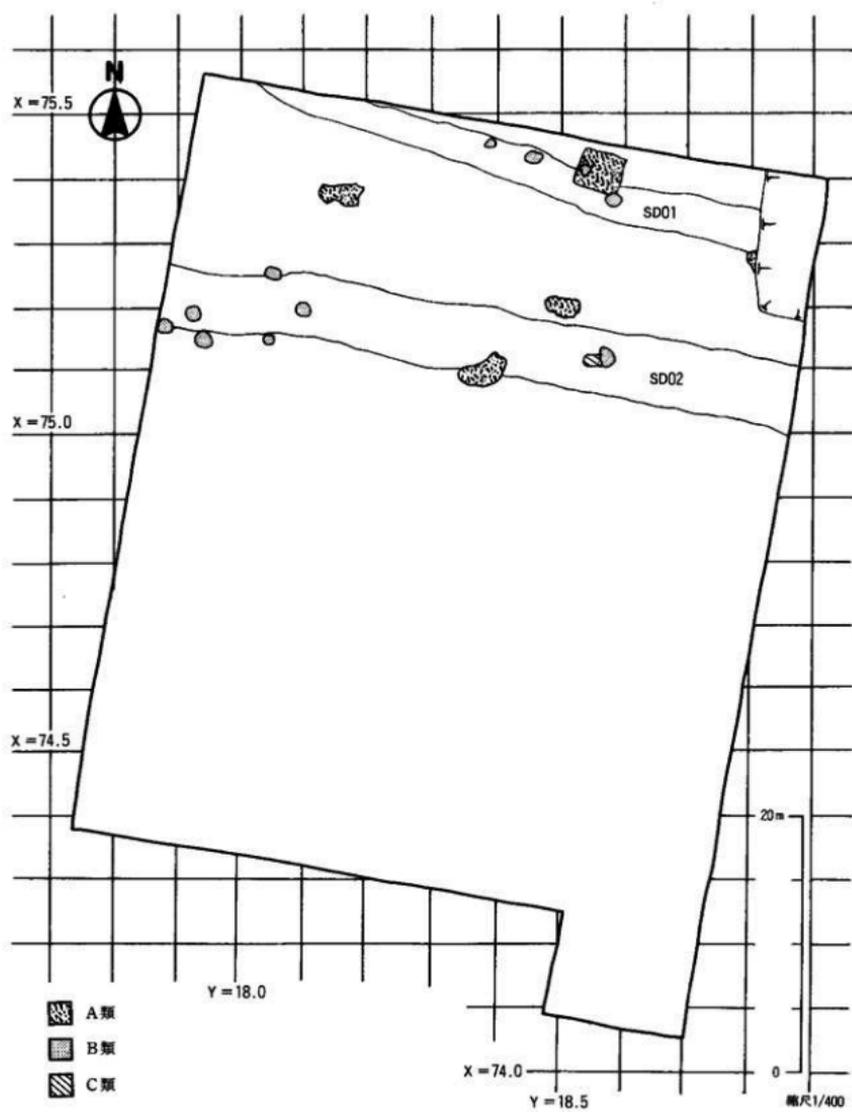
第18次・第76次調査区における集石遺構をみても、A類が3基、B類が6基存在することを確認できる。A類とB類の比率が本年度調査区とほぼ同じになる点が興味深い。

(b) 出土遺物および遺構の年代

概してA類には土器、陶器が多く、B類には遺物が少ない。時期が分かる遺物としては、瀬戸美濃が古瀬戸後Ⅱ期、珠洲がV期のものが多数の遺構から出土しており、14世紀後葉から15世紀中葉に属すると考えられる。多くの遺物から被熱が確認され、礫とともに被熱したと考えられる。被熱を確認することが比較的容易な瀬戸美濃では、24個体中16個体が被熱している(第80図)。特定の時期に被熱した遺物が集中するというような傾向は見受けられない。ある時期に被熱した遺物が何らかの過程で集石遺構に混入したのではなく、遺物が礫とともに被熱したことを裏付ける。

今回確認した集石遺構はそのほとんどが堀SD01・02を壊しており、すべてが堀廃絶後につくられたと考えて間違いないだろう。また、堀上につくられた遺構を壊すようにつくられている例も多く、堀廃絶後何段階を経て、今見られるような集石遺構群が形成されたと考えられる。

A類であるSX04と、それを壊して形成しているB類のSX03との間に第Ⅲ層が確認できる。このことか



第61図 築石遺構分布図

らSX04とSX03の形成にはある程度の開きがあるものと考えられる。しかし、遺物はSX03から古瀬戸後I期または後II期の瀬戸美濃（14世紀後半～15世紀初頭）が、SX04から後II期の瀬戸美濃（14世紀後半～15世紀初頭）およびV期の珠洲（14世紀末～15世紀中葉）が出土しており、時間差はそれほどないことになる。

以上のことから考えると、数十年の間にそれぞれわずかな時間差を伴いながら徐々に、あるいはほぼ同時に集石遺構群が形成される状況があったと考える。

(c) 分布 (第81図)

先述のように、ほとんどの集石遺構が2本の堀、SD01・02上に位置する。集石遺構としての属性によってある程度位置する場所が違うと考えられる。まず、火葬施設の可能性を持つC類は第77次調査区のSX02、本年度調査区のSX06の2基ともSD02上で確認されている。A類はSD02以南には存在せず、B類はそのほとんどがSD01・02上に位置している。

本年度調査区においてB類はSD01・02上に位置するという特徴をもっているが、第18次・第76次調査区における集石遺構では分布に特徴を見出すことはできなかった。しかし堀上だけではなく堀の内側に分布するととらえるならば、安藤氏の館跡に集石遺構が見つられたという結論を得ることができる。

(d) 性格

つぎに集石遺構の性格を探ってみよう。しかし、本年度調査までに得られた情報は断片的なものばかりであり、どうしても推測に頼ることになってしまう。そこで、ここでは今回の調査で確認された情報を記すことで、集石遺構の性格を探るてがかりにしたいと考える。

A類にあたるSX04出土の珠洲すり鉢は、破片のほとんどが1cmから2cm角の細片になっている。自然に割れてこのような状態になるとは考えられず、何らかの意図、作為が働いているものと思われる。ただ、それが集石の礫に混入していること自体は意図したかどうかは不明である。

A類の検出された状況はその遺構が見つられた時点での形態そのものである、といえる。というのは、掘り込みが明確ではない以上、掘り込みを埋め戻すことを目的に礫を使用したとは考えられないからである。つまりA類は、礫を廃棄すること、もしくは礫を平面的に配することを目的としていたと考えられる。また礫のほとんどは被熱しているが、なぜ被熱したのかは不明である。何らかの理由で被熱した礫を散布したのか、散布した状態で火熱を使用する何らかの作業をおこなったのか、いずれかであろう。

A類にあたるSX08においては集石遺構の埋土が柱穴の中に流入している。このことから、柱穴が存在する場所に礫および集石遺構の埋土を散布した、という状況を想定することができる。

B類に関しては、単に土坑を埋め戻す際に礫を使用したと考えることもできる。しかしB類においても礫のほとんどは被熱しており、遺構形成の目的は何らかの理由で被熱した礫を廃棄するために土坑を掘ったのか、土坑を埋め戻す際にたまたま被熱した礫を使用したのか、土坑に礫を詰めた状態で火熱を使用する何らかの作業をおこなったのか、いずれかであろう。

B類の中でも、SX11は礫にかぶせるように上面に大型の凝灰岩（径30から60cm）をのせた状態で確認されており注目される。他の集石遺構ではそれだけ大きな礫が出土する例はない。そのため、このSX11は他の集石遺構とは違った意味を持つ可能性が考えられる。

集石遺構の礫はほとんどが角礫である。河口である十三湊の立地では角礫は自然には存在しない。すぐに手に入るとはいえない角礫が多数出土することからは、相応の需要と役割があったと考えるべきで

ある。そこで礫の用途について推測を重ねると、焼失した家屋の屋根石の廃棄、火葬施設（C類）で使われた礫の廃棄などが考えられる。いずれも確証に乏しく今後の研究が待たれる。

(e) 小 結

以上の事柄を整理してみる。十三湊遺跡における集石遺構は少なくとも次の3類型が存在すると考えた。礫を散布しただけのもの(A類)、礫を埋めるために土坑を掘った、あるいは土坑を埋めるために礫を使ったもの(B類)、そして火葬施設の可能性を有するもの(C類)である。火葬施設と考えられるもの以外の集石遺構については、なぜあれだけの被熱した礫が生じたのか、またなぜ散布あるいは埋設したのかは推測の域を出ない。

今回十三湊遺跡の集石遺構について検討してみたわけであるが、多くのことを知るには情報が少なく、全貌をつかむにはいたらなかった。今後の発掘成果および他遺跡における類例の検討などに期待したい。

(6) 遺構の変遷

(a) はじめに

これまでのところで、本調査区(86・87次調査区)の出土遺物や遺構についての、詳細な個別的検討が行われた。本稿ではこれらの成果をふまえて総合的に、本調査区の遺構の変遷を考察する。それによって、領主館地区にあたる本調査区、十三湊遺跡全体における位置付けを考える作業に寄与したい。

方法としては、まずこれまでの十三湊遺跡の遺構変遷の研究を整理し、問題の所在を明らかにしたい。続いて出土遺物の検討、特に時期を限定できそうな標準資料の設定を行いたい。標準資料については、十三湊遺跡に搬入された国産土器・陶磁器類の中でも、それほど注目されているとはいえない瓦器を中心に、二、三の土器・陶磁器について若干の検討を行なう。その後、遺構配置において重要な役割を果たすと予想できる、堀・集石遺構・井戸の遺物の出土様相を主に検討し、遺構配置の変遷をまとめる。

(b) 研究の整理と問題の所在

領主館地区の遺構変遷に関わる分析は、主に二つの成果があがっている。一つは国立歴史民俗博物館(以下「歴博」とする)の調査報告書によるものである(国立歴史民俗博物館1992)。ここで文献資料と絵図・地籍図の検討、それから考古学的調査との結合が見られ、土塁によって隔てられた領主館の存在や、町屋の形成など、現在も継承されて考えられている中世十三湊の外貌および、それらの時期的変遷

第12表 従来の遺構変遷案と本稿の遺構変遷案

遺構名称	I期		IIa期	IIb期	IIc期
	12世紀後半～14世紀初め	13世紀～14世紀初め	14世紀中葉～14世紀末	15世紀前半	15世紀後半
標準(1992)	遺構の特徴	土塁築造以前	堀(14世紀末～15世紀初め)土塁・土塼・土塼北側において部分的空間形成が見られる	後半に土塼跡跡(瓦葺土塼)、土塼北側において部分的空間形成が見られる	IIa・IIb期の区画遺構が壊滅される
	遺物の特徴	土師瓦(1群)、灰土系土器(2群)	瀬戸美濃御器(古瀬戸後遺跡)、灰土系土器(灰土系V期)、信楽焼		土師瓦(2群)

遺構名称	Ia期	Ib期	IIa・IIb期	IIc期
	12世紀後半	13世紀～14世紀初め	14世紀後半～15世紀前半	15世紀中葉
市野村数寄(1996)	遺構の特徴	宗教的(?)施設	土塼北側で都市計画の萌芽	標準に準拠
	遺物の特徴	珠洲寺(1群)	瓦葺土塼(2群)、瀬戸美濃平陶(古瀬戸I～II期、前期)、珠洲IV～V期など	土師瓦(2群)、瀬戸美濃御器小皿(古瀬戸後遺～前期)

遺構名称	Ia期	Ib期	II前期	II後期	IIc期
	不明	13世紀後半～14世紀前半	14世紀後半～14世紀末	15世紀前半～前半	15世紀中葉
本稿	遺構の特徴	不明	領主館に関する区画遺構	土塼・土塼北側、古瀬戸土塼	堀の崩壊、後堀土塼
	遺物の特徴	不明	土師瓦(1群)、越前焼(2群)	瓦葺土塼、瀬戸美濃(古瀬戸後I～II期)	土師瓦(2群)、瓦葺土塼(2群)、瀬戸美濃(後遺～IV(古瀬戸))

の大枠が述べられた。もう一つは市浦村教育委員会の調査報告書によるものである（市浦村教育委員会1996）。ここで歴博による成果をふまえた上で、I期の二区分とそれぞれの年代の比定が行われた。

それぞれの成果を簡単にまとめると、次のことが分かる（第12表）。十三湊遺跡における遺構配置の変化に重要な役割を果たしたのは、都市軸線を反映するような大規模な遺構、即ち堀や土塁であった。こうした軸線が領主館において遵守される時期を十三湊遺跡の最盛期、それを破壊するかたちで遺構が形成される時期を衰退期と評価されている。そのうち最盛期の二区分が歴博によって試みられているが、それは土塁北側に都市的な空間形成が広がる時期をII a期、土塁南側にまで街区が広がり、短冊形の地割をもつ町屋地区が成立する時期をII b期とするというものであった。そうすると、II期において土塁の北側、本稿の問題に限定して述べると領主館の内部に、どのような変化があったのか（あるいは変化が無かったのか）ということ土塁南側から独立させて考えるということは、画期の設定上できないのである。

ところで、86・87次調査の遺物の出土傾向は、量的な面で、従来の出土傾向を更にはっきりと明示するものとなった（貫井本章第一節第一項）。瀬戸美濃の傾向を例にとって述べると、古瀬戸後I期から急激に出土量を伸ばし、後II期の段階でピークに達した後、後III期には量の落ち込みを見せ、後IV期（古）を最後に出土しなくなる。つまり、14世紀後半～15世紀初頭に遺物の量のピークをみせた後、15世紀中頃急速に衰退するという、従来述べられていた遺跡の盛衰を如実に示している。

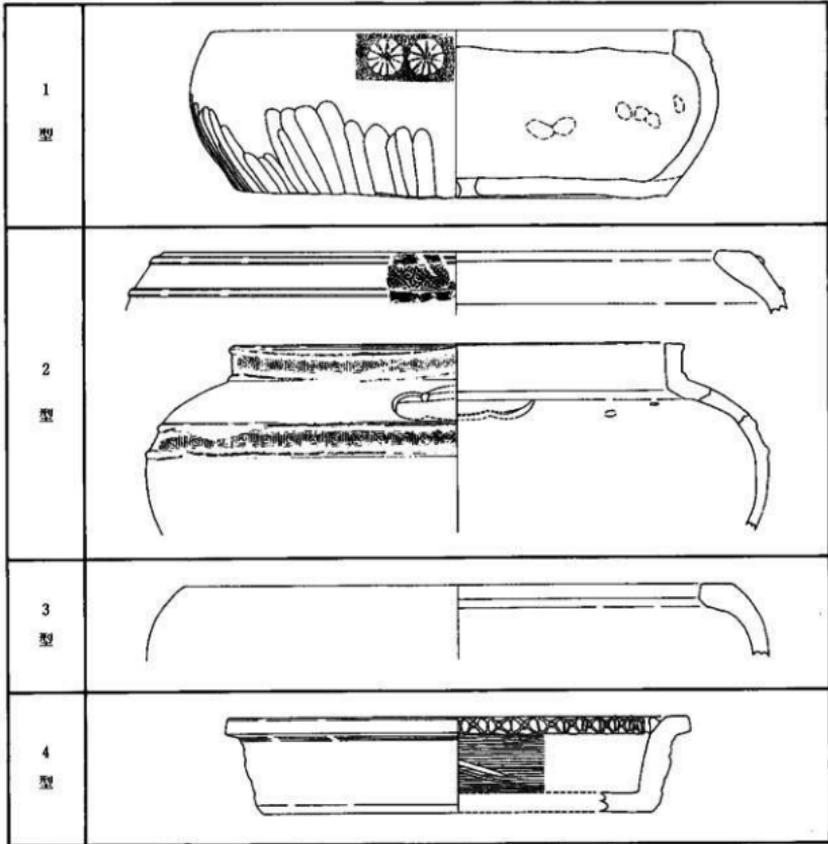
しかし遺構から見た場合、事態は少し複雑である。井戸についての考察にあるように（渡辺本節第二項）、堀の廃絶以降に形成されている井戸の数は僅かではなく、むしろ堀の廃絶以降も領主館の住民が息長く活動していた跡が残る。従来の遺構変遷案からII期を最盛期と衰退期とに2区分していることは先述した。そこでは堀の廃絶後の遺構はすべて、中世十三湊遺跡の衰退時期に相当する。そうすると本調査区においてかなりの数となる、堀廃絶後の遺構が全てII c期の遺構となり、15世紀中頃という若干狭い年代幅の中におさめてしまう結果になるのではないかと、という疑問が浮かぶ。これには中世十三湊遺跡の衰退について都市軸線の破壊に重きを置く余りに、遺構形成の活発な時期と衰退の時期との境に、堀の廃絶を即応させて考えがちであった点に問題があるように思われる。第86・87次調査区においての成果は、堀の廃絶後が、遺物の出土量も遺構の形成も低調な時期とは必ずしもいい難い状況を示しているように考える。

以上問題は二つの点に絞られる。一つは領主館地区内において単独に、最盛期内の変化を捉える画期が必要なことである。もう一つは堀の廃絶が従来いわれている「最盛期」内で起こったという事は無かったのか（あるいは衰退期においての堀の存続は無かったのか）という、画期の再整理である。それぞれの時期にどういった遺構が配置されていたのかを知る必要がある。そのため、もう一度該期の示準となる遺物、遺構を検討することが必要となるのである。

（c）出土遺物の検討

瓦器：十三湊遺跡で出土した瓦器の器種はすべて火鉢である。瓦器火鉢の生産は奈良で始められたものであり、東北地方には15世紀前半から搬入されると考えられている（近江1997）。十三湊遺跡出土の瓦器が奈良産でないとすると、その瓦器火鉢の型式の原型を奈良にもとめることができるのであれば、当地の年代観を以って位置づけることは、ある程度可能であると思う。

中世後期東北地方の遺跡出土瓦器については、工藤清泰が他地方の遺跡出土瓦器なども含めて資料集



第82図 十三湊遺跡出土瓦器分類図(縮尺1/3)

成と、詳細な分類を行っている(工藤1989)。十三湊遺跡においては、その細分に対応するほど種々の型式を出土していないので、簡便に四つの型式に分類することにする(第82図)。

火鉢1型…平面円形であり、体部は直線的に外上方にのびる。突帯を貼りつけない。工藤氏のIA1b類に相当する。

火鉢2型…平面円形であり、体部は内湾する。外面に突帯を貼りつけ、その間に連続スタンプ文を配する。工藤氏のIA2・IA3類に相当する。

火鉢3型…平面円形であり、体部は内湾する。内外面に装飾を施さない。工藤氏のIA5類に相当する。

火鉢4型…平面円形であり、口縁部は直角に外折し、内面に波状突帯を貼りつける。本調査区出土のものを指標とする。

火鉢1型は十三湊遺跡内では、本調査区SI02において初出の型式であり、東北地方でもおそらく初出



第83図 植木鉢に転用された瓦器
(中央公論新社 1990『墓塚絵詞』巻九より転載)

け、畿内の遺跡出土瓦器と比べると特異なスタンプ文を外面に施し、内面に朱漆を塗布するという独自の装飾から、畿内・奈良で生産されたものというよりは、在地産の可能性を指摘できるであろう。そうすると、東北地方に瓦器が搬入されるより後の年代を与えるのが適当であろうから、少なくとも15世紀の範疇で捉えるのが妥当である。

さて近江俊秀の論考に拠れば、東北地方に搬入された「大和系」瓦器は全て火鉢2型に相当し、「15世紀以降」という年代を与えることができる(近江前掲)。近江の論考の段階では、まだ火鉢1型を出土した東北地方の遺跡が無かった事情を考慮すると、東北地方に大和系瓦器が搬入された年代を火鉢1型の属する年代、即ち14世紀後半頃に朝上すると結論づけることができるであろう。火鉢1型である資料(図版129の252)をもう少し詳細に観察してみると、2個1単位で押印する菊花文スタンプなどの細部も、近江の言う「大和系」の概念に適合しており、この瓦器が搬入された瓦器である可能性は高い。

以上の検討から、火鉢1型=14世紀後半～15世紀前葉、火鉢2・3型=15世紀前葉以降、火鉢4型=15世紀代、という概観を得る。

しかしこの瓦器が14世紀後半の型式であるとしても、遺構に遺棄された年代は必ずしも一致しないかもしれない。同資料には底部に径約1cmの穿孔がなされている。この穿孔にどのような意味があるのかわからない点が多いが、『墓塚絵詞』を見ると、火鉢1型に相当する瓦器が植木鉢として使用されている(小松茂美編1990, 第83図)。円孔を穿つのは火鉢としての機能性を減じており、代わりに植木鉢として転用された可能性も考えることができよう。

仮定の上に仮定を重ねるのは忌むべきではあるが、もしこの瓦器が植木鉢として使用されているとすれば、その使用年間はある程度長いと考えた方がいい。そうするとこの瓦器は14世紀後半頃に搬入された後、14世紀でも末の方あるいは15世紀初頭頃にSI02に廃棄されたと考えることができ、同遺構もその頃の遺構であると判断するのが妥当であろう。

信楽焼：本調査区出土の信楽焼のうち、型式分類の可能な破片は全て口縁部であるが、これらは全て壺であり木戸雅寿のTB2類に比定できる(木戸1995)。したがって、遺跡出土の信楽焼は15世紀後半とい

のものと思う。火鉢2型は器形の違うもの同士を含みこんでいることもあり、将来的には細分されるべきであると思う。ただし本稿ではこれらの年代的位置づけを把握することに主な目的があり、その意味では、外面に2条の突帯と、その間に連続スタンプ文を施すという製作技術上の共通点を重視して、火鉢2型を概括することにする。

これら諸型式の年代的位置づけを述べたい。火鉢1型は、今尾文昭の分類によると丸・浅鉢形C類に相当し、14世紀中葉以降の所産となる(今尾1992)。佐藤聖亜の分類では浅鉢形土器II-A類に相当し、14世紀後半～15世紀初頭に位置づけられている(佐藤1996)。火鉢2型は15世紀前葉～中葉以降の所産と見てよい。火鉢3型は火鉢4型に関しては類別が見当たらず、出土地点も遺構外であったため、今回の検討で明言はできない。ただし波状突帯を内面に貼りつ

第13表 第86・87次調査区堀・集石遺構の時期区分

時期	遺構名	SD01-02 との関係 備考	遺物群												その他		
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
堀跡 (一期遺構)	SD01(古墳跡上)																銅鏡点
	SD02(人骨跡上)																瓦片3類
	SD03(人骨跡中)																中世中期後半
	SD04(土器跡上)	1															中世中期後半(土器跡上)
堀跡 (二期遺構)	SD05(古墳跡上)																中世中期後半
	SD06(人骨跡上)																中世中期後半(土器跡上)
	SD07(土器跡上)																中世中期後半(土器跡上)
	SD08(土器跡中)																中世中期後半(土器跡中)
	SD09(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)
	SD10(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)
	SD11(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)
	SD12(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)
	SD13(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)
	SD14(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)
	SD15(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)
	SD16(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)
	SD17(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)
	SD18(土器跡下)																中世中期後半(土器跡下)

表中の○は堀を掘していることを示す。

う年代観を与えることができるであろう。ただし「15世紀後半頃から近江一國に分布圏を広げ」戦国時代の終わりに茶陶器の生産を開始し、近江以外にも分布圏を拡大する」と木戸の論考にはあるので(木戸前掲)、十三湊遺跡に信楽焼が出土するというのは、分布の問題上異例のことなのかもしれない。しかしそうした背景を逆に捉えると、十三湊遺跡出土の信楽焼の年代が15世紀以前に遡ることは更に考え難いので、僅かな破片でも信楽焼が遺構から出土した場合、その遺構は従来の編年観でいう「廃絶期」に比定されるであろう。

土器皿：十三湊遺跡における在産の焼き物は、この土器皿のみである。しかも恒常的に生産されていたというよりは、「京都系土器皿」という、洛外産土器皿の属性の地方伝播が起きた結果のみ生産したようである。榑原滋高の最近の論考によれば、第1群(13世紀後半～14世紀初頭)と第2群(15世紀中葉頃)の二者が存在する。特に第2群は「中世十三湊における最終時期の遺構から出土しており、時間的に最も新しい」とされている点が目玉である(榑原1998)。本調査区で出土した土器皿も第1群・第2群の二者に比定が可能であり、ほとんどが第2群である。

(d) 堀と集石遺構、井戸の年代的な位置づけ

堀の形成と廃絶の年代的な位置づけを、堀および集石遺構の出土遺物の様相から再確認したい。集石遺構を選んだのは、この遺構が短期間で形成されるという性格を予測できる点と、堀を壊して形成される遺構として出現する点(広瀬本節第五項)で、堀の年代の下限を示すのに最適と判断したためである。年代の指標としては先に整理した遺物に加えて、従来十三湊の編年の指標として一番重視されている瀬戸美濃を用いる。

出土遺物の一覧表を作成すると、次のことが理解できる(第13表)。^①瀬戸美濃について、堀には古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期の遺物より新しい時期の遺物は出土しない。集石遺構にもほとんど同様のことが言えるが、後Ⅲ期の遺物が出土している点に違いを見る。^②SD01に瓦器火鉢2類、SD02に信楽焼が出土している。集石遺構にも瓦器火鉢2類が出土している。^③堀には2群の土器が出土していない可能性が高い。^④2条の堀について、出土遺物から見た時期差は特に無い。

①については、集石遺構が堀の埋土を削りこんで形成されている以上、堀の遺物が一部混入する可能性もあるので、そういった現象が起こるのかもしれない。しかしそれをふまえても、堀と集石遺構の出土瀬戸美濃がかなり近接する時期であったことは注目すべきであろう。つまり堀の廃絶と集石遺構の形

いるものの、なお継続して最盛期の区画に従って井戸が掘削される」時期をこの隙間に相当させたい(渡辺前掲)。井戸は中世の生活に必須の要素である。したがって遺跡の形成から廃絶まで通時的に存在するであろう。井戸についても堀や集石遺構と同じ手段を用いて年代的位置づけを分析したので、参照していただきたい(第14表)。

(e) その他の遺構の年代的な位置づけについて

十三湊遺跡を構成する遺構は他にもある。例えば土坑は遺構の中でも柱穴などを除けば一番数の多い遺構であるし、重要な遺物を出土していることも多い。しかし土坑はいかにして形成されたのか不明な点が多いので、短期的な形成であるのか、長期的な形成であるのかが判然としない。したがって他の遺構との先後関係などに気を配りつつ、先の検討と同様に扱うことにし、詳細に検討しなかった。

竪穴遺構については、それが建築物であるという一定の評価を得ることはできたが、長軸方向による時期の比定という従来の方法があまり有効でないことも判明したようであるので(真井田本節第三項)、本稿で特別に検討することは止め、真井田論考に準拠することにした。

掘立柱建物や道路についてはその復原を高島成佑氏のご教示に準拠した。しかし年代に関しては、柱穴から年代を推定できる遺物が出土することはほとんど無いので、主軸方向や、他の遺構、特に井戸との位置関係から推定せざるを得なかった。

溝については堀との関係において若干述べておきたい。堀に先行して領主館を区画していたと考えることのできる溝が何本か今回発見されている。出土遺物からのそれらの詳細な検討は、遺物量があまりに僅少のため現状としては不可能であるが、堀・溝についての考察によって以下のことが判明している(遠野本節第一項)。**①**堀に先行して何本も、先後関係をもちつつ形成されている。**②**区画溝SD03・17においては「比較的長期間にわたって機能した」ことが土層の堆積状況から裏付けることができる。**③**区画溝群の主軸方位が堀や古中道・土塁の主軸方位、即ち都市軸線を継承している。以上**①**～**③**を従来の成果に照らして考えると、区画溝群は13世紀後半～14世紀前半(I b期)の間に継起した遺構であると結論される。溝に伴って出土していないが、おそらくは土器Ⅲ第1群やⅡ期の越前焼変の時期に相当するであろう。

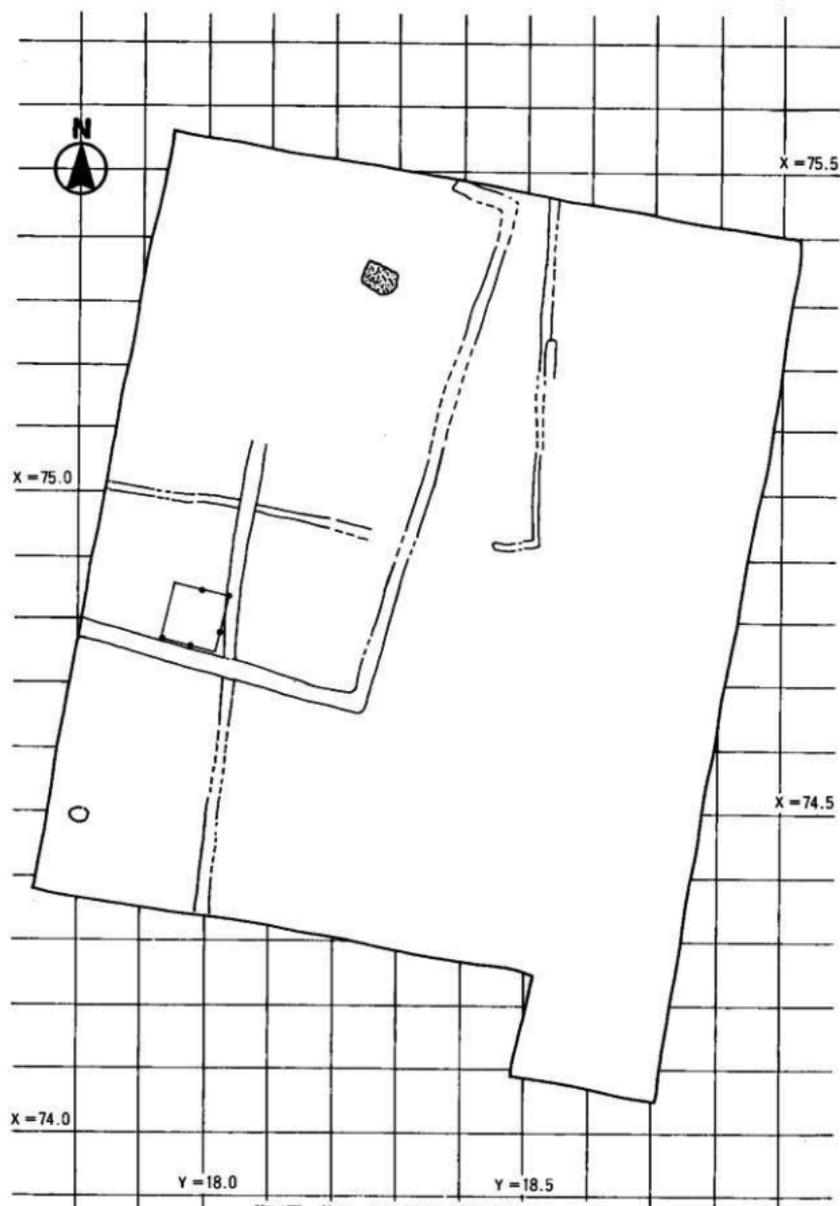
(f) 遺構配置の変遷

以上の遺物・遺構の検討から、遺構配置の復原を行なう(第84～87図)。

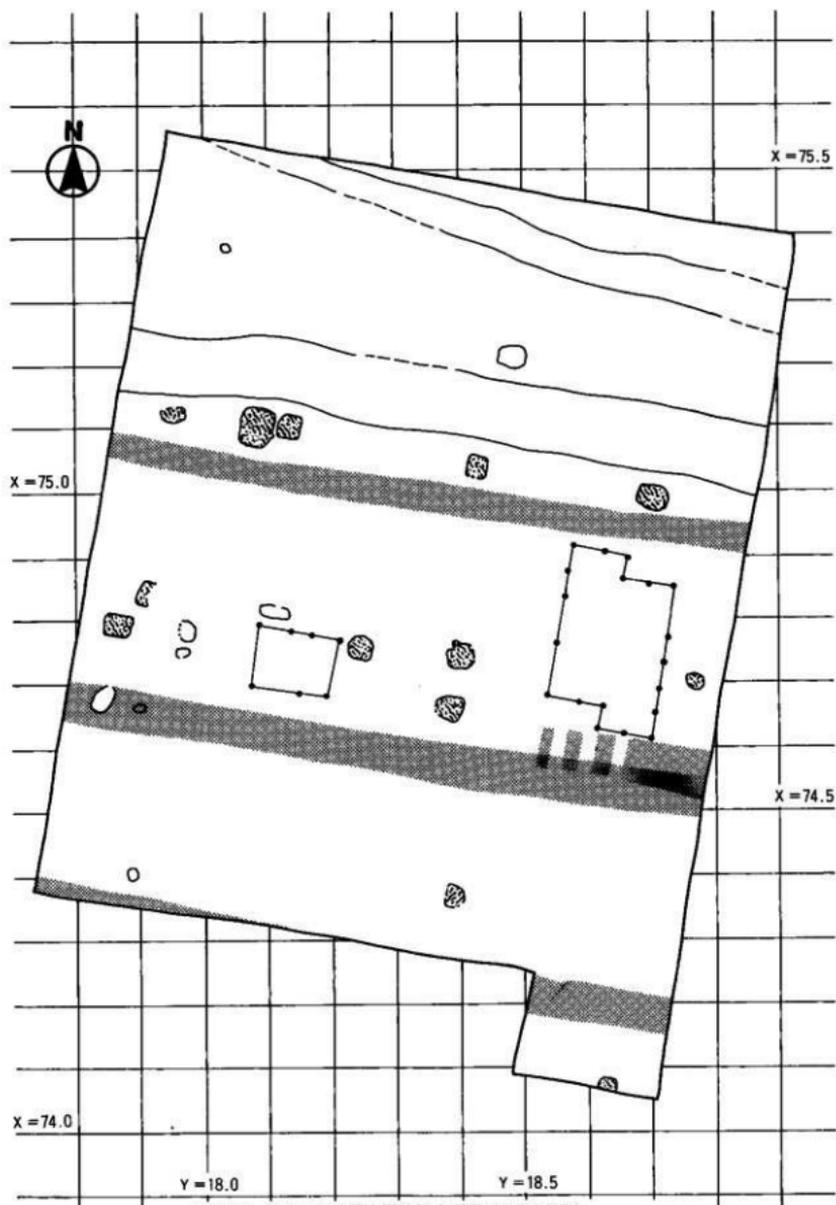
I b期(13世紀後半～14世紀前半, 第84図)：都市軸線に主軸方位をあわせながら、領主館の区画溝が形成される時期。領主館の規模は区画溝の隅の存在から推するに、次のⅡ期ほどには大規模ではない。当該期の遺構は確定できるものがかなり少ないが、目立った遺構としてはSK159があり、土器Ⅲ第1群と六器と考えられている銅製品が出土している(青森県教育委員会1999)。

Ⅱ期古段階(14世紀後半～15世紀初頭, 第85図)：十三湊における領主権力の向上に伴い、館の規模や位置なども一新され、南側を大規模な堀SD01・02によって区画される時期、いわゆる十三湊の「最盛期」である。土塁もこの時期に形成され、領主館の威容が顕現している。堀の南には何本かの道路が通り、その間に南北方向を主軸とした比較的小規模な建物群が密集し、井戸もそれらの間に配置される。

Ⅲ期新段階(15世紀初頭から中頃, 第86図)：十三湊の堀が廃絶され、集石遺構などがその上に形成される時期。都市軸線は比較的守られているが、建物の配置や道路の位置に変更がなされる。この変化は都市生活の荒廃とは言えない。井戸が安定的に存在しており人口減少などを見受けられないからである。

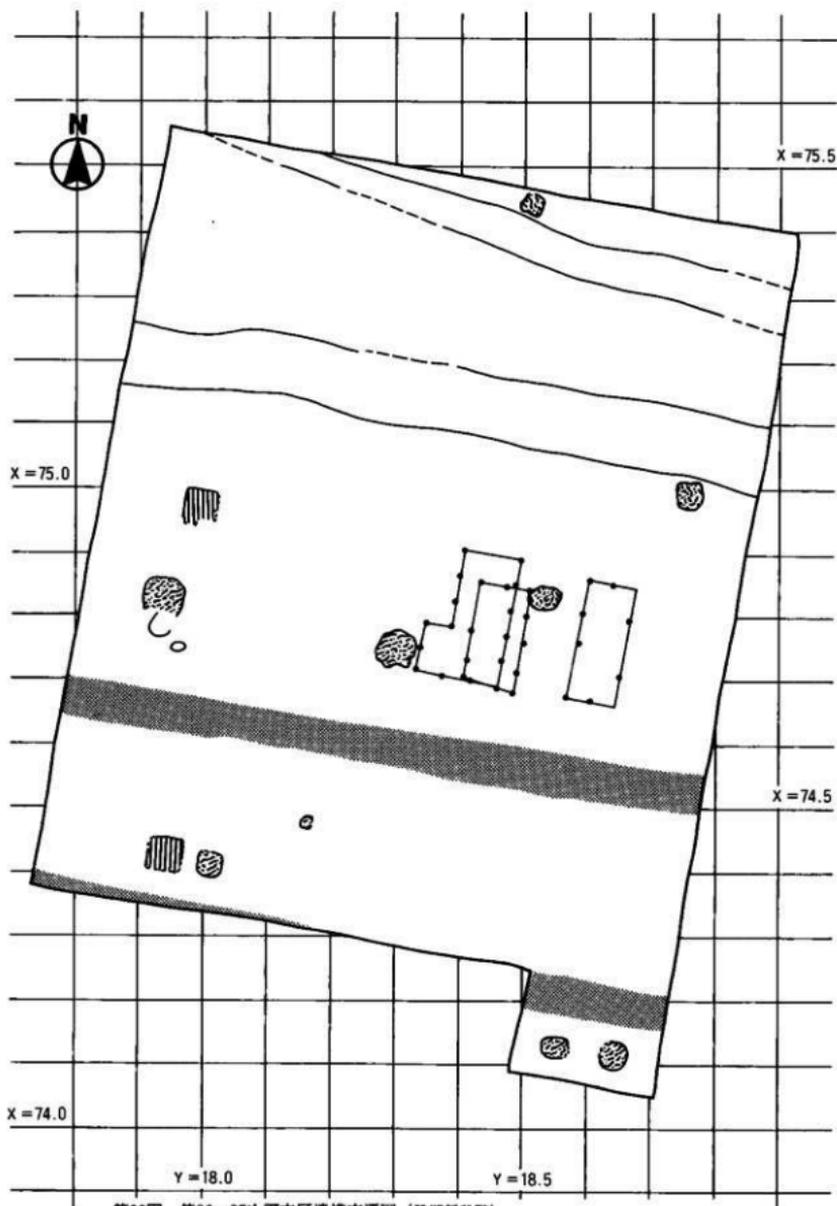


第84図 第86・87次調査区遺構変遷図 (I b期)
※梨地は井戸を示す。



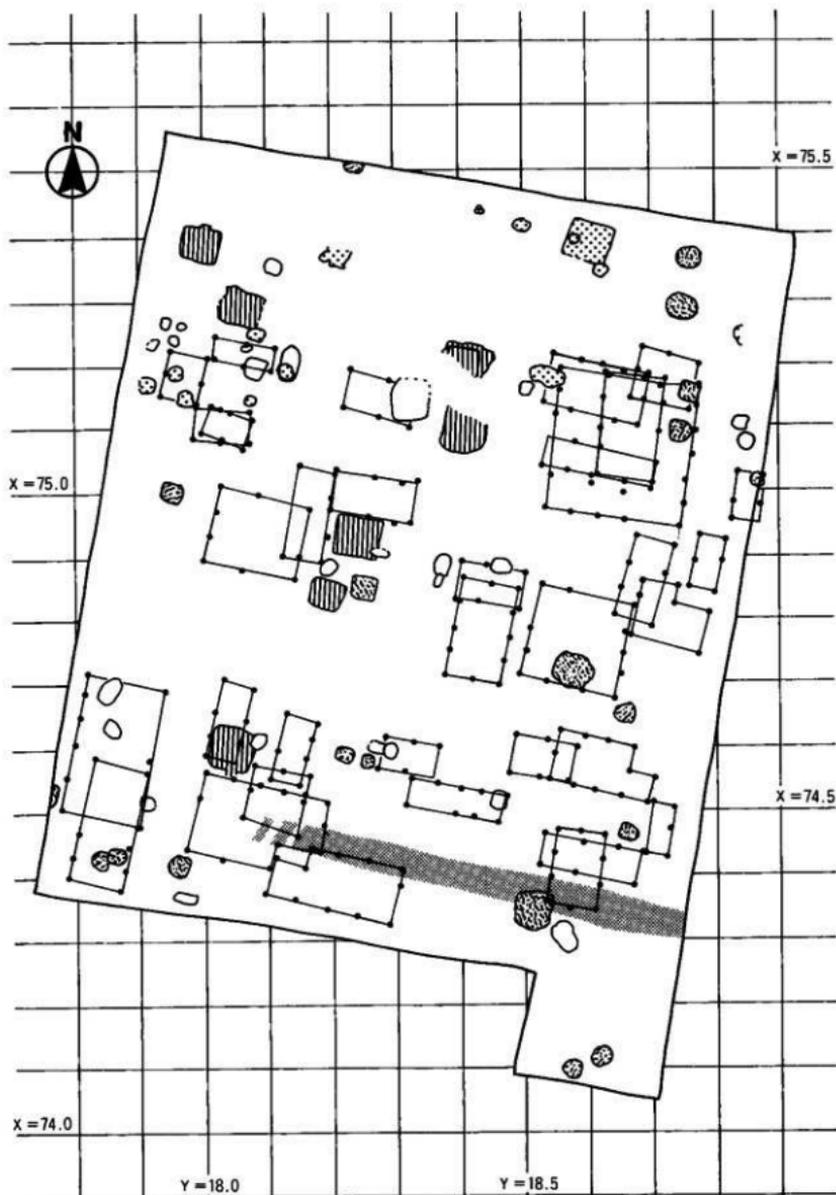
第85図 第86・87次調査区遺構変遷図 (II期古段階)

■梨地は井戸、白抜きの丸は土坑、網点は道路をそれぞれ示す。



第86図 第86・87次調査区遺構変遷図（Ⅱ期新段階）

※型地は井戸，網は竪穴遺構，白抜き丸は土坑，網点は道路をそれぞれ示す。



第87図 第86・87次調査区遺構変遷図(IIc期)

※梨地は井戸、縞は竪穴遺構、白抜き丸は土坑、目の粗い網点は築石遺構、網点は道路をそれぞれ示す。

また土塁も補強され(後期土塁)、土坑に銭を埋納する行為もこの時期に示唆される(阿部本章第一節第三項)。前段階と比較した場合この段階は、土塁の内側に住む人々の居住区を「堀」によって更に厳格に区別するという、領主と他の人々を分かち行為が行われず、「土塁の内側」というかたちで居住地が再編された、とだけ説明すべきであると考ええる。つまり都市計画の変更ではあるものの、そこに付随する領主権力の減衰や増大を考えるには、材料が少ないといえる。

Ⅱc期(15世紀中頃、第87図)：十三湊遺跡における遺物量が急速に減少する「廃絶期」である。この時期を最後に中世十三湊遺跡は終焉し、領主と目される安藤氏は北海道へと勢力の中心を移す。井戸、堅穴遺構、集石遺構などは形成されているが、この段階において都市としての勢いが衰退していくのか、急激な断絶を迎えるのかは不明な点が多い。

(g) おわりに

以上86・87次調査区における遺構配置の変遷を試みた。従来領主館地区における遺構配置の変遷は、その面期の設定についての制約上、Ⅱa・b期として一括せざるを得なかった。発掘調査の整理を経て自分なりの印象として、本調査区における遺構変遷と、遺物量の増減という二つの現象を整合的に説明するには、十三湊の繁栄期の時期区分に関して省察しなければならないという結論に至った。本稿は粗雑ではあるがその点に配慮したものである。

したがって本稿のこの視座に問題が感じられる場合、Ⅱ期古段階、新段階の遺構をまとめて「Ⅱa・b期」と呼称すれば、従来の遺構変遷の考察とほぼ変わりの無い結果となると思う。従来の見解に対して無用の混乱を招くことを避けられたいならば、そのようにして頂きたい。本稿は未だ提言の域を脱していない。

本調査区は領主館の区画遺構および家臣団の居住区跡と推される。これらの変遷が十三湊遺跡の変遷にとって重要な役割を果たすことは周知のことである。しかし領主館地区の変遷が十三湊の全体を示すかといえ、そうではないと思う。今後の不断の調査とその成果の積み重ねが、総合的な十三湊の全貌を指し示すことを期待する。

(田中 学)

(註) 歴博による調査においても第1群・第2群は出土していたが、それぞれ「12世紀後半」「15世紀第3四半期(あるいは末葉)」と年代観が異なっている(国立歴史民俗博物館前掲)。

3 結 語

(1) 今回新たに判明した事実

十三湊遺跡第86・87次調査は、従来の発掘調査の中で最も広範囲のものであった。そのために、新たな事実が判明してきた。それらを、簡潔にまとめて以下に略述し、意味するところを述べたい。

瀬戸美濃の構成比率：古瀬戸後Ⅱ期に比定される生産地の小長曾窯跡と今回出土遺物との比較検討を行った結果、器種別構成比率は、椀類が第86・87次調査区では全体の76.7%、小長曾窯跡では52.5%であり、両者ともに最も多く出土している。しかし、天目茶碗と平碗の比率は、第86・87次調査区では、1：2であるのに対して、小長曾窯跡では、1：8である。今回調査区における他の瀬戸美濃の様相は、全体的にみて、生産地とほぼ同じ様相を示していると考えられる。藤澤良祐氏のご教示によると、青森

県内の浪岡城や境関館などはほぼ同時代の他の遺跡では、縁軸小皿や平椀が多くない。生産地の状況を港湾都市ゆえに直接反映しているのではないかと考える。つまり、港湾都市に荷揚げされ、器種が選択された後、岩木川を遡って、各消費地に到達したと考えた。天目茶碗は、生産地の4倍の出土量であるが、むしろこの点は消費地の一般的ありかたである。

遺物の平面分布：遺物の平面分布図作成に地理情報システム(GIS)を利用した。出土遺物の分布を主として用途別にみることによって、遺跡内の格差に基づく空間の違いについて考察しようとしたが、土器・銅製品・茶道具・調度品・文房具・仏具・装飾品などに空間分布に大きな差異は見られなかった。しかし、工具がSD02以北に集中する傾向が見られた。このことは、SD02廃絶後に竪穴住居が多く作られることと関連すると考える。GISの利用については、膨大な数量の出土遺物の平面分布図を作成するのに非常に効率的であった。今後も積極的に利用していきたいと考える。

銭貨：SK60出土さし銭の意味付けが問題となる。枚数は83枚と通常より少ない。銭種構成からみて、鈴木公雄編年の3期以前(14世紀第4四半期から15世紀第1四半期以前)と考える。また、共伴遺物である瓦器火鉢・瀬戸美濃天目茶碗・珠洲甕の編年観から15世紀初頭と考えた。また、性格としては、骨片が共伴していることから、墓である可能性も存在するものの、推定安藤氏館の堀の南側、家臣団屋敷北側のちょうど空間構成の異なる場所の接点に位置することから、境界祭祀のためのものと考えた。

また、1993年に実施した歴博による発掘調査以降の銭貨562枚について分析を試み、東北地方及び日本海側中世遺跡との比較検討を試みた。その結果、大きくみて2つのピークが存在することが判明した。一つは、皇宋通寶から政和通寶にいたる部分、もう一つは、洪武通寶から永楽通寶にいたる部分とである。

区画遺構：居館の堀2条と溝3条の埋土の分類と埋没過程から溝・堀の性格や廃絶年代を検討した。その結果、溝SD04・72, SD22, SD17, SD03が管理維持を継続して長期使用されたのに対して、堀SD01・02が管理維持をほとんどせずに短期使用されていることが判明した。堀SD01・02を掘削する目的は、管理維持がなされていないことから防衛の意味合いよりも、堀をほるための労働力の掌握と、大規模な区画を施すことによって区画の内と外を視覚的に区別する象徴的な意味合いが強かったと想定した。

井戸：推定領主館跡内の第18・76次調査区検出の井戸も含めて比較検討した。時期的には、1期, 2期, 3a期, 3b期の4つの時期に区分できることが判明した。堀SD01・02を切っている井戸が3b期に多く存在し、瀬戸美濃編年から、後III期の時期にも機能していることが判明した。推定領主館跡内の第18・76次調査区検出井戸との間に構造上の違いは認められなかった。井戸掘削廃棄の方法についての復原も行った。

竪穴遺構：これまでの調査区で検出された竪穴遺構を集成し、分類を行い時期の比定を行った。時期によって、形態および主軸方位には相違が見られるが、平面規模には相違が見られ、特にC類とされる規模の大きいものが推定安藤氏居館内のみで検出されていることが判明した。SI01・11からは、鉄片を検出しており、工房跡と考えた。竪穴遺構の大半は、住居としての機能ではなく、工房である可能性が高い。

土坑・土坑墓：規模・出土遺物から分類を行った。鉄釘・古銭・骨片・刀子・炭化物を含む土坑の規模分布図を作成した。古銭・刀子は副葬品として、骨片は人骨の可能性を考えて抽出した。古銭と骨片が出土した土坑は土坑墓としての可能性が特に高く、それに鉄釘・刀子が伴えばさらに高い可能性を推

定した。

SK17は5つの対象遺物に加え後述する金銅製品が出土したことから、土坑墓群の中でも特殊なものとした。また小規模円形土坑SK12は被熱した骨片や炭化物が大量に密集した出土状況から火葬墓であると考えた。対象の遺物が出土しなかった土坑群は、円形を呈し、長径150cm以下、短径120cm以下に収まるものが大半であった。

大半の土坑の成立時期は14世紀中葉～15世紀中葉頃にあたりと考えた。また堀SD01・02との新旧関係を確認できる土坑は19基であり、堀成立以前の土坑は1基、堀廃絶後の土坑は18基である。堀SD01・02が15世紀初頭に廃絶されることを考えると、今回の調査で検出された大半の土坑は15世紀初頭～中葉にかけて成立したと考えた。古瀬戸中期に属する遺物の出土が19基中2基で確認でき、威信財として長期使用された陶器が副葬品とされたと考えた。また、土坑墓として分類した土坑は堀SD01廃絶後そこを境界として墓域が形成された可能性を考えた。

集石遺構：A・B・Cの3分類を行い、時期を瀬戸美濃編年によって確定した。集石遺構は、大半が堀SD01・02の上から検出されたことから、居館廃絶後に形成されたと考えた。なお、火葬施設の可能性は低い。

遺構の変遷：田中論考では、遺構の変遷から、従来の十三湊遺跡の時期区分の再検討を行った。領主館地区内において単独に、最盛期内の変化を捉える画期が必要なことを提唱した。具体的には、瓦器編年と井戸・集石遺構・竪穴遺構出土の瀬戸美濃の年代観と遺構の切りあい関係から、従来の時期区分であるII a・b期、II c期というものを、II期古段階と新段階、II c期に再区分した。そして、堀の廃絶年代をII期新段階として推定居館の廃絶年代を遡りさせることになった。居館廃絶後のII c期にも井戸、竪穴遺構、掘立柱建物などのかなりの遺構が、形成されていることが判明してきた。この点は、今後の調査を計画する上で非常に重要であり、遺跡全体の評価も含めて後述する。

その他：田中論考で指摘したが、従来あまり遺構が明瞭には判明しなかった13世紀後半から14世紀前半のI b期の遺構を検出した意義は大きい。具体的には、方形区画溝と若干の掘立柱建物を考えた。また、遺物上で特筆すべきは、SK17出土金銅製品である。出土時には、船の可能性も取り沙汰されたが、名古屋大学考古学研究室ソフテックスの写真撮影により、橋であることが確定した。橋の上に2羽の鳥が飛ぶ図像が印刻されており、航海の安全を祈願した住吉図であると考えた。

(2) 推定安藤氏居館の移動の可能性と今後の発掘調査の課題

堀SD01・02が、管理維持されずに、序々に埋没していったのち、人為的に埋められたことが判明したことは、興味深い。その他の溝などの区画遺構が、いずれも維持管理されていることと対照的である。さし錢を出土したSK60が、堀SD01・02が人為的に埋める際に、境界祭祀が行われたためのものであるとすれば、空間を区画して領主居館を設定するため、つまり象徴性を視覚的に表現するためのものであったと理解したい。青磁盤、香炉、青白磁の梅瓶、合子、枢府手白磁椀、瀬戸美濃盤、梅瓶など威信財と想定される遺物が今回の発掘調査区から定量出土することや、土器皿については、定量の2群土器皿が出土することが推定居館周辺の特徴であるといえる。

今回の発掘調査では、II期新段階に堀が廃絶し、推定安藤氏居館の機能が消失したのちも、II c期にかなり都市生活が継続していたことが判明した。このことは、II c期に別の場所に推定安藤氏居館が移

動した可能性を示している。果たしてそれは、どこか。十三湊遺跡の中では、一町の大きな場所を確保することはほとんど不可能であり、その一つの可能性として、唐川城を挙げたい。勿論、唐川城は、十三湊遺跡における大土塁、中軸街路などを中心とする都市計画の再編とともに成立した可能性が高く、II a 期においては、十三湊遺跡における居館と併存していたと推定する。

もしそうであれば、居館の移動の理由は何か。2つ存在すると考えられる。以下に記す。

まず、今回、遺物と遺構の数量から考えて、II 期新段階が最盛期であり、II c 期にもある程度継続していたことが判明した。II 期新段階には、土塁と堀を越えて南側に都市域が拡大していった。恐らく、都市計画にあわせることが不可能なくらいに家臣団居住区の人口密集が生じてきていたのではないか。その矛盾を解消する手段が、唐川城への居館移動であり、二元的に存在した儀礼空間の一元化のためではないか。次に、南部氏との抗争が推測できる。安藤氏は、新羅之記録によると、兼部南部氏に敗れ嘉吉2年(1442)に蝦夷島(北海道)へ退去したことが推定されているが、瀬戸美濃編年後IV(古)期を十三湊の最終とすれば、年代的に整合することになる。また、II c 期の遺構は、ある程度都市計画に基づいており、これを南部氏による支配後のものとは考えがたい。

このように考えれば、以下の想定が可能である。1999年夏に青森県教育委員会による推定港湾施設の調査区で広範囲の敷石遺構が検出されたが、その中より大量の被熱陶磁器が出土している。そのうち瀬戸美濃の最新時期は、古瀬戸編年後III期であり定量出土している。従来編年観では、これは理解できなかった。つまり、都市計画の基準になる東西大土塁と居館の堀が廃絶して、都市機能が消失し、その後港湾施設が大規模に整備されるとすると、時期的に矛盾する。しかし、田中論考に示された編年観によれば、港湾施設の整備年代が、居館が移動した後、II c 期の都市再編の時期に相当することになり、従来の発掘調査成果と総合的に理解できる。年代の問題は、さらに慎重に検討しなければならないが、今後の大きな課題として問題提起したい。

以上の点から考えて、この夏に富山大学人文学部考古学研究室によって予定されている、安藤氏の詰城と想定される唐川城の調査が重要となる。もし、上記の仮説が正しいとすれば、古瀬戸後III期頃(15世紀第2四半期)を中心とする遺構・遺物が検出および出土することが推測される。発掘調査の成果に大いに期待したい。

(前川 要・榊原滋高・田中 学)

引用・参考文献 (五十音順)

- 青森県教育委員会 1986 『境岡館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第102集
- 青森県教育委員会 1996 『十三湊遺跡—市浦村—』I 青森県埋蔵文化財調査報告書 第225集
- 青森県教育委員会 1997 『十三湊遺跡』II 青森県埋蔵文化財調査報告書 第224集
- 青森県教育委員会 1998 『十三湊遺跡』III 第74・75次発掘調査概報 青森県埋蔵文化財調査報告書 第224集
- 青森県埋蔵文化財調査センター 1984 『浜通遺跡発掘調査報告書—東通地点原子力発電所建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』青森県埋蔵文化財調査報告書 第54号
- 秋田地所・秋田市教育委員会 1978 『後城遺跡』
- 網野善彦 1994 『貨幣と資本』『日本通史』第9巻 中世3
- 飯村 均 1994 『中世の「宿」「市」「津」—陸奥南部における中世前期の方形竪穴建物—』『中世都市研究』第3号 中世都市研究同人会
- 石川県六水町教育委員会 1987 『西川島一能登における中世村落の発掘調査—』
- 石川県埋蔵文化財センター 1984 『善正寺遺跡』
- 石川考古学研究会・富山大学人文学部考古学研究室 1993 『珠洲大島窟』富山大学考古学報告第6冊
- 伊藤都太郎 1992 『高麗青磁をめぐる諸問題—編年論を中心に—』『東洋陶磁』vol.22 東洋陶磁学会
- 今小路西遺跡発掘調査団編 1990 『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 岩田 隆 1985 『一乗谷出土の朝鮮製陶磁器』『貿易陶磁研究』No.5 日本貿易陶磁研究会
- 岩本正二 1996 『第二章 遺構 井戸』『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V—中世瀬戸内の集落遺跡』
- 上田秀夫 1982 『14~16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1991 『16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への考察』『関西近世考古学研究』I 関西近世考古学研究会
- 内田裕治 1990 『下宿内山遺跡出土の磁石』『清瀬市郷土博物館年報』
- 内山俊身 1998 『下妻市大木出土の一括埋納銭』『下妻市ふるさと博物館研究紀要』第1号
- 宇野隆夫 1981 『京都大学埋蔵文化財調査報告 II—白河北殿北辺の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 宇野隆夫 1982 『井戸考』『史林』第65巻5号 史学研究会
- 宇野隆夫 1992 『食器計量の意義と方法』『国立歴史民俗博物館研究報告書』第40集
- 宇野隆夫 1997a 『記念講演中世陶器の生産と流通について』『研究紀要』第5号 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 宇野隆夫 1997b 『中世食文化の諸相 中世食器様式の意味するもの—計量分析による使用法の復原—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 遠藤才文・小沢一弘 1992 『第四章 第一節 人・獣骨類の出土した大溝』『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集
- 近江俊秀 1997 『広域に流通した中世大和の土器』『中近世土器の基礎研究』XII
- 大石直正 1990 『北海の武士団・安藤氏』『海と列島文化』第1巻 日本海と北国文化 小学館
- 大橋康二・西田宏子 1988 『別冊太陽—古伊万里—』平凡社
- 大橋康二 1993 『考古学ライブラリー』55 —肥前陶磁— ニューサイエンス社
- 小野正敏 1982 『15, 16世紀の染付碗, 皿の分類とその時代』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1984 『第4回貿易陶磁研究会, その成果と課題』『貿易陶磁研究』No.4
- 小野正敏 1991 『城館出土の陶磁器が表現するもの』『中世の城と考古学』新人物往來社

- 小野正敏 1997『戦国城下町の考古学』講談社
- 葛飾区郷土と天文の博物館 1993『新宿町遺跡』葛飾区郷土と天文の博物館考古学調査報告第3集
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995『江馬氏城館跡一下館跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996『江馬氏城館跡Ⅱ一下館跡門前地区と庭園の調査報告書一』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997『江馬氏城館跡Ⅲ一下館跡南辺の調査一』
- 上ノ国町教育委員会 1984『史跡上ノ国勝山館跡Ⅴ』—昭和59年度発掘調査環境整備事業概報—
- 河合君近 1998『古瀬戸後Ⅱ期の様相—国指定史跡 小長曾麻跡試掘調査から—』瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要、第6輯
- 九州歴史資料館普及館 1978『九州歴史資料館研究論集』4
- 金武正紀 1988『ピロースクタイプ白磁碗について』『貿易陶磁研究』No.8 日本貿易陶磁研究会
- 工藤清泰 1999『北日本における中世後期の陶磁器様相』『貿易陶磁器の年代観』第20回研究会資料集日本貿易陶磁研究会
- 小口雅史 1988『津軽安藤氏の虚像と実像—安藤氏研究の現状と課題』『総合研究津軽十三湖』北方新社
- 国立歴史民俗博物館 1994a『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社
- 国立歴史民俗博物館 1994b『日本出土の貿易陶磁 東日本編Ⅰ』国立歴史民俗博物館資料調査報告書第5輯
- 国立歴史民俗博物館 1995『国立歴史民俗博物館研究報告』第64集
- 国立歴史民俗博物館 1998『陶磁器の文化史』
- 工藤清泰 1986『浪岡城跡出土の瓦質土器とその考察』『浪岡城跡Ⅹ—内館調査の成果とまとめ—』No.1
- 工藤清泰 1995『城館生活の一断面—埋納儀礼の考察』『中世の風景を読む』1 蝦夷の世界と北方交易
- 小松茂美編 1990『墓埴拾詞』続日本の拾巻9 中央公論社
- 小松茂美編 1992『当麻受茶羅羅縁起 稚児観音縁起』続日本の拾巻20 中央公論社
- 柳原滋高 1997『十三湊遺跡出土の陶磁器』『東北の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会
- 茶道資料館 1992『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁—名椀と考古学』
- 市浦村教育委員会 1996『十三湊遺跡』市浦村埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 市浦村教育委員会・富山大学考古学研究室 1997『十三湊遺跡—第77次調査の成果—』
- 沙見一夫 1999『磁石について—中世遺跡出土の仕上磁を中心に—』『中世北陸の石文化Ⅰ』第12回北陸中世考古学研究会資料集
- 嶋谷和彦 1997『十三湊遺跡の出土銭貨』『十三湊遺跡—第77次調査の成果—』
- 下地安広 1997『朝鮮と琉球』『考古学による日本歴史 10 対外交渉』雄山閣
- 尻八館調査委員会 1981『尻八館跡』
- 新宿区市谷本村町遺跡調査団 1995『東京都新宿区市谷本村町遺跡尾張藩徳川家上屋敷—(仮称)警視庁単身待機宿舎仮建設に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 鈴木公雄 1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 1997『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通』『研究紀要』第5輯
- 高橋信雄 1989『戦国期の工人集落—「竪穴状建物群」—』『よみがえる中世』4 平凡社
- 高橋興右衛門 1992『発掘された中世の建物跡』『北の中世 史跡整備と歴史研究』日本エディタースクール出版部
- 立山町教育委員会・富山大学考古学研究室 1994『芦山弁寺堂遺跡—立山信仰の考古学的研究—』
- 田中 学 1999『青森県十三湊遺跡出土の磁石』『中世北陸の石文化Ⅰ』第12回北陸中世考古学研究会資料集
- 谷口 榮 1991『北部東京湾岸における土師の様相』『竹橋門—江戸城址北九竹橋門地区発掘調査報告—』東京国立近代美術館遺跡調査委員会

- 対馬坤六・上村不二雄 1959 『5 萬分の1地質図幅説明書 小泊(青森-第10号)』地質研究所
- 戸籍暢宏 1998 『黒川上古墓群の空間分析—GISの考古学的利用への展望—』平成8年度富山大学人文学部卒業論文
- 富山正明 1999 『越前における石製品の様相』『中世北陸の石文化Ⅰ』第12回北陸中世考古学研究会資料集
- 中井 均 1991 『中世の居館・寺そして村落—西国を中心として—』『中世の城と考古学』新人物往來社
- 永井久美男編 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男 1996 a 『中世の出土銭 補遺Ⅰ』兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男 1996 b 『日本出土銭総覧 1996年度版』兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男 1999 『1999年送付資料』兵庫埋蔵銭調査会
- 中田書矢 1997 『第四章 考察 2 遺物の考察』『江馬氏城館跡 III 一下館跡南辺の調査—』
- 浪岡町教育委員会 1985 『浪岡城跡』Ⅶ 昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書
- 浪岡町教育委員会 1986 『浪岡城跡』Ⅷ 昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書
- 浪岡町教育委員会 1989 『史跡浪岡城跡—環境整備報告書Ⅰ—』
- 新納 泉・金田明大・松下 修 1995 『地理情報システムの試み』『考古学研究』第42巻第3号 考古学研究会
- 西川島遺跡群発掘調査団 1989 『西川島 能登における中世村落の発掘調査』穴水町教育委員会
- 西谷 正 1992 『日本出土の朝鮮陶磁—高麗青磁を中心として—』『東洋陶磁』vol.22 東洋陶磁学会
- 日本貿易陶磁研究会 1999 『貿易陶磁器の年代観』第20回研究会資料集
- 橋口定志 1993 『埋納銭の呪力』『新視点日本の歴史 第四巻 中世編』新人物往來社
- 橋口定志 1997 『考古学から見た中世から近世へ』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集
- 橋口定志 1999 『銭を埋めること—埋納銭をめぐる諸問題—』『越境する貨幣』青木書店
- 長谷川成一 1988 『津軽十三津波伝承の成立とその性格—「奥国元年の大海瀆」伝承を中心に—』『総合研究 津軽十三湖
一』北方新社
- 八戸市教育委員会 1979 『史跡根城発掘調査報告書』Ⅱ 八戸市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 八戸市教育委員会 1982 『史跡根城発掘調査報告書』Ⅲ 八戸市埋蔵文化財調査報告書第3集
- 八戸市教育委員会 1983 a 『史跡根城発掘調査報告書』Ⅳ 八戸市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 八戸市教育委員会 1983 b 『史跡根城発掘調査報告書』Ⅴ 八戸市埋蔵文化財調査報告書第11集
- 八戸市教育委員会 1985 『史跡根城発掘調査報告書』Ⅸ 八戸市埋蔵文化財調査報告書第18集
- 八戸市教育委員会 1987 『史跡根城発掘調査報告書』Ⅹ 八戸市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 八戸市教育委員会 1989 『史跡根城発掘調査報告書』Ⅺ 八戸市埋蔵文化財調査報告書第31集
- 八戸市教育委員会 1990 『史跡根城発掘調査報告書』Ⅻ 八戸市埋蔵文化財調査報告書第35集
- 八戸市教育委員会 1993 『根城一本丸の発掘調査—』八戸市埋蔵文化財調査報告書 第54号
- 平山明寿 1999 『青森県の出土貨幣』『東北地方の中世出土貨幣』東北中世考古学会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ—北部地域北半部の調査—』
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ—北部地域南半部の調査—』
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1995 a 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ—南部地域北半部の調査—』
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1995 b 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ—南部地域南半部の調査—』
- 福島政文 1996 『第三章 遺物 4 石製品 A 砥石の分類と用途』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 福田友之 1988 『十三湖周辺地域の考古学的研究の現状と課題』『総合研究津軽十三湖』北方新社
- 藤澤良祐 1982 『古瀬戸中期様式の成立過程』『東洋陶磁』vol.8 東洋陶磁学会
- 藤澤良祐 1991 『瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—』『研究紀要』Ⅹ 瀬戸市歴史民俗資料館

- 藤澤良祐 1993「第一編 瀬戸大窯の変遷 第四章 瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史』陶磁史編四 愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 1995 a「瀬戸古窯址群III—古瀬戸前期様式の編年—」『研究紀要』第3輯 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1995 b「古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 平凡社 1982『青森県の地名』日本歴史地名大系2
- 北陸中世土器研究会編 1997「中・近世の北陸—考古学が語る社会史—」桂書房
- 松井 章 1994「草戸千軒町遺跡第36次調査出土の動物遺体」広島県草戸千軒町遺跡発掘調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』II
- 松井 章 1997「考古学から見た動物利用」『部落解放』8 奈良県部落解放研究所
- 松尾信裕 1994「大阪市出土の中国陶磁器—特に福建省漳州窯系青花について—」中日学術討論会『SWATOW』
- 松村英之 1999「南北朝期における京都北辺の堀」『考古学に学ぶ—遺構と遺物—』同志社考古学シリーズVII
- 馬淵和雄 1991「都市の周縁、または周縁の都市—いわゆる方形竪穴建築址による中世都市論の試み—」『青山考古』第9号 青山考古学会
- 水戸弘美 1999「山形県大厩遺跡と藤島城跡の石製品—砥石と硯—」『中世北陸の石文化 I』第12回北陸中世考古学研究会資料集
- 箕浦幸治・中谷 周 1990「津軽十三湖及び周辺湖沼の成り立ち」『地質学論集』第36号
- 村越 潔 1975「十三琴湖遺跡」『日本考古学年報』第26号
- 森 毅 1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第9号 大阪市文化財協会
- 森 毅 1995「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に—」『ヒストリア』第149号
- 森田 勉 1982「14—16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 森村健一 1991「畿内とその周辺出土の東南アジア陶磁器—新政権成立を契機とする新輸入陶磁器の採用—」『貿易陶磁研究』No.11 日本貿易陶磁研究会
- 森村健一 1997「中国福建省漳州窯平和県五寨・南勝表採品及び発掘調査」『関西近世考古学研究』V 関西近世考古学研究会
- 山本信夫 1988「北宋期貿易陶磁器の編年—大宰府出土例を中心として—」『貿易陶磁研究』No.8 日本貿易陶磁研究会
- 山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山本雅和 1995「中世京都の堀について」『研究紀要』第2号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 山本正敏 1996「中国製陶磁器の分類と編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）—東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II—』第1分冊 富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所
- 由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査団編 1997「由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書」
- 伊龍二 1998『韓国陶史の研究』淡文社
- 横田賢次郎・森本朝子・山本信夫 1989「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器—森田勉氏の研究成果によせて—」『貿易陶磁研究』No.9 日本貿易陶磁研究会
- 横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『大宰府陶磁器研究—森田勉氏遺稿集—』森田勉氏遺稿集・追悼集刊会
- 吉岡康輔 1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館

付 章 関連調査の成果

- 1 津軽・十三湊遺跡出土漆器の塗膜分析
- 2 十三湊遺跡第86・87次発掘調査出土の動物遺体
- 3 十三湊遺跡の種実同定
- 4 北東日本海域における貿易陶磁の年代観

1 津軽・十三湊遺跡出土漆器の塗膜分析

四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）

(I) はじめに

漆器はJapanとよばれるように日本を代表する工芸品であり、古代以降、階層や価格に応じた各種の製品が生産された。とくにその品質が考古学的には所有階層復原の手がかりとなること、近年の科学的調査で明かにされつつある。この品質差を材料や技術的側面から評価する場合、肉眼による表面観察では使用及び廃棄後の劣化を含めた表面の塗りと加飾部分でしか判断できず、それも専門的な経験に左右される。しかし漆器本来の耐久・堅牢性による品質差は塗装工程(程塗)にあり、この塗膜の下に隠された情報は肉眼観察では判断できず、一般に光学顕微鏡による塗膜断面の分析によって解明される。しかし当遺跡では木胎の遺存するものは少なく、塗膜片だけの出土であるため今回は実体顕微鏡・金属顕微鏡による観察と塗料の同定については、フーリエ変換赤外分光光度計による赤外分光分析をおこなった。

(II) 分析結果

分析・観察を行ったものは下記の資料である。

- 1998年度調査 第86次調査 SK429 (年代不詳・中世か)
 1996・97年度調査 第18・76次調査 SK292 (中世, 15世紀前半, 墓跡) Na270・271
 第18・76次調査 SE05 (中世) Na295
 第18・76次調査 SK300 (中世, 15世紀前半, 墓跡)
 第71次調査 SE01 (近世, 17世紀後半) Na423・440・493

顕微鏡による表面観察 (図版1)

①SK429 (年代不詳・中世か, 図版1-1・2)

1×2cm程度の破片で、総赤色か内面赤色の漆器である。赤色漆は鮮やかな黄赤色(蒲色)を呈し、マンセル値は10R 4.5/11, 顔料は朱。下地の剝離が著しいが炭粉淡下地(後述)の上に漆層、そして上塗りの朱漆が施されている。

②SK292 (中世, 15世紀前半) Na270・271

ともに総赤色か内面赤色の漆器である。塗装工程は炭粉淡下地層→漆層→赤色漆層(マンセル値は7.5R 3.5/6, ベンガラか)。

③SE05 (中世) Na295

SK292に同じ。

④SK300 (中世, 15世紀前半, 墓跡)

SK292に同じ。

⑤SE01 (近世, 17世紀後半) Na423・440・493

Na423 (図版1-3) は井戸の覆土から出土した総赤色漆器で、かろうじて木胎が遺存している。高台裏は黒色漆で、赤色漆による在銘がある。赤色のマンセル値は7.5R 3.5/6 (ベンガラか)。塗装工程は炭粉淡下地層→赤色漆層か、炭粉淡下地層→漆層→赤色漆層と思われる。

Na440 (図版1-4) は高い高台(2.6cm)からあまり腰がはずしに立ち上がる、外面黒色内面赤色漆

器である（口径12.5cm前後）。高台の内刺は浅く6mmほどで、みこみは焼けている。高台裏は茶色漆で、赤色漆による輪辺り紋が加飾されている。塗膜は外面の剥離が著しく、全体の塗りは薄い。ヨコ木取り（柾目）。

No.493は直立するいくぶん高めの高台から、あまり腰がはずらずに立ち上がる総黒色漆器である（高台径7cm前後、高台高1.8cm）。高台裏まで塗膜がみられるが、外面の剥離は著しい。ヨコ木取り（柾目）。

赤外分光分析（図1・2）

中世漆器SK429、近世漆器SE01—No.423・440、SK300の塗膜と下地同定については、フーリエ変換赤外分光光度計（測定機器は日本分光製FT/IR420）を用いた。この赤外分光法は赤外線（普通赤外波長2.5～25 μm 、波数4000～400 cm^{-1} ）を、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析する方法である。試料は2mgを採取しKBr（臭化カリウム）100mgをメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものをを用いた（KBr錠剤法）。測定条件は分解能4 cm^{-1} 、積算回数16、アポダイゼーション関数Cosine。こうして測定した赤外線吸収スペクトルを図1・2に掲載した。

図1はSK429の漆塗膜と炭粉下地に、基準データとして現在の生漆（1994年作成）と炭粉漆下地（1993年作成）の赤外線吸収スペクトルを重ね合わせたもので（ノーマライズ）、縦軸は吸光度（Abs）、横軸は波数（カイザー）である。②はSK429の漆塗膜であるが、生漆の①の吸収と一致しており糖タンパク（1650～1620 cm^{-1} ）の吸収にやや減少がみられるほかは、劣化漆によくみられるゴム質（1070～1030 cm^{-1} ）の増大もみられない。木胎は遺存しないが漆成分の残りは良好といえる。③は炭粉下地の吸収であるが、④の炭粉漆下地（1993年作成）とほぼ一致している。ただ柿漆は炭粉と混ぜた場合は漆とちがってそれ自体の吸収が弱く、指紋領域（1500～650 cm^{-1} ）においては炭粉の吸収が強く現れ、柿漆単体のときのようなシャープな吸収がみられることはあまりなく判別がしにくい。1460～1400 cm^{-1} （ CH_2 変角振動）付近の吸収はタンニン酸の構成成分であるトリヒドロキシベンゼンカルボン酸（没食子酸）のスペクトルと思われ漆下地と判断される。

図2は近世漆器のSE01—No.423・440、中世漆器SK300の塗膜と炭粉下地に、基準データとして現在の炭粉漆下地（1993年作成）と炭粉漆下地（1993年作成）の赤外線吸収スペクトルを重ね合わせたものである。どのデータも④の炭粉漆下地とは一致せず、⑤の炭粉漆下地に近いことが知られる。前記のように1460～1400 cm^{-1} の吸収に特色がみられ、①SE01—No.423は1040～1020 cm^{-1} に増大がみられる。

（Ⅲ）小 結

十三溪遺跡では砂質土が多いせいかわ機質遺物の出土量が少なく、往時の生活文化復原のネックとなっていた。77次調査ではSE01（1号井戸）から17世代と思われる平椀・壺椀・小皿・椀が出土しているが、今回の1997・1998年度調査出土の中・近世漆器とあわせて、ようやく全国的な視野の中で検討できる基礎データが提供されたといえる。要点をとりあげてまとめにかえたい。

中世漆器は十三小学校調査区のSK300、SK292で、安藤氏館内の土坑から刀子・鐔とともに共伴し、15世紀前半ごろに比定されている。塗装工程（髹漆）は下地に普及型の炭粉漆下地を用い、この上に漆層を塗り、上塗りには朱漆が施されていた。つまり漆下地ではあるが上塗りに高価な朱を用い、見た目にも麗しく華やかな仕上がりとなる朱漆器である。朱漆器は下地でみると普及型漆器に用いられる漆下地と上質品の漆下地に大別される。後者は上質な地の粉地とやや安価な炭粉地に分けられ、下地が1回のもものと2回のもの（二辺地）、さらに中塗りにおける黒色顔料の含まれた黒色漆や漆の塗り重ね回数によ

って製品ランクが決まる。樹種もランクに対応した普及型のブナやトチノキ、上質のケヤキといった選択がなされる⁽¹⁾。

岐阜県神岡町江馬氏城館跡では、1996年度調査で地の粉漆下地層→黒色漆層→漆層→漆層→朱漆層という上質品が出土しているが、1995年度出土品には本例と同じく上塗りも朱塗りであるが、下地が普及型の漆下地漆器が出土している。このように館跡からは、領主の家財に相応しい上質な漆下地漆器と被官クラスが用いた漆下地漆器の双方が出土する。

SK292, SK300出土漆器は中世墓の副葬品と考えられるものであるが、中世ではこうした事例が増加している。例えば15世紀代の例として石川県七尾市細口源山遺跡を取り上げることにしよう。

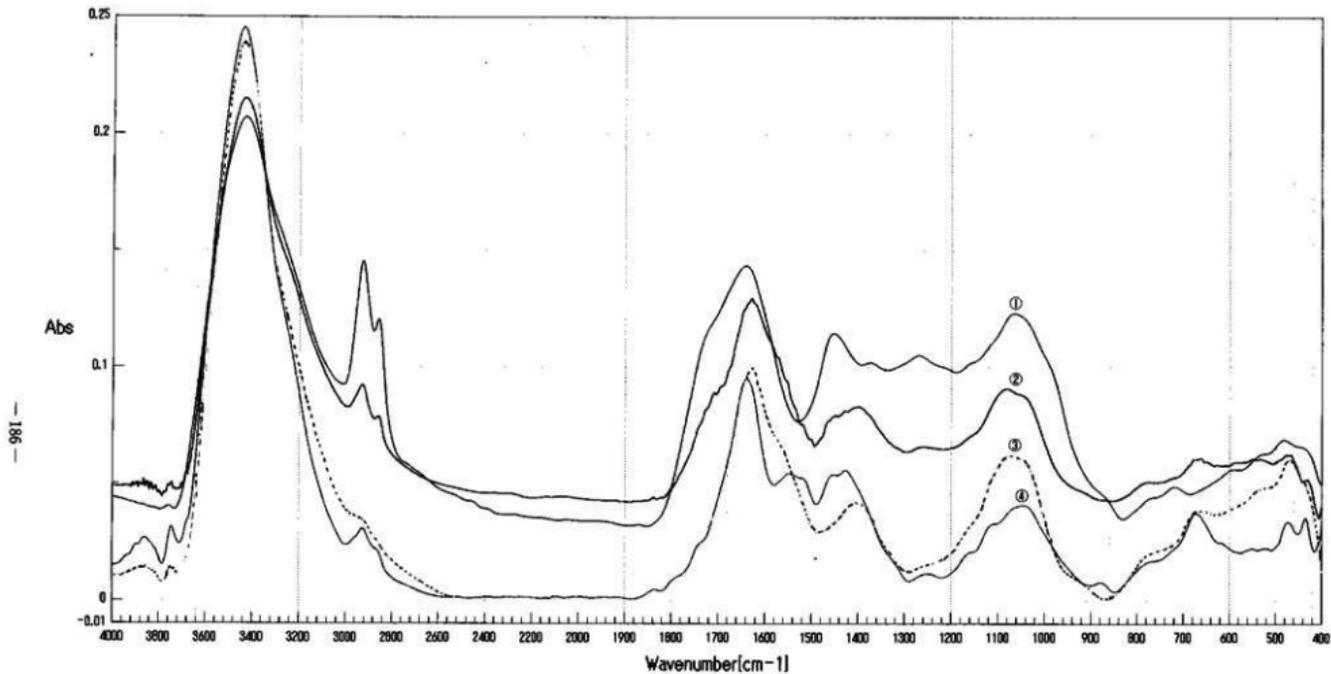
細口源山遺跡は鷹合川流域の低地に向かって伸びる徳田丘陵（標高30～40m）上に営まれた中世墓地で、南側を土塁によって区画して墓域を設定している。400㎡の狭い範囲に土葬墓約50基、火葬墓約80基が重複して存在するが、土塁から北約13mあたりで墓域先端部を区画する溝が弧状に廻っており、火葬墓はこの溝の北側先端部に集中している。時期的には14世紀末から16世紀にまたがるが、主体は15世紀前～中である。土葬墓が先行し、ややおくれで火葬墓が営まれている。漆器が副葬されているのは土葬墓（土坑墓）だけであり、副葬遺物としては以下のようなものがある。

4号土葬墓 漆器・銅銭（12）・数珠玉 5号土葬墓 漆器・銅銭（6）・釘（12）・石玉（3）

18号土葬墓 漆器・銅銭（10）

副葬内容で比較すると土葬50基のなかで銅銭や土器のみのものが大半であることをみれば、4・5・18号土葬墓は最上位にあたる。漆器としては18号土葬墓は数個体重なっていたようで（器形不明）、外面黒色漆地に朱漆塗で向鶴九紋が描かれており、技法としては引掻が多用されている。4号土葬墓も外面黒色漆地に朱漆塗のようであるが、意匠などは不明。5号土葬墓は内面朱、外面黒色の椀とされている。いずれも内面朱漆の漆器であることが共通しているが、どのような品質のものであったかは報告書刊行時点では未報告である。そこで、その後筆者が4号土葬墓副葬漆器の分析をおこなったところ、木胎は残っていないが、①下地としては炭粉漆下地が施されており、層厚は146 μ m前後。炭粉粒子の破碎工程は細かい。②この上に層厚19～32 μ mの漆層が塗られ、③上塗りは朱（HgS）漆である。層厚17～21 μ m。朱粒子は細かく均一なものであった。つまりこの漆器は、上塗り漆は高価な朱を用いているが、下地は漆下地ではなく漆下地であることが判明した。普及型の漆下地漆器としては上質品であり、一般に見た目では、さらに上質の漆下地との識別はできない⁽²⁾。供伴の銅銭（最多の12枚）・数珠重からみて名主クラスの所持品とみて大過ないと思われるが、十三湊遺跡の中世漆器と同じ材料、工程であり被葬者の性格を探るうえで参考となろう。

次に石川県鳳至郡穴水町の西川島遺跡群・白山橋遺跡⁽³⁾の例も被葬者の性格を考えるうえで、重要な手掛かりを与えてくれる。当遺跡は能登の要衝穴水低地に流出した小又川が、大きくS字状に蛇行した西側に営まれている（標高2.7m前後）。集落はIV～V期（中世III～VI期、15～16世紀前）で廃絶し低地型立地の墓地となる。墓地は配石墓（火葬、蔵骨器なし）が主体で五輪塔などの石造物は皆無である。墓地が集落を見下ろす丘陵や寺院境内に石造物を有するものとは対照的な在り方といえる。配石墓は主軸を南北にとる1群と東西に偏した1群に分けられるが、方形プランのものではなく長方形を基本としたくずれたものが多い。副葬品としては土器や漆器（SX09の漆器-西川島-9は布着せに漆下地層、漆3層の極めて上質品）を有するものと皆無のものがあり、若干の階級差や葬法差が読み取れるが、概して

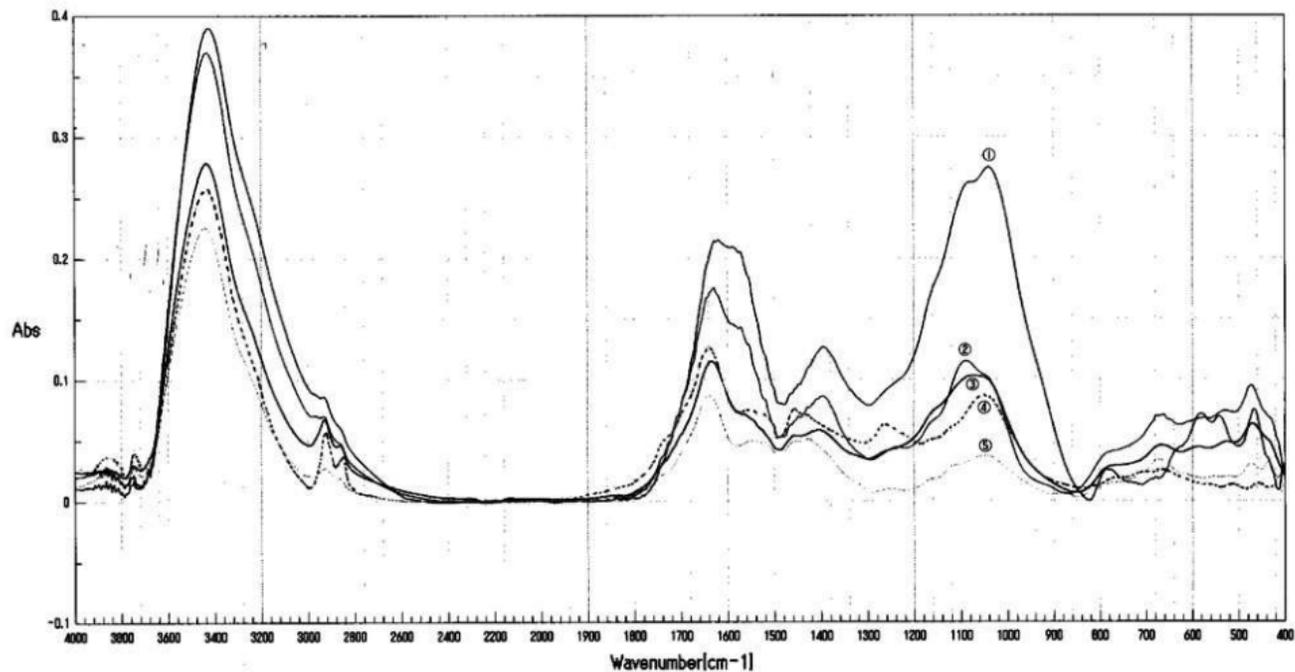


サンプル名
分解
積算回数
アボダイゼーション

十三瀬中世漆器
4 cm⁻¹
16
Cosine

①生漆 (1994年作成)
②十三瀬出土漆器 (SK429, 漆層)
③十三瀬出土漆器 (SK429, 下地層)
④炭粉灰下地 (1993年作成)

図1 中世漆器の赤外線吸収スペクトル (ノーマライズ)



サンプル名
分解
積算回数
アポダイゼーション

近世漆器下地
4 cm⁻¹
16
Cosine

- ①十三層漆器下地 (SE01-423)
- ②十三層漆器下地 (SK300-272)
- ③十三層漆器下地 (SE01-440)
- ④炭粉漆下地 (1993年作成)
- ⑤炭粉伏下地 (1993年作成)

図2 近世漆器下地の赤外線吸収スペクトル

一般村落構成員（平百姓）の墓地と思われる。しかしそのなかでも注目されるのは方形竪穴状配石遺構（15～16世紀初）とよぶ方形竪穴（2.85×2.55m、深さ0.35m）内に3基の配石墓（SX18～21）を有する特殊な遺構である。中央のSX21は焼石を含む人頭大の石を放射状に組んだもの（直径1.5m）。北東隅のSX18は内部を空間とした方形プランを呈するもので、内部には石硯・漆器（盃）・中世土器、そして骨片が認められた。SX21とSX18に挟まれた北東コーナーより、やや西北に木箱（0.9×0.3m）が置かれ内部に2点の漆器が納められていた。SX19は西辺に一部はみだすように作られているが、放射状に近い集石状況である（大塚1期の美濃皿が出土）。SX19とSX21間には瓦質火舎と底部穿孔の珠洲鉢が倒置状態で置かれていた。漆器（SX18）は根来手とよばれる皆朱盃（漆下地の高級漆器、挿図西川島19-10）、木箱内出土の2点（挿図西川島19-1・2）は淡下地漆器の椀ではあるが、漆を数層塗り重ねた淡下地漆器のなかでも最高級品といえるものである。配石墓はSX21→18-19の変遷（15世紀後→16世紀前）をたどる家族墓と考えているが、身分としては木箱内の漆器やSX18の遺物構成（石硯や皆朱盃）から識字階級であるが、五輪塔などの石造物を建造できない階級（村落上層農民＝下層名主）との想定も成り立つ。なお、最上質の漆器を副葬した例としては、磯柳墓から硯箱や化粧箱などの漆製品が出土した福井県生市家久遺跡があるが、中世前半にさかのぼるので割愛したい。

さて、十三漆遺跡でみられた朱漆器は古代ではステータス・シンボルであり、限られた階級しか使用できなかった。内面朱塗（内朱外黒）を含む朱漆器の食器が公家・武家や寺院を中心として普及しはじめるのは13世紀ごろからで、当時の様子が『遊行上人絵巻』『東征伝絵巻』などに描かれている。15世紀では純赤色漆器の出土量がさらに増加し、武士クラスではかなりを占めるようになったことが、1463（寛正4）年の「新見地頭方政所見搜物色々在中」（東寺百合文書サ函123）からもうかがえる¹⁷⁾。新見荘地頭方政所で使用された漆製品は、瓶子・銚子・提子・鏡箱・蒔絵の茶人れ・薬壺・湯盞台・茶釜・香箱・折敷・椀・皿などで、在地支配者層が使用した当時の製品全体がほぼ網羅されている。内面赤色椀も含めると大半が朱漆器である。この傾向は16世紀に入ると一層加速し、越前・常神半島の刀禰大音氏の雑物注文（16世紀中頃¹⁸⁾）のうち、漆器は皆朱と内朱で占められていた。赤色漆器流行の背景としては、元や明の堆朱をはじめとする唐物漆器への強い憧れがあった。『君台観左右帳記』や『室町殿行幸御傍記』によれば室礼における唐物の多さは圧倒的であり、漆器では朱を多用した堆朱、堆黒などの彫漆が主流を占めている。こうした朱色への強い憧れが禪家・公家・武家の座敷飾りや調度品のみならず、食器にも及んだことは当然であろう¹⁹⁾。今1つは町衆や農村の自立に伴って赤色漆器を求める動きであり²⁰⁾、たとえ淡下地にベンガラ漆による赤色漆の椀皿であっても、その赤色の有する魅力は今日われわれが想像する以上のものがあっただと思われる。

近世漆器ではSE01-440は高い高台を有するいわゆる「合鹿椀タイプ²¹⁾」であり、口径がせまくなりかつ器高が低いことから、筆者の編年ではX-2期にあたる²²⁾。赤色漆器の塗装工程は前述の中世漆器と基本的には同じか、中塗り漆層が省略されたものであろう。77次調査のSE01（1号井戸）から17世紀代と思われる平椀・壺椀・小皿・椀が出土しているが、うち2点の木取りがタテ木取りと報告されている。今回の分析ではすべてヨコ木取り（柁目）であり、木取りが確かとすれば東北地域での該期のタテ木取り漆器は西からの搬入品の可能性がある。十三漆遺跡には海運によって各地から運ばれた漆器が中世、近世を問わず存在したかと思われるので、ヨコ木取り木地との違いを、器形や加飾、塗装方法などから検討することが必要であろう。

近世では陶磁器との競合関係は激しくなるが、各地に新しい漆器産地が形成され中世以上に普及を見た時期でもある。近世の漆器産地は1638(寛永15)年の『毛吹草』(松永重頼)によると、山城(塗師細工、棗塗師、浅黄柄・盆・折敷など)、大和(塗桶、塗鉢、山折敷)、和泉(中浜塗木履、常器柄)、近江(朽木塗物 盆・玉器等、五器)、陸奥(薄柄・同盆)、石見(浜田折敷)、播磨(清水折敷)、紀伊(黒江洪地柄、根采柄、折敷)、筑前(折敷)、肥前(唐蒔絵)、日向(五器)があげられている。1712(正徳2)年の『和漢三才図会』では、陸奥(柄 盆)、下野(柄折敷 日光阿曇・木麻)、近江(柄日野、盆朽木)、山城(塗物)、大和(塗桶棗良、塗挽はち 吉野女木)、紀伊(柄 名草黒江)の産地が見える。このほか17世紀において、生産を開始した所は、弘前(津軽塗)、藤崎(白子春慶)、能代(能代春慶)、川連、荒沢(浄法寺柄)、鳴子、仙台、山形、米沢、鶴岡、村上、日光、江戸、平沢、名古屋、高山(飛騨春慶)、彦根、小浜(若狭塗)、金沢、高岡、竹田(竹田柄)、松江、長崎、富山、山中などの25ヶ所におよび(高松、長岡もこのころか)、中世末までにすでに生産を開始していた会津若松(喜多方を含む)、木曾福島(木曾春慶)、駿府、輪島、河和田(越前漆器)、黒江(紀州漆器)などが産地として大きくなり始めたのも、ほぼこの時期といわれている。

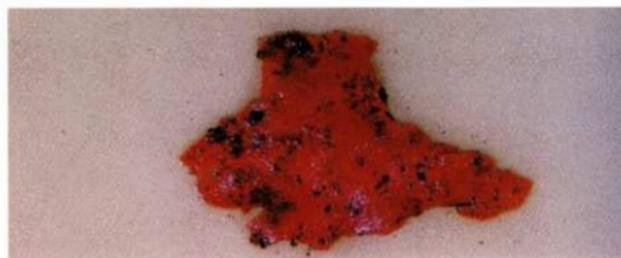
文献の上では上記のようであるが、実際には中世以来、狭域商圏の漆器生産が継続されていたことは確かであり、今後の出土漆器の考古学的、文化財科学的研究によって生産・流通の実態が究明されるものと確信している。なお近世漆器の加飾や木取りによる産地特定については、静岡県御殿川流域遺跡群の報告¹³⁴でふれたことがあるので、参照いただければ幸いである。

末筆ながら本稿作成に際しては富山大学前川 要助教授から何かとご便宜をはかっていただいた。厚く御礼申し上げます。

註

- (1) 四柳嘉章 1995 「漆器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- (2) 四柳嘉章 1996 「江馬氏城館跡下館跡出土漆器の塗膜分析」『江馬氏城館跡II』岐阜県神岡町教育委員会・富山大学考古学研究室
- (3) 四柳嘉章 1997 「江馬氏城館跡1996年度出土漆器の塗膜分析」『江馬氏城館跡III』岐阜県神岡町教育委員会・富山大学考古学研究室
- (4) 桜井憲弘・土肥富士夫ほか 1982 『細川源田山遺跡』石川県七尾市教育委員会
- (5) 四柳嘉章 1997 「概説・北陸の漆器考古学」『北陸の漆器考古学—中世とその前後』北陸中世土器研究会
- (6) 四柳嘉章・辻本 馨ほか 1987 「西川島一能登における中世村落の調査」石川県穴水町教育委員会
- (7) 小泉和子 1986 「荘園政所の家財と生活」『朝日百科 日本歴史』2
- (8) 網野善彦 1990 「北国の社会と日本海」『日本海と北国文化』小学館
- (9) 四柳嘉章 1996 「新潟県水久保遺跡出土漆器の塗膜分析」『水久保遺跡』新潟県教育委員会
- (10) 四柳嘉章 1995 「掘り出された縄文～中世の漆器」日本漆文化会議
四柳嘉章 1998 「漆の考古学—その方法と近年の話題をめぐって」『檜崎彰一先生古希記念論文集』同刊行会
- (11) 四柳嘉章 1993 「合鹿柄の計量及び塗膜分析」『合鹿柄』石川県柳田村
- (12) 四柳嘉章 1997 「概説・北陸の漆器考古学」『北陸の漆器考古学—中世とその前後』北陸中世土器研究会
- (13) 半田市太郎 1970 『近世漆器工業の研究』吉川弘文館
- (14) 四柳嘉章 1994 「三島市御殿川流域遺跡群出土漆器の塗膜分析」『御殿川流域遺跡群II 平成2・3年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財調査研究所

図版1 漆器の実体顕微鏡写真



上塗朱漆層
(塗膜のみ)

1. 十三小区 SK429 表面 (上塗漆)

×26



下地の炭粉層の上に漆層が
施されている

2. 同上 裏面 (下地)

×13



下地の炭粉層の上に漆層がなく、
ただちに上塗赤色漆層
が施されている

3. 町屋区 SE01-423 裏面 (下地)

×13



表面 (上塗赤色漆層) から
下地の炭粉層がのぞいてい
る

4. 町屋区 SE01-440 表面

×13

2 十三湊遺跡第86・87次発掘調査出土の動物遺体

西本豊弘（国立歴史民俗博物館）

十三湊遺跡第86・87次発掘調査で、少量の動物遺体が出土した。それらには、人骨と、ウマ・ウシ・イヌの4種が含まれていた。それらは、焼骨や歯の破片や四肢骨の小片であり、消滅寸前のもろい状態のものが多かった。従って、それらの動物の形態についてはよくわからない。遺構ごとにその出土内容を簡単に説明する。

(a) SD01

第1～3図：第1号溝からはヒトの焼骨が多量に出土した。すべて長さ1ないし2cm以下の小さな破片であり、また焼けて収縮していた。人骨かどうか、判断に苦しむものが多かったが、ヒトの頭蓋骨片・下顎骨片・大腿骨・寛骨・指骨・椎骨・肋骨を認めた。そのため、これらの一括で採集された焼骨は人骨と判断した。頭蓋骨片と下顎骨片の大きさから見て、成人である。下顎枝の筋粗面がよく発達していた。寛骨はおそらく左側の大座骨切痕部分と思われる。大座骨切痕が90度の場合は普通女性であるが、この資料はそれよりもかなり狭いので、おそらく男性であろう。大腿骨は様々な部分の破片となっていたが、後後部分の破片では後稜の発達が弱いようであった。男性としては華奢な感じであるが、中世人とすればこの程度の弱さでも男性と判断して矛盾はない。歯は全く残っていませんので、詳しい年齢はわからないが、この人骨はこれまでの所見から見て青年から熟年にかけての男性であったと推測される。

第4図：ウシの左右下顎骨。いずれも第一から第三後臼歯有り。計測できた歯は、左側第三後臼歯だけであり、その長さは38.2mmであり、かなり大型のウシである。磨耗がかなり進んでいるので、老年であろう。

地点なし：ウマまたはウシの上顎臼歯1点。

(b) SD17

第5図：ウシの歯一括。下顎右側第二、第三後臼歯。左側第一から第三後臼歯。切歯片2点。計測できたものは、右の第三後臼歯の長さ39.4mm、左側第三後臼歯の長さ38.6mmであった。これらはいずれも磨耗が著しく、同一個体で大型の老年のウシと思われる。

(c) SD03

第6図：ウマの下顎右側第四前臼歯、第一から第三後臼歯一括。歯のみの出土であるが、おそらく顎骨を伴っていたと思われる。歯の磨耗が著しいので壮年から老年のウマである。破損が著しく、歯の大きさは計測できなかった。

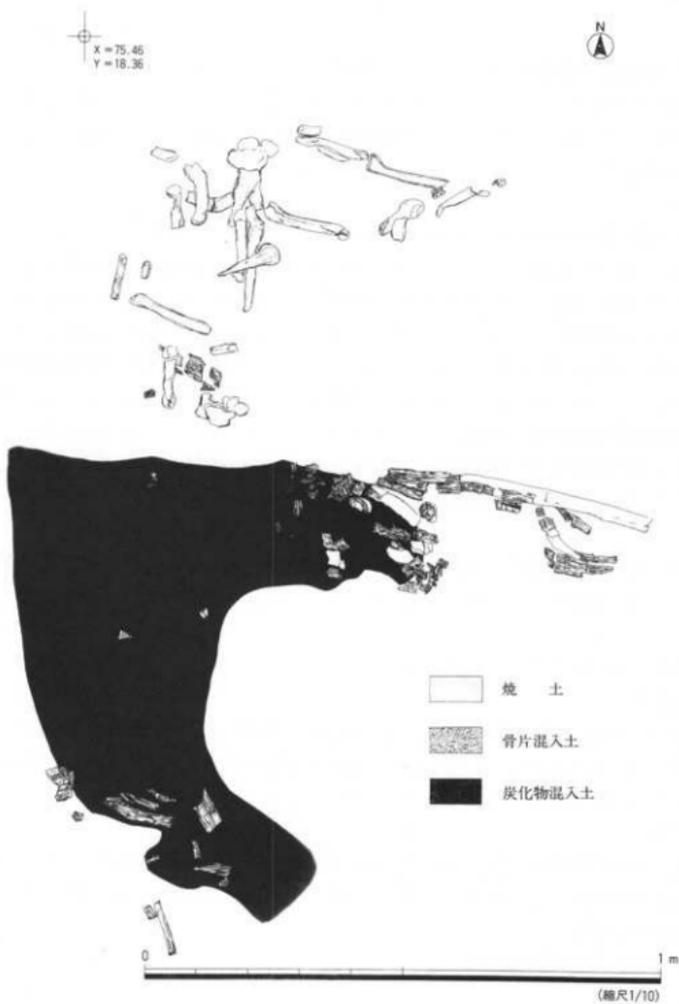
ウマまたはウシの上顎臼歯2点。

(d) SK327

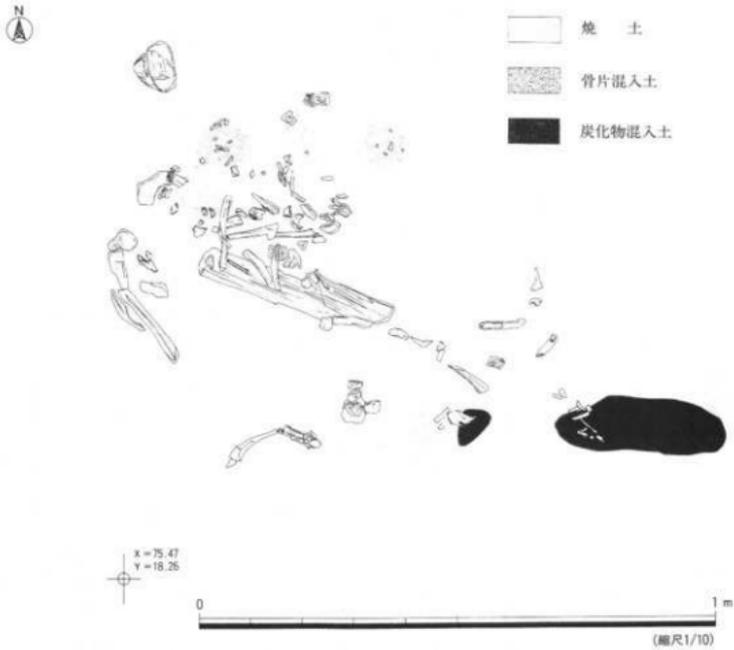
ウマの上顎臼歯破片1点。小骨片3点。ウマの上顎左側第三または第四前臼歯一点。長さ26.2mm。磨耗がかなり進んでおり、壮年の大型のウマと思われる。

(e) SP409

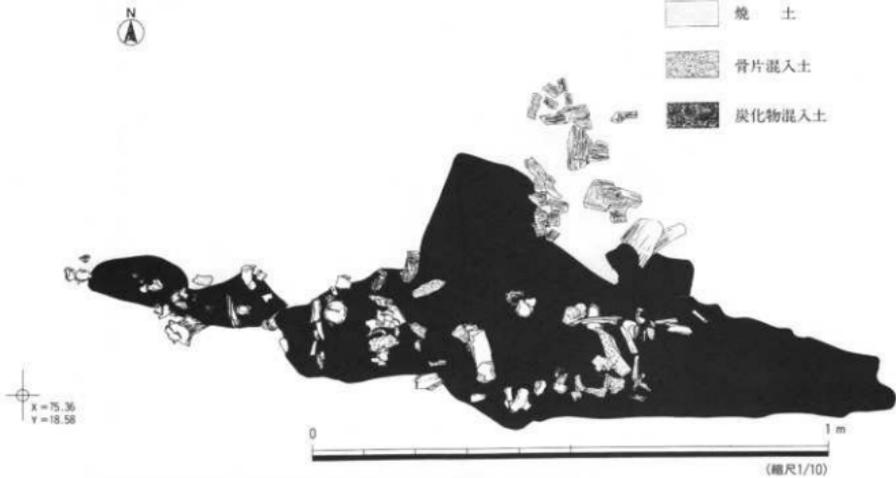
焼骨破片少量。



第1圖 SD01人骨出土状況図1 (遠野いずみ製図)



第2図 SD01人骨出土状況図2 (遠野いずみ製図)

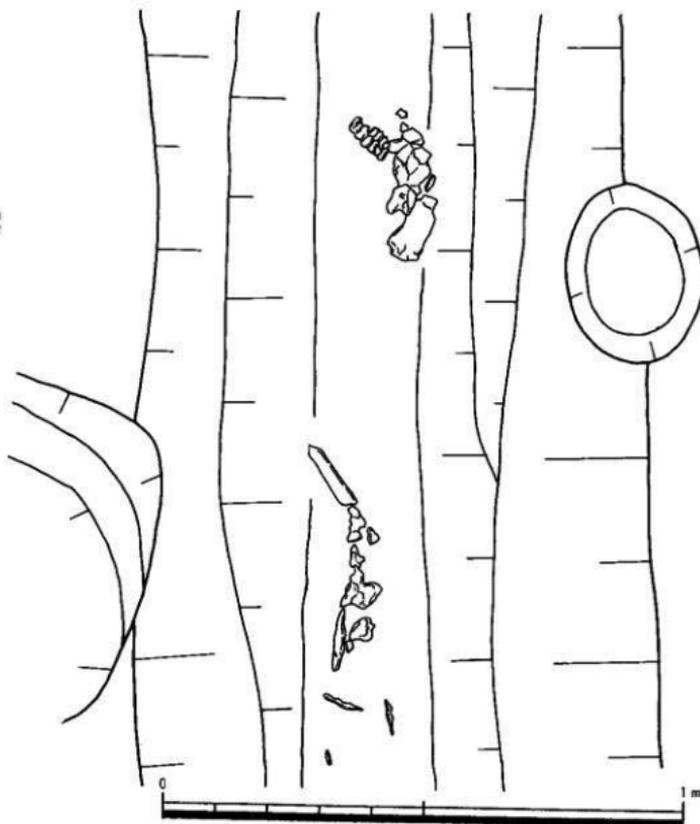


第3図 SD01人骨出土状況図3 (遠野いずみ製図)



(縮尺1/3)

第4図 SD01獣骨出土状況図 (遠野いずみ製図)



第5図 SD17獣骨出土状況図 (遠野いずみ製図)

(縮尺1/10)

(f) SX35

ウマの上顎白歯破片2点。四肢不明。磨滅少なく若獣。

(g) 包含層出土

ウマ基節骨2点。中節骨1点。いずれも大型のウマ。

イヌ上顎骨左側。第四前臼歯、第一後臼歯有り。第一後臼歯の長さ、11.2mm。第四前臼歯は計測不可能。歯が磨滅しており、壮年の小型犬である。

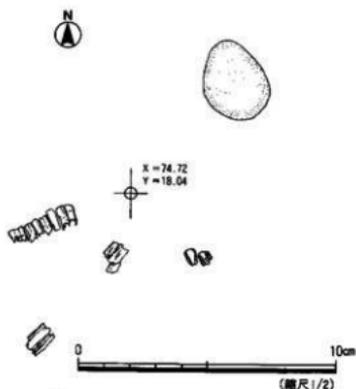
家畜骨片5点。

(h) まとめ

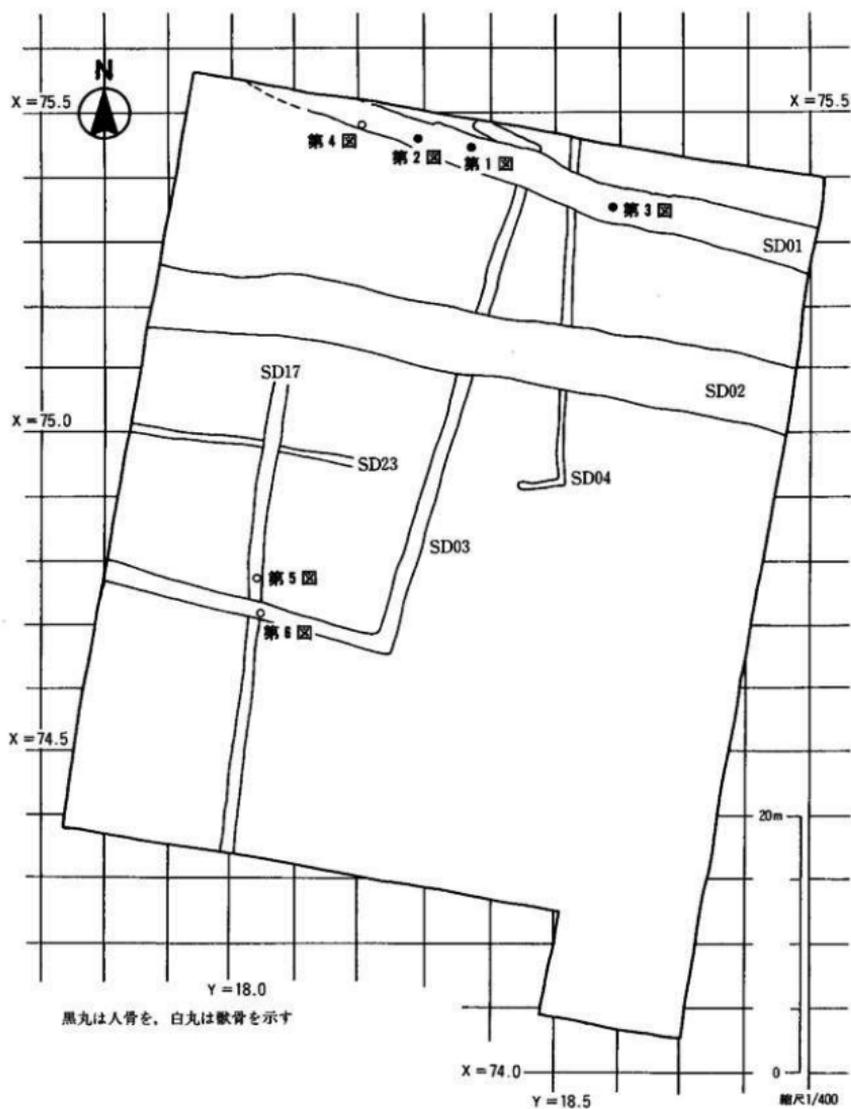
以上に述べたように、今回出土した動物骨のうち人骨は全て焼骨であった。その人骨がSD01で焼かれたものか、または焼かれたのちにSD01に安置されたものかのいずれかであろう。この点は発掘所見を参照していただきたい。ウ

シは下顎の歯からみて少なくとも成獣2個体以上含まれていた。それらの歯や骨から見るとかなり大型のウシであった。ウマは、歯の内容容から見て成獣1個体、若獣1個体の少なくとも2個体以上含まれていた。馬の歯は、その計測値から見て比較的大型のものであった。イヌは上顎骨1点の出土であり、小型であるという以上にその形質的な特徴は良くわからなかった。

以上4種の内容容を見てきたが、いずれも家畜であり、野生の動物が全く含まれていない事が特徴である。また、家畜では、東日本では古代中世にかけてウシよりもウマの方が多い傾向があるが、この遺跡ではウシとウマがほぼ同程度出土していたことが特徴である。



第8図 SD03獣骨出土状況図(遠野いずみ製図)



第7図 第86・87次調査動物遺体出土地点 (田中 学作成)

3 十三湊遺跡の種実同定

金原正明・金原正子

1. はじめに

十三湊遺跡で出土した炭化物の同定の依頼を受けたので、記載を主に報告を行なう。

2. 試料と方法

試料は表に示す23点の試料であり、ほとんどが炭化し、複数の種実類が塊状を呈するものであった。

同定は試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

3. 結果

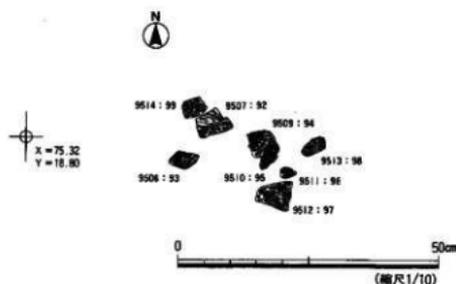
同定の結果、ほとんどが、イネの炭化果実の塊であり、他にエゴマの炭化果実の塊とモモ核が同定された。塊であるものは重さをはかり、結果表に示した。以下に形態の記載を行なう。

1) イネ *Oryza sativa* L.果実 (炭化) イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。炭化した穎の残るものも多い。



第1図 SD01人為的埋土内炭化イネ出土状況図 (遠野いずみ製図)



第2図 SD01人為的埋土内炭化イネ出土状況図 (遠野いずみ製図)

4. 考察

イネ果実は、ほとんどが炭化した塊となっており、全体の形状を観察できるものは少なかった。やや

2) エゴマ *Perilla frutescens* Britton var. *japonica* Hara 果実 (炭化) シソ科

炭化しているため、黒色を呈し、下端はわずかに突出する球形を呈する。表面に大きい網目模様がある。

3) モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

表1 十三湊遺跡の種実同定結果

試料No.	出土遺構	分類群	形状	部位	重さ(g)	個数	備考
9507:92	SD01人為的埋土	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	29.65		
9508:93	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	24.65		
9509:94	同上		炭化物				種実無し
9510:95	同上		炭化物				種実無し
9511:96	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	3.66		
9512:97	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	34.97		
9513:98	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	17.47		
9514:99	同上		炭化物				種実無し
9535:120	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	142.56		
9536:121	同上		炭化物				種実無し
9537:122	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	234.82		
9538:123	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	67.8		
9539:124	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	70.65		
9540:125	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	2.39		
9541:126	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	107		
9542:127	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	3.98		
9543:128	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	269.93		
9544:129	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	235.5		
9545:130	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	61.97		
9546:131	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	80.74		
9547:132	同上	イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化物	果実	68.06		
8129:12	SX12	エゴマ <i>Perilla frutescens</i> Britton var. <i>japonica</i> Hara	炭化物	果実	1.23		
9402:11	SK490	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核		1	

短粒のものとみられる。炭化した穎片が観察され、穂の状態で火災などにあって炭化したものと推定される。エゴマは自然炭化でタール状の塊となったと考えられる例もあるが、同様に火を受けて炭化したとみられる。モモ核は東北日本での出土は珍しいが、以前にも十三湊遺跡から破片が出土している。核の表面に維管束の小孔があり、比較的新しいタイプのモモ核である。

引用・参考文献

- 佐藤敏也 (1988) 弥生のイネ。弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣出版株式会社，p.97-111。
- 松谷純子 (1995) 遺跡からのエゴマの出土に関連して，月刊考古学ジャーナルNo.389，ニューサイエンス社，p.9-13。
- 金原正明・金原正子・中村亮仁・金原明 (1995) 十三湊遺跡発掘に伴う試料の花粉・寄生虫分析ならびに種実・樹種同定。青森県十三湊遺跡・福島城跡の研究。国立歴史民俗博物館研究報告，第64集，国立歴史民俗博物館，143-151。
- 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種。考古学ジャーナル，No.409，ニュー・サイエンス社，15-19。

図版 1 十三湊遺跡の種実 I



1 9511 : 96 _ 1.0mm



2 9535 : 120 _ 1.0mm



3 9547 : 132 _ 1.0mm



4 9537 : 122 _ 1.0mm



5 8129 : 12



_____ 1.0mm 6 同左 _____ 1.0mm

図版 2 十三湊遺跡の種実 II



1 8402 : 11 _1.0mm



2 同左 _1.0mm



3 9547 : 132 _1.0mm



4 9547 : 132 _1.0mm



5 9547 : 132 _1.0mm



6 9547 : 132 _1.0mm

4 北東日本海域における貿易陶磁の年代観

—瀬戸美濃との併行関係について—

貫井美鈴（富山大学人文学部国際文化科学学生）

(1) はじめに

貿易陶磁の分類および編年研究は、現在までに多くの研究者により行なわれている。しかし個々の案には差異があり、未だ確固たる決定をみない。この理由としては、貿易陶磁の生産地が当然ながら国外に存在することや国内における長期使用が考えられることなどにより、生産から流通、使用から廃棄までの期間を想定することが困難であることが挙げられる。

近年では生産国や輸入国の調査・研究が進み、国家間での比較検討が行なわれつつあるものの、生産状況、流通ルートなど貿易に関わる政治・経済・社会的背景を解明するにはまだまだ厳しい状況である。そのため貿易陶磁は単独で研究することが難しく、他の遺物の研究成果に依存させて検証することが必要であると考えられる。

貿易陶磁の年代比定には、共存遺物の編年に基づいて決定する方法が採られ、比較資料には在地土器が最適であるとされている。確かに在地土器は各地で緻密な編年が組まれており、耐久性や使用目的などから使用期間は短いと推察できる。しかし土器は地域色が強く、地域間での相互比較が充分に行なわれているとは言い難い。また北日本のように土器が希薄な地域での検討は難しく、全国的な比較を行なう場合の基準には、必ずしも最適とは言えない。

そこで本稿では、土器に代わる指標として瀬戸美濃を用いることとした。瀬戸美濃は藤澤良祐氏によって詳細な編年が組まれており（藤澤1982, 1991, 1995 a）、本稿で扱う北東日本海域ではまとまった出土がみられる。また瀬戸美濃の成立と変遷過程には貿易陶磁の影響が強くみられ、両者を限られた時間の中でとらえることは、当時の社会におけるそれぞれの評価や役割を考える上で非常に重要であると考えた。

(2) 分析の方法

年代比定の方法には、十三湊遺跡における瀬戸美濃の各時期別出土量が石川県普正寺遺跡よりも先行することに着目し、その時期差にあわせて青磁・白磁の各型式の出土量がどのように変化するかを比較して行なった。

計量の方法は破片数計算法を採用した。対象時期は、十三湊遺跡と普正寺遺跡の活動が活発化したと考えられる古瀬戸後Ⅰ期から廃絶する後Ⅳ(古)期に限定し、この時期に該当する瀬戸美濃と貿易陶磁を用いた。ただし青磁椀・白磁椀・皿・坏以外の貿易陶磁については明らかに時期が早いと思われるものは除外したが、青磁盤・天目茶椀・黒褐釉陶器については、この時期に該当しない製品も混入している可能性がある。また実際に使用する場では伝世した製品も存在していたと考えられる。また対象資料は十三湊遺跡では第86・87次調査、普正寺遺跡では1982年度の発掘調査（石川県立埋蔵文化財センター1984）の成果を用いた（第1表）。ただし普正寺遺跡の計測データについては、筆者自身によるものである。

なお2時期にわたるもの（例：古瀬戸後Ⅰ期から後Ⅱ期）は、それぞれの時期に分配して算出してい

第1表 善正寺遺跡瀬戸美濃 器種・時期別一覽表 (破片数)

	中IV	中期	後I	後I~II	後II	後II~III	後III	後III~IV(古)	後IV(古)	後期	不明	合計
天目茶碗	1	4	3		9	2	12			9		40
平碗			4	4	8		7		8	1		32
浅碗										3		3
縁軸小皿			6		11	4	25		13			59
折縁小皿				1	1		7					9
卸皿		1					11		9	9		30
折縁中皿						1						1
豆皿										5		5
小坏					1					1		2
折縁深皿	3		2		2		2		3	4		16
直縁大皿							3		3	1		7
柄付片口							1			3		4
卸目付大皿				1			1			1		3
小鉢				1			1			1		3
盤類					2	1	5	3	6	7	2	26
梅瓶										4		4
水注											2	2
尊式花瓶					1					6		7
仏花瓶										4		4
花瓶										3	1	4
四耳壺		1									7	8
合子											1	1
壺瓶類											33	33
袴腰形香炉	2		1		1		3		1	1		9
筒形香炉	1								6	1		8
香炉										3		3
茶入										4		4
筒形容器							2					2
不明										13		13
合計	7	6	16	7	36	8	80	3	49	84	46	342

第2表 普正寺遺跡貿易陶磁 器種・時期別一覧表 (破片数)

	I	B0	B1	B1か	B2	C2	C2か	D-I	D-II	Dか	E	F	端反	不明	合計
碗	2	15	40	2	8	9	1	12	34	41	7	23		20	214
皿													11	1	12
盤類		15													5
壺瓶類															4
不明															3
合計	2	30	40	2	8	9	1	12	34	41	7	23	11	24	253

青磁

	IV-1	A	C	D	不明	合計
碗	1		1		2	4
皿		13		81	4	98
坏		1		6	1	8
四耳壺					2	2
壺瓶類					5	5
不明				1	4	5
合計	1	14	1	88	18	122

白磁

	合計
水注	1
瓶類	2
壺瓶類	5
不明	1
合計	9

青白磁

	合計
天目茶碗	17
壺	3
茶入	2
不明	1
合計	23

黒褐釉陶磁器

	合計
壺瓶類	4
合計	4

青花

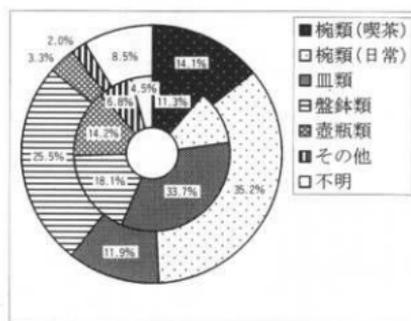
る。また可能性が高いが断言できないもの（例：龍泉窯系D—I類か）については、別の時期である可能性も否定できないが、より可能性の高い時期に加算することとした。

また分類・年代観については、瀬戸美濃は藤澤良祐氏（藤澤1982, 1991, 1995 a）、貿易陶磁は国立歴史民俗博物館の分類（国立歴史民俗博物館1994）に拠った。ただし青磁龍泉窯系D類は上田秀夫氏（上田1982）に従ってD—I類とD—II類に細分した。

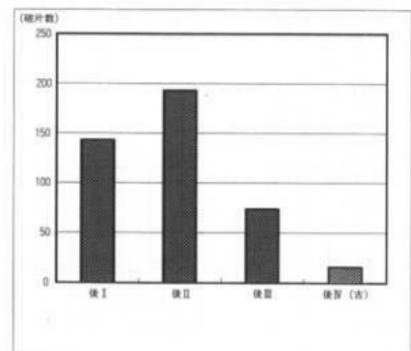
（3）青磁・白磁の分類・編年の対応関係

これまで多くの研究者が、貿易陶磁の分類・編年研究を行ってきた。しかしこれらの多くは個人の視点や目的に応じて作成されたものであり、全く同じ特徴をもつものでも異なる分類名が与えられている。ここでは代表的な分類・編年案の対応を図る（第2～4表）。ただし十三湊遺跡および普正寺遺跡から出土した型式に限り提示している。

また各分類・編年案は前述の案の他に、小野正敏氏（小野1982, 1985）、金武正紀氏（金武1988）、窪田雅秀氏（窪田1988）、普正寺遺跡（石川県埋蔵文化財センター1984）、森田勉氏（森田1980, 1982）、山本信夫氏（山本1988, 1995）、横田賢次郎氏・森田勉氏（横田・森田1978）の案に拠った。



第1図 瀬戸美濃 種類別構成比（外側：十三湊，内側：普正寺）

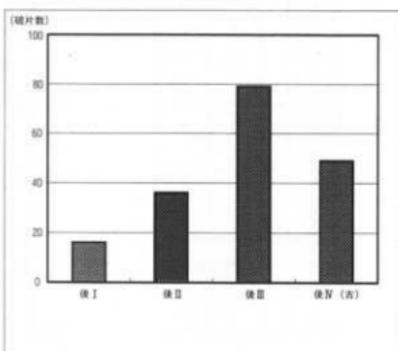


第2図 十三湊遺跡瀬戸美濃 時期別出土量

（a）瀬戸美濃と貿易陶磁の様相

まず始めに十三湊遺跡・普正寺遺跡における瀬戸美濃と貿易陶磁の様相についてみていきたい。ただし今回の調査区については考察の章ですでに述べているため、ここでは簡単に説明する。また貿易陶磁については青磁・白磁に限定して検討する。

瀬戸美濃の様相：種類別にみると、十三湊遺跡では碗類が49.3%ではほぼ半数を占めており、その中でも平碗の比率が天目茶碗よりも2.5倍多く占めている。次に盤鉢類が25.5%を占め、皿類が11.4



第3図 普正寺遺跡瀬戸美濃 時期別出土量

%と続いている。壺瓶類やその他（香炉・茶入）は少ない。これに比べ普正寺遺跡では椀類は22.6%、皿類は33.7%を示し、皿類の方が高い比率を占めている。十三湊遺跡に比べ盤鉢類が少なく、壺瓶類・その他の割合が高い（第1図）。

時期別にみると、十三湊遺跡では古瀬戸後I期に急激に増加し、後II期にはさらに増える。しかし後III期には激減し、後IV(古)期の製品はごくわずしかみられない（第2図）。

一方、普正寺遺跡では後I期の段階から出土し始め、後II期にさらに増加する。そして後III期にピークを向かえるが、後IV(古)期にはやや減少する（第3図）。

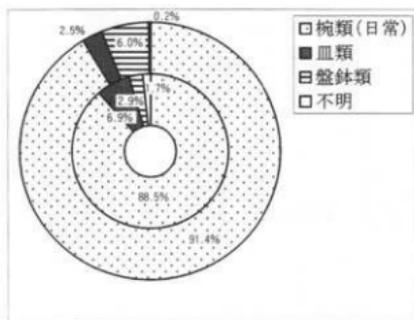
青磁の様相：種類別にみると、十三湊遺跡では椀が91.4%を占め、圧倒的に多い。普正寺遺跡も同様に、椀類が88.6%と高い比率を占めている（第4図）。

型式分類別にみると、十三湊遺跡では龍泉窯系D-I類の出土量は際立って多く、D-II類はD-I類よりも若干減るがまとまって出土している。B2・E・F類の出土量はごくわずかである（第5図）。普正寺遺跡では龍泉窯系D-I類は少ないがD-II類は急増し、B2・E類は激減する。F類はややまとまって出土している。また本遺跡からは十三湊遺跡では出土していない龍泉窯系C2類がみられた（第6図）。

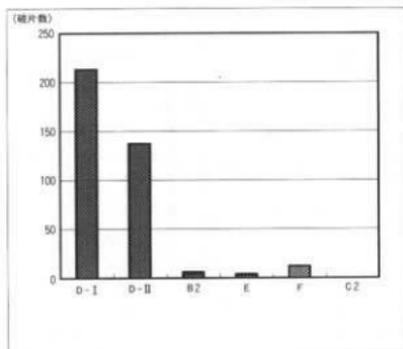
白磁の様相：種類別にみると、十三湊遺跡では椀類が44.6%、皿類は54.0%を占め、若干皿類が多いがほぼ同じ比率を占める。しかし普正寺遺跡では椀類はわずか3.0%であり、皿類が92.0%と圧倒的な比率を占めている（第7図）。

型式分類別にみると、十三湊遺跡ではB群はわずしかみられないが、C群は急激に増加し、D群はさらに増える（第8図）。普正寺遺跡ではC群は1点しか確認できず、D群の皿がほとんどであった（第9図）。

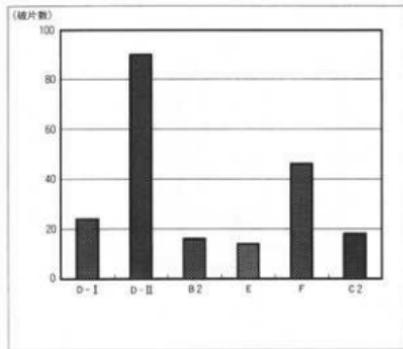
また椀ではC群、皿ではD群が圧倒的に多い（第



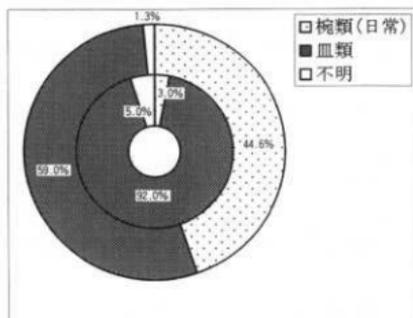
第4図 青磁 種類別構成比 (外側：十三湊、内側：普正寺)



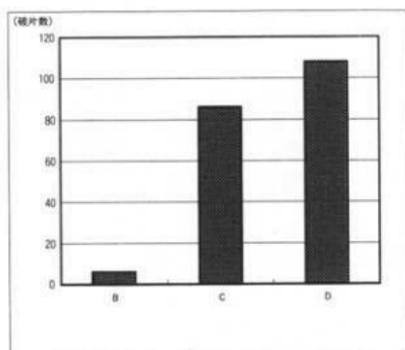
第5図 十三湊遺跡青磁 分類別出土量



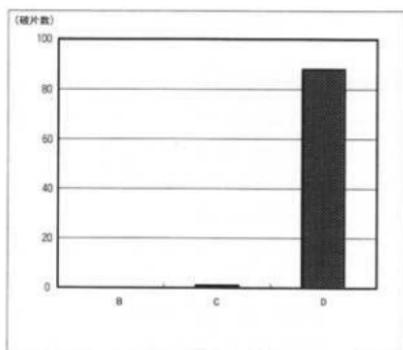
第6図 普正寺遺跡青磁 分類別出土量



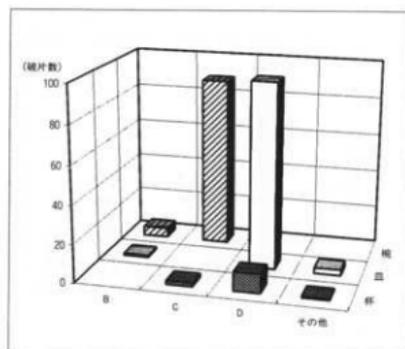
第7図 白磁 種類別構成比 (外側：十三湊, 内側：普正寺)



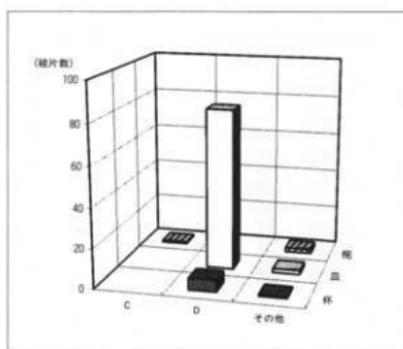
第8図 十三湊遺跡白磁 分類別出土量



第9図 普正寺遺跡白磁 分類別出土量

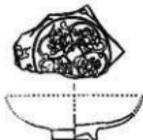
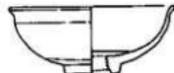


第10図 十三湊遺跡白磁 器種・分類別出土量



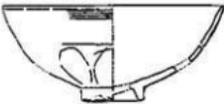
第11図 普正寺遺跡白磁 器種・分類別出土量

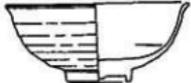
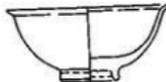
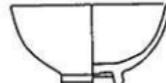
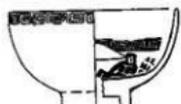
第3表 白磁 分類対応表

白磁	型博 (1994)	森田勉 (1982)	大宰府 (1978)	小野正敏 (1982)	金武正紀 (1988)	十三講	仮称または名称	実測図	備考
			IV-1類		I類	IV-1類	玉縁口縁		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は玉縁状 高台が厚く、削り出しが浅い 体部外面下半まで施釉
A群	A群	IX-1類 IX-2類	A群	II類	A群		口禿げ		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面を施釉 全施釉 または 体部下位・底部は露胎
B群	B群		B群		B群		根府手		<ul style="list-style-type: none"> 内面に壓押し唐草文・梅花文・雲鳥文など 青みを帯びた失透明性の乳白色釉がかかるため文様は不鮮明 高台に砂付着
C群	C群			V-a類					<ul style="list-style-type: none"> 口唇部は丸みをもつ 口唇内縁は内肉し、稜を示すものが多い
				V-b類	V-b類	ピロースクタイプII			
				VI類	C群		薄手外反		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反 透明感のある灰白色釉が薄くかかる 器壁は薄く、回転ヘラ削り痕明顯 内底に印花文をもつものがある
D群	D群			B群		D群			<ul style="list-style-type: none"> 陶器質の胎土で黄色茶を帯びるものまたは 焼成の良い乳白色のもの 高台を有し、挟り込みをもつものがある 内底に重ね焼きの痕跡をもつものがある 体部外面途中まで施釉 釉は細かい貫入をとこなう
									

- 1 大宰府 (横田・森田 1978)
- 2・5 穰世資寺 (森田 1982)
- 3・6 推定金光寺跡 (森田 1982)
- 4 ピロースク遺跡 (金武 1988)
- 7 櫻来寺 (森田 1982)

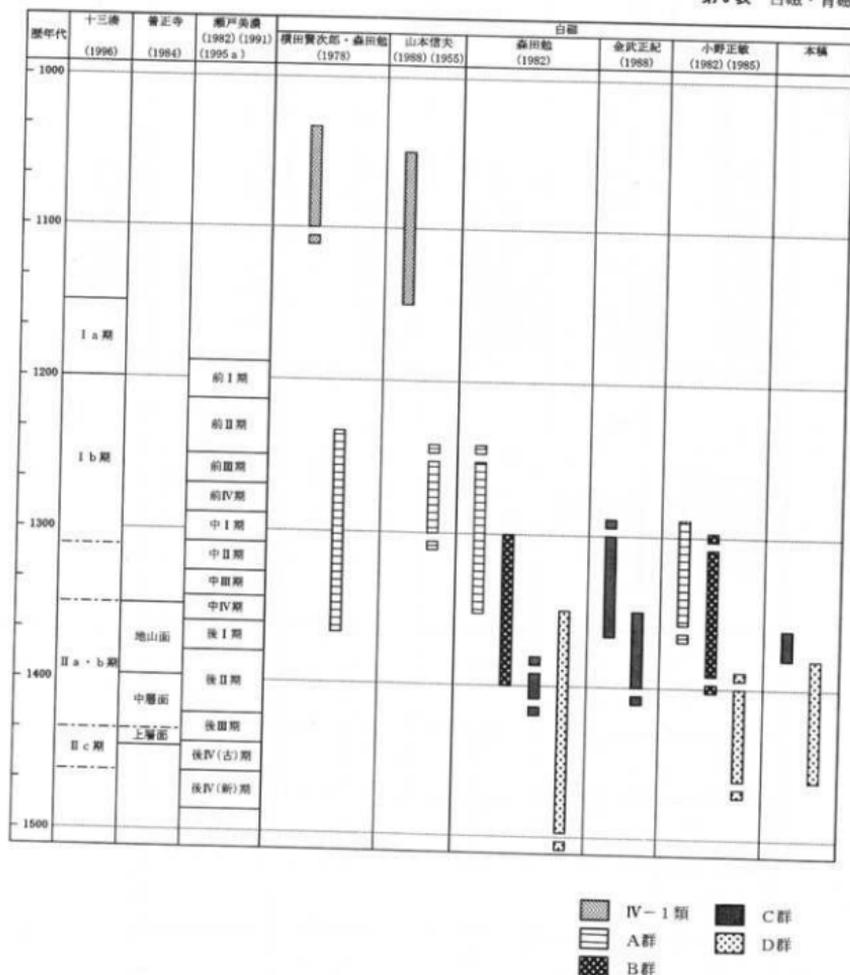
第4表 青磁 分類対応表

龍泉窯系 青磁	豊博 (1994)	大宰府 (1978)	上田秀夫 (1982)	小野正敏 (1982)	十三層	普正寺 (1984)	仮称または名称	実測図	備考
	I類	I-1類			I類		劃花文		・内面に劃花文・雲文
		I-2類							
		I-3類							
		I-4類							
	B0類	III-1類	A-II類	A群	B0類		竈蓮弁文		・外面に細長い竈蓮弁文または 蕉文 ・器壁は薄く、明緑灰色の釉が厚くかかる ・施釉部と露胎部の境は準橙色 ・高台の断面は三角形 ・全施釉後、量付け輪削ぎ
B1類	I-5類	B-I類	A群	B1類	I-a類	竈蓮弁文		・外面に片切り彫りによる竈蓮弁文 ・高台の断面は方形 ・高台外面まで施釉 量付け・外底は露胎	
	IV類	B-I'類							
B2類		B-II類	B群	B2類	I-b類	無竈蓮弁文		・粗雑な無竈蓮弁文 ・高台外面まで施釉 量付けにおよんだ輪は削り取る または高台内面途中まで施釉	
C1類	IV類	C-I類		C1類		雷文		・口縁部外面に平行沈線をもぐらし、数箇所斜線を施す ・体部外面には大きな雷弁文 ・高台外面まで施釉 量付けにおよんだ輪は削り取る	

C 2 類	C-Ⅱ類	B群	Ⅱ-a類	雷文		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部に雷文 体部に大きな蓮弁文 内底に印花文をもつものがある 高台内面途中まで施軸 または 全施軸後、外底を輪状に輪刺ぎ 	
D類	Ⅳ類	D-Ⅰ類	D-Ⅰ類	Ⅳ-a類	外反無文		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反 内外面無文 透明性の強い軸が薄くかかり、体部の回転ヘラ削り痕明顯 内底に印花文をもつものがある 高台外面まで施軸 疊付けにおよんだ軸は削り取る
	Ⅳ類	D-Ⅱ類	D-Ⅱ類	Ⅳ-b類	外反無文		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反 または 玉縁状 内外面無文 失透明性の軸が厚くかかる 内底に印花文をもつものがある 高台内面途中まで施軸 または 全施軸後、外底を輪状に輪刺ぎ
E類	E類	E類	E類	Ⅱ-b類	直口無文		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は直口 内外面無文 内底に印花文をもつものがある 高台内面途中まで施軸 または 全施軸後、外底を輪状に輪刺ぎ
			F類	Ⅲ類	人形手		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は直口 または 玉縁状 内面に型押しによる人物・文字・花文など 失透明性の軸が厚くかかるため、文様は不鮮明

- 1 大塚耐 (藤田・横田 1978)
 2~5 大塚耐 (上田 1982)
 6・8・9 紀淡海峽 (上田 1982)
 7 根来寺 (上田 1982)
 10 根来寺 (藤田 1988)

第5表 白磁・青磁



10・11図)。このことから白磁はC群からD群へ移行する際に、使用形態も碗から皿へ転換しているといえる。

以上の結果、十三湊遺跡における瀬戸美濃の出土量のピークは後II期であるのに対し、普正寺遺跡は後III期であり、両者にはズレが生じることが分かった。また十三湊遺跡は後IV(古)期の製品がほとんど出土しないのに対し、普正寺遺跡では一定量存在していることから、両者の存続時期には差があると言える。つまり十三湊遺跡が存続した時期は、成立・発展・廃絶のそれぞれにおいて普正寺遺跡よりも

編年対応表

横田賢次郎・森田勉 (1978)	山本浩夫 (1988) (1985)	青磁			本稿
		上田秀夫 (1982)	堀田雅秀 (1988)	小野正敏 (1982) (1985)	

- | | | | | | |
|--|------------|--|------------|--|-------------|
| | 龍泉窯系 I 類 | | 龍泉窯系 C 1 類 | | 龍泉窯系 D-II 類 |
| | 龍泉窯系 B 0 類 | | 龍泉窯系 C 2 類 | | 龍泉窯系 E 類 |
| | 龍泉窯系 B 1 類 | | 龍泉窯系 D-I 類 | | 龍泉窯系 F 類 |
| | 龍泉窯系 B 2 類 | | | | |

先行しており、十三湊遺跡が港町として機能しなくなるのは、普正寺遺跡が廃絶した1441年前後よりもやや早い時期であると推察する。

また両遺跡における青磁龍泉窯系D-I類からD-II類、白磁C群からD群への移行、白磁の椀から皿への変化には、この時期差が影響していると考えられる。

(b) 瀬戸美濃を基準とした貿易陶磁の年代観

十三湊遺跡と普正寺遺跡の間には時期差があり、両遺跡における青磁・白磁の様相の相違はその差を

反映したものであることがわかった。

ここでは両遺跡の時期差をふまえ、瀬戸美濃と貿易陶磁における各型式の出現期および出土量の変遷から、貿易陶磁の年代観を考える。

まず青磁をみると、十三湊遺跡では龍泉窯系D-I類が最も多く、D-II類では減少するのに対し、普正寺遺跡ではD-II類に出土量のピークがみられる。これは瀬戸美濃のピークが前者では後I期から後II期にあり、後者では後III期にあることと連動していると推測する。よって龍泉窯系D-I類は古瀬戸後I期から後II期、D-II類は後III期に併行すると考える。

次に龍泉窯系B2・E・F類は十三湊遺跡ではごくわずかであるのに対し、普正寺遺跡では一定量存在している。これは前者が古瀬戸後IV(古)期に入ってから早くに廃絶しているの比べ、後者では後IV(古)期に入ってからある程度存続し、後IV(新)期に入る以前に衰退していることに対応していると考えられる。よって龍泉窯系B2・E・F類は後IV(古)期に併行すると推察する。また龍泉窯系C2類は普正寺遺跡では出土しているが、十三湊遺跡では確認できなかった。このことから、C2類は後IV(古)期に併行するものの、B2・E・F類よりはやや遅れると考える(第5・6図)。

次に白磁をみると、B群は十三湊遺跡ではわずかに出土しているが、普正寺遺跡では出土していない。ここからB群は古瀬戸後I期以前にもたらされたものと推測する。C群は十三湊遺跡では多く出土しているが、普正寺遺跡ではごくわずかしか確認できなかった。このことは十三湊遺跡が後I期以前から存続しており、後I期に出土量が急増すること、普正寺遺跡の活動が本格化する時期が後I期に入ってからではないことに連動していると推察する。このためC群は古瀬戸後I期のやや早い段階に位置付けたい。D群は両遺跡において際立って多く出土している。そのためD群は後II期から後IV(古)期と併行していたと考える(第8・9図)。

以上を要約すると、瀬戸美濃・青磁・白磁の時期的な併行関係は次のようになる。

- 青磁 龍泉窯系D-I類 … 後I~II期 (14世紀中葉から15世紀初頭)
 龍泉窯系D-II類 … 後III期 (15世紀前葉)
 龍泉窯系B2類・C2類・E類・F類 … 後IV(古)期 (15世紀中葉)
- 白磁 B群 … 後I期以前 (14世紀中葉以前)
 C群 … 後I期 (14世紀中葉から14世紀後葉)
 D群 … 後II~IV(古)期 (14世紀後葉から15世紀中葉)

これは北東日本海域に搬入した時のセットであり、ここで導き出した年代観は貿易陶磁が当地にもたらされた搬入年代であると考えられる。

やや強引な年代比定になったが、おおよそ上田氏、森田氏の編年案の範疇に収まった。しかし紀淡海峽出土物では龍泉窯系D-II・E・C2類が相伴しており(上田1982)、龍泉窯系D-II類の下限は古瀬戸後IV(古)期まで下げるべきかもしれない。また京都府臨川寺では古瀬戸後IV(新)期の天目茶碗と龍泉窯系C2類が相伴しており(楢崎・堀内1995)、C2類の下限も下げなくてはならない。

ただしここで導き出した年代観は、あくまで十三湊遺跡と普正寺遺跡の存続した範疇での年代であるため、龍泉窯系D-I類の上限、龍泉窯系B2類・C2類・E類・F類、白磁D群の下限に関しては詳しく論じないこととする。

(4) 瀬戸美濃と貿易陶磁の関係

ここまでで、瀬戸美濃と青磁・白磁の関係を時間的に押さえることができた。次は両者が特定の使用目的のなかで、どのように存在しあったかについてみていきたい。

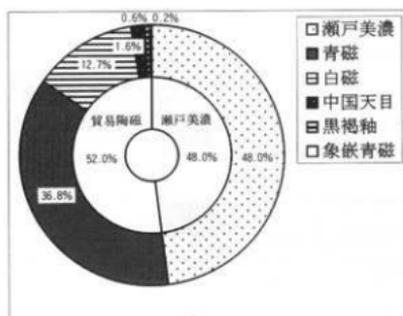
まず古瀬戸後期における瀬戸美濃と貿易陶磁の比率をみると、十三湊遺跡では瀬戸美濃が48.0%、貿易陶磁が52.0%であり、普正寺遺跡では瀬戸美濃が50.7%、貿易陶磁が49.3%であり、瀬戸美濃と貿易陶磁の比率はほぼ拮抗している。また貿易陶磁内での比率をみると、十三湊遺跡では青磁は36.8%、白磁は12.7%、天目茶碗は1.6%、黒褐釉陶器は0.6%、象嵌青磁は0.2%を占め、普正寺遺跡では青磁は28.7%、白磁は16.4%、天目茶碗は2.6%、黒褐釉陶器は1.0%、青花は0.7%を占めた。おおよそ同じ様相をしているが、青磁と白磁に違いがみられた。(第12・13図)。

次に喫茶用の椀、日常用の椀、皿類(皿・坏など)、盤鉢類、壺瓶類(四耳壺・花瓶など)、その他(香炉・茶入)にかけて瀬戸美濃と貿易陶磁の比率を比べてみた。

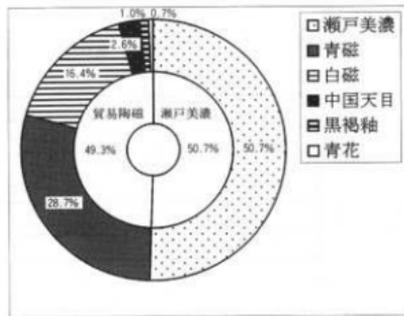
まず喫茶用の椀、壺瓶類、その他などの茶・華・香道や調度品として用いられていたと考えられる分野では、貿易陶磁の占める割合は低く、ほとんどを瀬戸美濃が占めている(第14~16図)。この理由はこれらの付加価値の高い分野では、貿易陶磁の流通量は少なく高価であったため、その不足分を瀬戸美濃で代用していたためと考える。

また盤鉢類も同じように貿易陶磁が少なく、瀬戸美濃が高い比率を示している(第17図)。「福富草子」の絵巻では、青磁の鉢は裕福な家において果物を盛った器や床の間の飾りとして登場し、富の象徴として描かれている。また「暮娚絵詞」では青磁の鉢は宴会用の料理を作る際の調理具として登場する。これは青磁の盤鉢類の価値が低かったためではなく、ハレの場に出す料理を青磁の鉢を用いて作るということ自体に価値が置かれていたと考えられる(野場1995)。一方、瀬戸美濃の盤鉢類は日常の食膳具あるいは調理具として用いられていたと考えられ、両者は使用する時と場によって使い分けられていたと推察する。

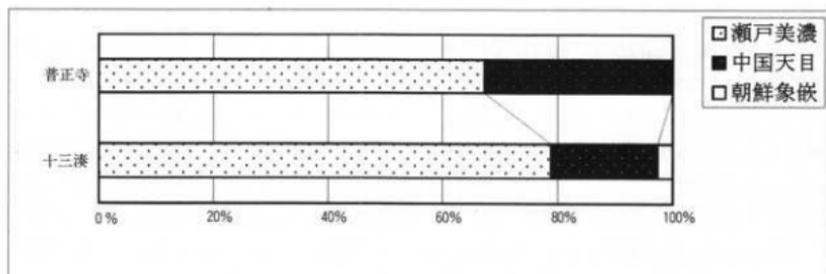
次に日常用の椀では大半を貿易陶磁が占め、瀬戸美濃の割合は少ない(第18図)。しかし生産地ではこの分野は中期後半から増産されることを考慮すると、この瀬戸美濃の比率は極めて低いと感じる。そのため前章で得られた貿易陶磁の年代観を用いて時期ごとの変化を追ってみた(第19・20図)。



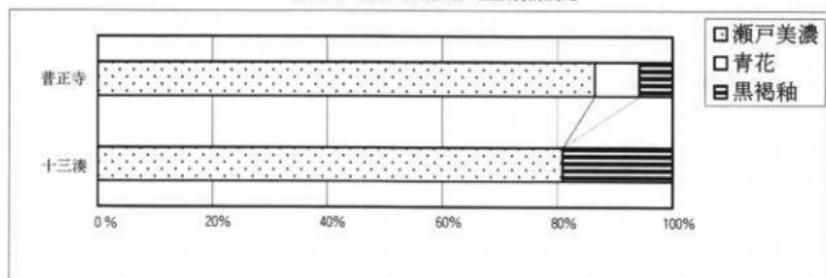
第12図 十三湊遺跡瀬戸美濃・貿易陶磁種類別構成比



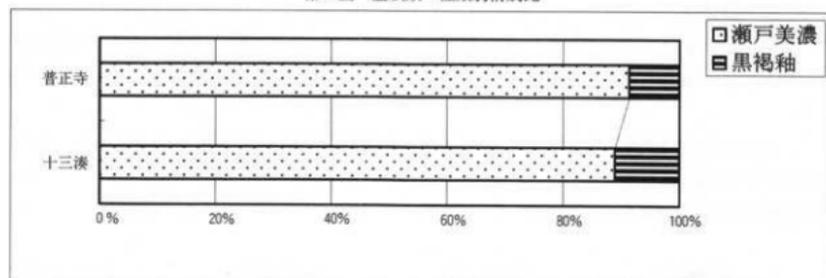
第13図 普正寺遺跡瀬戸美濃・貿易陶磁種類別構成比



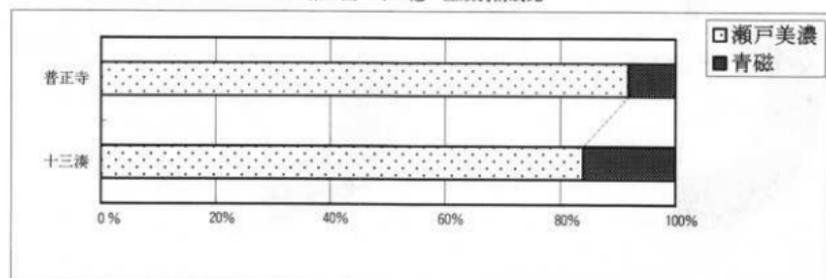
第14図 椀類（喫茶用）種類別構成比



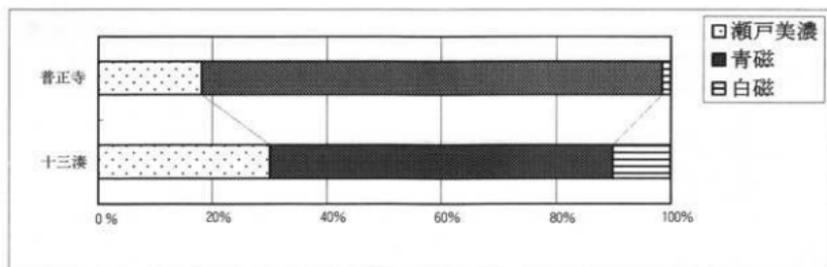
第15図 壺瓶類 種類別構成比



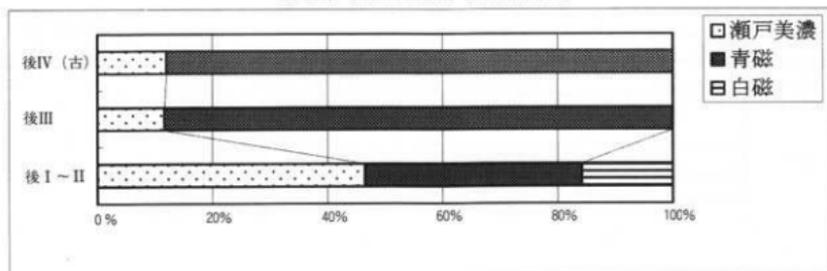
第16図 その他 種類別構成比



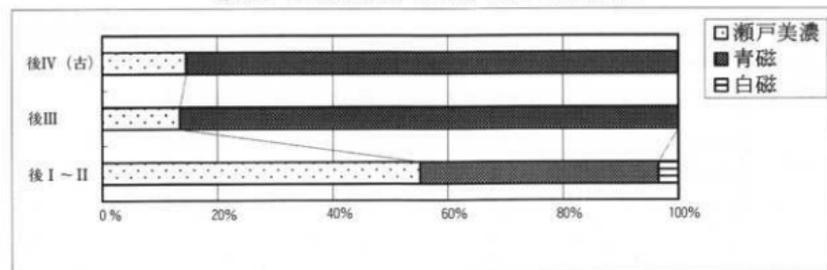
第17図 盤鉢類 種類別構成比



第18図 椀類（日常用）種類別構成比



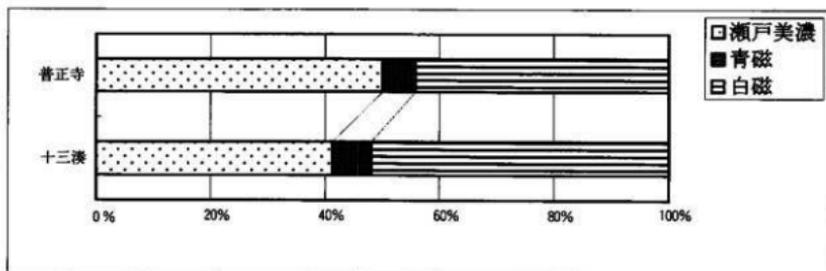
第19図 十三湊遺跡椀類（日常用）種類・時期別構成比



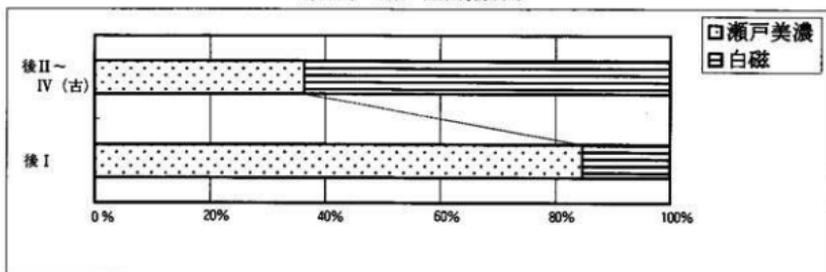
第20図 普正寺遺跡椀類（日常用）種類・時期別構成比

この結果、古瀬戸後I期から後II期では両者の比率は十三湊遺跡においても普正寺遺跡においてもほぼ同じ比率を占め、価格に応じた補完関係が存在したと考えるが、後III期から後IV(古)期では瀬戸美濃の比率は激減し、補完関係が失われていったと推察する。この現象は、大塚期における天目茶碗・小皿・すり鉢に絞った生産体制へ移行する過程と推察する。

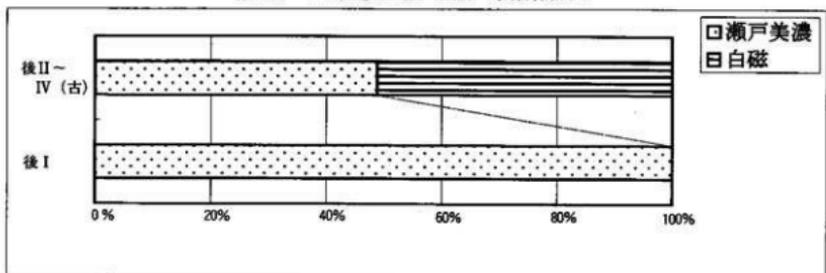
皿類では瀬戸美濃と貿易陶磁は拮抗している(第21図)。先に述べた通り、小皿類は大塚段階に重点が置かれた分野のひとつであり、また白磁・青花皿を積極的にコピーをすることから、戦国期には価値・價格的補完関係が存在したと指摘されている(小野1997)。よって、その前段階にあたる古瀬戸後期においても、両者には価格に応じた補完関係が存在したと考える。またその関係が成立したのは、白磁の使用形態の主体が椀から皿へ移行した後II期以降であるといえる(第22・23図)。



第21図 皿類 種類別構成比



第22図 十三湊遺跡皿類 種類・時期別構成比



第23図 普正寺遺跡皿類 種類・時期別構成比

瀬戸美濃と貿易陶磁の関係は、まず茶・華・香道に関する付加価値の高い分野と皿類では流通量や価格に応じた価値・价格的補完、鉢鉢類では使用する時と場に応じた機能的補完関係が想定できた。しかし日常用の碗では瀬戸美濃の存在意義が失われ、価値・价格的補完関係が成立しなくなっていくことがいえた。

(5) おわりに

瀬戸美濃と貿易陶磁の関係は使用目的によって異なり、時間によっても変化することがいえた。しかし、その変化が起こる背景について迫ることができず、中世前期、戦国期と関連づけた考察ができなかった。

今後は性格や存続時期の異なる遺跡間での比較を行ない、瀬戸美濃と貿易陶磁の比率の違いが時期差によるのか、地域差によるのか、遺跡の格や居住者の階層の差によるのか、それ以外に要因があるのかを検討することが必要であると考えます。

本稿を作成するにあたり、藤澤良祐氏、金子健一氏、河合君近氏、垣内光次郎氏の皆様には多大なご指導・ご教示をいただきました。また財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター、石川県埋蔵文化財センターの皆様には、お忙しい時期にも関わらず遺物の実見を快く承諾していただきました。末筆ながら感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1984『菅正寺遺跡』
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1992「食器計測の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1997「中世食器様式の意味するもの—計量分析による使用法の復原—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 小野正敏 1982「15, 16世紀の染付碗, 皿の分類とその時代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985「出土陶磁よりみた十五, 十六世紀における陶期の素描」『MUSEUM』No.416
- 小野正敏 1997『戦国城下町の考古学』講談社
- 亀井明德 1986『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎
- 金武正紀 1988「ヒロースタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』No.8 日本貿易陶磁研究会
- 工藤清泰 1999「北日本における中世後期の陶磁器様相」『貿易陶磁器の年代観』第20回研究会資料集 日本貿易陶磁研究会
- 窪田雅秀 1988「根来寺坊院跡(NG86)出土の中国陶磁—人形手青磁等根来寺初例のものについて」『貿易陶磁研究』No.8 日本貿易陶磁研究会
- 国立歴史民俗博物館 1994「日本出土の貿易陶磁東日本編1」国立歴史民俗博物館資料調査報告書5
- 国立歴史民俗博物館 1998『陶磁器の文化史』
- 榎原滋高 1997「十三湊遺跡出土の陶磁器」『東北の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会
- 鈴木和子 1998「青森県十三湊と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
- 鈴木康之 1996「輸入陶磁器の廃棄と集落の変遷過程」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V—中世瀬戸内の集落遺跡—』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 瀬戸市史編纂委員会 1993『瀬戸市史』陶磁史篇 四
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 1997「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—」『研究紀要』第5輯
- 横伸一郎 1995「中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 橋崎彰一・堀内明博 1995「臨川寺出土資料にみる中世後期陶磁器の—様相」『大宰府陶磁器研究—森田勉氏遺稿—』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会
- 日本中世土器研究会編 1996「土器から見た貿易陶磁」『中近世土器の基礎研究』XI 日本中世土器研究会
- 日本貿易陶磁研究会 1990「1980年代の貿易陶磁研究の成果と課題」『貿易陶磁研究』No.10
- 日本貿易陶磁研究会 1999「貿易陶磁器の年代観」第20回研究会資料集
- 野場喜子 1995「中世の絵画作品にみる中国製陶磁器」『貿易陶磁研究』No.15 日本貿易陶磁研究会
- 藤澤良祐 1982「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』vol.8 東洋陶磁学会

- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1995 a 「瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸前期様式の編年—」『研究紀要』第3輯 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1995 b 「古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 藤澤良祐 1999 a 「古瀬戸の流通をさぐる」『愛知県史研究』第3号 愛知県公務部県史編纂室
- 藤澤良祐 1999 b 「北東日本海域における瀬戸・美濃大窯製品の受容」『列島に拉がる大窯製品～東日本の様相～』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録
- 藤澤良祐 未刊 「中世都市鎌倉における古瀬戸と輸入陶磁—中世前期の補充関係について—」『歴博フォーラム 陶磁器がかたる日本とアジア』国立歴史民俗博物館
- 北陸中世土器研究会編 1997 「中・近世の北陸—考古学が語る社会史—」桂書房
- 森田 勉 1980 「『軀府磁』に関する二・三の資料」『大宰府陶磁器研究—森田 勉氏遺稿—』森田 勉氏遺稿集・追悼集刊行会
- 森田 勉 1982 「14—16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 山本信夫 1988 「北宋期貿易陶磁器の編年—大宰府出土例を中心として—」『貿易陶磁研究』No.8 日本貿易陶磁研究会
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山本正敏 1996 「中国製陶磁器の分類と編年」『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告（遺物編）—東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ—』第一分冊 富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『大宰府陶磁器研究—森田勉氏遺稿集—』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会
- 吉岡康暢 1994 「中世陶磁器流通の諸段階」『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 吉岡康暢 1999 「歴史資料としての陶磁器」『考古学資料と歴史学』吉川弘文館

TOSAMINATO SITE

A Fifteenth Century Harbor Site in Northern Japan

Editors: MAEKAWA Kaname, SAKAKIBARA Shigetaka and TANAKA Manabu

March, 2000

**SHIURA village board of Education and Toyama University Team
for Investigation into TOSAMINATO
Faculty of Humanities, Toyama University, Japan**

English Summary

This is a report of archaeological investigations into the TOSAMINATO site in northern Aomori Prefecture, Japan. The site is situated on the sand spit along the Japan Sea. One summer of archaeological fieldwork has been carried out jointly by the staff of the Shiura Village Board of Education and the department of archaeology at Toyama University since the site is aimed at being designated by Historic site.

This report covers the major results which took place from June to October of 1998. The four months of fieldwork enabled to find out the graveyard after the moat was buried completely. The moat is thought to be related to the square castle which was excavated in 1995,1996 and 1997. Before we began to excavate, we presumed that the graveyard belonged not to Ando family but to Nanbu family who attacked TOSAMINATO in the middle of 15th century according to the documentary evidence, however, through the investigation for the post excavation, especially the chronology of Seto-Mino ware, a significant fact has come up.

Even after the moat was filled and the function of square castle was vanished, a certain amount of urban life was virtually continued. In addition, the harbor site which was excavated by Aomori prefecture board of education, was also continued at the same time. Where is the square castle gone? Inside this site, no other space for square castle can be found. One possibility, we would like to mention here is that the function for square castle was removed from the city center to the northern part of mountain. In other words, the KARAKAWA castle was used as the lord's living space.

During this phase, many archaeological artifacts were found, including Chinese blue porcelain, Seto-Mino ware, and earthen ware. The study of these kinds of ware would dates to the medieval chronology in this area. Regarding to artifacts, what we stress here is the bronze medal. It was excavated in the tomb. The bridge in the center and the cloud above it are engraved, which is thought to mean safe voyage.

The excavation of KARAKAWA castle will be prepared in August 2000 by Toyama University. Without excavation, we cannot testify the hypothesis as shown above. In order to reconstruct the town site, as well as the archaeological method, because of too much area to cover only by archaeology, the geophysical one is also required.

報告書抄録

ふりがな	とさみなといせき							
書名	十三湊遺跡							
期書名	第86次発掘調査報告書							
シリーズ名	市浦村埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	前川 要・榊原滋高・田中 学							
編集機関	青森県市浦村教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室							
所在地	〒037-0401 青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81-384・〒930-8555 富山県富山市五福3190							
発行機関	青森県市浦村教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 "	東 経 "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
とさみな 十三湊	青森県北津 軽郡市浦村 大字十三字 琴湖岳地内	02385	38022	41度01分 40秒	140度19分 56秒	19980615 ～ 19981030	1,360㎡	重要遺跡緊急確認調査
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
十三湊遺跡	集落 (港町)	中世, 近世	(中世) 掘立柱建物, 堀, 井戸, 柵列, 溝, 土坑, 竪穴遺構	(中世) 青磁, 白磁, 瀬戸美濃, 常滑, 越前, 珠州, 土師器, 銭貨, 獣骨, 鉄製品(鉄釘, 刀形刃物), 石製品(砥石) (近世) 近世陶磁器(伊万里, 唐津など)		第86次調査区では, 中軸街路に直交すると思われる道路及び大規模な区画遺構を検出し, 推定領主館跡南側の空間利用状況が明らかとなった。		

2000年3月25日 印刷

2000年3月31日 発行

市浦村埋蔵文化財調査報告書 第11集

十三湊遺跡

—第86次発掘調査報告書—

本文編

編集・発行 市浦村教育委員会

F937-0401 青森県北津軽郡古瀬村大字堀内字若井61-304 01173(62)3751

富山大学人文学部考古学研究室

F930-0205 富山県富山市五福3190 076(443)6196

印刷 有限会社真陽社

F930-0475 京都府京都市下京区堀小路弘見寺上10 0975(351)6034